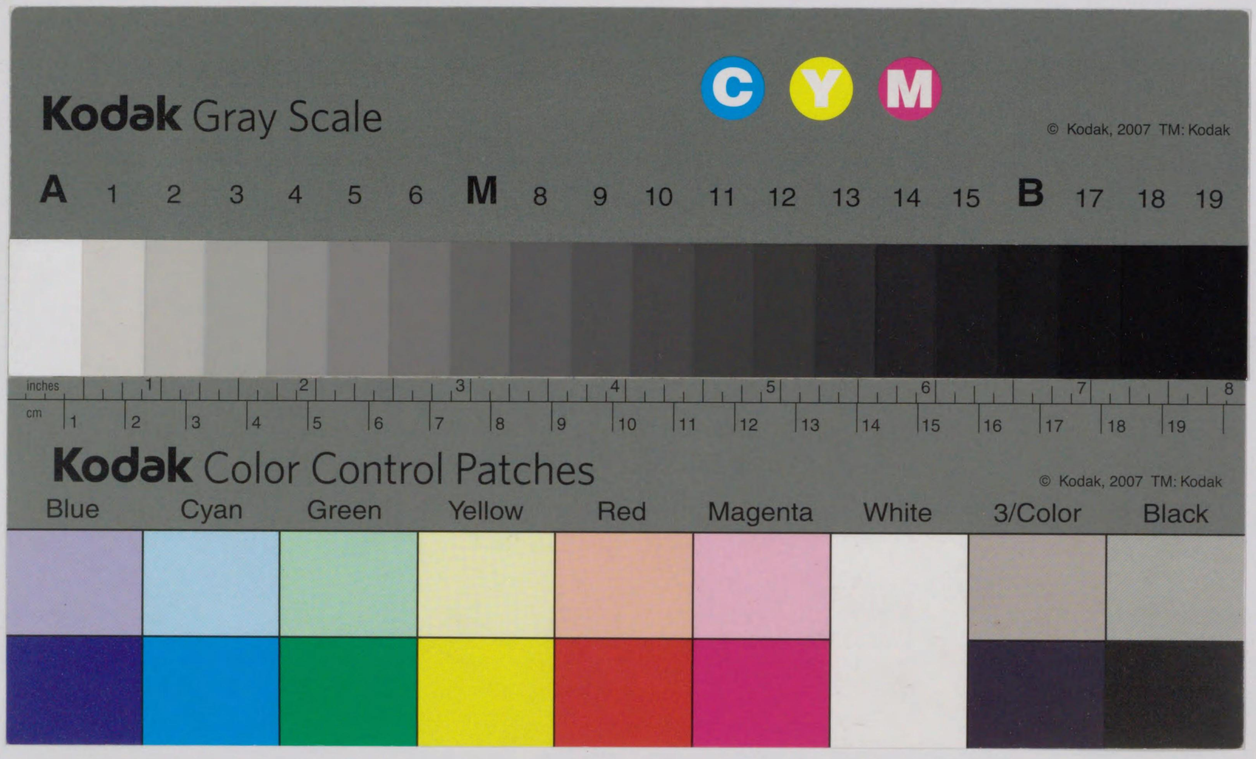


605-107
12005015320053

大衆圍碁講座

講師 七段 雁金準一先生
七段 高部道平先生

第一册

平凡社版

605
107
605-107

大衆圍碁講座 第一冊 目次

一 初段を目指して……一—三二
一、概念——二、盤と石——三、石の死活——四、手段の初歩（征、劫、點、門、撲、追落、持、打終つた形、作つた形）——五、用語と用字——六、對局上の用意
二 布石……一—一六
井四目（十三目）第一例——同 第二例——互先 第一例（次輯に續く）
三 定石……一—五六
一隅に於ける黑二の應手——一隅に於ける白三の應手——頂定石——一間夾——二間夾——三間夾
四 手所……一—一六

五　實戰例示……一—五六
九子局—八子局—六子局—五子局—四子局—
三子局—二子局—先の局
六　郵便碁……一—二四
九子局（十二）—六子局（四）—四子局（四）
七　雜錄……一—八

初段を目指して

大衆圍碁講座

初段を目指して

講師七段　雁金準一

講師七段　高部道平

〔一〕概念

茲に大衆圍碁講座の新學期開始に當りまして、はじめて其の第一學年に、入門されやうとする諸君の爲めに、碁（棊にも棋にも通ず）はどうすれば覺えられるものであるかと云ふ、方法を說き明す前提として、碁が何ゆゑに斯くまで世間に流布して、交際上缺くべからざる要具となつたか、先づ其の概念から呑み込んで戴き、其れから順々に次第を逐つて、やがて碁はどうすれば巧くなれるかと云ふ、諸君の聽きたがり知りたがられる疑問を解き、結局之れだけの修業を積めば、誰でも初段までは漕ぎつけ得ると云ふ骨を、徹底的に申し述べやうと思ひます。

圍碁が如何に微妙の制度に依て、組み立てられてあるかといふことは、其の道に入るに從つて自ら會得されませうが、「夫れ棊の制たるや、天地方圓の象あり、陰陽動靜の理あり、星辰分布の序あり、風雲變化の機あり、春生秋殺の權あり、山河表裏の勢ひあり、世道の昇降人事の盛衰、之れに寓せざるはなし、惟ふに能者は、之れを守るに仁を以てし、之れを行ふに義を以てし、之れを秩すに禮を以てし、之れを明すに智を以てす、又焉んぞ尋常他藝を以て、之れを忽がせにすべけんや云々」と古人も申した通り、天地の形にも象り、陰陽の理にも則り、なかなか幽玄な意味から組み立てられたもので、其の高さに於ても、其の廣さに於ても、其の深さに於ても、實に端倪を知りがたいものです、從て之れが一種の道德的、修養的、又は哲學的技藝である事は、圍碁の有つ歷史の上から見ましても、爭はれない澤山の證據が有ります、が其れを最も的確に裏書するものは、他のあ

らゆる遊技といふものには、其の仕方に就いていろいろ不自然の約束がありまして、やればやれる事を、そうやってはいかぬとか、やりたくない所でも、斯うやらなくてはいかぬとか、我れと我意志を自由に行ふわけに行きませんけれども、碁には絶對に約束といふものがなくて、始りからしまひまで、自然の理法で行く點であります。

もつとも布石とか定石とか云ふことを、一つの約束なり規則なりのやうに、穿きちがへる人もありますが、其れもやはり自然の理法から來て居ますので、けつして勝手に取りきめた、法則ではないのです、此の事は唯だ斯う申したゞけでは、合點が行かれますまいから、後段に實例を擧げて說明しませうが、要するに徹頭徹尾自然の理法に基いて進退する所に、圍碁の超然として、一般遊技から聖別さるゝ尊とさと、妙味とが寓するのであります。

然かもまた碁は古く支那に起つて、奈良朝以前に早くも吾邦に傳來した技藝のやうですが、今日では其の本地たる支那に衰へて、立派に日本に固定された、國技となつたのであります、されば近來歐米各國にも、日本は生絲の國、茶の國として知らるゝのみならず、碁の國としても紹介され、又大分好事家の間に、圍碁が行はれて來ました、殊に獨逸の陸軍の如きは、嘗て圍碁を陸上戰術に應用した例もありまして、科學的の立場からもとうに研究されて居るさうです。

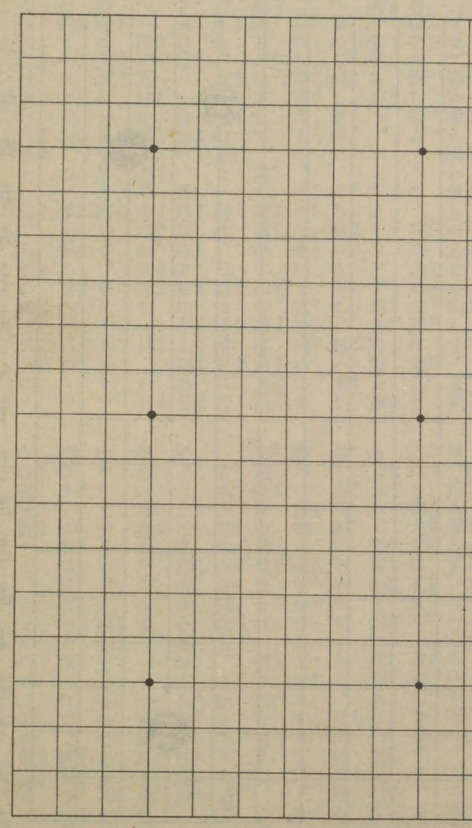
現に獨逸第一の棋客として知らるゝ、ホホシュレー（高等學校）の數學教授、デューベル博士のごときは、なかなか侮りがたい技倆を備へて居るさうですが、斯くの如く碁が特に獨逸に發達したのは、明治初年本邦に駐紮した獨逸公使が、非常に斯の道の熟心家でありまして、時の名人村瀨秀甫に就いて修業した結果、終に初段の免狀を得て歸國したのが發端だそうです、そんなわけで今日は歐羅巴にも亞米利加にも、專門の雜誌や書物が發行されて、次第に此の趣味が流行して居ります、さすれば之れを我が國技の矜りとして、奬勵もし研究もし、普及もさすべき性質の物たることは、改めて申すまでもありますまいが、苟且にも斯の門に入らんとする程の諸君は、豫じめ以上の概念を胸に置いて、さて其の第一歩に就いて戴きたいと存します。

〔二〕盤と石

茲に先つ碁盤と碁石とを一通り見て置きまして盤石と云ひますが、盤は桂、其上が公孫樹、其の上が榧……榧と云つのは桂、其上が公孫樹、其の上が榧……榧と云つても日向物の柾目で、分厚のものを最上とし、石にも亦次第がありまして、白石の上等はやはり日向產の蛤貝、黑石は紀州產の那智黑と云ふのですもつとも貝は貝、石は石と、判然其の性質が異つて居るに拘はらず昔からの呼びならはして、白の方も亦白石と言ひますが、同じ蛤でも其の厚味によつて、一分にも足らぬ所謂煎餅石といふのもあれば、極厚いものになると四分位もあり、黑石にもスレートや練物などもありますが、間に合せの代用品なら、紙の盤に土の石でも事は足るのですさて其の碁盤の面には、縱横十九筋の線が布かれて、總體の目數が十九筋の自乘、即ち三百六十一目、石の數も、其れに相當する、白百八十個、黑百八十一個となつて居ります、そして此の盤面で白黑互ひの領分を爭つて、其の爲めに攻めたり守つたり、千變萬化の手段が繰返されるのですから一口に云へば碁は地面の取り合ひで、どちらか一目でも多く圍つた方が勝となり、どちらも同じ目數に決着した場合は持碁と云つて、野球などのドロンゲームと同樣、勝負なしといふことになるのです。碁を圍むと云ふ詞も、これから起つたものと見えます。

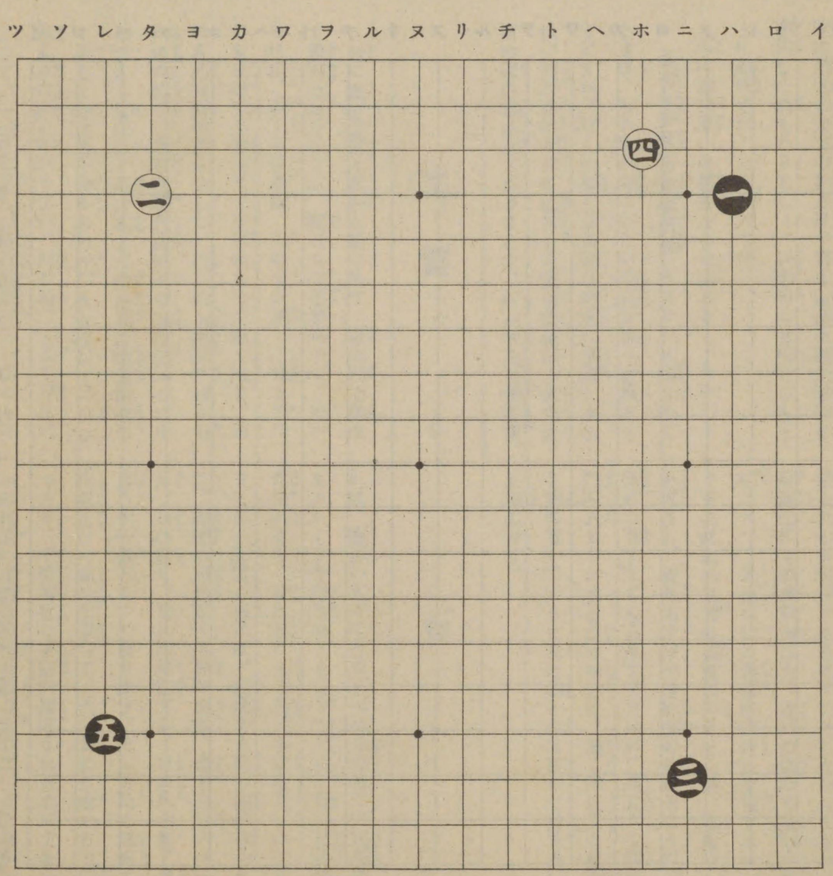
ソコで斯う三百六十一目と限られた盤面で、千變萬化の手段が行はれるとは、一寸受け取りにくいやうですが、一から二を生み、二から四を生み四から八を生み八から十六、十六から三十二と云ふ工合に、殆ど無數の變化を生じるのですから、凡そ碁と云ふものが始まつてこのかた、今日までにどれほどの番數が打たれたか、これはとても統計は取れませんが、其の無數の番數中、一つとして同じ碁ができた例しはありません、そういふ風に毎局必ず趣きを異にします所に、最も古い技藝でありながら、打つたび毎に新し味を感じるのです、故にたとひ此の面積に限りはあつても、手段の變化には盡未來際限りがないのであります。

先づ盤に向つたとしませう、覺られるとほり盤面には縱横三個づゝ、合計九個の星があります、之れを井目と名け別に聖目とも制目とも星目とも書かれますが、井字にかたどつて井目といふのでせう、其の由來については、いろいろの故實もあ



りますが、まあ謂はゞ双方の着點を撰ぶ便宜の爲めに必要といふだけで、野球の一壘とか二壘とかいふやうな配置とは、まるで其の意味を異にし勝負とは全く沒交渉なのであります、が弱い者が强い者と對局する時、其のハンディキャップとして先に何目かの黒石を置く目やすには用ひられるのです、そして弱い方が黒を持ち、强い方が白を持つて打つのは、念にも及びますまい。

盤面に石を下すには、十字形を爲した所と、各線の終點なら、何處でも構ひませんが、白黒互ひに一手づゝ打つので、一度に二手打つわけには行きません、と云ふと「其れ見給へ、やつぱり碁にも約束が有るぢアないか」と、斯う言ふかも知れませんが、其れが取りも直さず自然の理法なので交互に一手づゝやるから勝負にもなるのですが、一度に幾手も打てるものとすれば、いつになつてもはてしは付きますまい。又二人對座の場合彼れ間ひ是れ答へ、是れ問ひ彼れ答へと云ふので、意志の交換もできますが、一人でしやべつて居たのでは談話の形式にすらならないのと同じ理屈ですされば碁も亦互ひに一子づゝ交換する手に、一々意味があるのですから、之れを手談とも云ふのです、其れから次に盤面の稱呼に就いて、豫め心得



て置かれたいことは、四方の緣を邊と云ひ、邊と邊との角を隅と云ひ、圖の如く黒の方から見て上を上邊、又は上側、下を下邊又は下側、右を右邊又は右側、左を左邊又は左側右上の隅を右上隅右下の隅を右下隅、左上の隅を左上隅、左下の隅を左下隅、中心の星を天元と呼ぶことです、デ當然白を持つ方が上手に座り、黒を持つ方が下手に座る意味から見て、場合に依つては盤面を東西南北に分け、先づ白の位置を南面して孤と稱すると云ふ、王者になぞらへて北と定め、之れに北面する方の下邊を南、右邊を東、左邊を西と斯う區別して、左邊の戰況が沈滯して居るやうな場合に、「西部戰線異狀なし」など、洒落る人も有りますが、之れも一種の新しい看方では有りませう。

盤面の今申した上邊に「イ」から「ツ」までの記號と、右邊に一から十九までの數字を添へてあるのを、何の爲めか合點の行かぬ人も有りませう之れは打つた石の位置を示す時、從前は縱横の線の數から數へて三の三とか十二の十とか云ふ、符號で言ひあらはしたものですが、其れは一寸見出すのに煩はしいので、現在は大抵圖の如く横をイロハ、縱を數字に改めて、例へば圖中の黒一を言ひあらはす場合には「ハの四」、白二を言ひあらはす場合には「タの四」、黒三は「ニの十七」、白四は「ホの三」、黒五は「レの十六」と、斯う呼ぶやうになつて、見出すのに大變便利になりました、が此の記號はマサカ碁盤の端に、刻み付けて置くわけにも行きませんから、横に「イ」から「ツ」までの中心が「ヌ」であり、縱に一から十九までの中心が十であり、井目の位置は横に並んだ三列が、四、十、十六の線であり、縱に並んだ三列が「ハ」、「ヌ」、「タ」の線であることを暗記して置いて載きたいのです。

ソコで弱い者と强い者との力を平均して、互角の戰ひを爲し得るやうに、其の力量の差に應じて劣つて居る方へ、ハンデイキヤップ即ち持點を與へるのと同じ意味で、打ち始める前に、弱い方が二目から井目までの、置石を置いて立ち向ふのを置碁と云ひまして、其の置石が二目の時は右上隅の星と、左下隅の星とへ置き、三目の時は更に右下隅の星へ一目加へ、四目の時は更に左上隅の星へ一目、五目の時は更に中心の天元へ一目、六目の時は天元の一目を取り除いて、更に左右「ニ」の行と「タ」の行との、第十線の星へ一目づゝ、七目の時は更に天元へ一目、八目の時は天元の一目を除いて上下「ヌ」の行の、第四線と第十六線との星へ一目づゝ、九目の時は星の全部に置き、之れを九目と言はずに井目と呼ぶのです、又力がズツト懸け離れて、井目でもかなはぬ時には、其の上にも尙ほ、「トの七」「トの十三」「ワの七」「ワの十三」の四箇所に一目づゝ加へて十三目置き、之れを井四目と申します、其れでもまだ釣合の取れない時は、星と星との中間へ等分に一目づつ加へて、縱横五目づゝとして、合計廿五目置いて懸かる場合もあります。

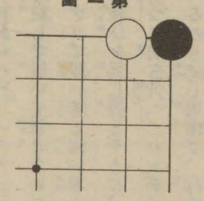
對局者相互の力が伯仲して、優劣の無い場合には、白と黒と互ひに一番づゝ取替へて打つので、之れを相先又は互先の手合と云ひますが、どちらも百分の百の技倆を備へて居れば、黒を持て先を布く方に利があるのですから、互ひに黒なら必ず勝ち、白なら必ず負けると云ふやうな時、例へば初段位ゐの手合ならば、黒を持つ方から、白に對して五六目の石を提供し、之れをコミと云ふのです、コミとは刀のなかごの、小身から轉訛した名だといふ説もありますが、どうも其れも不たしかのやうです。そんな穿鑿はいづれでもよろしいが、其のコミに依つて平均を取るので、終局の後双方の目數を數へて、假りに白の方が四目多くても、五目のコミが出してあれば、差引一目の負けにな

から先に一と打ち出すのは言ふまでも有りません従つて黒先の碁なら何手進んでも、黒の手數はいつでも奇數、白の手數はいつても偶數になるのです、即ち七十七手とか百二十三手とか云へば黒の手、八十手とか百二手とか云へば白の手てす。

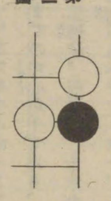
〔三〕石の死活

既に盤と石とを解せられたら、碁を打つ第一條件として、先づ以つて心得て置かねばならぬことは、石の活き死でありますが、石の活き死といふことは、前に申述べた地面の取り合に大關係がありまして、一方が成るべく多くの地面を取らうとすれば、一方が、極力それを、防害して假令寸土と雖も敵に多くを與へまいとする、其處に忽ち双方の衝突が起つて、力づくでも己れの希望を滿たさうとするのですから、どういふのが活きて、どういふのが死かを、頭に入れてかゝらなければなりません、スルト所謂四つ目殺しの意味から說き明かす必要がありますが、一つの石が敵の三つの石に取圍まれた時、直ぐ逃げ出さなければ、あと一手で取られてしまふので、其れを俗に四つ目殺しと申します。併し取られるのは必ずしも四つとは限らず、二つにでも三つにでもむざむざ取られる場合があります。例へば第一圖から第三圖まで

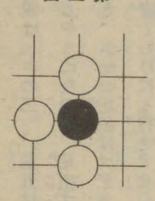
第一圖



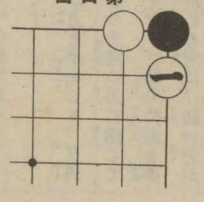
第二圖



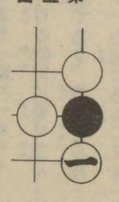
第三圖



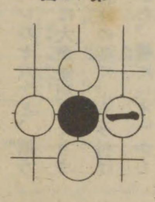
第四圖



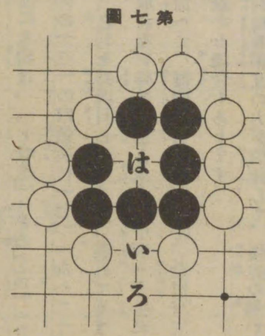
第五圖



第六圖



第七圖



第一圖から第三圖までは、皆黒が當りになつて居るのです、當りとは追手の意味で、今一手で取られる場合を總べて當りと云ふのですが、今度黒の打つ番なら、三圖のいづれでも、黒が一の所へ打つて逃げられますが、白の打つ番であれば、第一圖の黒は第四圖の如く第二圖の黒は第五圖の如く、第三圖の黒は第六圖の如く、何れも白に一と打たれて取られてしまふ其の第六圖が所謂四つ目殺しなのです、之れが延いて活き死の原則になるのですが、併しそれは一手も緩みのない、キシキシの所だから、是非ないとしても、當りになつて居ない石でありながら、取られてしまふ場合がいくらもあります。

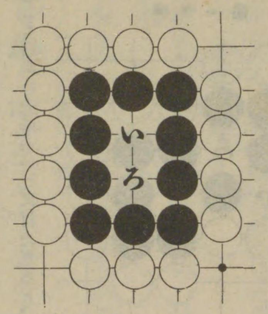
第七圖は即ち其の一例を示したもので、たとひ其れが當りになつて居なくも、黒はもう逃げることはできないのです、ト云ふのは此處でよし黒の手番であつても、例へば「い」の所へ打つて、此れを「ろ」の所へ取れば、直ぐ又「い」に打ちあげるなり、それと反對に「ろ」の所へ打ち込んで、「い」に取れば直ぐ「ろ」に打ち上げるなりそれは白の思ふまゝです、デ其の黒石を打ちあげた跡は、完全に白の十一目の地となり、打ちあげた黒石はやがて終局の後、黒地へ塡められるのです、所が同じ二目でも第九圖の如く、中に一つ仕切りがあつて一眼づゝ獨立して居れば、白に打ち込まれる餘地が有りませんから、もう金輪際死はないのです、尙ほ此の理合を推し廣めますと、確實に連絡して居る石なら、其れがどう曲りくねつてのたくつて居やうと、第十圖の如く總體の中に二眼有りさへすれば、其の位置は一眼が頭に在つて、一眼が臀の方に在らうと、活きは活きに相違ないのです。

るのです、又コミは必ずしも相先の手合に限るのでも有りません。

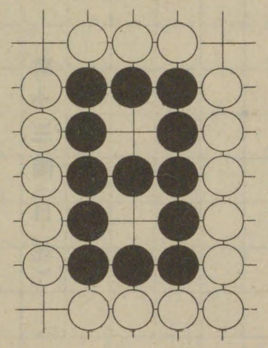
又一方が一目方弱い時は、常に黒を持つのですから、之れを單に先の手合と云ひ、黒から先に一と打ち出しますが、二目からの置碁になれば、白の黒を外部へ逃げ出さうとすれば直ちに白に「ろ」の所へおさへられて、當りとなるのですから、到底助りません、所が運よく若しも「ろ」の所に、味方の黒が一目在れば、「い」に打つて難なく連絡して、危ない命をのがれることもできますから味方と連絡を取ることも、常に必要の條件と覺悟しなければなりません、ソコでまた白の此の石を取り上げるのは、前の第六圖までの場合と違つてまだ當りになつて居ないのですから、順序として先づ「い」の所に當て、次の手番で「は」の所へ打つて取りあげるのです。其れを逆に「は」の方へ先に打ち込めるものと思へば大間違ひ、なぜなら一眼の中は、いくら打ち込んでも働きの餘地の無い所ですから、打ち込まれた方では手も濡さずに、只それを持つて行きます、故に一眼の中へ打ち込むのは、全部の石を取りあげる場合に限りまず、所が此處ではまだ「い」の所が明いて居て當りでないから、直ぐ打ち揚るわけに行きません。

スルト活きと死との差を、ごく手短かに言ひあらはせば、どんな大きな石でも一眼では死、どんな小さな石でも二眼あれば活きといふので、碁盤の上には伊達政宗や山路將軍のやうな、獨眼龍の存在は許されないのであります、ツマリ唯の一眼では周圍のダメの詰つた時に、一手で打ちあげられてしまひますが、二眼あれば其の双方へ一時に打ち込むことができません、もう何處からも其の石をいじめる餘地がないのです、併し二眼の形を持つて居ても、第八圖の如く横なり縦なりに連續して居る二眼では、活きにならないのです、なぜなら斯う續いて居る二眼ならば、白は何時でも「い」の所へ一目打ち込んで當りをかけ、黒が

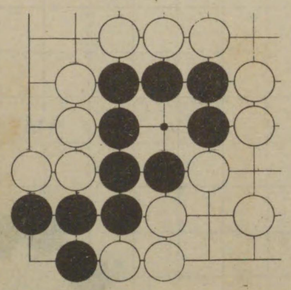
第八圖



第九圖

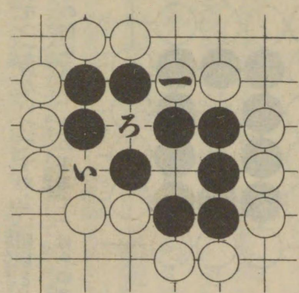


第十圖

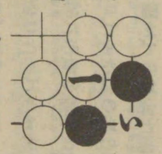


又第十一圖は白に一と打たれた時、「い」の點が死活の岐れる所であつて、之れを黒から先に行けば、黒の活きとなりますが、反對に白から先に行けば、黒の死となるのです、デ黒が「い」に打てば、黒の眼は斜めになつて居ても、其れは戞脫みの見當違ひではなく、立派な二眼の活きなのですが、若しも白から先に「い」に打たれると、上のカネの手になつた三目の黒が當りになつて、其の三目を「ろ」の所へ取られますから、「ろ」の一眼は潰れてしまふのです、斯ういふのを總て缺け眼と云つて、黒の死となるのです、第十二圖は

第十一圖



第十二圖



押し潰しと云つて、白に一と當てられると黒の「い」と粘げないのは、一眼の中へ打ち込めないのと同じ理由で、白の活なのです。

以上の說明と圖解とに依つて、死活の要領は得られた筈ですが、尙ほ簡單な圖を擧げて、之を補へば第十三圖以下第二十圖迄のやうになります。

第十三圖は白の三目の中心で、黒から一と打込めば白は一眼となつて死。

第十四圖は前圖と同じ中心へ、白から一と打てば二眼となつて活。

第十五圖は黒に「い」の點へ一目取られる餘地があつて、其處が缺眼ゆゑ死。

第十六圖は黒に「い」に打込まれても、「ろ」に取つて活。

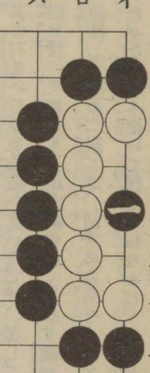
第十七圖は白一と下つて、黒に「い」に打込まれても、「ろ」と取つて活。

第十八圖は黒に一と綽ねられて、「い」と曲つても「ろ」と「は」が缺眼で死。

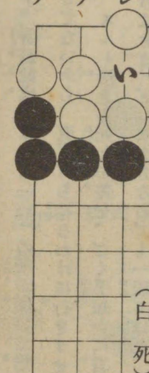
第十九圖は黒一で死、それは更に黒に一目加へられて其れを打揚げた時、中心へ又一目置かれて一眼しかならないのです。

第二十圖は前圖の如くなるのを逃げて白一と眼を持つて活る。

第十三圖（白死）

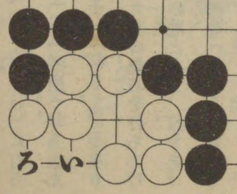


第十四圖（活白）

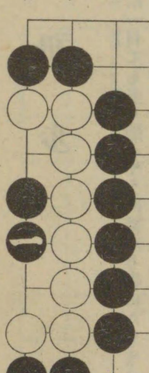


第十五圖（白死）

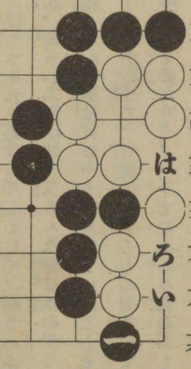
第十六圖（活白）



第十七圖（白死）

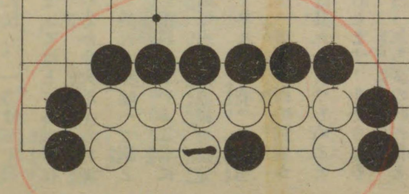


第十八圖（白死）



第十九圖（白死）

第二十圖（活白）



〔四〕手段の初歩

石の死活を誤りなく見定るのと、見誤るのとは勝敗の岐れる所ですから、常に心懸けて斯う打てば活き、斯う打てば死といふことを、形と、手順とに依り、成るべく多くの例示に就いて心得て置かれたいのです、初心の中は折角虫氣もなく守り育てた大事の石を、過失の爲めに頓死させたり、又は哺育の方法を誤つて、榮養不良に導いて、早世させたりすることが度々有りますが、それはまだ我が石の健康診斷をする、智識が乏しいからであります、デハ我が石の健康診斷だけ、できればいいかといふと、其れは、受身には妨げないとしても、働きかける役にはまだ足りません、スルトやはり我が石の健康診斷のみでなく、相手方の石の健康診斷もして、其のどれ程の抵抗力があるかと云ふことを察し、其れを目やすとして己れの働きも考へなければならないのです。

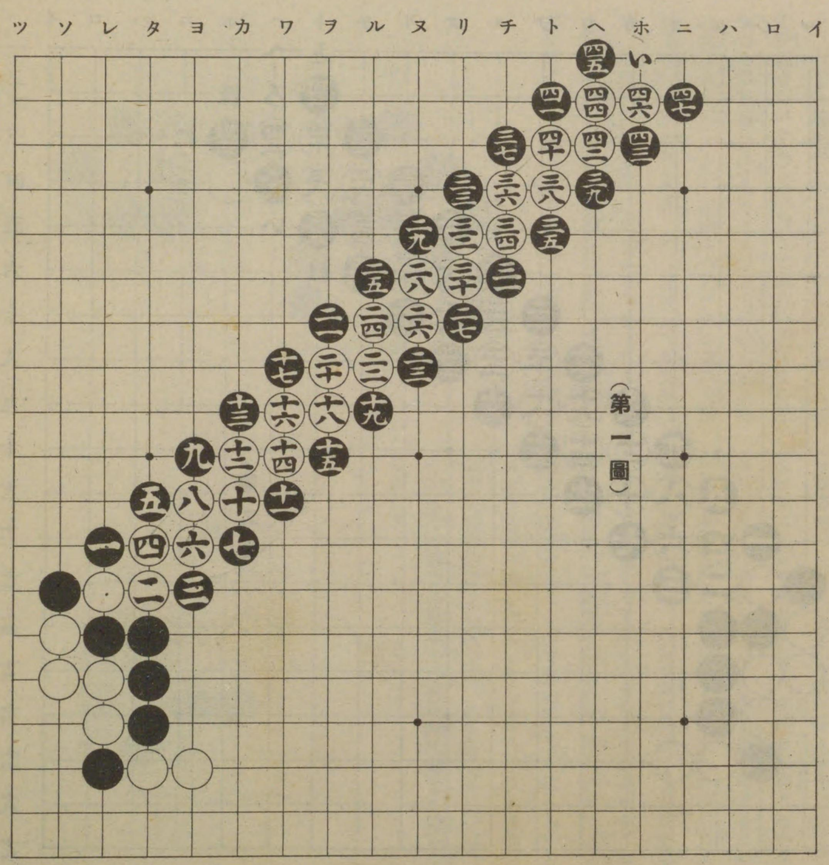
更に之を砕いて申せば、初めに述べた通り、碁は地面の圍ひ合ひですから、早い話が互ひに圍つた地が等分で、白も五十目黒も五十目と云ふのでは、持碁の勝負なしにしかなりませんから、互ひに一目でも多く圍ふやうに努める事になります、スルト勢ひ尋常の圍ひ合で其の目的を遂げることは、成功率が乏しくなりますから、折があらば何目でも敵の石を捕虜にして、終局の後其の捕虜を敵の地面に塡め、其れだけ己れの地面を多くしやうとするのです、假りに双方の地面が等分に五十目づつの場合、白には捕虜の石が十目、黒には捕虜の石が十二目あるとすれば、其れを双方へ塡め合つて白の地は三十八目となり、黒の地は四十目となりますから、差引黒が二目の勝といふことになるのです。

そんならどんな手段に依つて、敵の石を捕虜にするのかといふのが、當然解かねばならぬ謎で、其處に始めて石の死活と云ふことが問題になるのです、デ先づ敵の守りの薄弱と思ふ點を攻めて、其の全部を降伏させるなり、又は一部を切り取るなりして、其の取り跡を我が領分に編入しやうと云ふ作戰が、或は攻城ともなり或は野戰ともなり盤面に火花を散らすことになるのです、所が一面には又斯ういふ場合があります、一方が百目もあらうといふ、大地主であるに反し、一方は五十目にも足らぬ小百姓で、此のまゝではとても競爭はできないと見れば、小百姓の方から大地主の地面内へ、一粒の種子をおろし、其れが芽ばへて蝋となり、根を張り幹を伸べ枝を重ね、といふ工合にトウトウ他の地面内に、無斷で永久借地權を設定してしまふことがあります、其れは畢竟、「大男總身に智慧がまわり兼ね」で、廣い地面の何處かに隙があるか、さもなければ其れを取つちめるだけの、力が足りないからであります、サそうなると今までのブルジョア氣分は、忽ち夢の牡丹餅と消えて、盤面の勢力を顚倒し、終に後の雁が先に立つやうな結果を齎らすのです。

さすれば先づ己れの守りを固くして、然る後に敵の弱點を窺ふのが當然の順序で、一途に敵の隙ばかり狙つて、己れの守りをおろそかにすれば、逆に鼻毛を抜かれるものと覺悟しなければなりません、從つてそれを避ける用心として、斯ういふ石は活、斯ういふ石は死、又こんな形は活のやうでも死、こんな形は死のやうでも活といふことを判斷するのが肝要で、到底活のあるものを攻めて無益の彈丸を費したり、一手で死ぬ石を見のがしたりするやうな、ヘマを演じてはなりません。

征 ソコで四つ目殺しの原則に次ぐ、第二義として心得べきはシテウで有ります、一口に「シテウ知らずに碁を打つな」といふ喩へもある位、大切なものですから、此の成行に就いては特に愼重の注意を要しますが、初心の中は…イヤ初心の時代を通り越して、相當に打てるやうになつてからでも、得て測定を誤つて、飛んだ失敗を招くことがあります、嘗て或高段者が「征測定器」といふものを發明して、新案登錄の特許を得たと云ふ噂の立つた時、諸方から其註文や問合せが殺到して大いに當惑したといふ滑稽な話があります、又或教授が初心者の理解力をためす爲めに、取られるシテウを平氣で逃げ出して居ると、「ハテな先生が逃げ出した所を見ると、之れア取れないのだらう」と中途で其の追ひかけを、やめてしまつたと云ふ、お笑ひ草もあります、ソコで第一圖黒一と白の「レの十三」に在る一目に當てた時、白二と逃げ出すと、更に黒に三と當てられて、終に斜めに盤の終端四十七まで追ひ詰められ、トウトウ遁れる途がなくて、黒に「い」と打ちあげられてしまふのが卽ちシテウで、最初一と當てられた時に、早くも其の運命は定つて居るのです。

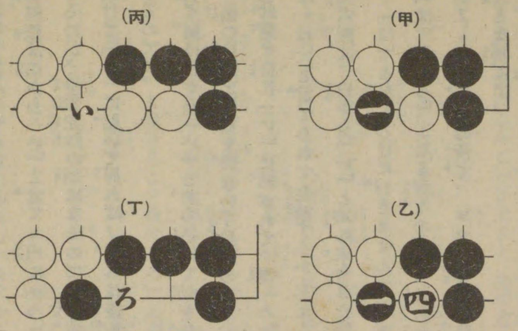
が、是れア白の逃げて行く針路に、味方の石が



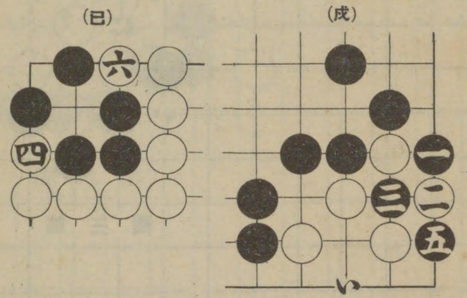
（第一圖）

一つもないからの結果で、息を吐く間もなくトウトウ逃げあふせずして、ムザムザ擒め取られるのです、所が第二圖の如く、「ホの四」の位置に白が一目在る時は、其れをシテウの當りと云つて、地獄の佛沙漠のオアシスにも勝るほど有がたいのです、ト云ふのは四十二までと逃げた時、此の一子があるばかりで、追手の黒三十九が當りになり黒尚ほも四十三と追へば、「い」の所へ打ちぬき黒更に「ろ」と當てれば「は」と打ち抜くことに依つて、アベコベに黒の方が、四分五裂となつてしまふのです、但し當りの白石は必ずしも此處とは限りません、「い」に在つても「は」に在つても同じ道理です、所が其れが若し「に」に在つた場合には、白四十二の時、黒四十三、白「ろ」、黒「ほ」、白「へ」、黒「と」と、斯ういふ運びで白が取られてしまふのですから、「に」に在る白は澤庵の押しにも足らぬ、無駄石となるです。

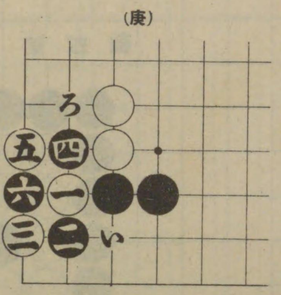
劫 コウとは甲圖のやうな形に於て、黒一と白の一目を取た時、白からも亦直ぐ其れを取返せさうに見えますが、其れでは互ひに取ると取返し取るとは取返し、所謂イタチゴッコでいつまでたつても鬼がつきません、ソコで白は二の手で劫立といふ間の手を一つ打ち、損得上黒が三の手でその間の手に、何とか挨拶しなければならぬやうに仕向け、それから乙圖のごとく四と、始めて其れを取り返すのです、スルト今度は黒五の手で、何處かに劫立して六と受けさせ、七の手で再び其れを取返すといふ順序で、互ひに同じ手順を繰返すのを、劫又は劫爭ひと云ふのです。

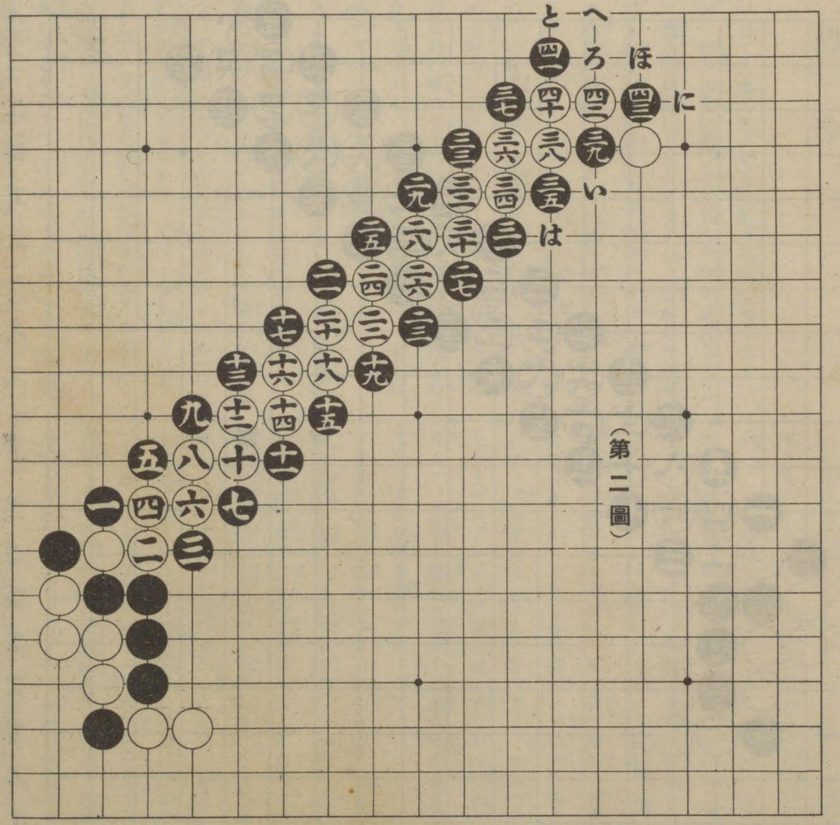


丙圖は、稍前の形と似ては居ますが、白が二目ですから、其の二目を黒が「い」に取つた時は、丁圖のやうな形ちとなります、スルト白は直ぐそれを「ろ」に取返せるのです、なぜなら前と違つて、其處に餘地が一つあつて、黒からは再び一手で取返せないからです、從つて其れは劫とは全然其の性質が異つて居るのです、以上は劫に就いての原則的例示ですが、戊圖は今黒が此の隅の白を取る目的で一と綽れた時、白三に粘いて居たのでは、黒に「い」と置かれて死となりますから、二と約へてサア劫に來いと出たのです、黒は目的の爲めには已むを得ませんから、三と取つたのです



ソコデ白一方の隅へ己圖の如く四と劫立した時、黒は其れに應答せずに、五と打ち抜きました、白は乘り懸つた船で、已むを得ませんから、六と打つて一方の石を取りました、之れを劫換りといふのですが、白の四と劫立した際、黒はなぜ其れに應答しなかつたかと云ひますと、之れは黒が双方の得失を比較して、己圖の方の我が小さな石を棄てゝも、戊圖の方の敵の大きな石を取るのが、得だからです、又庚圖は白三の時、黒「い」に應じたのでは白は其まゝ手を抜いても、又は「ろ」と粘いでも白が働いた形になります、故に黒は四と切り、白五の時六と取つて、劫となつたのです、これは白が劫立の關係で、此の劫に勝てる時に限るのです。



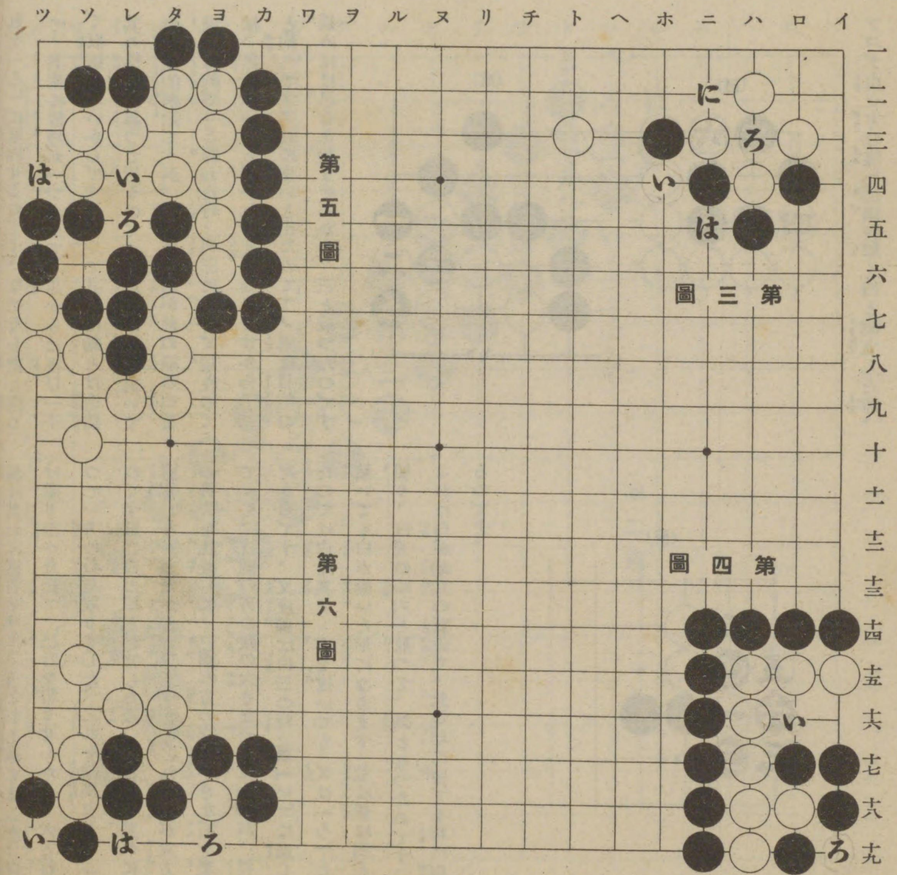


第三圖は白が「い」と切つて劫に來たのですから、黒「ろ」と取つてからの劫爭ひに、黒が勝てば「に」の所に、白が勝てば、「は」の所に打ち抜くのは、言ふまでもありません。

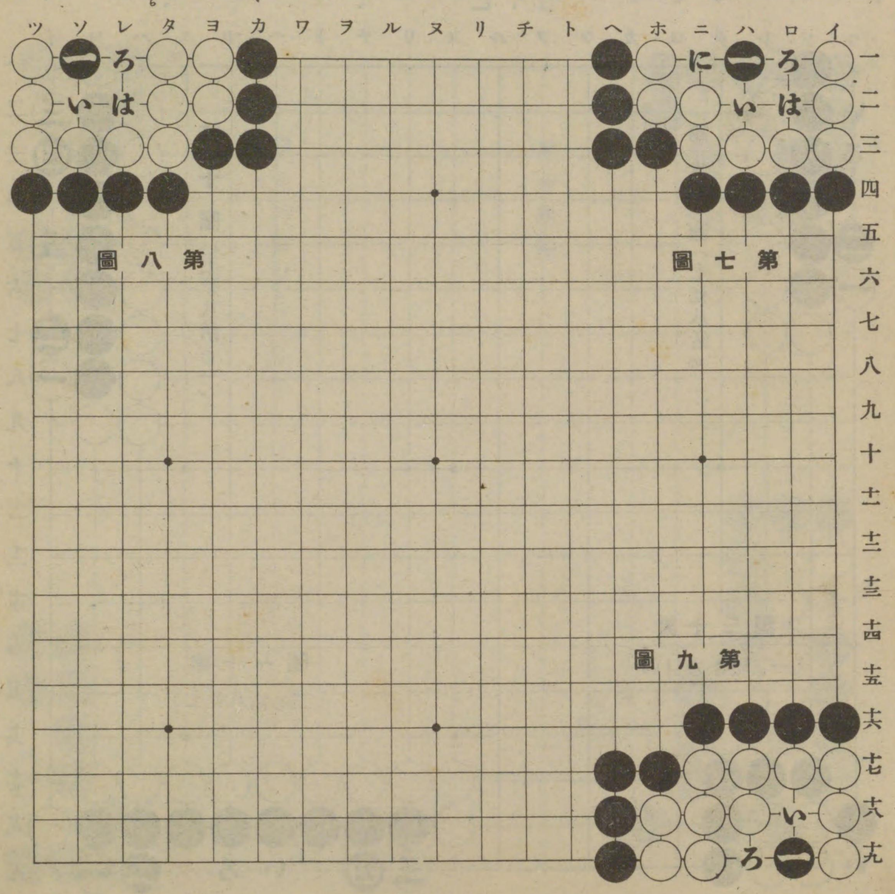
第四圖は黒から「い」と當てゝ白に「ろ」と取らせるのが、全體死活の劫になるので、黒若し劫を避けて「ろ」に粘いで居れば、其れは後段の持となるのです。

第五圖は黒から「い」と打ち込んで劫を仕懸けた、黒の自衛上已むを得ない手段なのです、なぜなら此處を白に「い」に粘がれて、黒「ろ」と粘げば「は」と當てられて全滅するからです。

第六圖は、白から「い」と劫に來られた時、黒直ぐ「は」と粘ぐわけに行きませんから、やがて白「は」黒「ろ」となる所なのです、此の劫なかなか〳〵黒の勝てぬ所で、ヨセの終りに臨んでは大きな劫です。

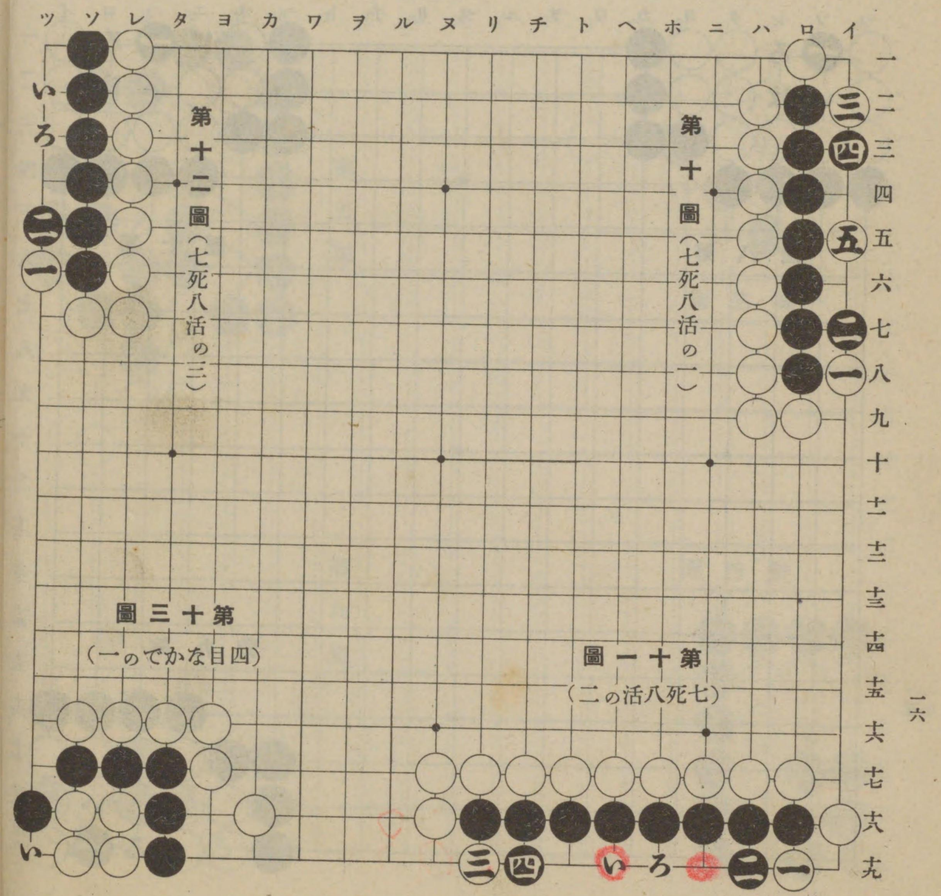


點 ナカデは敵の圍ひの中の急所へ〳〵トゞメを刺す手で、第七圖白の五目の中へ、黒一と打込んだのが即ち其れです、勿論此の位置を外れたら白は活となるのです、デ此のまゝで放つて置いて白はもう到底助らないのですが、周圍を取卷いた黒にも活がなくて、攻め合となつた場合、どうして此の白を取り揚げるかと云ひますと、先づ順に「い、ろ、は」の三ケ所へ詰めて、白に「に」に打揚げさせ、第八圖の形になつた時、黒又一と點するのです、そして又順に「い、に」と詰めて、白に「は」と打揚げさせ、第九圖の如く黒又一と點するのです、で今度は「い、ろ」の何れにでも詰めて、白に其れを取らせ、其の取跡へ又一目詰めて取らせて、次に全部の白を打揚げるのですが、最初第七圖の時、黒が詰め方の順序を誤つて、「い」から「に」、「は」と詰めると、白に「ろ」と取られて、其の取跡へ一と點すれば「い」と眼を持たれ、黒又「い」と點すれば一と眼を持たれて、白に樂活きられます、又「ろ、は、に」の順に詰めても、白に「い」と取られて活きられますから、必ず此の順序を間違へてはなりません。



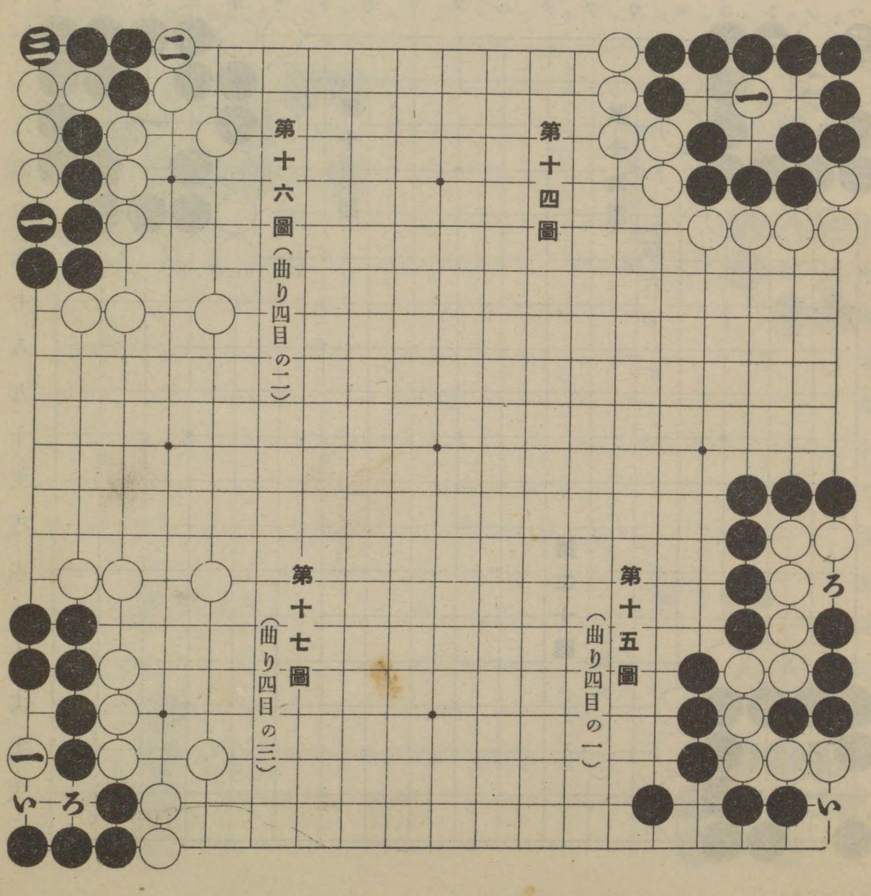
第十圖乃至第十二圖は、俗にいふ七死八活の意味を具體的に示したもので、第十圖黒の一直線になつた七目は、黒から先に一に打てば活ですが、白から先に一と打たれると、ツマリ四迄の手數を經た上、斯う五と點されて、黒の死となるのです、併し之れが第十一圖の如く、黒今一つ長く八目になつて居れば、どう攻められても二眼を得て活るのです、即ち一から四までと運んだ時、白「い」に打てば「ろ」と眼を持ち、白又「ろ」に打てば「い」と眼を持つゆゑ、確實に二眼できるのです、所が第十二圖の如き一隅に在つては、假令六目でも白は一方からしか攻められない爲め、斯う白一黒二となつて、ソコで白「い」に打込んでも、「ろ」に打込んでも、前圖と同じ理由で死は無いのです。

第十三圖は、たとひ黒が此の四目を「い」の所へ打あげた所で、其處に獨立した眼を二つ作ることはできませんから、四目あつても大きな一眼と同じこと、即ち前の第八圖と同じ意味であることを參照されたら、忽ち合點が行かれること、思ひます。



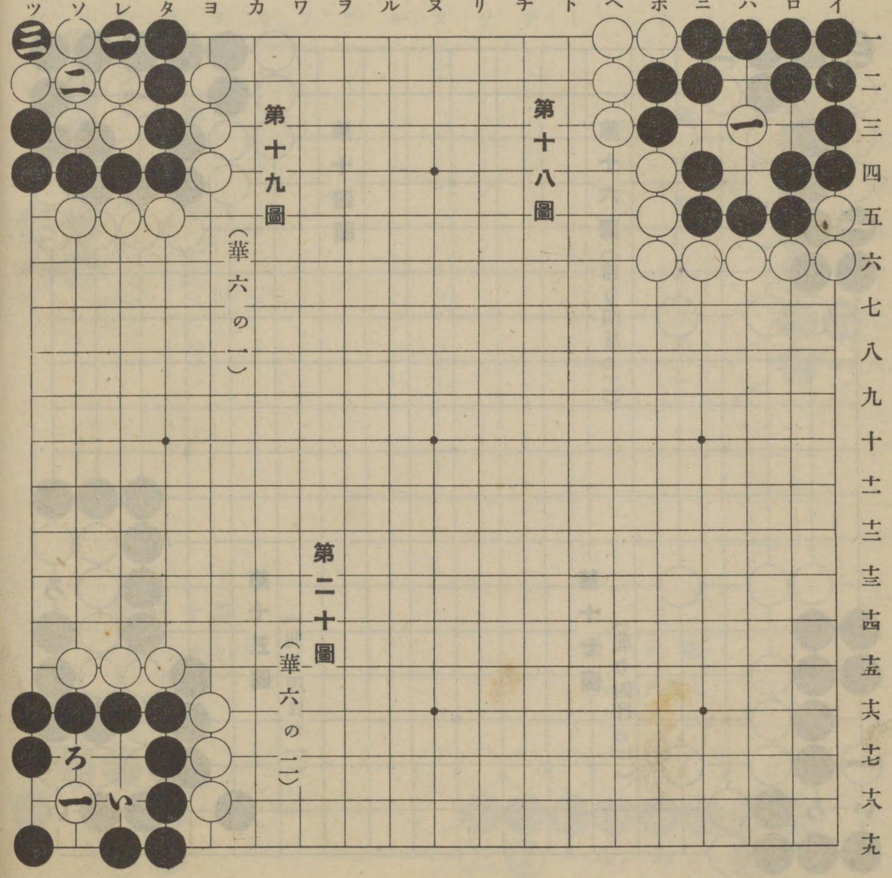
第十四圖は、前圖と稍々異つた形ではありますが、白に一と打たれると、もうグウの音も出ないのです。

茲にまた曲り四目と云つて、同じ四目でありながら、折釘のやうに一寸曲つた四目なら、周圍の關係に依つて、其れが活ともなり、又死ともなる變化が起ります、例へば第十五圖の其れは、何時でも黒の「い」と當てた時、白は「ろ」に取りさへすれば、もう完全に二眼を備へて、左圖扇といふわけです、併し其れだけではまだ、どうして二眼になるのかが徹底しかねると云ふ方があれば、いつでも遠慮なくお申出で下さい、所が第十六圖のやうな場合に在つて、黒一と詰め白二と當て黒三と打ち抜き、第十七圖のやうなかたちとなつた時、其の取り跡へ白から直ぐ一と打ち込まれて、之れを「い」に受けると、直ぐ「ろ」に打ちあげるし、ト云つて「ろ」に粘げば、三目の中央へ一と點されたのと同じ事になつて、何れにしても助らないのです、だが曲り四目に就てはまだ、隅の曲り四目と云つて、大分複雜な問題を伴ふのもありますが、其れは次の機會に於て說明しませう。



第十八圖は第十四圖に似て、只一目廣いだけですが、白に一と點されて全滅することは、別に蛇足を添ふる必要もないでせう。

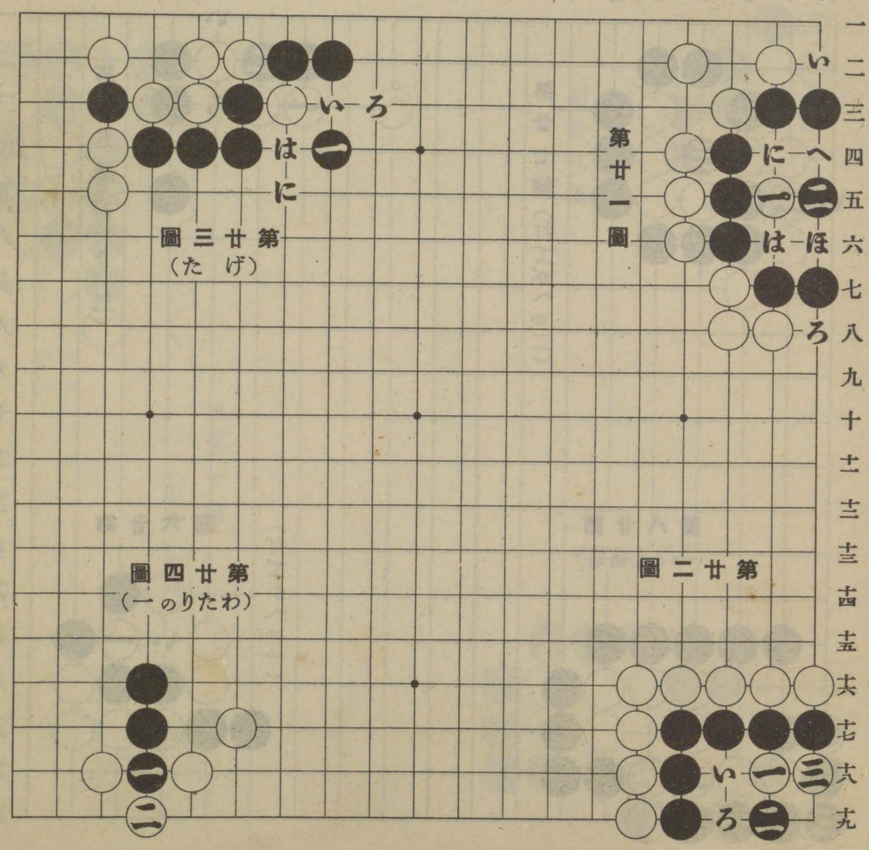
第十九圖は隅とも云ひ、又華六とも云ひ、點としては一番大きいのですが、デハそう澤山の眼があつて、どうして死になるかと云ひますと、此圖中黒が先づ一と當てゝ、白二と粘ぎ、黒三と取れば第二十圖のやうになつて、白は直ぐ一と點します、スルト黒が「い」と打てば白に「ろ」と出られ、黒又「ろ」と打てば白に「い」と出られて、一眼にしかならないのです、之れを華六といふのは、どこか梅鉢の紋に似通つて居るからでせう。



同じ六目でも、第廿一圖の形ちになると、之れを櫛形と云つて、「い」と「ろ」の點が詰つてさへ居なければ、黒の活です、其れは白一と打ち込めば二と應じて、次に白「に」なら「は」に、白又「は」なら「に」に粘いで活、又白一を二に打ち込めば一に受けて、次に白「ほ」なら「へ」に「へ」なら「ほ」と應じて、此の黒到底手に合ひません、第二十二圖は一から三までの手順で、黒の死となるのです、デ白三の時黒「い」と約へれば「ろ」と取られるのは、言ふまでもありますまい。

附　ハカスとは下駄を穿かす意味で、第廿三圖の黒一がそれなのですが、下駄にせよ草履にせよ靴にせよ、此の白が歩き出して逃げられるものなら、當然履物の必要もあらうが、白を逃がさぬ爲めの下駄だから下駄よりは足枷の方が當つて居るなんて理屈は禁物です、ともかくも之れでもう白の一目は完全に捕虜となつたので、「い」の方へ出れば「ろ」に「は」の方へ出れば「に」に約へられて、逃げるわけに行かないのです。

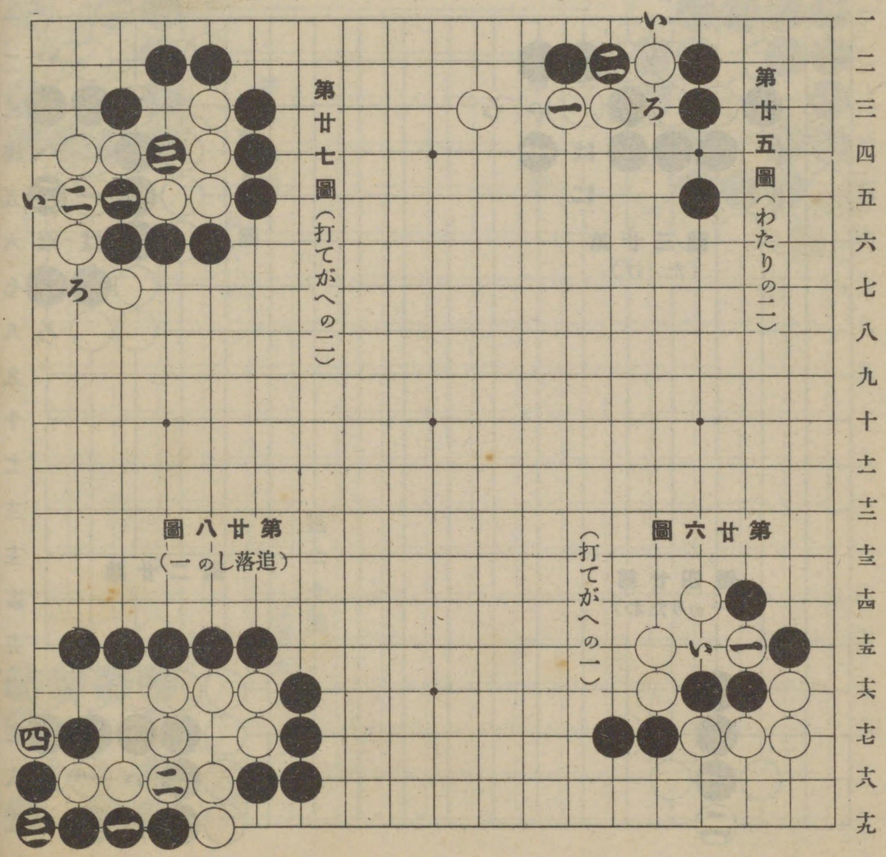
盤　ワタリは敵が我が軍を兩斷せんとして、隘路を臨んで脅やかし來つた時に、間一髪といつたやうな、低い狹い處で味方と連絡する意味です、第廿四圖の黒一に、白二と受けたのが即ち其です。



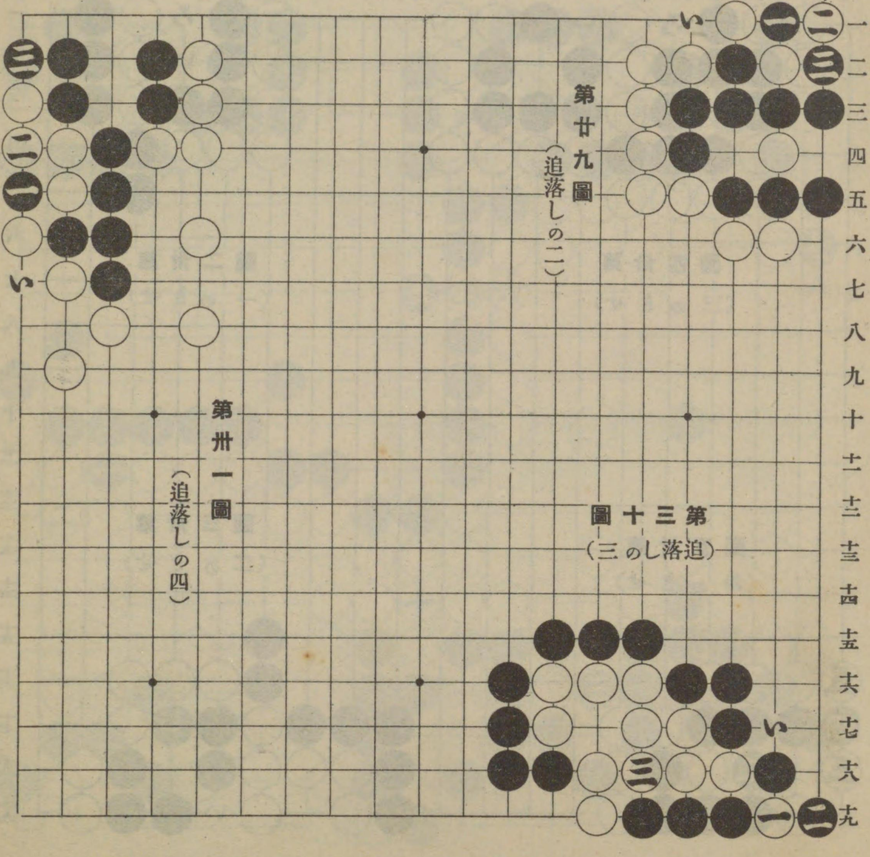
第廿五圖の白一の時、黒二と突き當つた手は、まだ右の黒と連絡して居ないやうですが、白ソコデ「い」と下れば、黒に「ろ」と切られて、却つて己が取られますし、ト云つて「ろ」に粘いで居れば「い」に渡られるのですから、何れにしてももう、黒二と突き當つたゞけで、確實に渡つたのです。

撲　第廿六圖、及び第廿七圖は、共にウッテガへの類例ですが、廿六圖は白に一と打込まれて、黒それを「い」に取ると、今度は白にまた一の所へ打ちあげられるのです、故に黒はもう一と打込まれた以上は、其のまゝソックリ見捨る外はないのです、第廿七圖のやうな形に在つて、黒一の時白打つてがへを恐れて三の所に粘げば、黒に二に出られて、白の一い」と渡つた時、更に「ろ」と切られ、白は全部捕獲されることになりますから、此處は三の打つてがへを覺悟で、二と粘ぐの外はないのです。

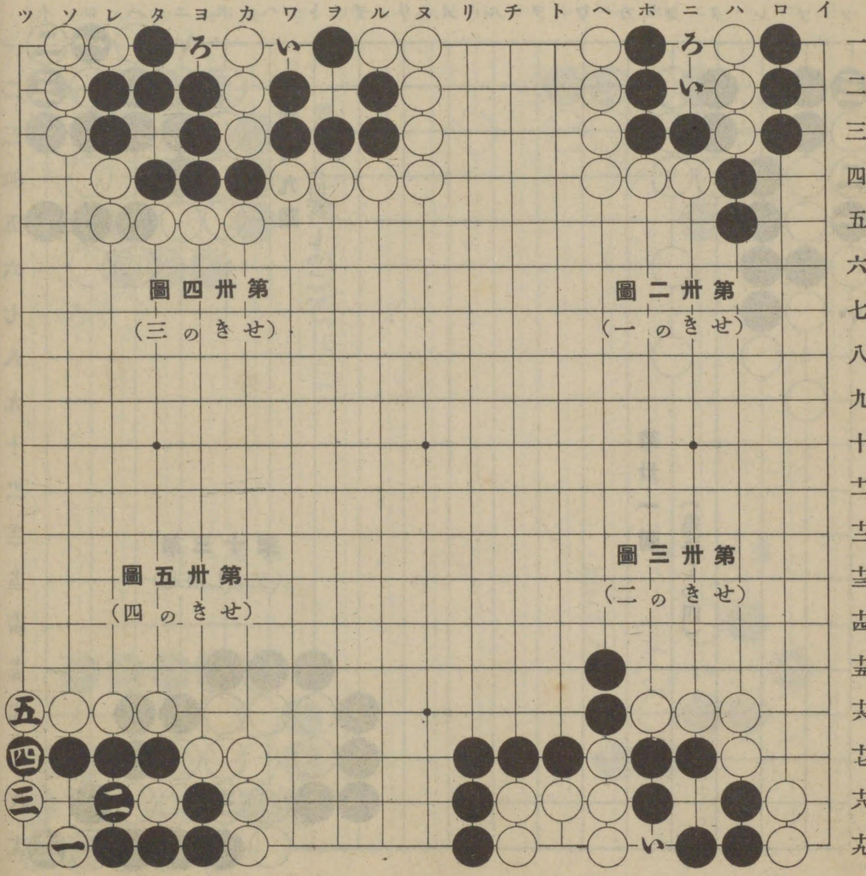
追落　之は、敵のにげるのを背後から追撃して、終に其の本隊に收容される邏の無いやうに、一手の緩みも與へぬ攻手です、第廿八圖に就いて言へば、黒一と粘ぎ白二と追ひ、黒三と粘いだ時白に四と打つて取られるのが、最も簡單な追落の一例であります。



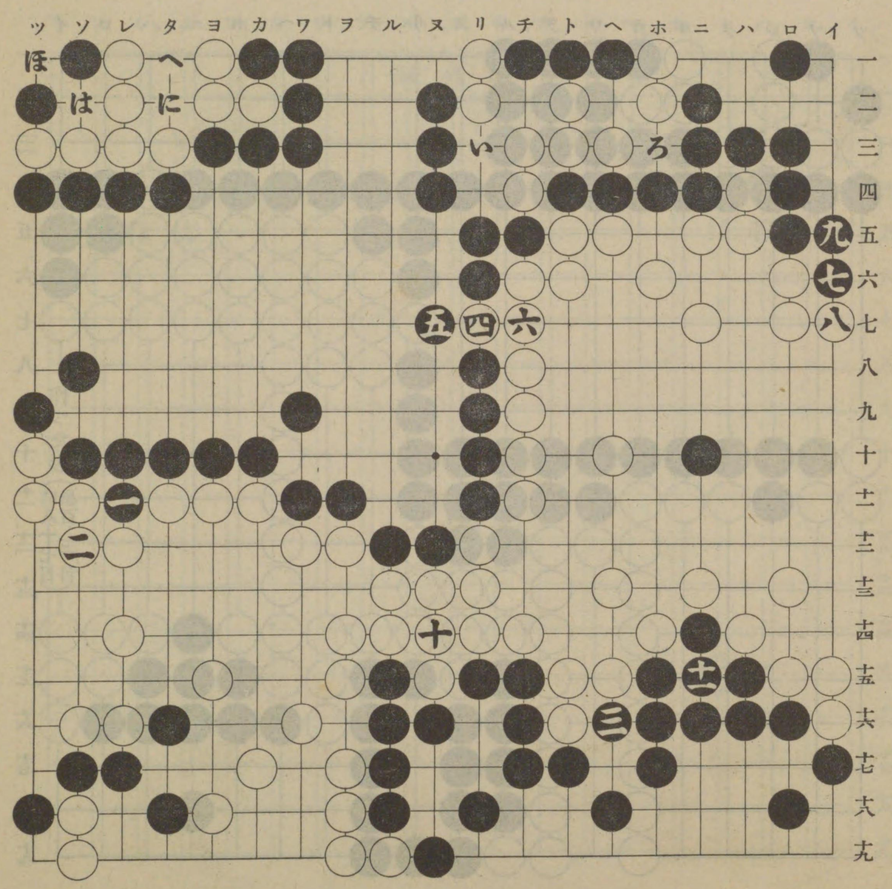
第廿九圖は少し工夫がいるのです、其れは先づ黒一と打ち込んで、白に二と取らせてから三と追ふのです。スルト白一の所へ粘げば、「い」と取られますから、其の當りの二目は當然黒のものになつたのです、第三十圖も稍や前圖と同じやうな意味で、白先づ一と打ち込み、黒二と取つた時三と追ひ、ソコで黒一の所へ粘げば「い」と切つて取らうといふのです、又第三十一圖は黒先づ一と打ち込んで二と取らせ、三と追つて白其處を一に粘げば「い」に取らうといふのです、初心の中は此の一と打ち込む手に氣づかず、正直に三の所から當てますが、スルト白に一の所へ粘がれて、黒次に二に一目取れば、白は「い」に粘いで長い舌をペロリと出すわけなのです。以上はほんの追落の一斑です。



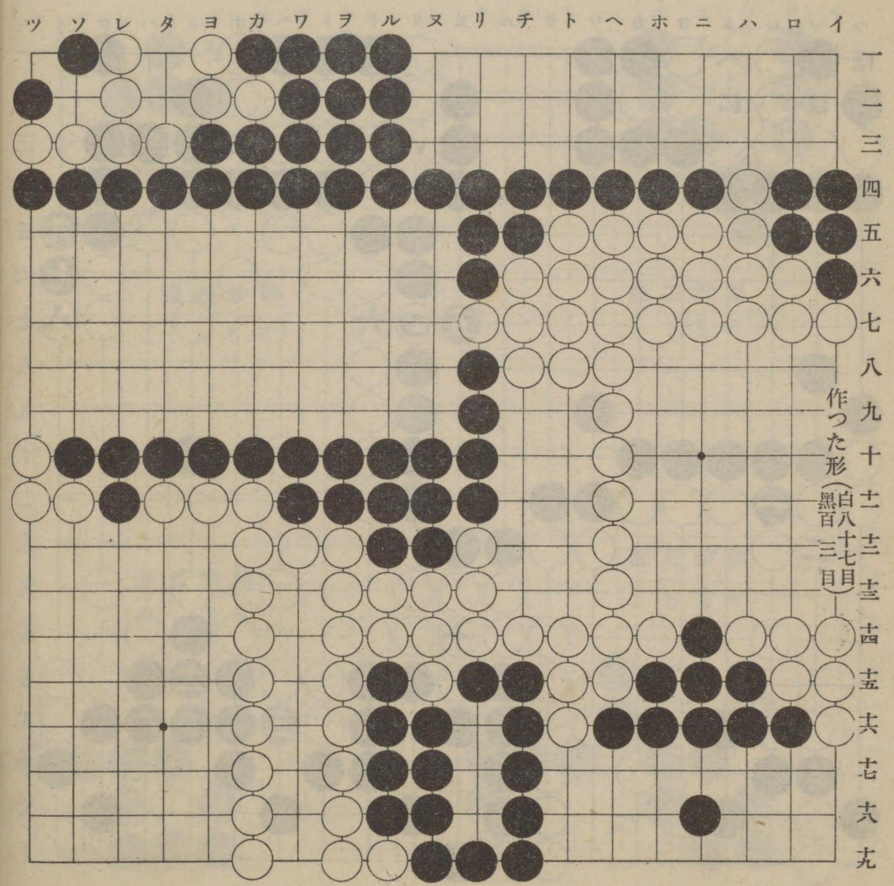
持　前項まで〻石の死活に關する手段は、畧ぼ要領を盡しましたが、まだ茲に一つ死活の圈外に在るセキに就いて申述べなければなりません、て持とは敵味方どちらからも、手の着けられぬ狀態に在る石を云ひますので、第三十二圖は其の最も單明な一例です、卽ち圖中「い」「ろ」の點は、黑白どちらが先に行つても、「い」と打てば「ろ」に取られ、「ろ」と打てば「い」に取られる所で、双方脫み合つたまゝ、どうすることもできないのですから、終局の後も此處だけは除外して、目數の計算に加へないのです、故に「い」「ろ」の點は國際上の中立地帶とか、緩衝地帶とかいふやうなものです、第三十三圖の「い」の點、第三十四圖の「い」「ろ」の點、皆な同じ理由の下に、双方絶對に働きかけるわけに行かぬ所です、第三十五圖は終盤に臨んで、下手の能くかゝる手ですが、懸かると云つても別にハメ手ではなく、ツマリ黑の油斷から起る事です、卽ち白一と當てゝ二と取らせ、三と尖みましたから黑は四と約へるの外なく、ソコで白に五と詰められて持となつた結果黑は辛うじて死を免れたものゝ、六目あつた地面は全然捧に振つたわけです。



◇打終た形　さて諸君は以上の說明に依て、必要の豫備智識を得られ、もう略ぼ何人とでも對局し能ふ筈です、既に碁が打てるとなつたら、打ち終つてからの目數を算へて、勝敗の數字を知る方法をも知らなくてはなりません、今打ち終つた形に就いて言へば黑一白二で白地を一目減らしたのが、黑の先手一目、次に黑の三と約へて後手一目を占めたのは、白四黑五白六と運んだ、白の後手二目と、黑七、白八、黑九と運んだ黑の後手二目とは見合ひになつて居るからです。次に白十黑十一の粘ぎ〳〵は、互ひに其處へ取られぬ中に、一目づゝを收容したのです、デ全く終局し、「ホの五」と「ヲの十六」に在るダメは、黑白一目づゝ塡め、其れから黑は白の揚石九目も取つて、白の地へ、白は黑の揚石六目を取つて黑の地へ塡めます、但白の揚石九目と云ふのは、上邊の稍や楕形を爲した白が其れで、白之れを「い」と粘げば黑「ろ」、白又「ろ」なら、黑「い」で此の白到底活きず、又左上隅の白九目は持て、白假りに「は」と當てれば、黑に「に」と打込まれて、其れを「へ」に取れませんから、「ほ」と二目打拔く外なく、スルト黑に「へ」と三目取られて、却て損になるのです。

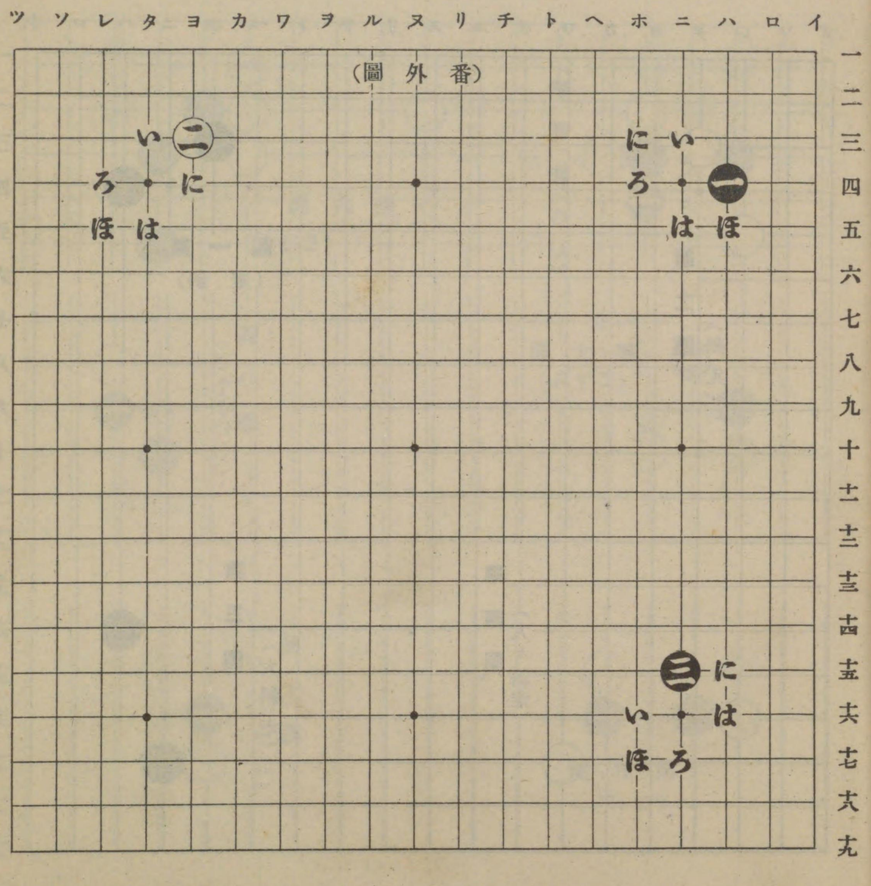


◇**作つた形**　既に前圖の如く最後のヨセを終り、ダメを詰めたら、今度は互ひの揚石を取つて敵の地面に塡めて、數へやすいやうに形を直すのを、碁を作ると云ふのです、そして黒の人が白の地を作り、白の人が黒の地を作るのですが、形を直すと云つても、唯だ勝手に直すのでは有りません、同じ二十目ある地面でも其れが出たり引込んだりして居ては數へ憎いものですから、横を四列、縦を五列にすると云ふ工合に、見易い二十目に作るのです、勿論地は一と地と限りませんで、此處に二十八目あり、彼處に十七目あると云ふやうな時は、廿八目の地面の一部から、二目取除いて其處を三十目の地に廣め、そして其の取り除いた二目の石を、十七目の方の地面へ塡めて、十五目の地面に狹め合計四十五目と云ふことが、一見して解るやうにするのです、そういふ風に作り上げた此の一局の目數は、黒合計百三目、白合計八十七目で差引黒が十六目の勝となつたのです。



〔五〕用語と用字

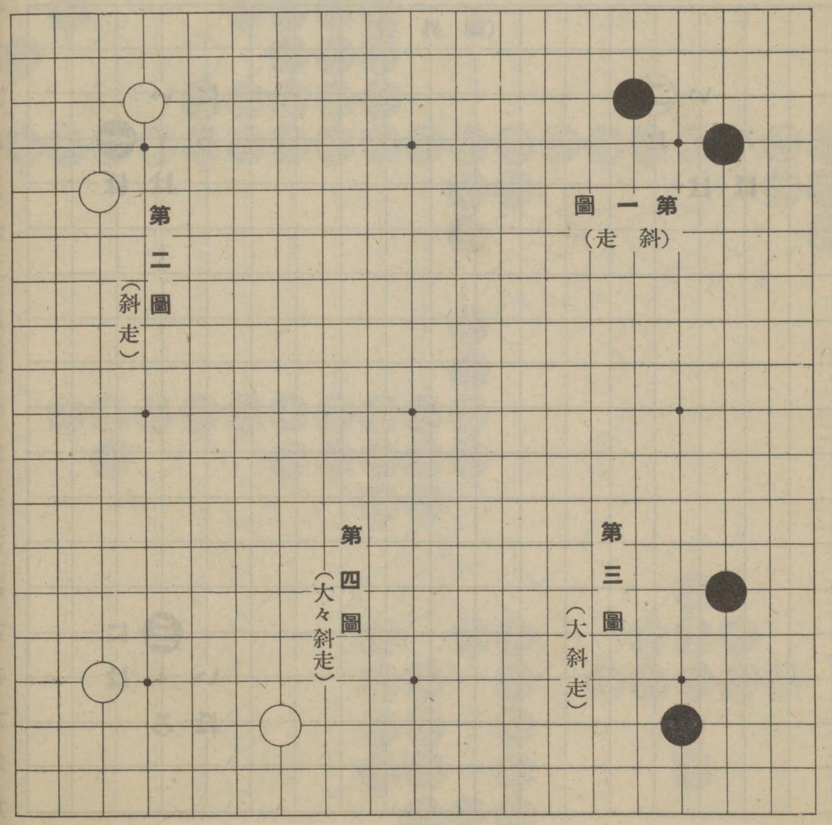
專門の用語用字に就いては、大部分はむづかしい漢字で、表はされて居ますが、本講座に於ては必ずしも、之れに拘泥しないで、便宜上解し易い文字をも、併用することに致しました、そこで働きについての用語を理解される前に、是非心得て置くべき條件は、四隅の星を中心として、互ひに根據を占めやうとする位置の名稱です、番外圖黒一の位置を小目又は目下と云ひ、白二を目外しと云ひ、黒三を高目といふのです、そして黒一を「い」に打てばやはり小目となり、「ろ」又は「は」に打てば高目となり、「に」又は「ほ」に打てば目外しとなるのです、其筆法で白二が「い」又は「ろ」なら小目、「は」又は「に」なら高目、「ほ」ならやはり目外しとなり、黒三が「い」ならやはり高目、「ろ」又は「は」なら小目、「に」又は「ほ」なら目外しといふわけで、圖の如くまだ石を下さない、左下隅を明隅と云ふのです、以下用語と其の形式とに就いて説明しますが、征、劫、點、門、盤、樸、持等々は、「手段の初歩」の部に於て説明してありますから、省きます。



飛　國語にケイマと譯されたのですが、斜めに走るといふ意味から、或る時代に「斜走」の二字を以て之に代へ、今日では「斜走」と書いてケイマと讀ませて居ります、語源は其の形が將棋の桂馬の動きに似て居るので、それになぞらへたのは申すまでもありません、デ第一圖と第二圖とが普通のケイマ、第三圖を大ケイマと名づけ、それを又便宜上第一圖第二圖を小ケイマ又は約して小ケイ、第三圖を約して大ケイ又は大斜と呼んで居ります、第四圖は締りの部には入りませんが、締りの目的でない場合に現はれる、斯うした形を、大々ケイマと云ひます。

イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ヌ ル ヲ ワ カ ヨ タ レ ソ ツ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九



第一圖（走斜）

第二圖（斜走）

第三圖（大斜走）

第四圖（大々斜走）

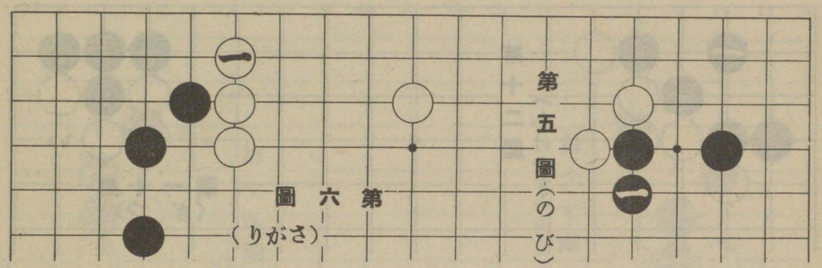
行　は伸び出す意味で第五圖の、黒一が即ちそれに當ります。

下　は第六圖の形ちに當て嵌ります、もつとも前の盤と石の條下で盤の上下左右を說明してありますから、盤の下邊に向ふ時だけがサガリであるやうに、解釋される方が無いとも限りませんが、石の働きは必ずしも盤の方位に關係しませんので斯ういふ形で邊に向つて居れば、上下左右の別なく總て下となるのです。

尖　第七圖のやうに、筋かひに黒一と打つのをコスミとかコスムとかいふのですが、其の働きは前後左右どちらでも、己れの位置からハスに打つ時は皆コスミです、又第八圖の如く白石の在る所へ密着して黒一と打てば、其れは尖頂と云ふのです、即ちコスんで白に着ける意味なのです、又之を逆にして、白から先に「い」に打てば、白が其處へコスミツケたことになるのです。

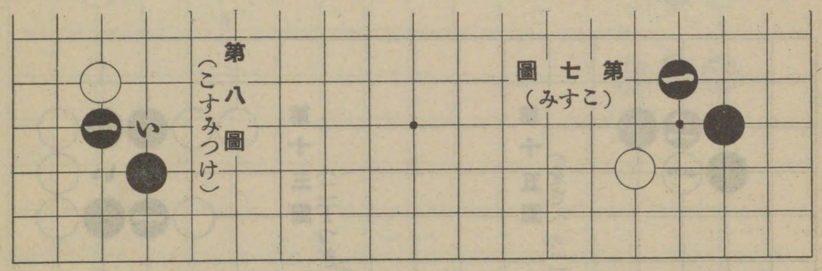
頂　第九圖の黒一と打つた手をツケといふのです、着けるからツケと云ふだけのこと。

絆　第十圖の如き形に於て、黒一と打つのがハネです、白から先に「い」と打つてもハネです、ハネは敵を追擊するやうな意味で、場合によつてはハネ捲り、又はハネ上とも云ひます。



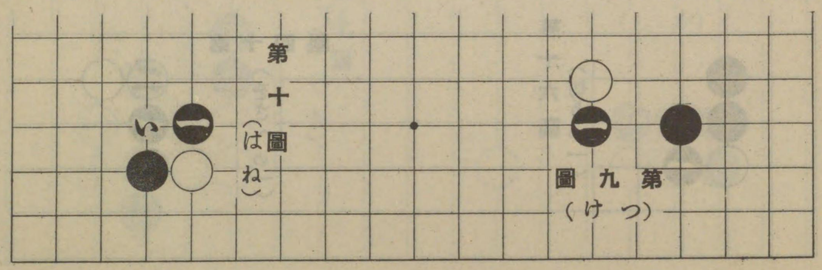
第六圖（りがさ）

第五圖（のび）



第八圖（こすみつけ）

第七圖（みすこ）



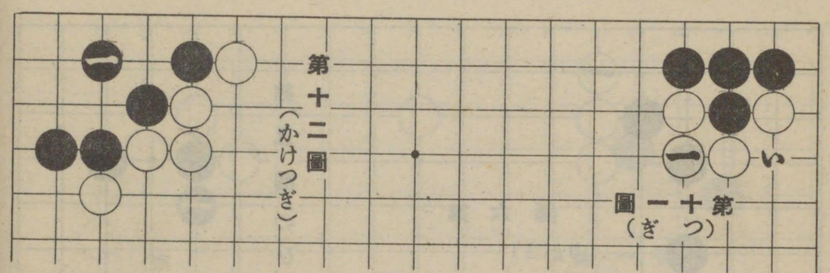
第十圖（はね）

第九圖（けつ）

粘 ツギは其の點を、敵に切り離されぬやうに連絡する意味です、第十一圖の白一は即ち其の一例で、之れを「い」に打つても、やはりツギですがツギにも場合によつて、いろいろのツギ方があります、第十二圖の黒一を懸粘と云ひ、第十三圖の黒一を二丁粘と云ひます、其れは味方の二目と平行して「い」「ろ」の間を連絡するからで、之れを双關とも竹の節とも云ひます。

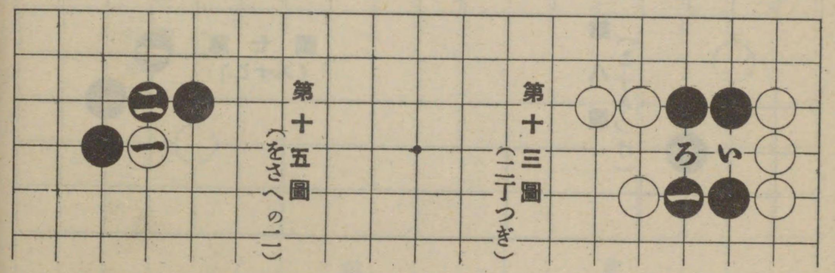
約 オサヘは即ち抑へて、其處から敵を外へ出さないやうに抑へる意味です、第十四圖の白二は其れで、黒の今一と抜け出さうとするのを、抑へつけたわけですが、之れと反對に敵の外から、侵入しやうとするのを、抑へて入れさせないのも亦オサヘです、第十五圖の黒二は其れに當るので、白一と侵入せんとするのを、二と約へて其のドアを鎖した意味です。

斷 キリは截とも書き、通俗には切りとも書きます、粘と反對の意味で、其處から切り離されて連絡が絶へてしまふのです、電車ならば斷線と云ふ所で、停電とは違つて全く電流が通はなくなるのです、第十六圖の黒一が其れですが、



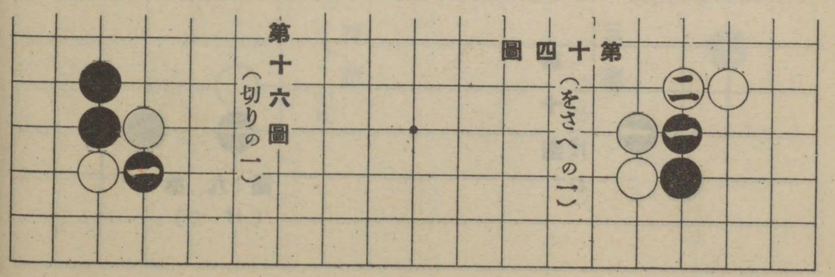
第十圖（ぎつ）

第十二圖（かけつぎ）



第十三圖（二丁つぎ）

第十五圖（をさへの二）



第十四圖（をさへの一）

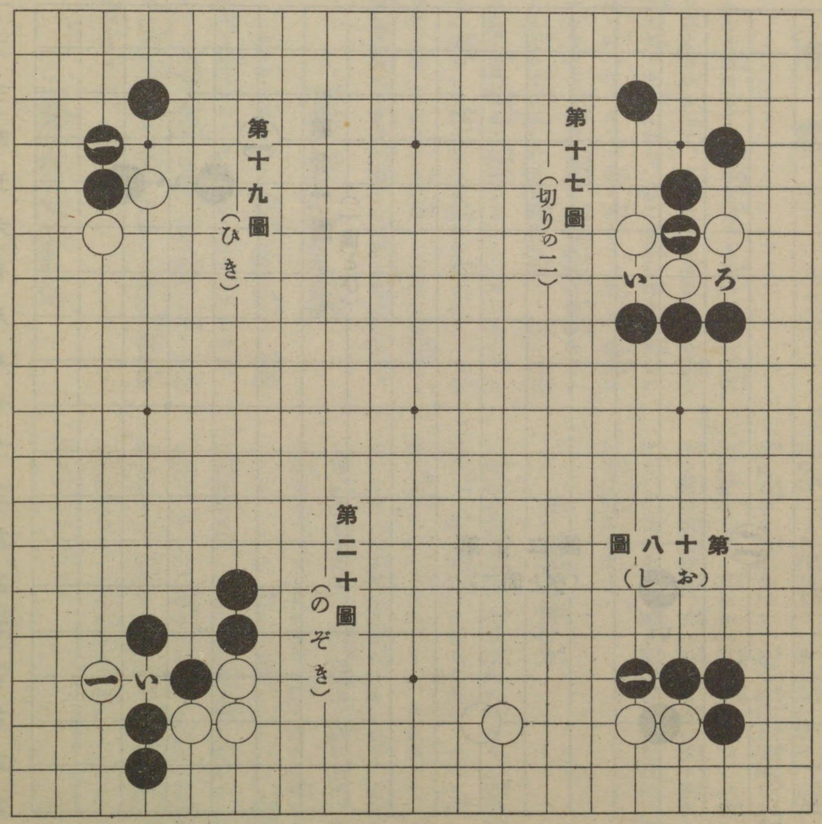
第十六圖（切りの一）

第十七圖のやうに黒一と突つ込んでも、やはりキリになるのです、なぜなら黒に斯う打たれた時白「い」の方に粘げば「ろ」に切られるし、「ろ」の方に粘げば「い」に切られて、何れにしても一手で連絡するわけに行かないからです。

押 第十八圖の黒一は、即ち其れです。

引 ヒキとは一歩退く意味で、第十九圖の黒一が其れに當ります。

覗 こんな字は、活版にも稀れですから、普通は覗の字が用ひられて居りますが、第二十圖の白一が其れで、敵に「い」の所へ粘がせるのが目的なのです、故に「ノゾキに粘がぬ馬鹿はなし」とさへいふ位大事の點で、若し捨てゝ置けば、白に「い」に切斷されるのです。



第十七圖（切りの二）

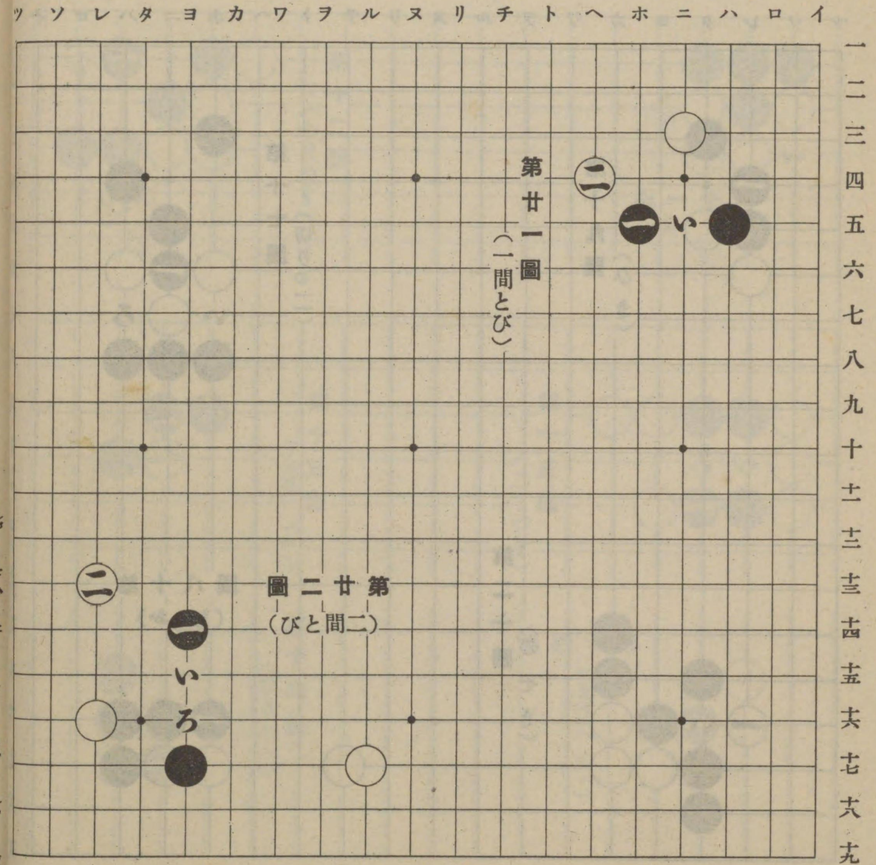
第十九圖（ひき）

第十八圖（おし）

第二十圖（のぞき）

關　第二十一圖の黒一は一間トビで、之れを單關とも云ひます、「い」の所を直線に一間飛び越すからですが、第廿二圖の如く「い」と「ろ」の二路を隔てゝ飛べば二間トビとなるのです。

專門的の用語用字は決して以上で盡きてるのでは有りません、まだまだ部分的にも綜合的にも、澤山の用語があつて、例へば「締」とか「懸」とか「夾」とか「拓」とかいふ詞もあり、取つて打ちあげる時の取りは「提」と云ふ字が當てられ、最後のヨセには收束又は侵分の二字が當てられ、又負け勝ちの事は輸贏の二字が當てられ、勝負なしの持碁には辭書にも餘り見當らぬやうな、吊といふ變な文字が當てられてありますが、支那では其れを和局と云ひます、其の外「味」と云ひ「含」と云ひ、「緩い」と云ひ、「嚴い」と云ひ、「帽子」と云ひ、「グズミ」と云ひ、「薄味」と云ひ、「厚味」と云ひ、其の全部を一度に呑み込むのは骨ですから、締や懸や夾や拓などの事は、前に征や劫や點の事を、「手段の初歩」の部で說明した例に做ひ、布石と定石とに伴ふ說明の部に讓り、其他は皆實戰例示の場合に於て、自ら會得されるやうに仕向たいと存じます。



〔六〕對局上の用意

碁を打つことを手合と云ひ、又對局とも云ひますが、扨何時でも、誰とでも對局ができるといふ段になりましたら、對局に就ての心得も、一と通りわきまへて置かなければなりません、先づ第一は對局の作法ですが、碁は上代に在つては、一時の興を行る娯樂ではなく、專ら縉紳公卿の間にのみ行はれた、一つの儀禮とも謂ふべきものでありまして、御歷代の帝にも仁明天皇を始め奉り、宇多、朱雀、村上、醍醐の各帝、孰れも圍碁に御堪能に渡らせられ、就中醍醐天皇の如きは、其の道の巧者にも、をさをさ劣らぬ御技倆を、備へさせられたやうに承りますから其處に自づから尊い傳統と、正しい意義とを有つて居ることは、申すまでもありません、されば斯の道に遊ぶ程の者は、かりそめにも之れを一般の遊戲と混同してはなりません。

大胡座をかいて片肌ぬぎで、鼻唄を諳ひながら盤に對ひ、權兵衞が種蒔よろしくと云ふ、無作法極る格好で碁を打つのを、どうかすると見受けますが、こんなのは趣味としての碁を解し兼る人であらうと思ひます、曲木を樹うる者いづくんぞ直景を得んといふ通り、曲つた木に眞直な影の宿らう筈もありませんから、碁でも亦左樣な見苦しい態度で打つて、なんで强く明るく、正しい結果が得られませう、彼の書道で健腕直筆の作法をやかましく云ひますのもやはり同じ意味で、己れの所作が直ぐ其の作品に反映するからであります、と云つて必ずしも形式にのみ重きを置くわけではありませんが、とにかく次に陳べるだけの箇條は、一應胸に置いて常識の糧として戴きたいのです。

一　對局の終始に於ける會釋

一家の內に在つてすら朝起ればお早う、夜床に入る時はおやすみなさいと云ふのですから、まして他人と對局する時、其の始めと終りに於て、互ひに默禮を交換する位ゐの事は當然の作法でせう。

二　碁笥の取り方と置き方

碁笥とは碁石の入れてある器です、禮を了つたら靜かに碁笥に手をかけて、黒なり白なり己れの持つべき石の入つてある方を取り、左手を底に右手を蓋にかけて、先づ膝頭と膝頭との中間に置きます、其れから更に蓋を取つて、其の蓋を盤の右隅の下、右の膝頭に近い所へ置きますそして其れをハマ即ち敵から取つた石の、容れ物に代用します。

三　碁石の運び方

碁石の運び方は、先づ己れの打たうと思ふ點を考へ、其の考へがきまつてから、一つの石を執り上げて打ち下すのですが、之れがどういふものか素人の多數には守られないので、最初から澤山の石を執つて、掌に山ほど盛り上げ、其の中から一つづゝ次ぎ次ぎに打ちたがる癖があります、そうかと思ふと又徒らにがら〳〵碁笥の中を掻き廻したり、盤の横や盤の底をカチカチ敲いたりして、甚だうるさい眞似をする癖もありますが、要するに打つ時の外、用の無い石を手に持つて、それをなぶり物にするのは、甚だ見苦しいのです。

四　待つたと剝し

布石

初段を目指して

置いた石を剝して、其の着點を變へたり、相手が打つてから後に、待つたをして外へ打ち直したりする人も世間には可なり多いやうですが、之れは自己の無節操を表白するのと同じことですから、大いに恥として愼まなければなりません、畢竟己れの意志がきまらないから置いた石を剝したり、相手の打つた手に依つて己れの前の手が、良くなかつたことを發見するから待つたをしたり、未練の仕打に出るのでせうが、斯うと決めて一旦盤面に下した石は、雨が降らうが風が吹かうが、金輪際剝しもせず待つたもせず、たとひ其れが置いた瞬間に、ヨリ善き手を見出したにせよ、決して變更すまいと云ふ、堅い信念がなくてはなりません、中には「何も好んで待つたをする譯ではないが、相手が盛んに待つたをするのに、自分ばかりそんな戒しめを守るわけには行かない」と、斯う言はれる人もありますが、其れは所謂暴を以て暴に易へるので、待つたをしてもいゝと云ふ、理由にはなりません、成るほど待つたをするのとしないのとは、する方に非常の剩得があつて、其れが結局の勝敗に影響するのは勿論ですから、彼方待つたの、此方待つたなしの、甚だばかばかしいのは、きまりきつた話でありますが、ソコへ行くと昔の人は氣が練れて居ますから、敎へる事も總て仁を基とし、相手の待つたは咎めるな、己れの待つたは夢にもするな、相手が一と手待つたをしたら、もう其の時自分が一番勝つたものと思ひ、二手待つたをしたら、二番勝つたものと思ひ、我れと我が心の中に慰めて居よと、斯うたしなめて居ますが、とにかく待つた剝しのやまない中は、絕對に碁は上達しません、なぜならいつでも都合の悪い時には、自由に待つた剝しの出來るものと思ふと、打つ手に少しも責任が有りませんので、從つて見損じてはならぬ、打ちそこなつてはならぬと云ふ、研究心が伴はないからであります、故に互ひに「待つた」、「剝し」の弊を愼んで、飽くまでも公明正大の爭ひで行くべきです。

五　無駄口と助言

碁を打ちながら、盛んに駄洒落や口合を言ひたがる人が有ります、例へば「負けてくやしき玉手箒」とか、「活は巴と降りしきる」とか「死なぬの國の善光寺」とか「シテウ刈萱女郎花」とか、「ついでくりやるな八幡鐘を」とか、「劫でもないと四疊半」とか、「ハネてより口說上手と知りながら」とか、「手拔きの金比羅大權現」とか、「古い手や蛙飛び込む水の音」とか、「打つ身につらき置碁たつ」とか、更に念入になると、助六の思ひいれなどして「ム可愛や此奴ア死んださうな…」など、數へ立てるとき限りはありませんが、斯樣に碁を茶化して、眞劍味を殺ぐのは宜しくありません。

が、同じ無駄口でも、罪の無い駄洒落はまだしも、どうかすると相手を罵倒したり冷かしたり、變ないやがらせを言つたりして、其の思はずクワツとなつた所に、ツケ入つて勝たうといふ、至つて卑劣な計略を用ひる人を見受けます、しかも此の計略にはなかなか成功率が多くて、怒る方が大抵は負けになるものですが、何れにしても手會中、無用のおしやべりはよくないのです、其れからまた他人の碁を見ながら、横合から斯う打てのあゝ打てのと、助言することは絕對に禁物です、第一此の位ゐ失禮なことは無いのです、イヤ助言ばかりではありません、手合中濫りに其の着手の、是非善惡を批評するのも、素より遠慮すべきです。

大衆圍碁講座

布石

講師七段　雁金準一

講師七段　高部道平

布石は圍碁に就いての、最も大切な基調でありまして、別に石立とも云ひ、配石とも云ひ、又布陣とも申します、之れを軍事に喩へれば、先づ司令部に於て作戰計畫を樹て、其れに基いて一般方略を定める其れが取りも直さず布石に相當するのです、デ其の一般方略に擬する、石の配置が終つてから、戰鬪に入るのですから、布石の精神を知らずに碁を打つのは、あたかも一般方略なしに戰鬪行爲に就くのと同じ理合でありまして、たとひ如何に旺盛の武力を以てしても、如何に精銳の兵器を以てしても、偶々一部分の戰ひに成功する事はありませうが、結局は失敗に終るのが當であります、ソコで一局の經過は、打ち始めから打ち終りまで、凡そ三期に區別して、其の初期を布石時代、其の中期を戰鬪時代、其の後期を收束時代としてあります、併し其れは打ち終つた局面に就いては直ちに、其の區別を說き明かすこともできますが、前以て何處までが布石時代、何處から何處までが戰鬪時代、何處からが收束時代と、豫め一定した分界を設けるわけに行かないのです。

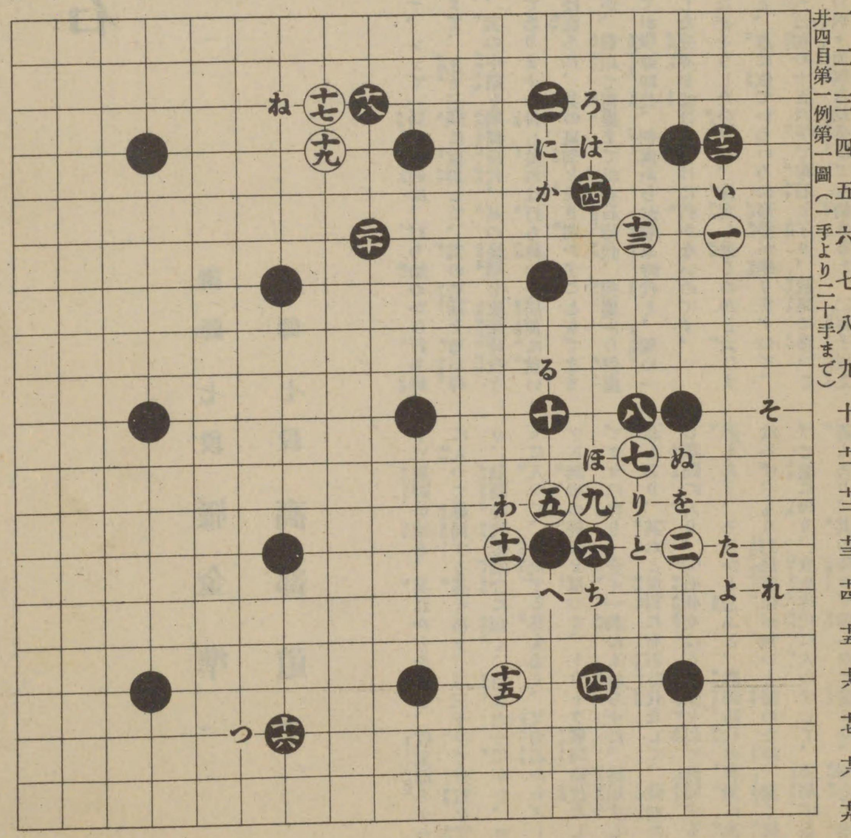
なぜそうした分界が、豫定し兼るのかと云ひますと、碁に依ていろいろに形勢が變りますので、例へば初め十五六手で布石を了り、戰鬪に移つてから偶々面倒な劫爭ひでも始まると、二百手以上まで戰鬪が續き、其れからやつと、收束即ちヨセに入つて終局する碁もあり、二三十手で布石を了り、戰鬪時代も判合に短く、百五六十手から、ヨセに入つて、終局する碁もあり、又布石からズーツと無事の經過を取つて、トウトウ戰鬪時代なしでヨセに移り、全く一兵にも劒らずに、終局する碁もあり、其れと反對に布石時代なしで、最初から戰鬪に入り、矢石相交はる光景を以て終局する碁もあり、そうかと思ふと、戰鬪時代の有無に拘はらず、もう到底勝味が無いと諦めた時、潔く投げて敵に降り、收束時代に入らずして、終局する碁もあり、其の時々で違ふのは素より、相先の場

合と置碁の場合とでも、大分違ひます、が相先から二三目以内の置碁なら、布石に少くも二三十手を要します、其の以上の置碁になると、置いた石其れ自體が布石の一部を爲して居るのですから、もう井目とか井四目（十三目）とかいふ置碁になれば、定石に頼るだけで、別段布石などの必要は無いやうなものです、併し、其處にはまた其れだけ、差のある力量の弱味を補ふ爲めに、やはり相當布石に準ずる心得を必要とします。

○井四目（第一例）

井四目と云へば、あたまて十三目置くのですから、例へば十三箇師團の兵力を以て、一箇師團の敵に向ふやうな比例にも當り、唯だ闇雲に突進したらよさゝうなものですが、前にも申述べた通り、一般方略を無視した兵團は、たとひ少數でも秩序あり統制ある兵團にはかなひません、其れと同じ事で、斯ほどの便宜を惠まれても、やはり合理的の布石の精神に則つて、何處までも大事を取らなければなりません。

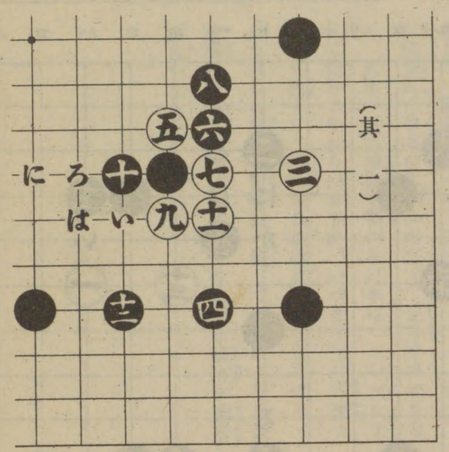
さて今玆に掲げた、第一例の譜面に就いて申しますと、初め白一と小ゲイに懸つた時、黒もし自己の力量に自信があれば、直ちに之れを「い」と



尖みつけるなり、十二の所に下るなりして、攻撃の動作に出てもいゝのですが、十三目置く腕前では、トテモ其の結果を豫測するわけに參りませんから、普通の如く守勢を取つて㊀と拓いたのです、デ黒二は白から此の隅の置石を「ろ」、「は」、「に」の點、又は二の位置に一と夾撃される手を豫防し兼ねて其の方面に、自己の領土をも開拓しやうといふ、まことに穩當の受け方です。

白三は右下隅の置石に對する、二間高懸の實現です、之れに應ずる黒四の一間飛は普通の應手で、略ぼ二の意味と同樣ですが、此處では白三に對して、己れの位ゐを保ちつゝ、自衛的の態度を採つたのです、斯うなると白一と三とが「ニの十」の置石に隔てられて、中斷される形ちとなりましたから、白は取敢ず三の石を安全地帶に導くべく、豫備行動として、先づ五と頂けたのですが、其の裏面には、次に黒に九の所へ綿ねさせて直ぐ六に切り、其處へ一つの紛擾を惹き起さうと云ふ、所謂誘ひ手の意味も籠つて居ります。

が、其處て黒其の誘ひ手通り、九に綿ねて白に六に切られたとしても、黒「ほ」と行び、白「へ」と當て、黒十一に行出し白「ち」と粘き、黒十五に備へると、斯ういふ手順を採りますと、左圖其

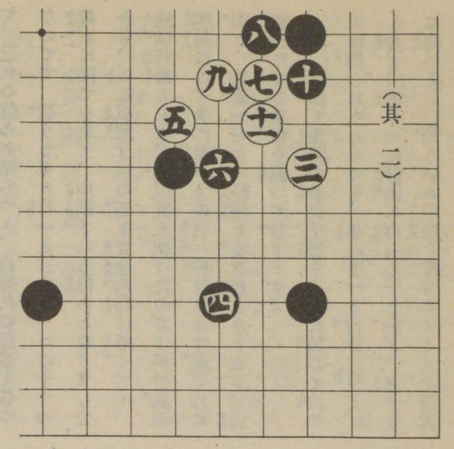


一に示すが如く三から五までは變りませんが、六からの變化が、こんな工合に運ばれ、黒の十二までの構へが如何にも巖壘になつて、白の侵入する隙が無くなるのみならず、白此處で「い」と押せば「ろ」と行び、「は」と押せば「に」と行びといふ風になつて、白は徒らに陰路を辿り、却て黒の中央に面する方面にいよいよ厚味を加へるので す、故に白の折角の誘ひ手も、ひどく其の能動價値を割引されるのです、けれども其れはせめて井目位ゐの力にならないと、一寸まだ其處までの手段には出られませんから、飽くまでも大事を取つて本圖の如く置石と連絡し、之れを六と受けたのも、力の程度と比較すれば當然と謂ふべきでせうが前のやうな手段が覺えられるものなら、覺えるに越した事はありますまい。

本圖に於ける白七は六にも強く響かせて、圖の如く我三と五の石に氣脈を通じて、其の方面の捌きを付けやうといふ意味です、黒八は白から其の點へ押されると、「ニの十」に在る置石が甚だ無力になつて、白に縱まに右邊を占領される基となりますから、其れに先んじて己と斯う用心したのです、白九は若し此の手を打たないと、黒から「り」と尖み付けられて、七の一子を「ほ」に行び出せば「ぬ」と約へられ、白又七の一子を「ぬ」の方へ出れば「ほ」と約へられ三と五との連絡を絶たれますから、取敢ず九で五、七、三の連絡を圖つたのであります。

白又九の手で、若しも「ほ」に行びると、黒に「ぬ」に曲げつけられて、其處を三の白に連絡するには、厭やでも「り」と應じなければなりませんが、これア白としては、お話しにならないまづい形ちとなるのです。

（其二）



假りに前述の如く、白九で「ほ」、黒「ぬ」、白「り」と運んだものとすれば、**其二**の如き變化となり、黒の次の手は本圖の「る」の所に打ち、「トの七」の置石と連絡して、遙かに白一の行動を監視するのが順序です、そして次に黒「ぬ」と曲げ付けたら、「を」か「と」に衝き當り「ぬ」にも六にも強く當らうと云ふのですが、白「り」では其の意味が缺けてるのです。

黒**十**は此の一着に依つて、横には「ヌの十」の置石と、縦には「トの七」の置石と聲息を通じ、刷毛ついでに白五の頭を「わ」と約へつけて、中央への針路を塞がうと云ふたくみなのです、で白は**十一**と絆ねて用心したのです。

黒も今は、一方にばかり係り合つても居られませんから、**十二**と締つて右上隅の自陣を固めましたが、斯うなると白一が甚だ孤立の狀態に陷つて酷く心細くなりましたから、已むを得ず**十三**と一間飛びました、玆で黒は若し「トの七」の置石がなければ、之れを受けて「か」と飛ぶのですが、幸ひ其の置石の一子が遊撃として控へて居ますから、**十四**と備へてソコへ尖み込まれるのを防ぎつつ、益自己の防備を整へたのです。

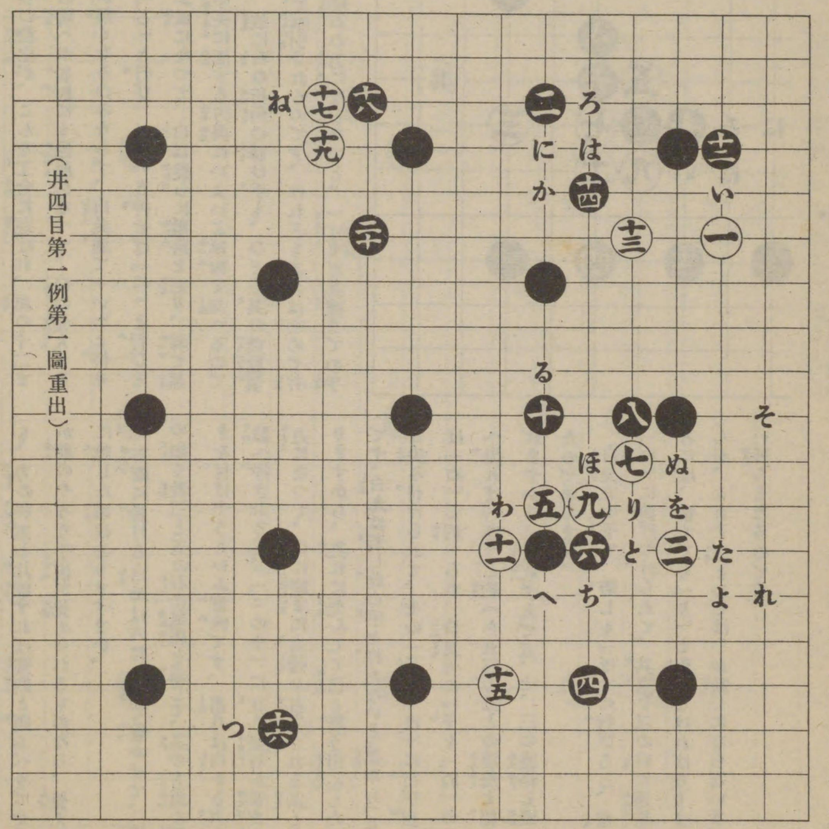
白の斯う十一と協力して、**十五**と打ち込んだ手には、内心黒の四と六と二つの置石とを合せた四目を、遠巻にして攻めつけ、一面には又「つ」と打つて、「ヌの十六」の置石を脅かさうといふ野心もあるのです。

併し黒其れに怖ぢて、後生大事に「よ」と斜走し、白の「た」と約へた時「れ」と下れば、此の隅の安全を圖ることに於て、けつして違算はないのでせう、が其うして後手を引いて居れば、白に「そ」の所へ盤りを打たれますから轉じて**十六**と備へて、白の打ち込みに用心したのです。

白も今は彼我の形勢を考へて、適宜に之れを按

イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ル ヲ ワ カ ヨ タ レ ソ ツ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十九 二十



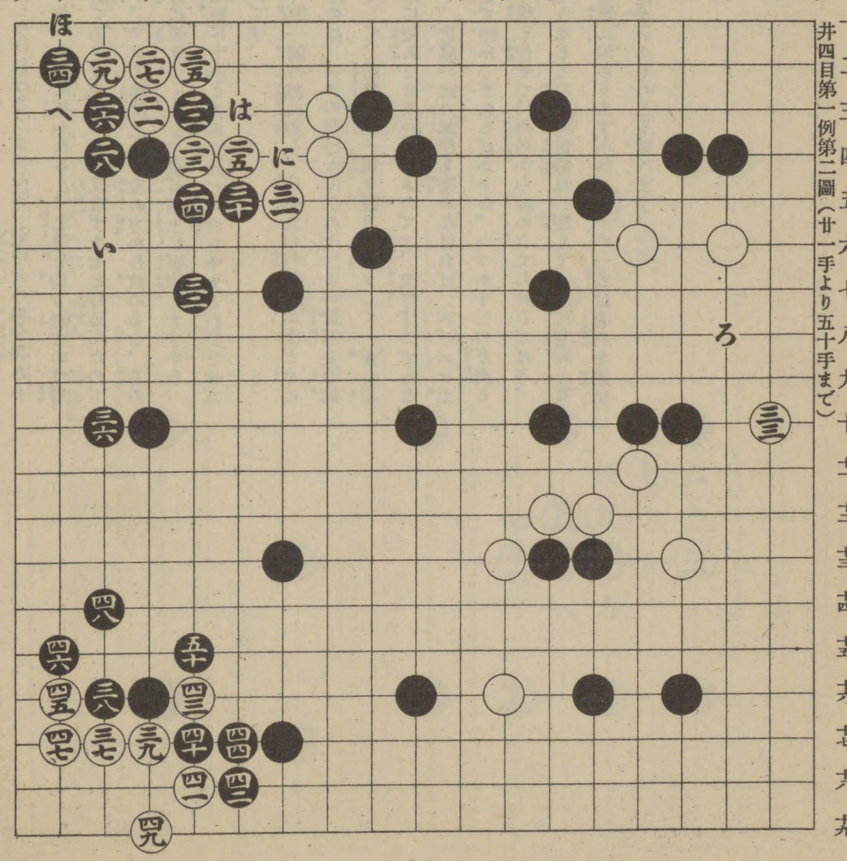
（井四目第一例第一圖重出）

排しなければなりませんが、就中此の場合黒から「ね」の點に拓かれると、上邊を切り崩すのは容易でありませんから、取敢ず**十七**と打込んだのです、ソコで黒は之れを左の方から攻めると、右の方に築きつゝある、我が領土に影響しますから、即座に**十八**と尖みつけて、白を**十九**と行びさせたのです。

第一圖の終に於る、白**十九**の行に黒**二十**と止めたのは、「ヌの四」と「ワの七」との置石を連鎖として、防禦の第一線を張り、敵をして一歩も右方に侵入させまいと云ふのです、又申すまでもなく、此處へ此の障壁を築かなければ、ズンズン土足で蹈みこまれるばかりか、いつか十三の方面と呼吸を合せて、內外から攻め立てられるでせう、そうなると局面の形勢は一變して、白に有利となる處れがありますから、二十の一着は適材を適所に置いたものとも謂へます。

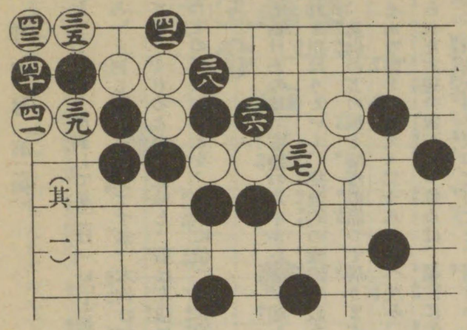
白**二十一**と頂けたのは「ヲの三、四」の二子を側面から支持せんとしたのですが、此手で「い」と懸かつて、隅の置石に攻めかゝると、黒に二十五に攻められて、右の二子の影が俄かに薄くなりますから、先づ斯う頂けて黒**二十二**の約へを**二十三**と切り違へ、延いて**三十二**までの應接を重ねたのです、此の際黒が事を武力の解決に訴へず、飽くまでも外交的折衝に依つて、斯くの如く敵を最少限度に治らせ、自己の領域を安定した手段は、如何にも氣の利いた捌きでした、井四目の腕にしては、チト出來過ぎの感も無いではありませんが曹植が七歩の才や、小式部が大江山のためしもありますから、そう一概に見かしめることもできますまい、其れに引きかへて、看らるゝ通り白は現在其處に九目まで投資して、タッタこればかりの猫の額にも及ばぬ地面を得たのでは、到底採算にならないではありませんか。

斯様に白は期待を裏切られて、甚だ貧弱の收穫しかありませんでしたから、右邊に轉じて**三十三**とわたつたのです、もつとも此の方面を黒から先に、「ろ」に詰めて、白の二子を擒にすると、黒は一擧にして全局の四分の一を占領した形になり、勝敗の數も自づから睹やすくなります。

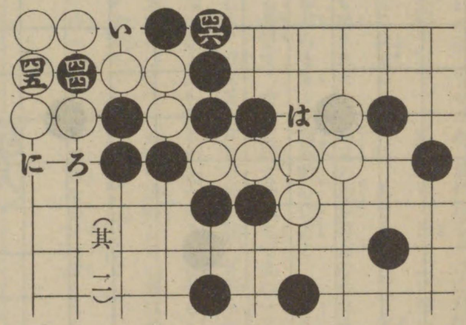


井四目第一例第二圖（廿一手より五十手まで）

尋いで黒**三十四**と約へた時、白**三十五**と應じたのは、まことに餘儀ない手です、なぜならウツカリ此處をほつたらかして、外へ打たうもんなら、黒に「は」と當てられて餘儀なく「に」と粘ぐ、途端に黒に三十五に約へられて、黒三目の餘地は三手、白三目の餘地は二手しか有りませんから、一手違ひて白の取られるのは勿論、白の全部も亦刃に斃らずして自滅、故に三十五と受けたのです、其の三十五で序に「ほ」に絆ねてはどうかと思ふ人もありませうが、それはいけません、デ今念



（其一）



（其二）

の爲め白三十五を「ほ」と綽ねた結果、トウトウ一口物に頬を燒くに至る手順を圖解すれば、**其一**の如く黒三十八までと運んで、白三十九と切つた時、四十と下るのが肝要で、ことさら二目にして捨てる覺悟をきめ、白四十三と其の二目を打ち抜いた時、黒は更に**其二**の如く、直ぐ取跡へ四十四と打ち込み、白四十五の時黒四十六と粘いで、白「い」ならば「ろ」と詰め、次に白「は」なら「に」と當てゝ、攻め合はトウトウ白が一手足りないのです。

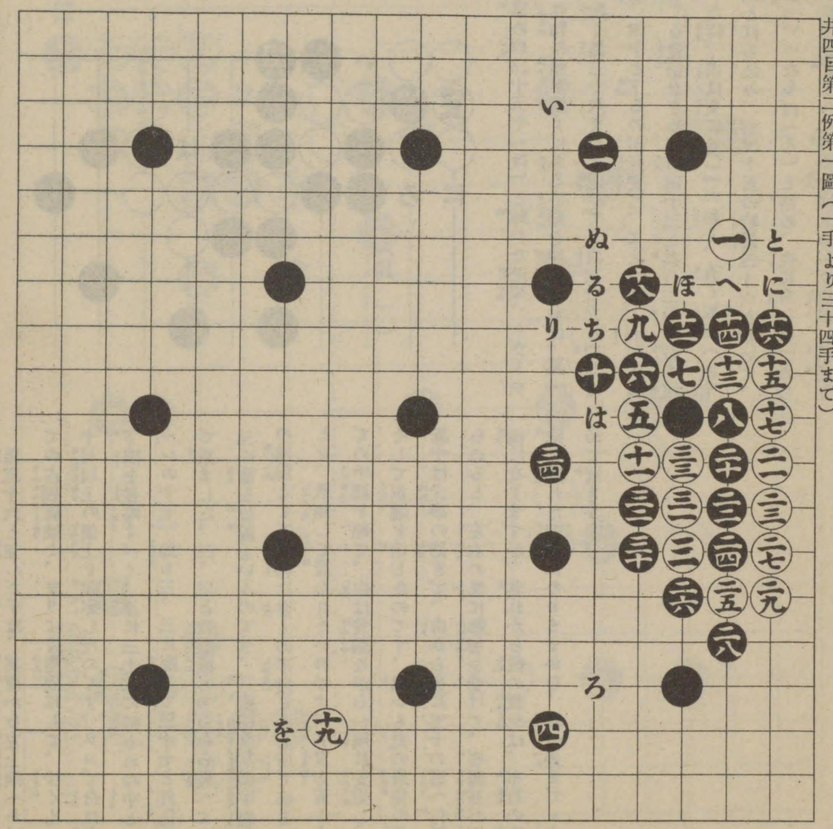
黒**三十六**と並んだ手は、其處から左上隅へかけての占領區域を、ヨリよく堅固にして、少くも二十目以上の領土を固定したのです、ソコで白は左下隅を侵略すべく、黒に三十八に締られぬ中と、「レの十七」即ち三、三に臨んで**三十七**と打込んで來ました、三、三とは縱横どちらから數へても三に當る位置をいふのです、其處は全局面中樞要の地點として、特に多くの手段を含む所であることを、承知して置かれたいのです、デ双方五十までの手順を經て、白は貧弱ながら一隅に安定し、そして黒地を消したのです、然かも此の最後の黒**五十**は大事の防ぎて、白から先に五十の處へ行びられると、左右の黒に影響を受けて、事態甚だ面倒になりますが、其れから後の變化は、布石の意味を離れた動作になりますから、此の邊まで〻止めて置きます。

井四目（第二例）

白一と三との懸りに對して黒二は「い」と應じ、四は「ろ」と應じるのが正式ですが、本例の如く應接しても、やれるといふ意味と、碁は左樣に極り切つたものでないことを、本例に依て具體的に示します。

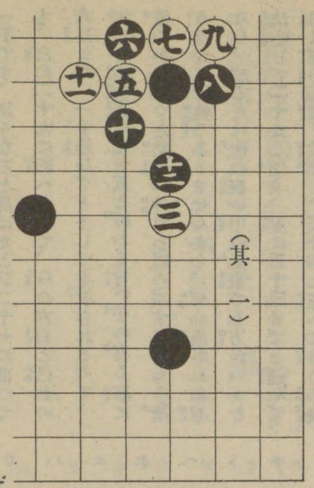
白**五**と頂けたのは、右邊の只中から事を起して敵の紛れを狙はうといふ、挑發的の豫備手段たることは、前例の五の頂と略ぼ似通つて居りますが從前はそんな點を見棄て、二十八の邊へ尖み、白に頂けられた右邊の置石一つ位ゐは、犧牲に供する覺悟で、只管大事を取つて打てと、斯ういふやうに敎へたものですが、それは堅實一點張の、寧ろ消極的の敎へ方で、どちらかと言へば進歩が遲いのです、從つて事毎に高速度で進む、今日の世柄とも相容れませんから、圖の如く直くこれを**六**と邀へ擊つ方略に出るのが、天才敎育の趣旨にも適ふのです。要するに消極的の優しい敎へにのみ泥まず、初めから積極的の敎へに依ることが、能率を增進するのです。

ソコで白は思ふつぼとばかり、早速**七**と切り違へて、早くも其處に戰端を啓きました、黒も素よ

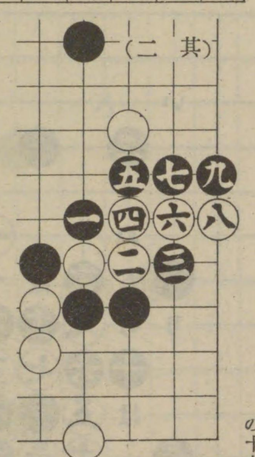


井四目第二例第一圖（一手より三十四手まで）

り騎虎の勢ひ、**八**と應じて置石の根を張り、益々強硬の態度を示しました、其の時白七と協力して、之れを十三の方から押すと、黒は十一に絆ねます、白は五の一子を取られては堪りませんから、無論「は」と逃げます、ト今度は黒三十三の所へ切られては堪りませんから、其れを防いで三十一の所へ尖みつけますが、其れでは白三が、左圖**其一**の如く、そう尖頂けられた、黒の堅い面に膠着して、甚だ面白くないのです、ト云つて黒八の時、白九の手で十一に引いて三と連絡を取つて居ると、忽ち七の一子を十二に徃に懸けられ、**其二**の如き手順に依つて取られてしまふのです。



（其一）



（其二）

だが黒此の十八を打たぬと、白に十八に行びられて、アベコベに十二、十四、十六の三子を包圍されてしまひます、そうかと云つて、黒十八の手で二十一に約へ、白の四目を取らうとすれば、白に二十に切られて、一足先に己れの二目を取られる事になるのです、白又試に九の一子を援くべく、其處を「ち」に出れば「り」と約へられて、行き詰るのは言ふまでありませんが、其の時、白「ぬ」にのぞくか、又は「は」と當てるかして黒に「る」に取られるのは、一目の損で濟むものを、物數奇にわざわざ二目にふやして棄てる道理なのです。

次に白の右邊から手を抜いて、**十九**と轉じた意味は、黒から「を」の點に備へられるのを妨げて一面には三と協力して、下邊から、右下隅に散在する黒の「ト の十三」や、「ヌの十六」や、「ニの十六」や、四の石やを攻めやうといふたくみも籠つて居るのです、ソコで黒は敵の手抜きを幸ひ右邊に取殘した置石と八の二目を逃げやうと、**二十**と出ましたが、白此處で廿二に尖頂れば二十一に出られて、今度は白の四目を取られますから、白は**二十一**と這ふの外なく、黒**二十二**も白**二十三**も、斯う應接するの外は無いのです。

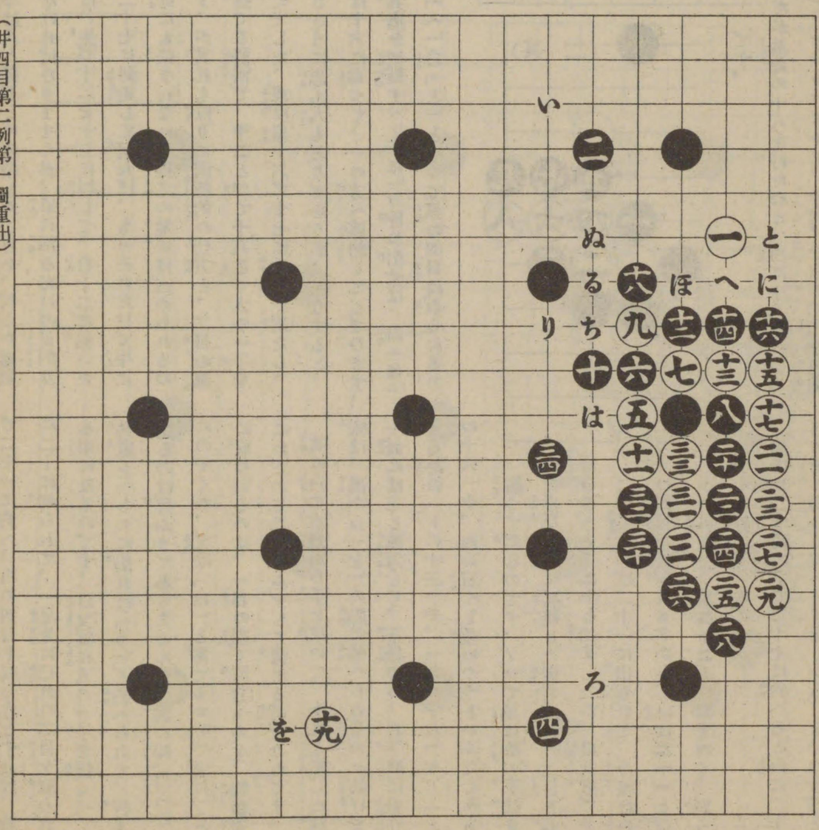
尙ほ黒**二十四**の手で二十七に約へると白に二十**八**の所へ切られていけませんから、も一つ廿四と**出ます**、で白同じ足並を採つて二十七に這へば、

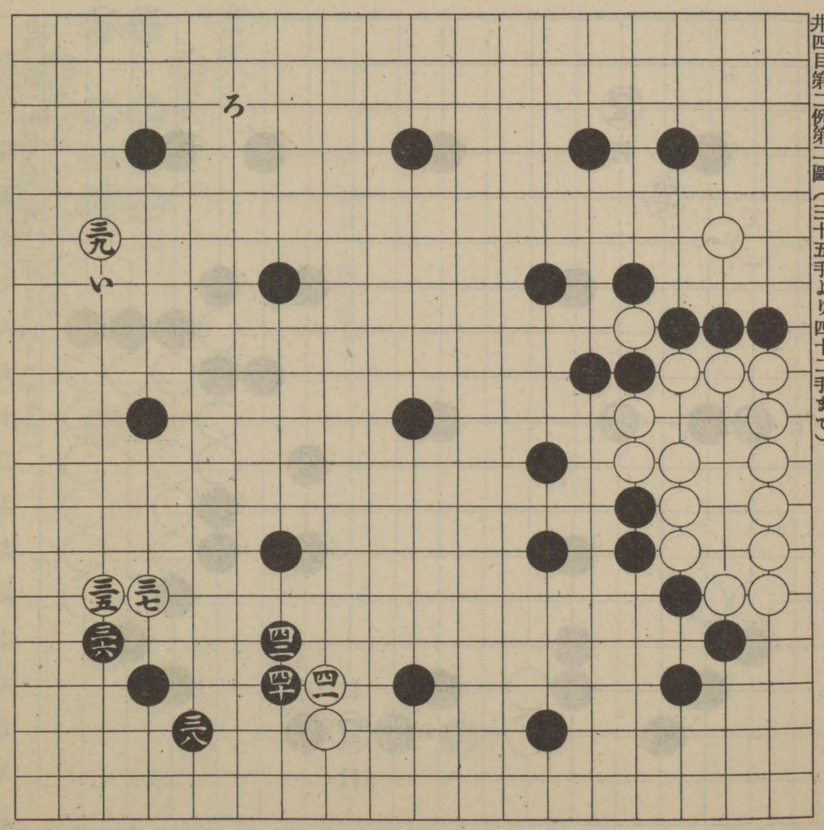
今度こそ黒に二十五に出られて、隅の置石の方へ連絡されてしまひますから、白は二十五と綿るの一手てす、斯うなると黒はたとひ二十七に曲つても、白に二十九に約へられて、白の六目と己れの六目とは、一手違ひでどうしても取られるので、其れは畢竟白に二十五と綿ねる旨い手の有る事に氣づかなかつた結果に外ならぬのです、がもう斯うなつては據ろありませんから、何れ逃がれぬ石なら、成るたけ荷の輕い中に見棄てる方がいゝと決心して**二十六**と切り、遂に**三十三**まてと運んて、黒は潔く五目を放棄し、**三十四**と備へて白の中央への出路を塞ぎました。

さて斯う一段落を告げて見ると、黒の最初二十と出た目的は達せられませんでしたが、白を完全に包圍した外壁は、所謂金城鐵壁となつて手も着けられないのてすから、黒は寧ろ過ちの功名で、其れが爲めに五目位ゐ取つて、一局部に閉塞された白は、實は有がた迷惑なのです。

第一圖の如く、白は右邊に於て思ふまゝの成功を收めませんでしたから、轉じて左下隅に向ひ、十九の一子と共同して「タの十六」の方面を攻撃すべく、**三十五**と夾んで來ました、尋で黒**三十六**と尖みつけ白を**三十七**と行びさせましたが、此處ては白十九の居り場が遠いから、黒は三十六の手で、「い」の方へ打つて「タの十」の置石と連絡を取り、左邊の經營に從ふこともあります、併し黒は斯うして、次に**三十八**と一隅を守る爲めに、先づ三十六、三十七の交換に出たのです。

白**三十九**は、黒に「ろ」と應じさせて、三十七の方面と策應しつゝ、左邊「タの十」の置石を攻めやうといふのです、ソコて黒は尚も、前の三十六、三十七と交換した意匠に伴ひ、三十七と十九の方面とを確實に隔離すべく、**四十**と打つて十九の肩を衝きました、スルト白は今一着、黒から四十一の所へ押されては堪りませんから、**四十一**と押すのも當然、黒はまた更に白から、四十二の所へ綿ねられては堪りませんから、**四十二**と行びるのも亦當然、ト云ふわけで此の應接は、互にのつびきならぬ所です、ソコデ白は差しあたり、三十五、三十七、若くは十九、四十一の左右どちらかの二子を救はなければなりません。





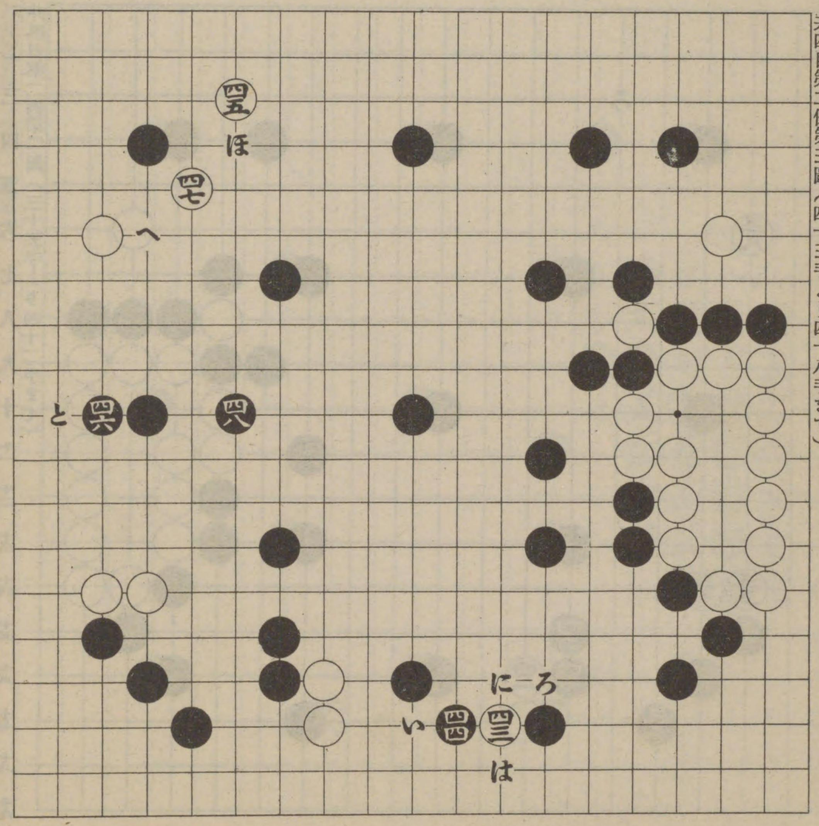
一二三四五井四目第二例第二圖(三十五手より四十二手まで)

此際白下邊の二子を救ふべく、「い」と頂ければ、黒に四十四の方から約へつけられて、其の足掻に困難を感じるのは言ふに及ばず、よし辛うじて虎口を遁れたとしても、目二つの消極的活路を得る位ゐのものでせう、白は畢竟そんな點を辭酌して**四十三**と頂け、あはよくば黒を「ろ」に應じさせて、次の手で「い」に頂けやうと云ふ肚なのですが、それはチト蟲のよすぎる註文と謂はなければなりません。

黒は果してそんな註文に應ぜず、**四十四**と夾みつけて、白の自由を束縛しやうとしました、此處で白「は」と下れば黒に「に」と約へられて、勿論上へ出ることはできず、ト云つて「は」から左右何れに曲つても、もう活きる餘地は無いのですそんなら白は「は」と下らずに、「に」の方へ行び出したらどうかと云ひますと、黒に「は」と盤られて、白は尻から突き出された、心太よろしくと云ふ格好になりますが、然かも上の方で活きを得やうと云ふのも頗る困難ですから、此の四十四の夾みには閉口して、少しでも足許の明るい中と棋勢の轉換を計り、轉じて**四十五**と夾みました。

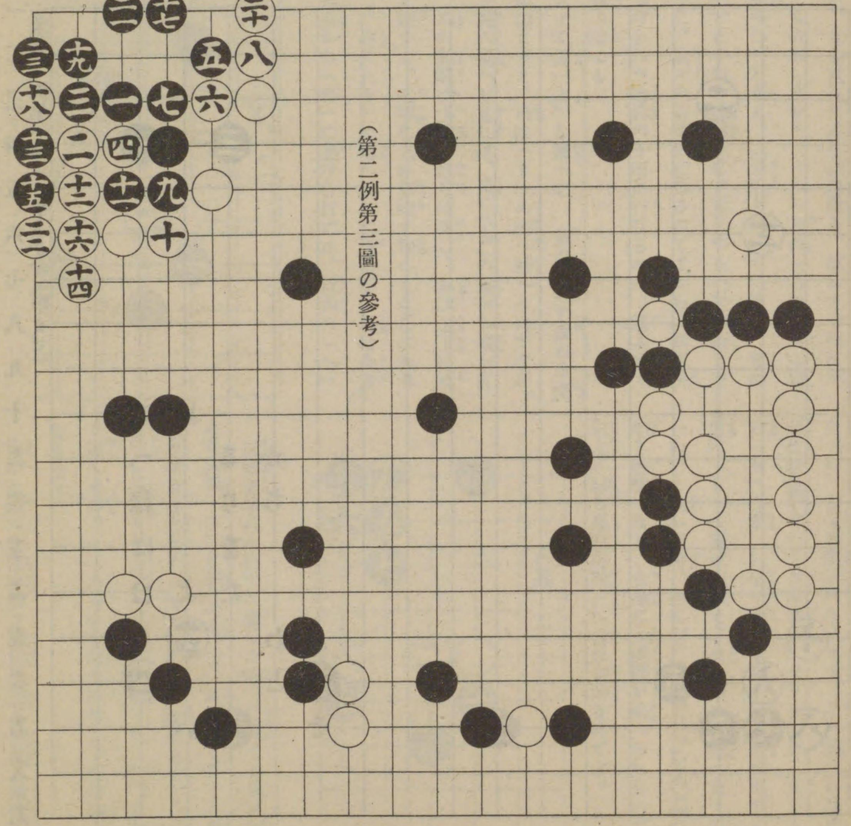
黒之れに應じて「ほ」と頂けるか、又は「へ」と頂けて、外部に進出するのは、普通の場合に於ける定石ですが、此の形勢に在つては四十六と並び、白の「と」の點を介して、三十五と三十九との間に通ぜんとする聲息を、遮斷するのを是とするのです、勿論斯う打つからには、白から次に**四十七**と懸けられて、左上隅を包圍されるのは、素より豫期して居るのです、デ果して白が其の通りに來ましたから、尚ほ一隅を放任して四十八と飛び、いよいよ其の障壁を延長して、三十五、三十七の二子を、全く嚢の鼠としました。

そんなら左上隅はもう白の所領ときまつて、黒の立場から施す術は無いのかと言ひますと、黒先手で行けば十分其の隅で活きられるのです、其の手順を示めせば下圖のやうになりますが、白十八と眼を缺きに來た時、黒十九で二十三に一目取れば、黒は忽ち果敢ない最期を遂げるのです。



一二三四五六七八九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九

井四目第二例第三圖（四十三手より四十八手まで）



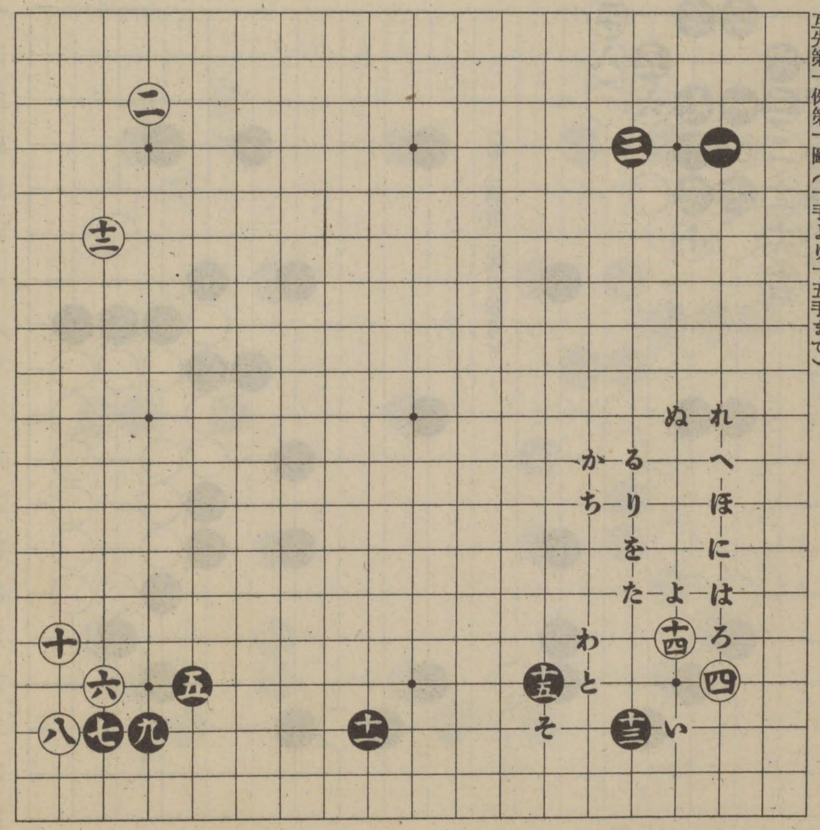
一二三四五六七八九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九

（第二例第三圖の參考）

互先（第一例）

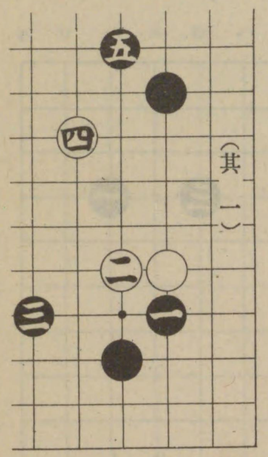
黒**一**を圖の如く右上隅から打ち出すのは、白に右を譲る儀禮から、出發したのであると、斯ういふ説もありますが、要するに黒一の一子は、何處から打ち出さうと隨意なので、之れを圖の如く、右上隅から一と打ち出す順序の定まるまでには、無論いろいろの方面から、打ち試みられたものに違ひありません、が段々經驗を積み、研究を累ねた結果、先づ第一の根據を占むるには、小目の位置を以て最も有利とすることが發見され、そして同じ小目から打ち出すものとすれば、手勝手から云つても、また盤面の明る味から云つても、此の一の小目が一番便宜と認められて、何時しか之れが布石の第一歩となつたのです。

白**二**は、黒と勢力の均衡を保つ意味で、遙かに敵と對立して、此の一角に同じ小目に據つたのです、次に黒**三**と締つたのは、先づ此處に金城湯池に擬すべき策源地を構へて、其れから徐ろに全局に向つて、號令しやうといふ用意なのです、しかも尚ほ此の一着には、尋いで右下隅「い」の點に據つて、一と三との威力を、更に其の方面に發展しやうと云ふ、計畫も含まれて居ますから、白は

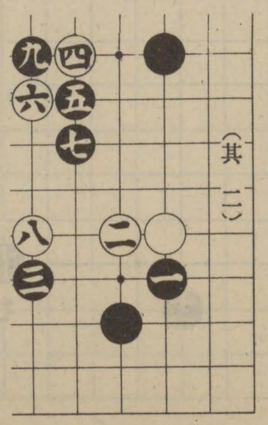


互先第一例第一圖（一手より十五手まで）

其れを妨げて**四**と據つたのです、だが假りに白四を他へ打つて、黒の思はく通り、五の手で「い」に據つたものとしませうか、スルト白は「い」の黒に對して、「ろ」と小ゲイに懸るか、十四と高く懸るか、「よ」と二間に懸るか、又は「は」と懸るのですが、かりそめにも其の點を看過して、黒に十四又は、「ろ」、「は」等に締られると、右上隅と相對して兩締りを形成し、局面が狹められて變化も乏しくなり、黒に有利に展開するからであります、故に或る特殊の場合を除く外、敵に兩締り即ち二ケ所の締りを與へてはならぬ事になつて居ります、其れで黒の「い」に對して白「ろ」と懸つた時、黒の採るべき應手は、其の白を「に」の一間に夾むか、「ほ」の二間に夾むか、但しは「へ」の三間に夾むか、何れにしても儀鐘年の蟹見たいに、夾まずには置ないのですが、其「に」の夾みには、次の手で十四の所へ頂け、「ろ」の白を內部に壓搾して、消極的の活路を與へ、然る後縱まゝに、外部に勢力を張らうと云ふ意圖を含みます、「ほ」の夾みも亦殆ど「に」と同じですが、場合に依つては十四に頂ける手を、四に尖みつけて側面から攻める手のあるだけが違ひます、又「へ」の三間夾の意中を解剖すれば、其れから四に尖みつけて、更に十四に絡ねやうと云ふのですが、まあ試みに黒の理想通り、運んで十四に絡ねたものとしませう、スルト其の「ろ」の白と四に尖みつけた黒と、二目取り除いて見ると、黒は「い」と十四の高締りに、も一つ「へ」の拓きを加へた、堂々たる陣形となるのですから、四に尖の三間夾が、甚だ無能になりますから、勢ひ黒から「ぬ」と尖む順序になります、此の變化を圖に示せば**其一**のやうな形ちになりますが、若しも白「り」の備へを今一路「る」の點迄進めますと、黒に「り」に頂けられて、白「ち」、黒「を」白「わ」と運んだ時、黒に「か」と切られて**其二**の如き圖樣となり、右邊に大模樣を構へられるので、以上が即ち黒の三間夾に含む目的なのです。



（其一）



（其二）

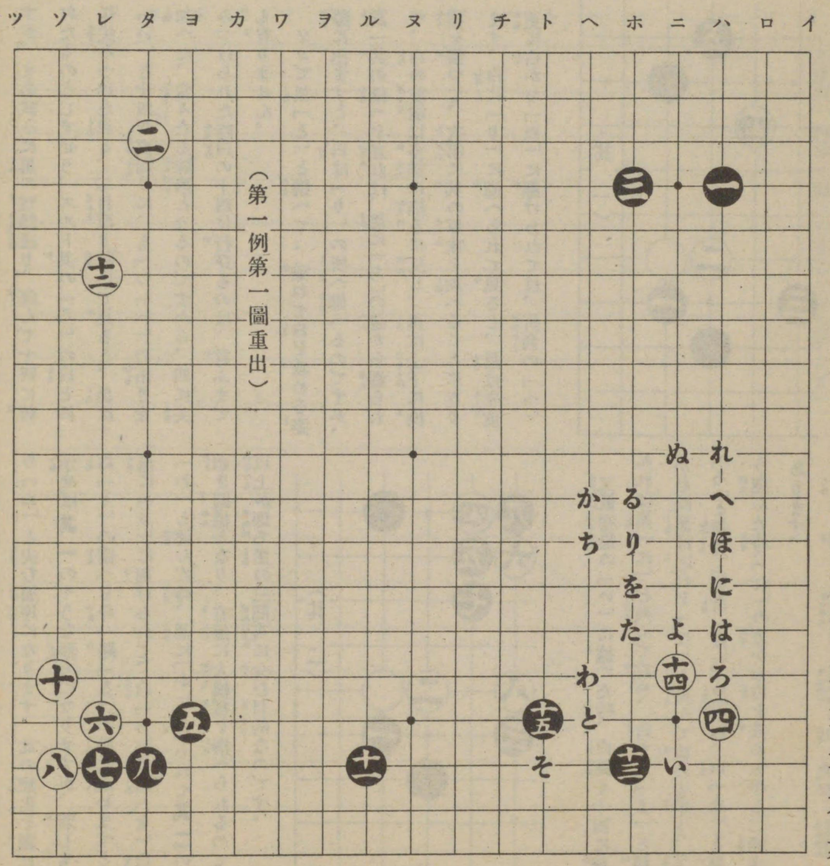
ソコで黒「と」と搏へて、兼ねて白を攻める姿勢に出ますと、白は「り」の所へ備へるのですが、萬一其の備へを怠れば、黒にて、白の前途は多難に陷るに反し、黒は上下に模樣を張つて、次第に其の厚味を加へることになります、白に「り」に備へられて見ると、黒は今度更に白から「ぬ」に懸けられては、折角の「へ」又最初黒の「い」に據つた時、白高く十四に懸かれば黒「に」と夾んで攻め、白また「よ」と懸かれば黒は之れを「ほ」と夾んで攻める手と、又「ろ」と斜走して白「は」、黒十四、白「た」と斯う運んだ時、「れ」の方から白を攻める手と二通りあります。

白四と據つた意中に、既述の如き經綸と魂膽と

定石

を持つことは、概ね徹底されたらうと信じますが、然かもまだ合點の行かれぬ點は、幾度でも、お尋ね下さい。ソコで黒三と締つた以上、白の四と撮ることは明白すぎるほど明白ですから、其れに次ぐ五の着點は、チヤンと三の時にきまつて居べき筈なのです、從つて黒が五の着點に、少しでも時を要するやうでは、無定見の譏を免れないのです。

斯くて黒**五**と撮り、白**六**と入り、黒**七**と頂け、白**八**と綽ね、黒**九**と引き、白**十**と懸け粘ぎ、黒**十一**と拓くまでの、一型の定石が交換されて、互ひに伯仲の棋勢を描きましたが、此處もやはり黒は十一まで、無時間で行くべき性質のものです、尋いで白は遠く十の方面へ呼應して、**十二**と大ケイに締りましたが、次に黒の十三と懸かつて來るのはもう豫期して居る筈なのです、又黒**十三**は白をして、此の際我右上隅と同樣の、高締りや其の他の締りに出させまいの意味が籠つて居るのです、白の**十四**と尖んだのも亦、チヤンと十二の時に豫定されて居る手で、其の次ぎには十三の黒を「と」と懸けて「そ」と受けさせ、次第に黒を薄くさせやうと云ふ思ばくなのです。故に黒の其れを防いで**十五**と斜走し、十一の一着を中心として、下邊に模樣づけたわけです。



（第一例第一圖重出）

大衆圍碁講座

定石

講師七段　雁金準一
講師七段　高部道平

凡そ萬有に亘つて、一として型の無いものは有りませんが、定石は卽ち碁を打つに就いて必要の型であります、そして自然の理法によつて定められた、最も公平無私のものであります、故に此の定石は是であり、此の定石は非であると云ふやうな、差別のあらう筈もなく、謂はゞ自然の理法其のまゝを具體化したものなのです。

例へば相撲を取るのに、四十八手と云ふ定石を除外しては、相撲は取れません、イヤ取れば取れないことは有りませんが、四十八手の心得ある相手にかゝるとキット負けます、其れと丁度同じ道理で、定石を知らなくとも、碁の打てぬことは有りませんが、定石を知らない同士ならともかくも定石の心得ある相手に出くわすと、到底勝てないのです、然も、定石は布石の如く限られた分界もなく、最初から最終まで、隨時隨所に現はれる型ですから、其の周圍の情況と關係とに依つて、適材を適所に置く意味の、應用に就いて心がけなければなりません。

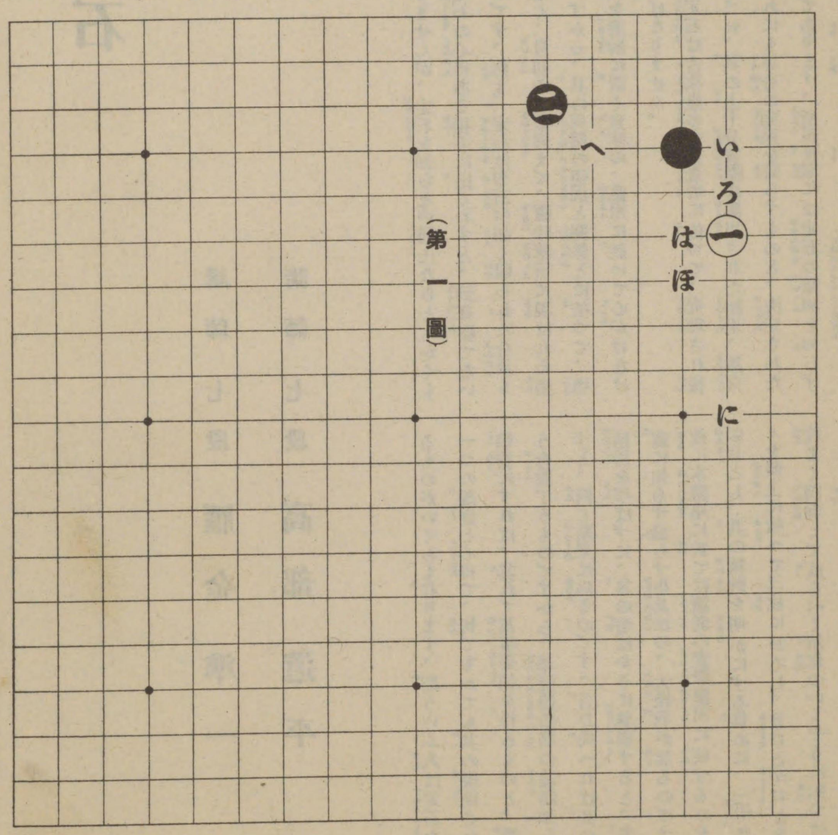
定石は古來幾多の先覺者に依つて、究理され檢討され、其の上十分實際に應用された結果、黒白何れにも等分の効果を齎らすものと、決定された型であります、所が世間には定石の精神を知らずに、型の末にばかり囚はれて、所謂定石倒れとなるものがいくらも有ります、斯ういふ人は定石を一つの規則と心得て、何でもかでも其の規則さへ鵜呑にすれば、其れで萬事要領を得るものと、斯う合點するものですから、畢竟論語讀の論語知らずと、同じ結果に陷るのです、言ひ換へれば其の精神を學ばずに、其の型ばかりに執着すると、其處に知らず識らず生兵法の、大怪我が起るのです故に本講座に於ては讀者の實際應用に便ずるのを眼目とし、其の精神を明かにする爲めに、一手々々を俎上に横へて三枚におろし、甘口と辛口とを程よく調和して成るべく消化のいゝやうに味つけやうと思ひます。

□一隅に於ける黒二の應手

茲に說明するのは、何れも置碁の隅に於ける。白一と懸つた時の、黒二の受け方を圖示したのであります。

第一圖

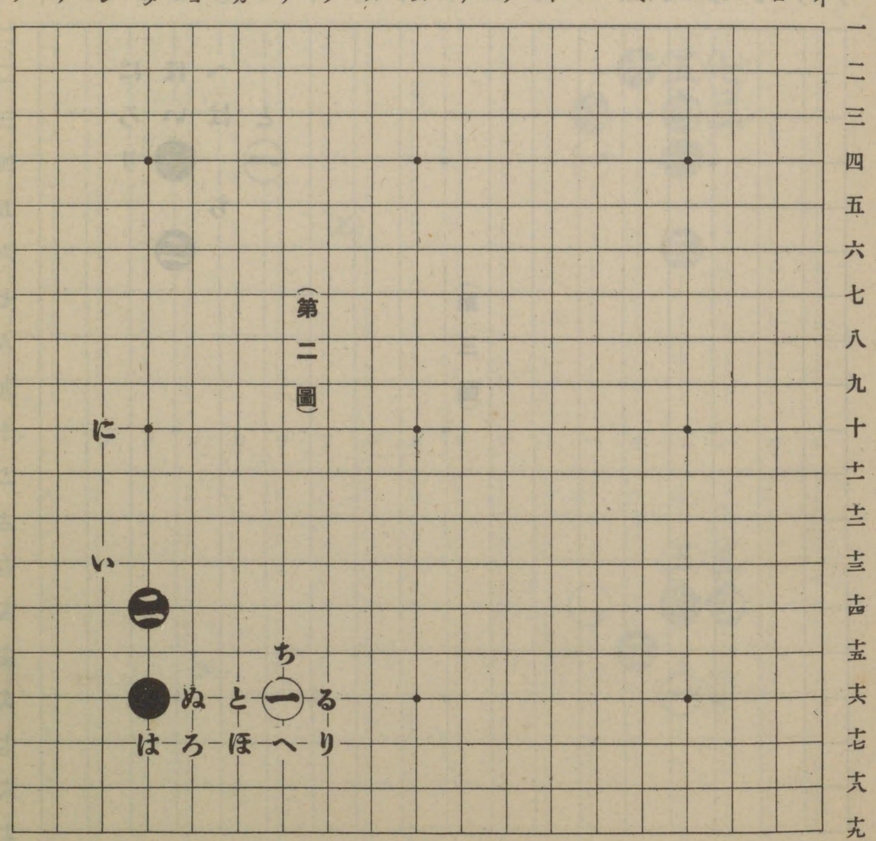
此の圖に於て、白一の小ゲイマ懸りに對し、黒二と斯う大ゲイマに應じたのは、やがて其の二と協力して、「い」の所へ締れば、一隅に先づ我が領土を打ち建て得るからであります、黒「い」で「ろ」と尖みつけることもあります、スルト白は今度其處を更に「は」と絆ねられると、一の石の能力を大部分殺がれますから、其の尖みつけに應じて、「は」と行びるのが最も肝要なのです、スルト黒は「に」の邊に薄つて、白の二子を攻めつけるといふ順序になりますが、場合によつては白「は」の行びを、「ほ」と尖むこともあります、其れは「に」の方面に發展すべき用意として、一路でも多く進んで其の便宜に供する意味と、一つには白一を早く眼形に就かせやうといふ、守勢の方針から出るのです、併し黒二は前述の如く次に



「い」と締るのが主たる目的で有ますから、「ロ」と尖みつけるが如き手段に出るのは、其の時の黒の趣向に依るのです、又黒二で「へ」の點へ一間飛んで應じる手も有りますが、其れは又目的を異にしますから、第五圖に於て說明します。

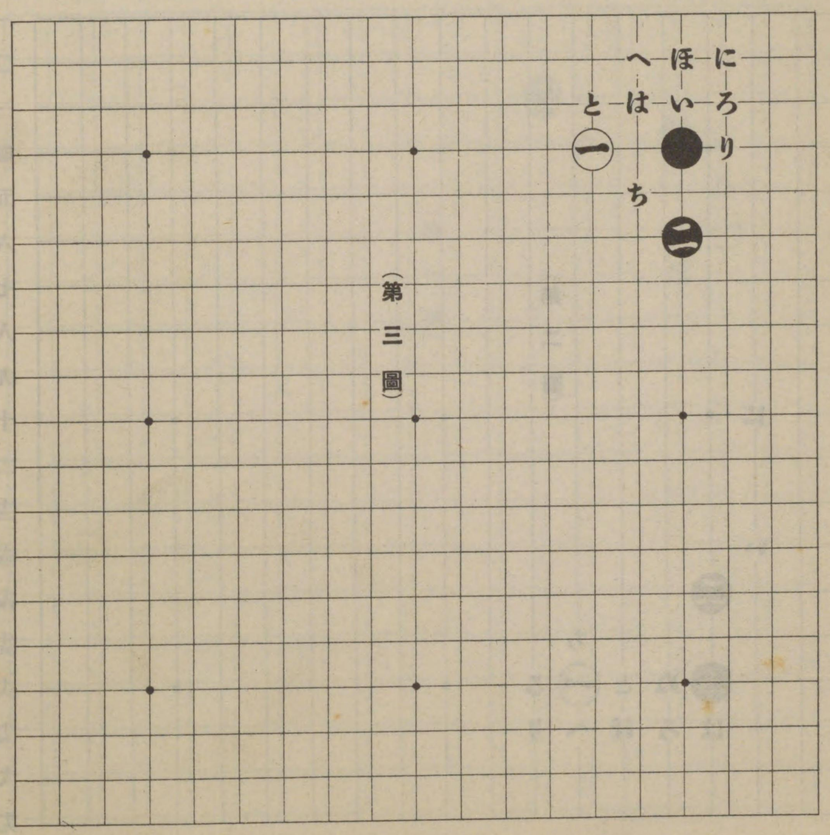
第二圖

白一の二間高懸りに對し、黒二と應じた手は、「い」と受ける場合もありますが、其れは黒が次の手で「ろ」又は「は」と締て見ると、前圖と違ひ一の懸りが遠い所に居て、黒に取つては直接の影響が、比較的薄いのです、デ斯う一に對する位を保つて二と應じ、尋いで「に」の邊に拓いて、其の方面に發展しやうといふ目的、が黒若し先手を取る目的なら、二で「ほ」と走つて、白「へ」、黒「と」、白「ち」となつて、卽ち他へ轉じるのです、但し、白の「ち」の點は、黒に其處へ絆ねられると、白の二目が壓せられて效用を缺くは勿論です、又そうなる白「へ」で「と」と押して來たら、黒「へ」、白「り」、黒「ぬ」、白「る」となりますが、此の「る」の點は黒に切られては大變の所です。

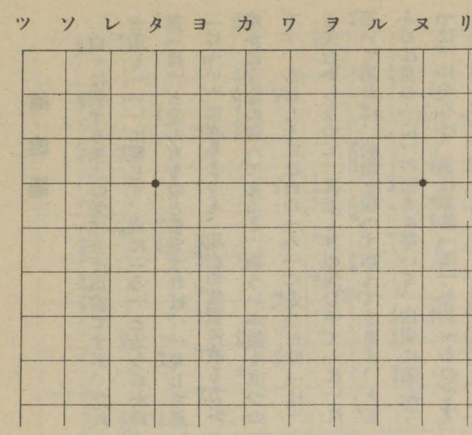


第三圖

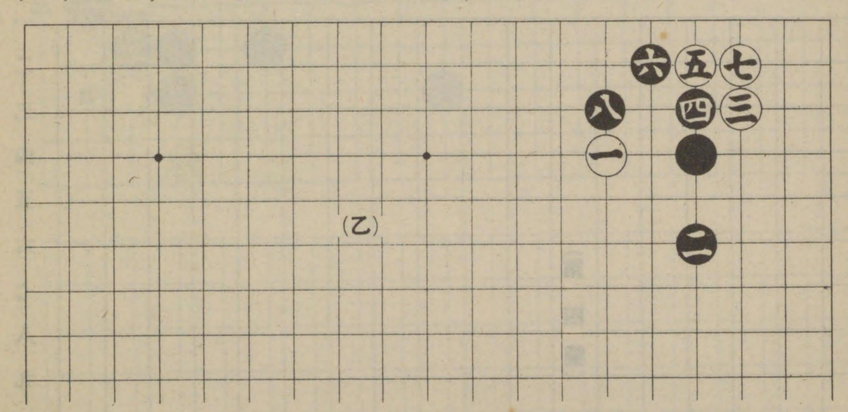
白一の高懸りに、黒斯う二と應じたのは、一番適宜の受け方で、白一の懸りが甚だ悪いのです、なぜなら、尋いて白「い」、黒「ろ」、白「は」黒「に」と運べば、左圖(甲)の如く黒の固定するに反し、白の三と五の頂け引きが重くなつて、大した効果は有りません、ト云つて白「ろ」の三、三に入つて、黒「い」、白「ほ」、黒「へ」、白「に」と運んで、黒に「と」と懸けつがれると、(乙)の如く八までの變化に依つて、最初の白一が敵の堅い面に膠着して、トテも働かない事になるのです、總てこんな敵の一點の隙も無い、完全の防禦線に接近することは、禁物と心得なくてはなりません、又白に斯う一と懸られた時、黒の其れに應じない道理はありませんが、其の一が征の當りや劫立の關係にあつて、黒手を抜けば、白更に二に夾んで、黒「ち」、白「ろ」と交換し、次に黒「い」なら白「り」、黒又「り」なら白「い」となつて二に夾んだ白を一とする、(丙)の如く五までの運びに依つて黒の根據は崩壞するのです、故にそう云ふ場合か、急を要する時の外は、白一は甚だ悪いのです。



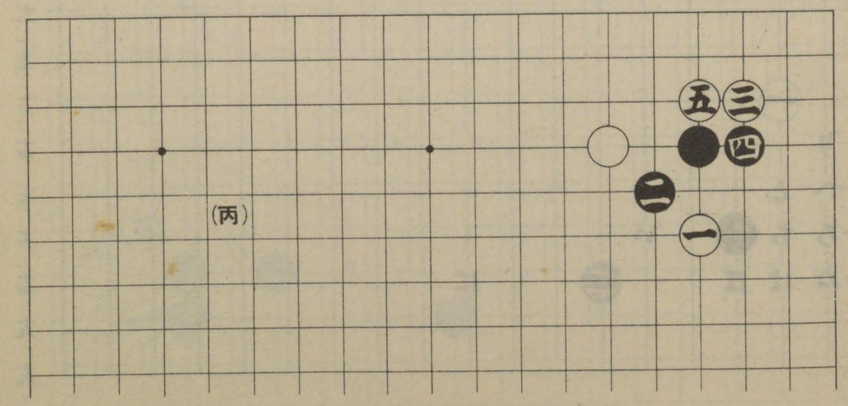
(第三圖)



(甲)



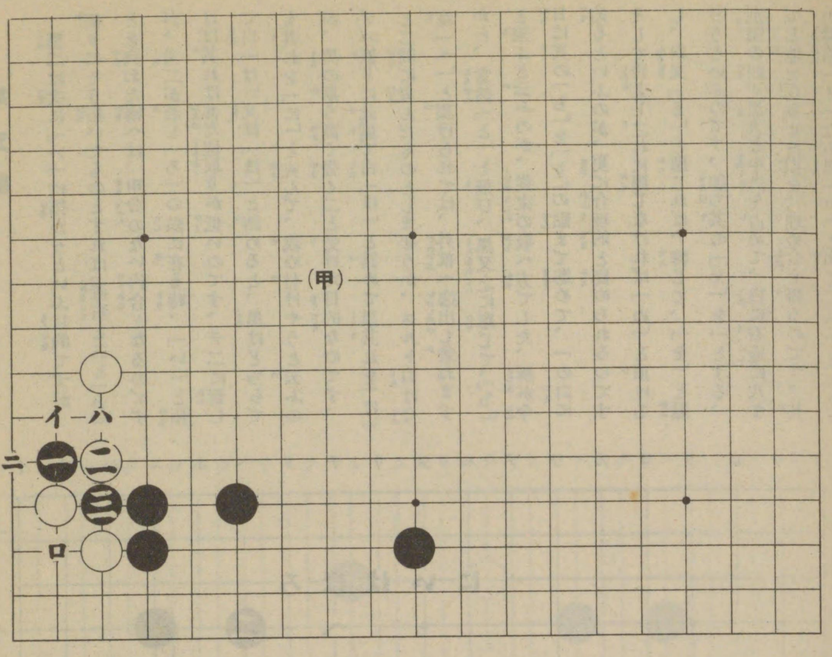
(乙)

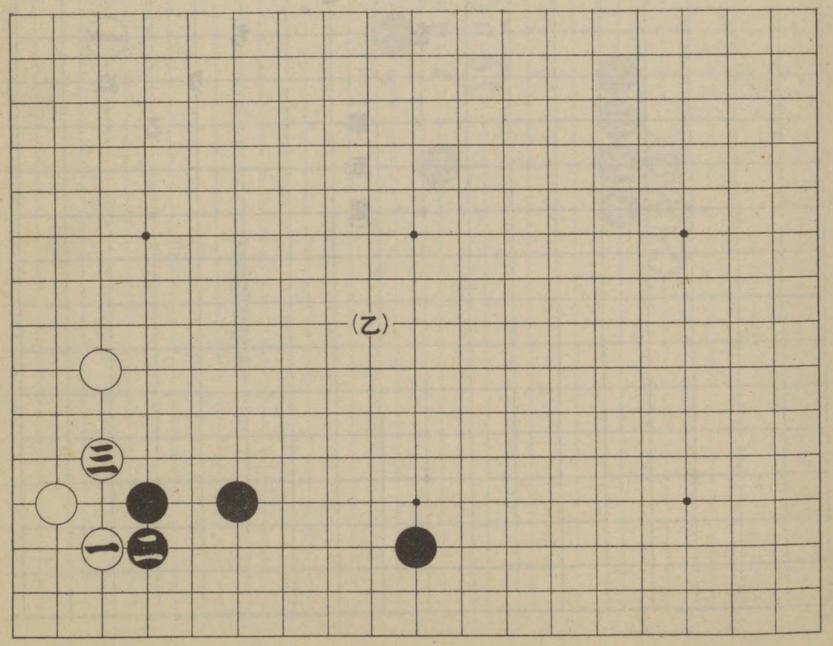


(丙)

第四圖

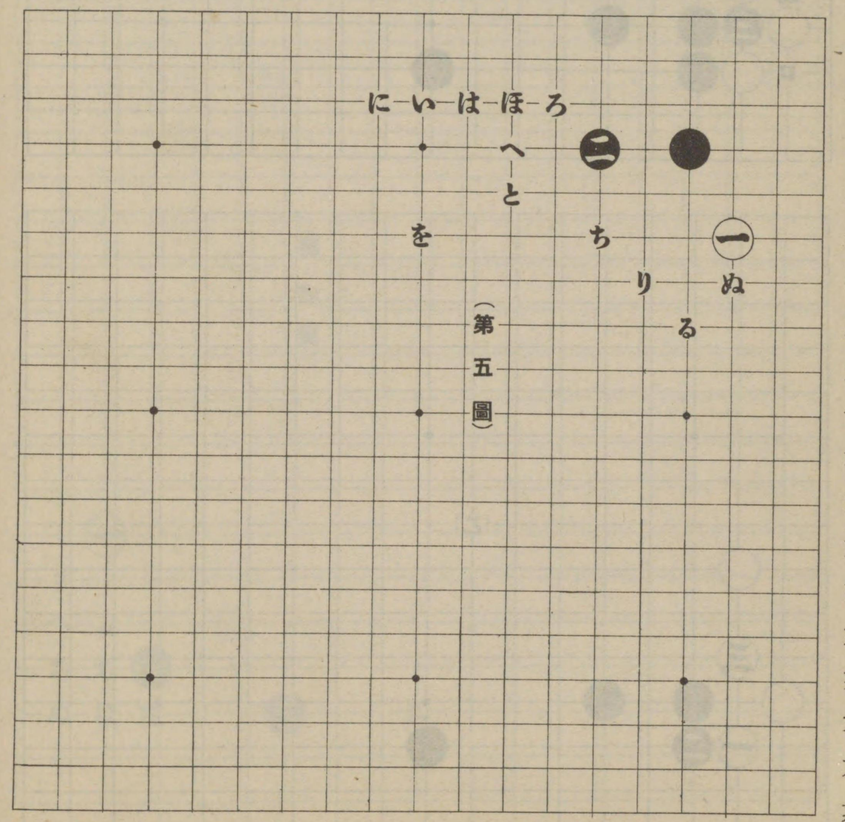
白一に對する黒二の受け方は正當ですが、之れを若し「い」に應じて、白に「ろ」と走られた時黒「は」と尖んだものと假定すれば、一見して黒二は「い」に在るよりも、現在の位置に在る方が遙かに完全の備へであると、斯ういふ論も立つのですが、併しそれは白の「ろ」に走つた時「は」と尖むからなので、黒若し其の尖む手で「に」に拓いて居れば、前論を覆へす事もできます、ト云ふのは黒の「に」の拓きに尋いで、白更に進んで「は」に尖めば、黒は無論「ほ」と約へるのですソコで白は今度、黒から「へ」の所へ頂越されると、其の頂越を一とする左圖（甲）のやうに、黒一、白二、黒三と運ばれて、白「イ」なら黒「ロ」、白又「ロ」なら黒「ハ」となつて、白のまづいのは勿論です、ト云つて黒の一を、白「イ」に尖みつけて、黒二に引いた時「ニ」と盤るのも、白の地とならぬ意味で惡いのは知れた事です、故に白は其の一に本圖の「と」と尖む外ありませんが、スルト（乙）の如き現れとなり、其の配置に於て、黒の豐かな事が解りませう。從て黒二を「い」と應じる手もあるのです。



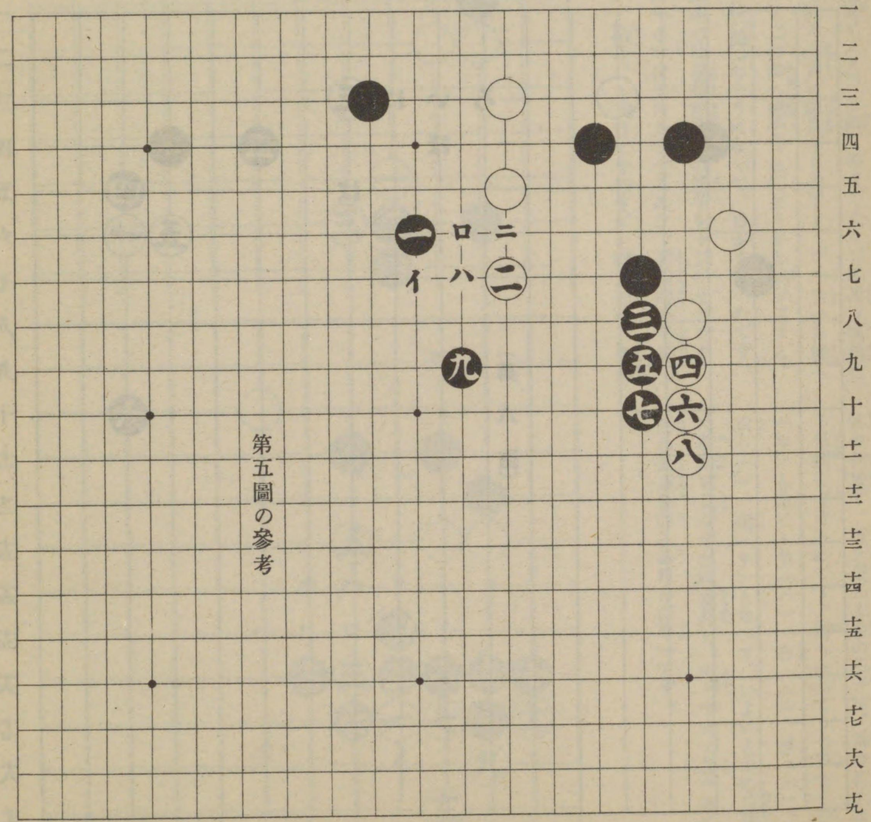


第五圖

黒二は次に「い」に拓かうといふ目的ですが、假りにそう拓いたものとすれば、置石と二と「い」とを列ねた構へは、申分のない釣合となるのですが、黒二が若し「ろ」の點に在る時、「い」と拓けば其れは甚だ位取りが低いのです、デ二に對して白「は」又は「ほ」と詰めると、黒はどちらでも其れを「に」と夾んで、攻め付けやうと云ふのが、黒の斯う高く強く二と受けた目的なのです、デハ假りに此處で白「ほ」と詰めて黒其れを「に」と二間に夾んだものとしませうか、スルト白は今度「へ」と頂けられては、外部へ逸出し兼ねますから、當然「と」と飛び、黒又之に應じて、「ち」と飛ぶと云ふのが、從來の教へ方でした、所が今日は其の「ち」を「り」の點まで進めて、一の白に迫るといふのが、更に合理的と認められるのですそして白若し之れに應じなければ「ぬ」と頂けるし、白又「る」と應じれば、轉じて、「を」と煽らうといふのです、卽ち其の「を」を一とする、別圖の如く黒九と中央を占めて、白に右邊に八まてと地を取らせた損を、埋め合せ得るのです、其の時白「イ」なら黒「ロ」と出て、「ハ」と「ニ」



の切れができます、故に黒「ロ」と覗いて「ニ」と粘がせる交換を經てから、九に懸けるが如きは俗手で、其の交換を保留して、九と懸ける所に妙味があるのです。

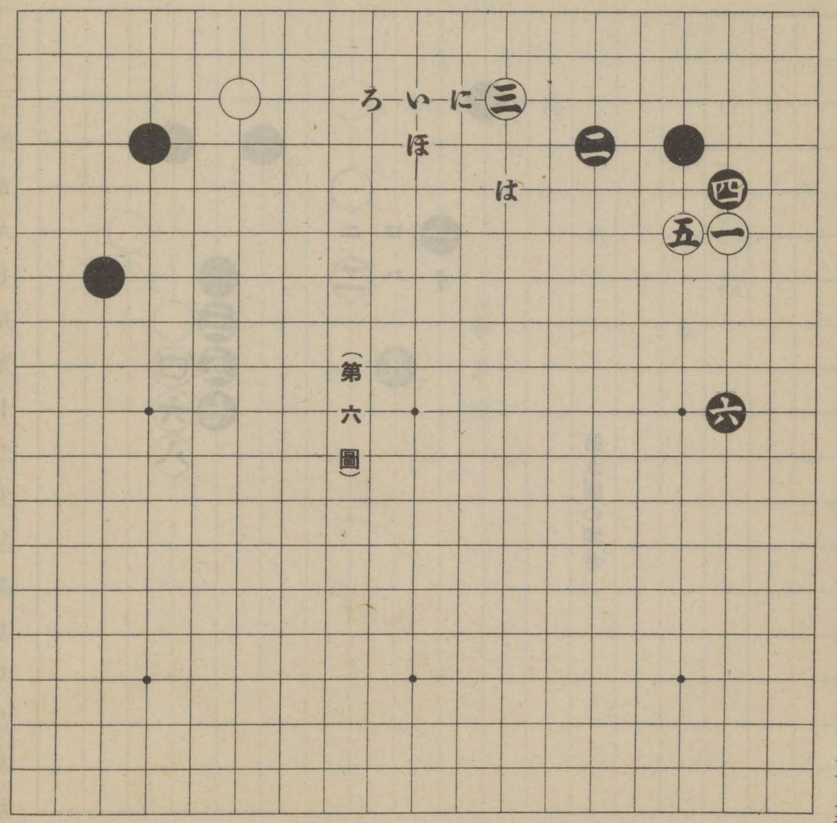


第五圖の參考

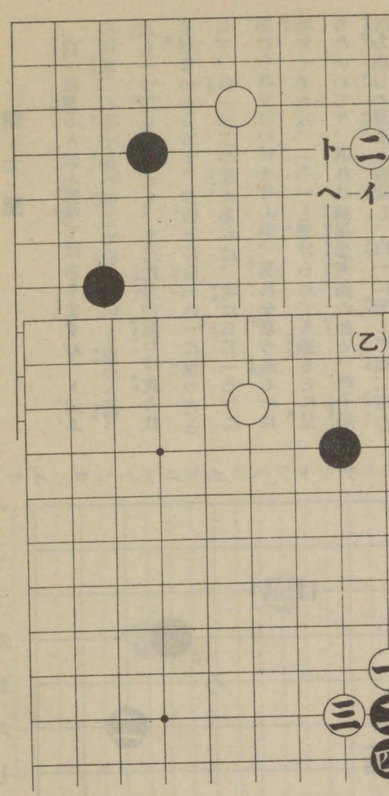
第六圖

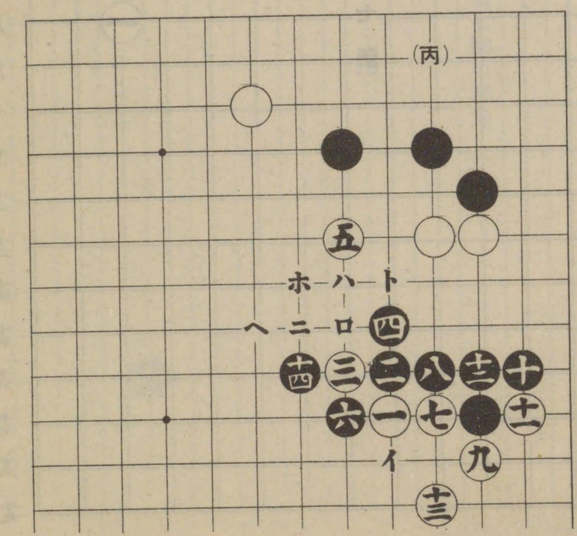
圖の如く左上隅に於て、既に白黒三著の交換のある場合、黒に次に「い」と詰められては、左上隅の白の居り場が悪いから、其れを避けて三と詰めたのです、ソコで黒「い」又は「ろ」に打ち込んで戰ひを挑めば、自然二と構へた右上隅に影響を受けますから、右邊の經營にも資する意味を兼ねて四と尖みつけ、白を五と行びさせて其れを斯う六と攻めるのが、二と飛んだ豫定の一つです、デ黒は次に「は」と帽子して更に「に」に頂けるか、又は「ほ」と懸けるのが目的ですから、白は其の「は」に對して「ほ」と受ければ、(甲)の如く黒一と頂けて二と引かせ、三と攻ることになるのです、デ黒一と頂けた時白若し「イ」と絆ねれば、黒「ロ」と膨らんで、次に白「ハ」なら黒二、白「ニ」、黒「ホ」と運んで、斯う三と攻るか又は白の「イ」の一子を「ヘ」と征にかけるか、若し征の利かない場合には「ト」と行び出すか、二途其の一を擇ぶのですが、要するに右上隅の白の二子を、消極的に活かして、中央の經營に就かうといふのが黒の希望なのです。

又本圖黒六に對して、白右上隅の二子を掩護する意味で(乙)の如く四までとなつて黒は次第に右下隅の方面に發展するのです、デハ白一と備へる手を二の所へ帽子すればどうかと云ひますと、其れは(丙)のやうになつて、白がまづいのです、ト云ふのは黒最初白一の帽子を十三に受けたり、又は「イ」に受けたりするのは、對内的の手段ですが、斯う二と頂けて十四までと運ぶのは、對外的の作戰で、五と飛んだ白の三子は、爲めに大なる脅威を受けるのです、斯うなつてから白たとひ「ロ」と出ても黒「ハ」、白「ニ」、黒「ホ」、白「ヘ」、黒「ト」となつて、いよいよ五の方面に危殆を及ぼすのは當然で、從つて此の黒十四の筋の要領を呑み込むのが專一です。



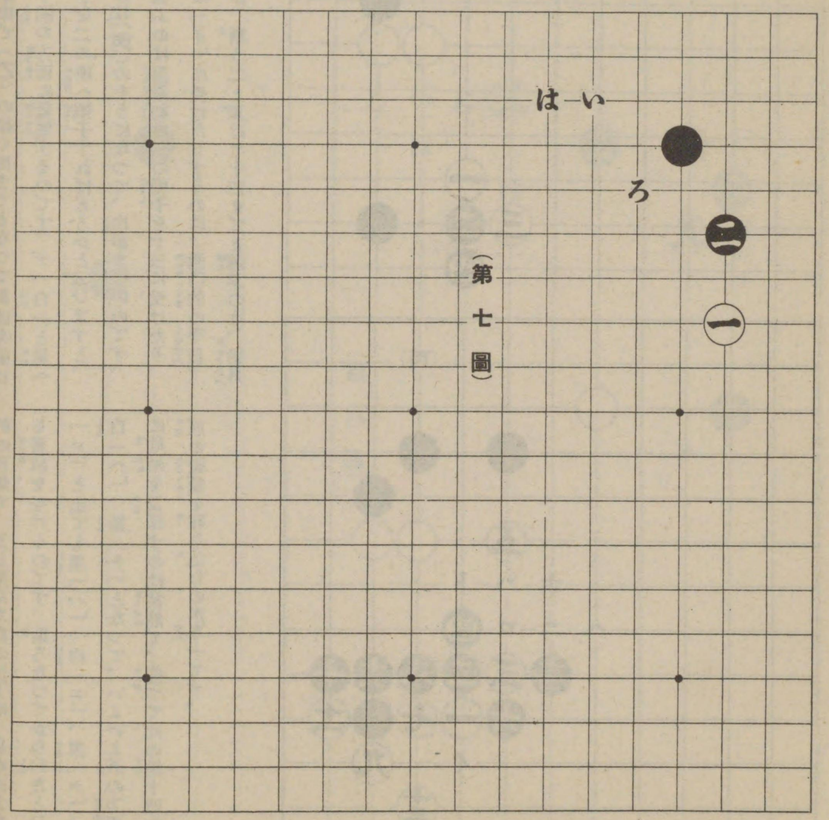
(第六圖)



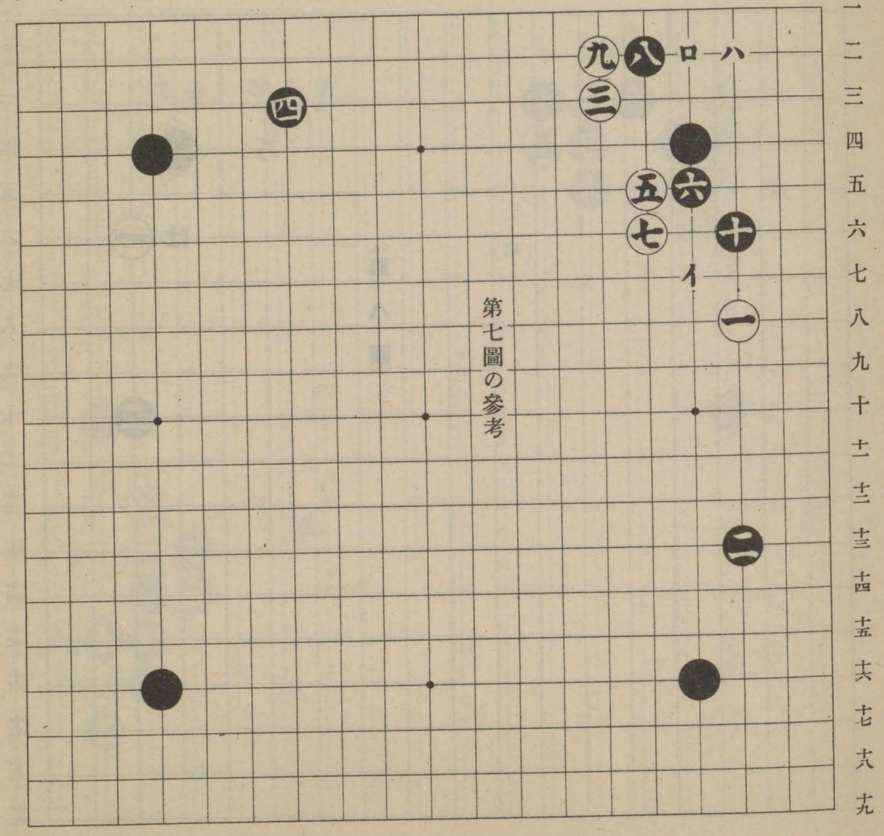


第七圖

白一は懸りと云ふ意味ではありません、ト云ふのは黒二の手で他へ轉じて白「い」と懸つた時、黒も一つ手を抜いても、まだ此星の置石は攻られて居ないからです、が假りに白「い」に懸つたとして、白一が二の所にあれば、次に白に「ろ」に懸けられてはいけませんが、其れを斯う遠く一に離れてあれば、「ろ」と懸けられても恐るるに足らないのです、其れは別揭參考圖の如く、四子局卽ち四目の置碁と假定し、白一に對して黒二着の手抜をした形から、說き明すのが、最も能く徹底するであらうと思はれます、デ「ろ」を一として、一からが圖の如く十までとなると、黒に相當の地が附くのです、スルト白の外覩は、大變に大模樣を築かれたやうですが、黒は其處で假りに黒の十までとなつた地域と、二と四との二着から生ずる利得とを概算して、約三十目と見積れば、白の此の外廓の線には、其の三十目だけの負擔が加はつて居る道理なのです、故に斯う十までの運びを採つて、一と三とに對する、二着の手抜をする定石に依つて、「イ」の尖み出しを殘したまでの、右上隅の應接もいゝのです、斯樣な理法は常識の範圍で、容易に悟れる筈です、尙ほ此の圖中白七は黒に其處へ綽ねられるのが、白九は黒に其處へ泳がれるのが、堪らないからの應手です、但し白「ロ」と頂けたら、黒「ハ」と爽み返して、無論八の一子を放棄するのです、そして徐々に白の厚味を消して行かうと云ふ、高等の作戰もありますが、しかしそれには相當の技倆を要します、本圖黒二は白一に對抗の姿勢ですが、之れを「は」と拓いて居るのも妨げないのです、其の代り白一はそれが爲めに、寬いで居ることになります。



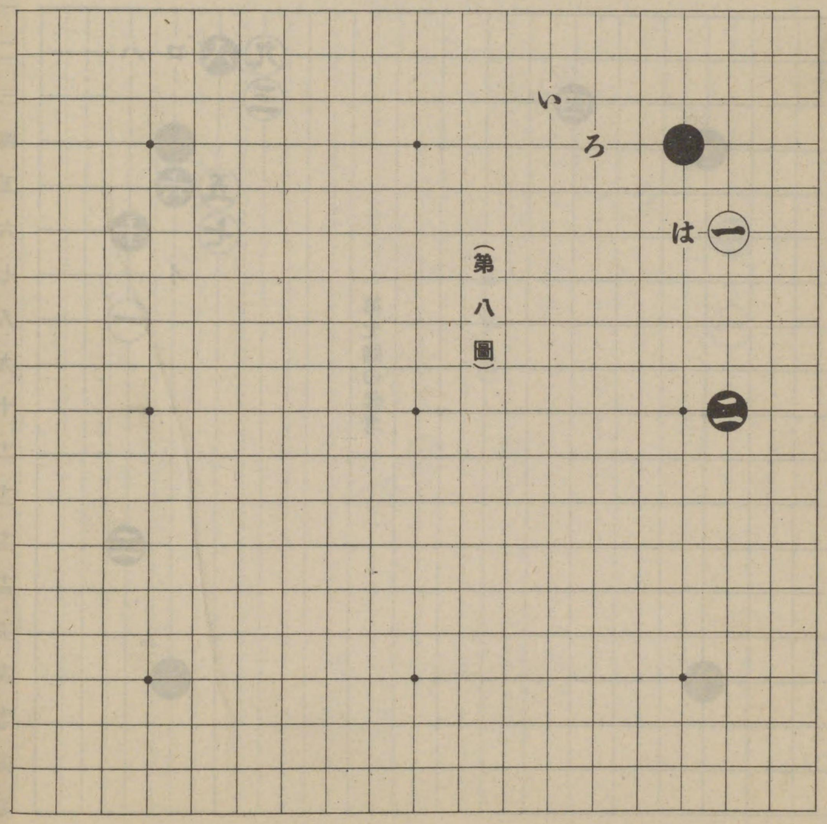
（第七圖）



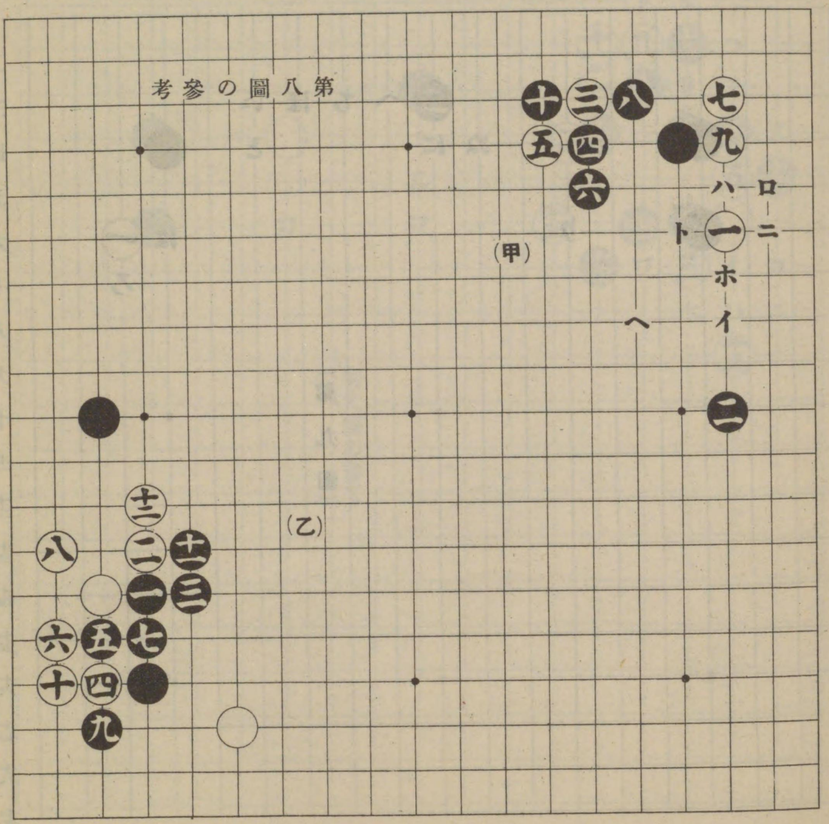
第七圖の參考

第八圖

白一は黒に「い」、「ろ」又は「は」と受けさせやうと云ふ目的、ゆゑに黒は其の意中に投じない意味で、二と夾むことも有ります、ソコで白は參考圖（甲）の如く、三と夾み返して十まで定石を運びます、此の中黒十は肝要の切りで、若し白九で十に粘げば、黒は九の方へ出るのです、十までの運びでは二の方が働かないやうに見えますが、黒右下隅からの刺戟を受けて、二の活動を起す場合には、先づ「イ」と詰めます、其れには次に「ロ」と覗いて白「ハ」、黒「ニ」となると、黒が強くなつて白が弱くなりますから、黒「イ」の時白「ホ」と突き當つて、豫め黒「ロ」ののぞきを防げば、其れを機會に黒は「ヘ」と飛ぶのです、そうなると白は中央へ向ふ針路を擁塞され、黒は縦まに中央へ、棋勢を張ることになります、此の圖中黒四の頂は勿論定石ですが其の四を「ト」の方へ頂けると、「ト」を一とする參考圖（乙）の如くなつて、甲圖の黒二は白の十二までとなつた定石の、堅い面に接近しますから、爲めに白の形勢は善化し、黒の形勢は惡化するのです、そんなら黒の一と頂ける手が、絶對に無いかと云へば、そうには限らないのです、例へば黒五で九に約へるとか、黒三で五に約へるとかといふ手に依つてならば、一と頂けることもありますが、それは技倆の上達に就いて、肝要の點ですから、改めてまた詳述しませう。



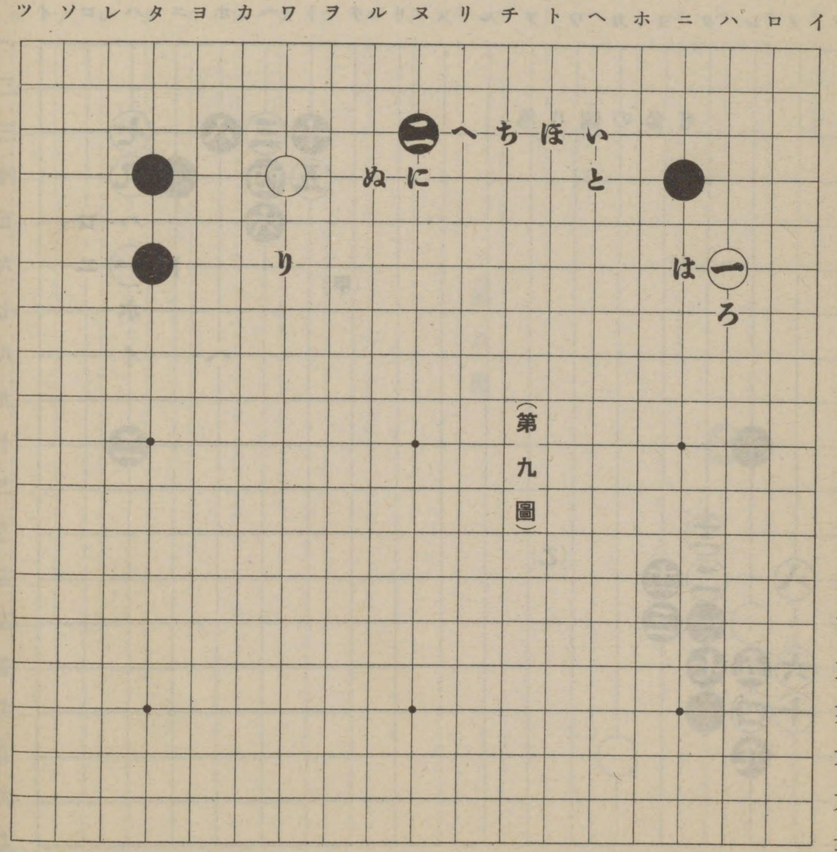
（第八圖）



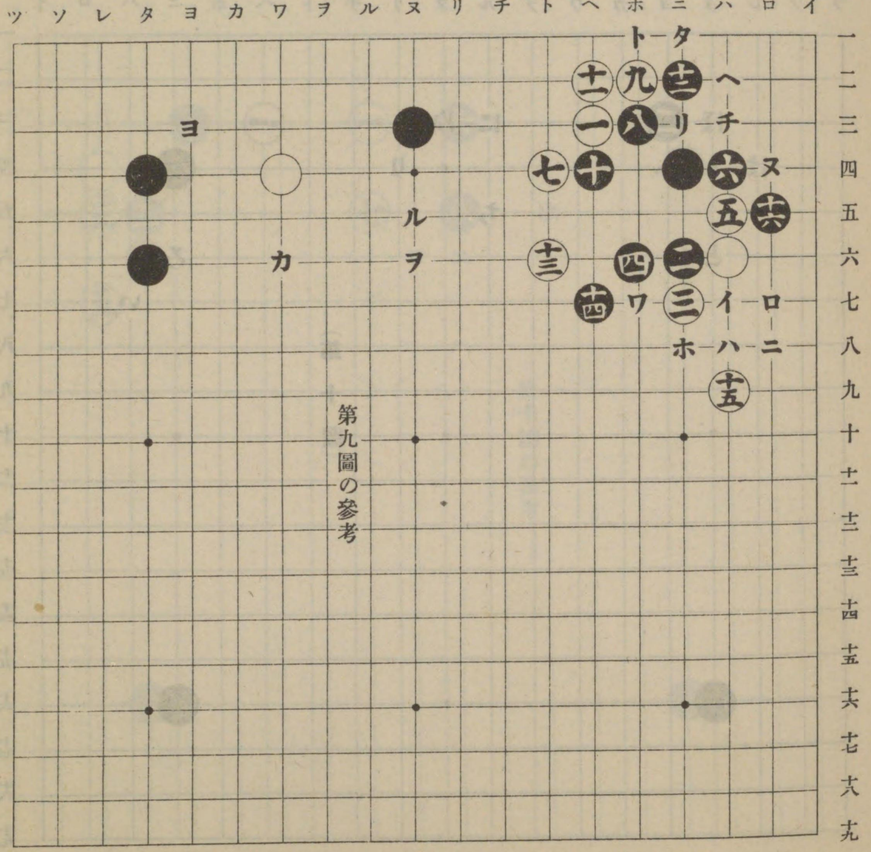
第八圖の參考

第九圖

圖の如く斯う左上隅に、白と黒との交換のある場合、白一は「い」に懸つて、黒に「ろ」か「は」と應じられると、やがて黒から二又は「に」の邊に、打ち込まれる虞れがあつて、どうも其處が手薄でありますから、斯う一と懸つて黒「ほ」と應じたら「へ」、黒又「と」を應じたら「ち」と詰めて、左上隅に在る白の一着と、簇應しやうと云ふのです、黒は其の魂膽を察して、二と白に薄つたのです、ソコで黒「と」と拂へたり、又は「り」から白を煽つて、白「ぬ」に針路を採て、黒「に」に押すやうな事になれば、黒二が大に働きますから、其れを防いで白は「い」と夾み返します、スルト其の「い」を一とする、別掲參考圖のやうな運びになりますが、此手順中萬一白十五に備へないと、黒に「イ」と切られて、白「ロ」、黒「ハ」白「ニ」、黒十五となつて、白は徒らに低く細くなり、黒は中央に向つて無限に發展し得るのです、ト云つて黒に「イ」と切られた時「ハ」と綽ねて黒に「ロ」と下られると、「ホ」に三の一子を取られるのと、十六の所に五と、五に續く一子とを取られます、黒十六は白「ヘ」、黒「ト」、白「チ」

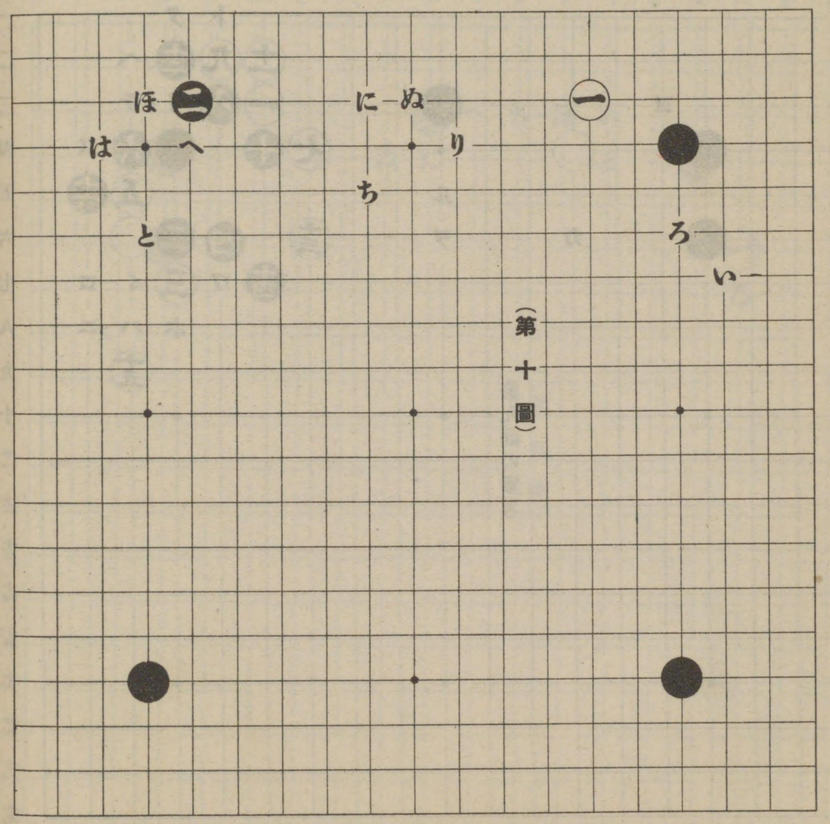


黒「リ」、白「ヌ」となると、黒地が變じて白地になりますから、「ヘ」の頂けを防いで十六と綽ねるまでが定石です、斯うなると白に「ル」と帽子されて、本圖の二に壓迫を受けますから、黒十四で「ヲ」の所へ躍進し、白「ワ」の時黒「カ」と、白の出を止るのです、デ白は更に黒から「ヨ」と尖まれては堪りませんから、何とか其處に活路に就かなければならず、そうなると黒はますます中央に發展し得るのですから、此の場合必ずしも十四から十六までの定石を運ばなくもいゝのです其れは白「ヘ」と頂けて、黒「ヌ」、白「タ」、黒「イ」と切る變化もあつて、そうなつても黒は惡くないのですが、其の事に就いては次の機會に讓ります。

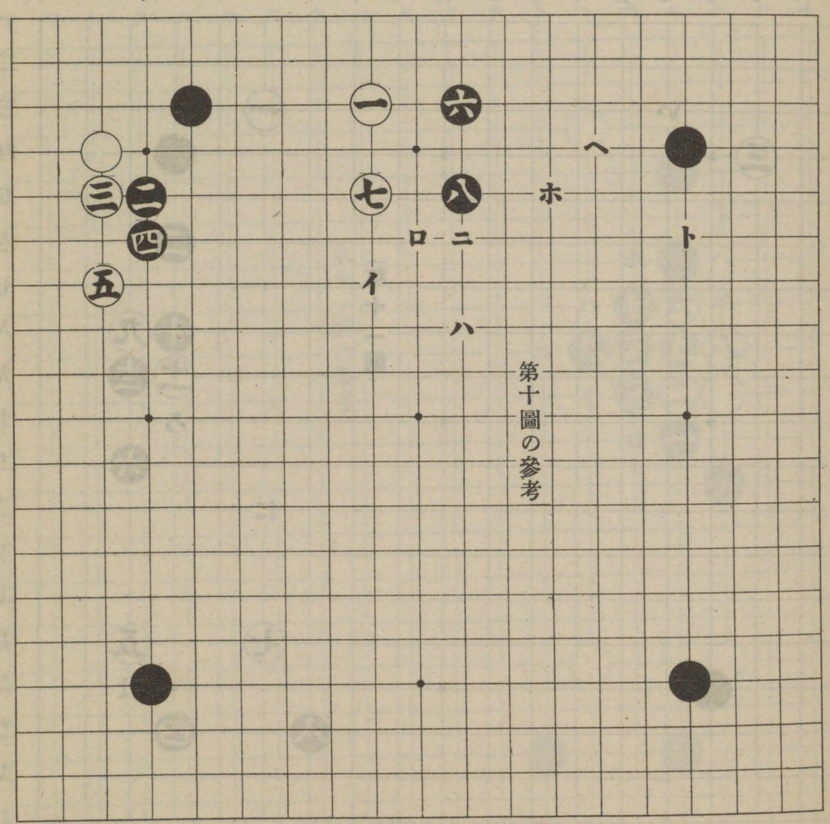


第十圖

本圖は三子局に就いての、白一に對する黒二の受け方ですが、白一は黒に「い」又は「ろ」と應じさせて、「は」と據らうと云ふのです、假りにその白の註文通りになつた時、白の「は」に黒二に懸つたら、白は先づ其の黒を「に」の所へ夾みます、そして黒それに應じずに他へ轉じれば、白は更に前の「に」と夾んだ目的に從つて「ほ」と尖みつけ、黒「へ」、白「と」、黒「ち」、白「り」となると、白一との釣合もまた「と」と搏へた方面も、白に地が附いて都合がいゝのです、ト云ふのは一と「い」「ろ」の交換なしに「は」に據つて、黒二に懸つた時、「に」と夾みますと、其の「に」を一とする別揭參考圖のやうに、黒二と懸けて八までの運びなどになつて、白は上邊に地を得るわけに行きませんが、それに反して黒は右上隅から、上邊にかけて勢力を蕃へるのです、ソコで白七の頭邊を放任しますと黒「イ」、白「ロ」黒「ハ」と運び、そして白「ニ」なら黒「ホ」となつて、黒は中央に勢力を展べつゝ右上隅を固める手段に出ますが、白の方は容易に治りません、故に黒八の時白直ぐ之れに應じて「イ」に飛べば

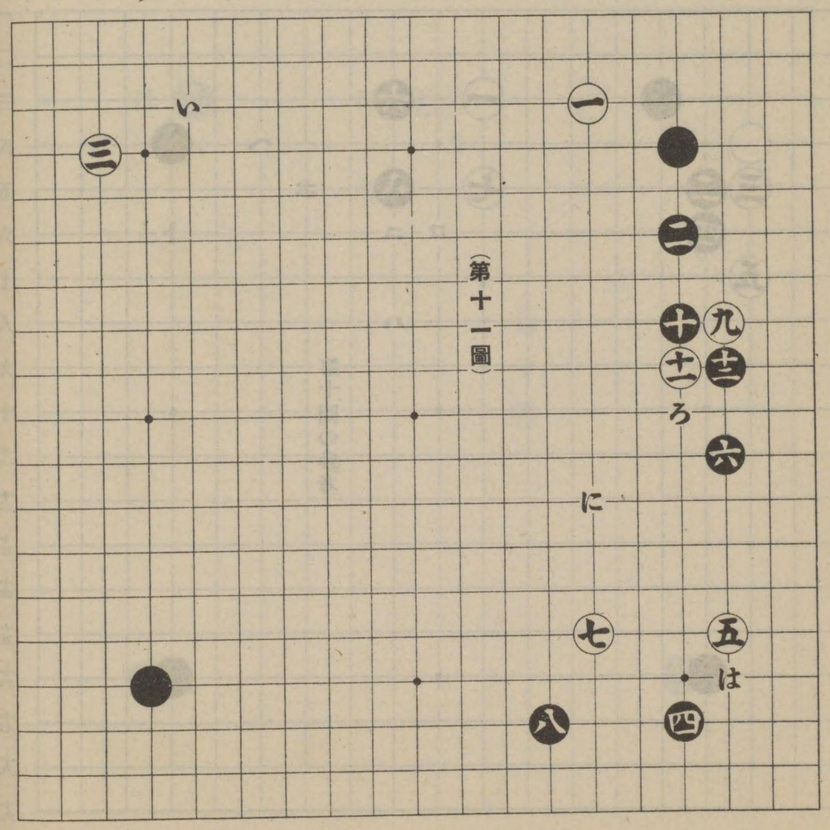


黒は「ト」と搏へて「へ」の邊の薄味を補ひ、左右に發展しやうといふのです、されば本圖に立ち戻つて、白一と懸つて「い」、「ろ」と應じさせやうとしたのも、黒二と據つたのも、ツマリ以上の意味に基くのです、然かも黒の二に白「は」と懸かれば、黒は「ぬ」の方に拓いて、一の白に薄らうといふのです。併しそれでどちらが善いとか、悪いとかいふわけではありません、從つて白一黒二は適宜の定石となるのです。



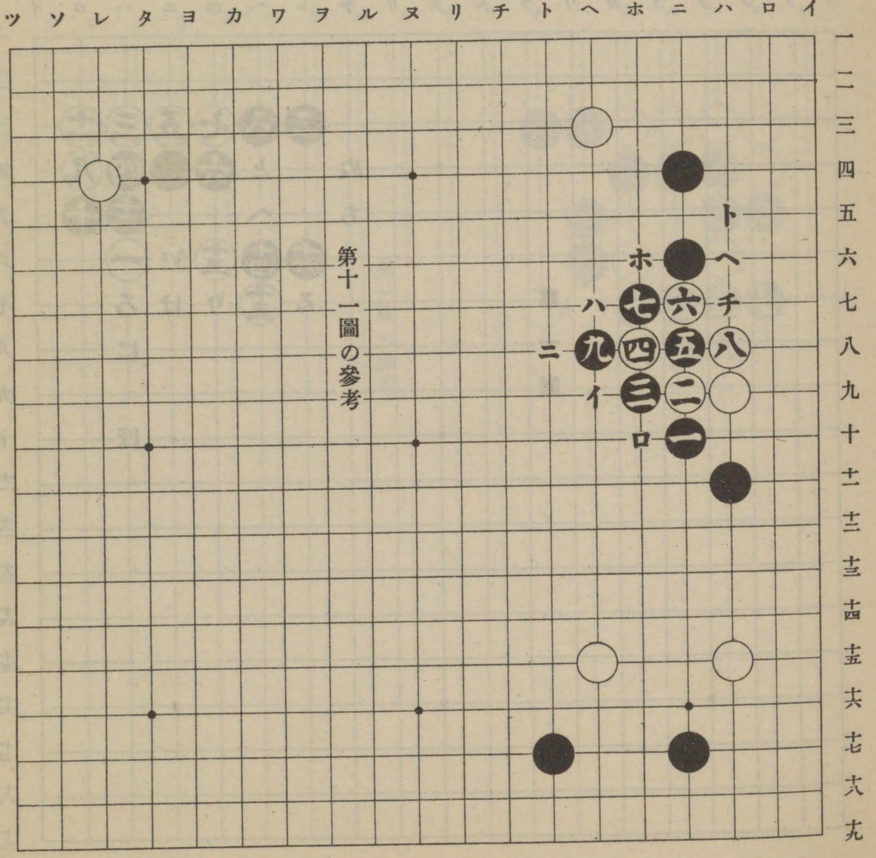
第十一圖

本圖は二子局の黒二の受け方ですが、白三は前の三子局の條下に述べた通り、一に伴ふ豫定の着點です、又黒二で「い」に據つていゝことも三子局の通りですが、二目の置碁ですから、斯う二と受けたので、其れは黒四に據つて白五の時六と搆へるのが、二との間隔を保つ釣合から見て甚だいゝからです、白七は六に伴つて、黒に「は」と尖みつけられますから、斯う七と飛んで八と受けさせたのです。スルト今度黒に更に「に」の邊に煽られることになると、實に五と七の足掻に、窮屈を感じるのみならず、右邊に黒の大模様を築かれますから、それに先んじて九と打ち込んだのです、が黒又十と頂けられ白十一と綽ね、黒十二と切るのは、皆な是れ當然の交換ですが、此の白九と十一、黒十と十二の互の切り違ひは、双方五分々々で、茲で白先手で手段を運らし得ることにはなりますが、黒には前後に二と六との援けがありますから、白の手段も思ふまゝには行はれません、そんなら白九で十二の所に、打ち込んだらどうかと云ひますと、黒「ろ」を一とする別圖のやうに、九までの運びになりますが、白劫手段の爲めに六



（第十一圖）

で「イ」に綽れて黒「ロ」と交換し、次に白六に絡ね込んで、斯う九までとなつた時、白「ハ」と切れば黒五に劫を取つて、大抵の劫立には應ぜずに、四の所へ粘ぐのです、がそれをウカツに劫立に應じて白に劫を取り返され、遂に白に「ニ」と打ち抜かせる劫換りは、一口に百目と言ふ所ですが、或は其れ以上の劫換りを要するのです、さて斯うなつて見ると、白は五の所へ粘いで、黒に「ホ」に粘がせたのでは重いから、五に粘がずに「ヘ」に綽ねます、其の時黒かりそめにも「ト」に應じると「ホ」に切られてどちらかの一目を取られます、故に白「ヘ」の時五の所へ取ります、ト白は「チ」と粘いで活きる外は有りません、ですから本圖白九では、十の所に打込むのが穩當です。



第十一圖の參考

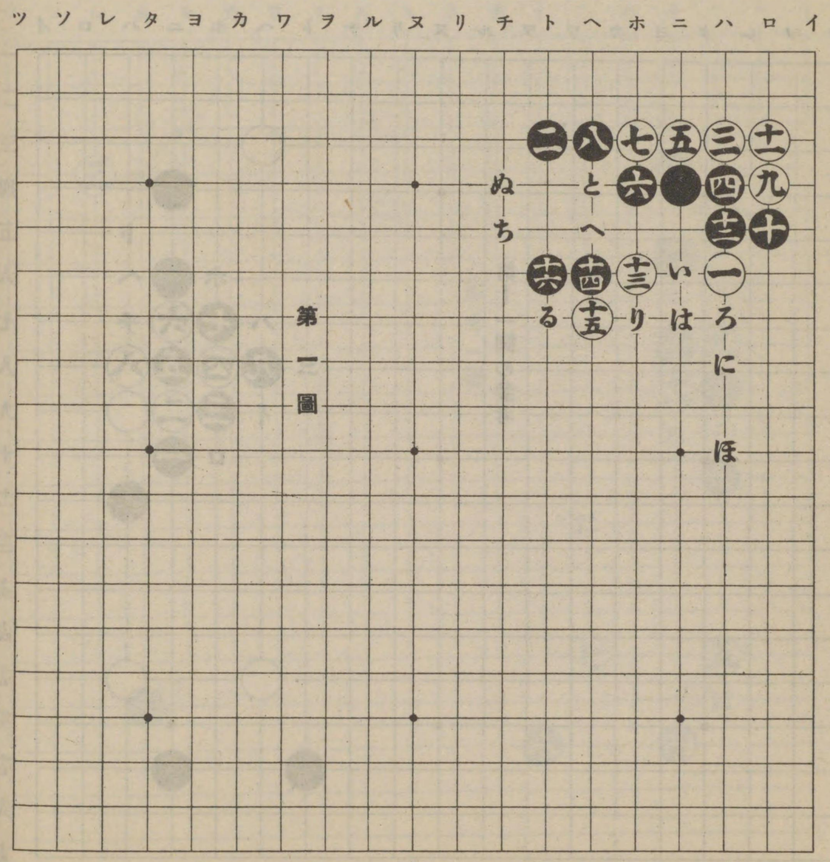
一隅に於ける

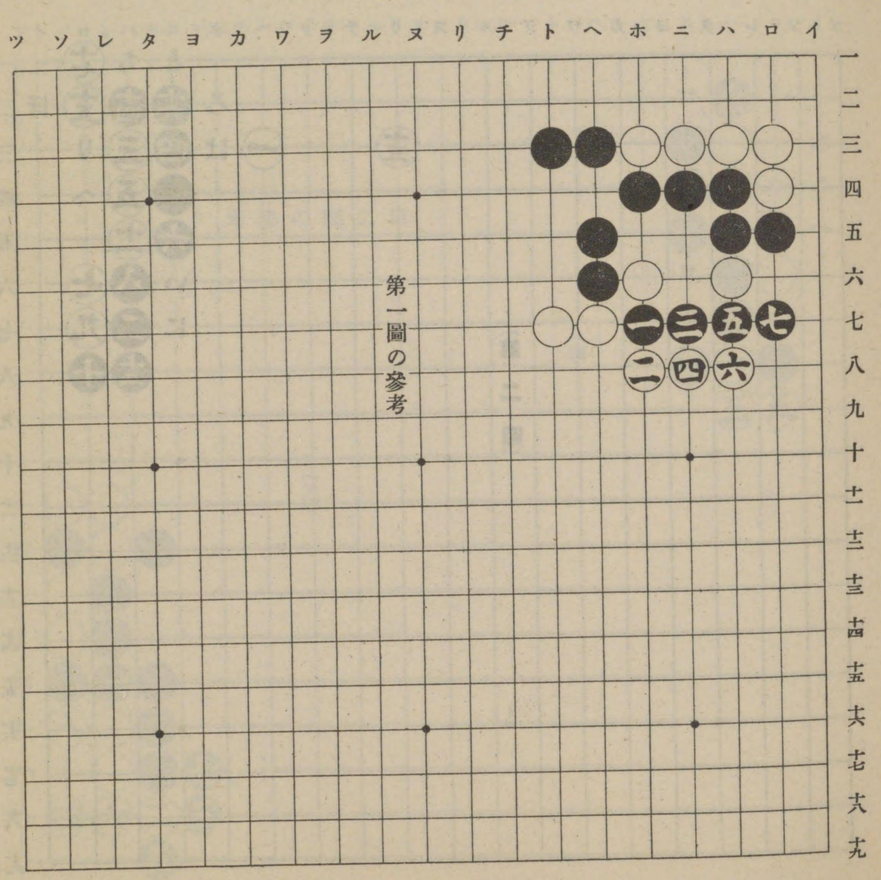
白三の手段

第一圖

前項に於ては、白一に對する黒二の受方を說きましたから、玆には黒二に尋ぐ白三の手段と、其の變化とを說かうと思ひます、第一圖に於て白三と斯う三、三に入つたのは、言ふまでもなく黒の四に締るのを妨げた手で、そして十一まで運んで、一隅に若干の地を設けたのです、白十三と飛んだのは、此處を黒から先に「い」と絡ねられる手を防いだのです、若しそう絡ねられると一の石が、其の一手で殆ど死命を制せられるので、其の時白「ろ」と引けば、黒に「は」と押され、更に「に」と引けば、今度は「ほ」から攻められると云ふので、之れはもう惡い方の型の標本ともいふべきものです、故に輕く十三と飛んで、次の機會に「へ」と覗いて、黒の「と」と粘いだ時「ち」と飛び、漸次中央に發展しやうと、斯ういふ腹案もあるのです。

そうなると黒は折角十二まで築いた、外壁の厚味が消されるのみならず、白を內部に治まらせた、損の償ひを得られないのは素より、却つて損の上塗りのやうになりますから、十四と頂けて十五　十六と交換し、ますます其の厚味を、延長しやうとしたのです、が白十五の手で「り」に行びると、黒は當然「へ」と引くべきです、其れを若し圖の如く十六に並びますと、白は「へ」の絡ね出しを覿て「ぬ」の方から覗いて來ます、そんなら白十五の時黒「へ」に引いてはどうかと云ふにスルト白は「る」と行びきつて、十五の頭邊を延長し、ます〳〵中央に向つて發展しやうとするのです、そんならそう白の行び切つた時、黒には、「り」と切る手があるではないかと、斯う言ふ人も或は有りませう、がそうすると別圖の如く、七までの運びで、白に輕々と二目を捨てられ、黒の外部に沿つて又新たの障壁を築かれますから、黒の厚味は其の利用程度を局限されて、殆ど此の以上の効用を爲さないのです。

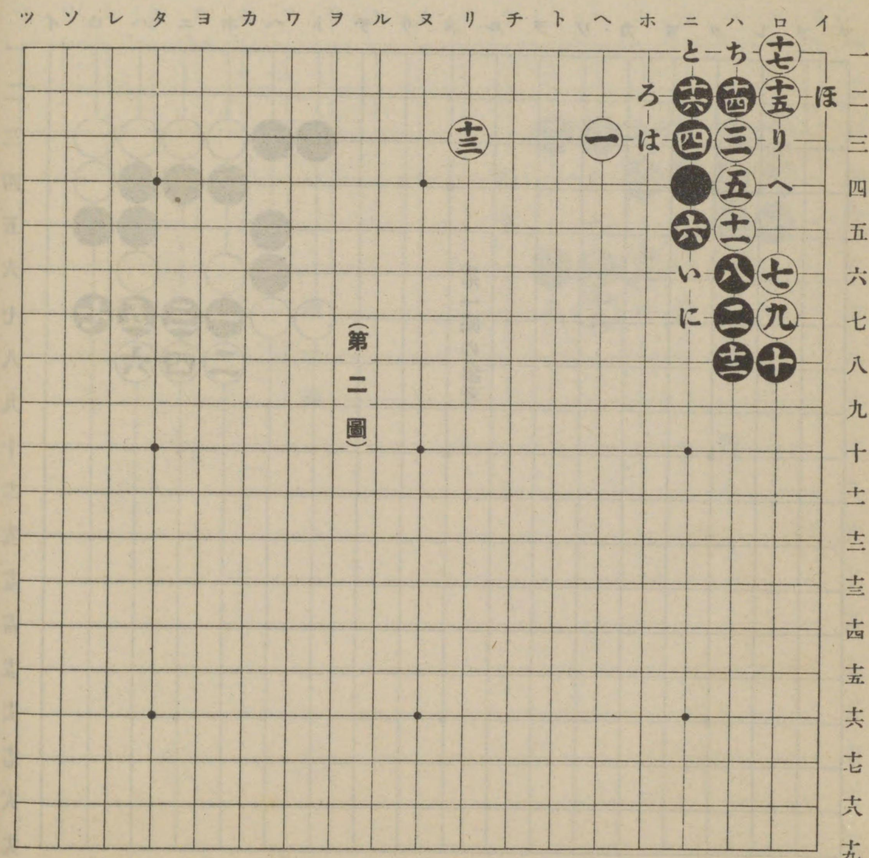




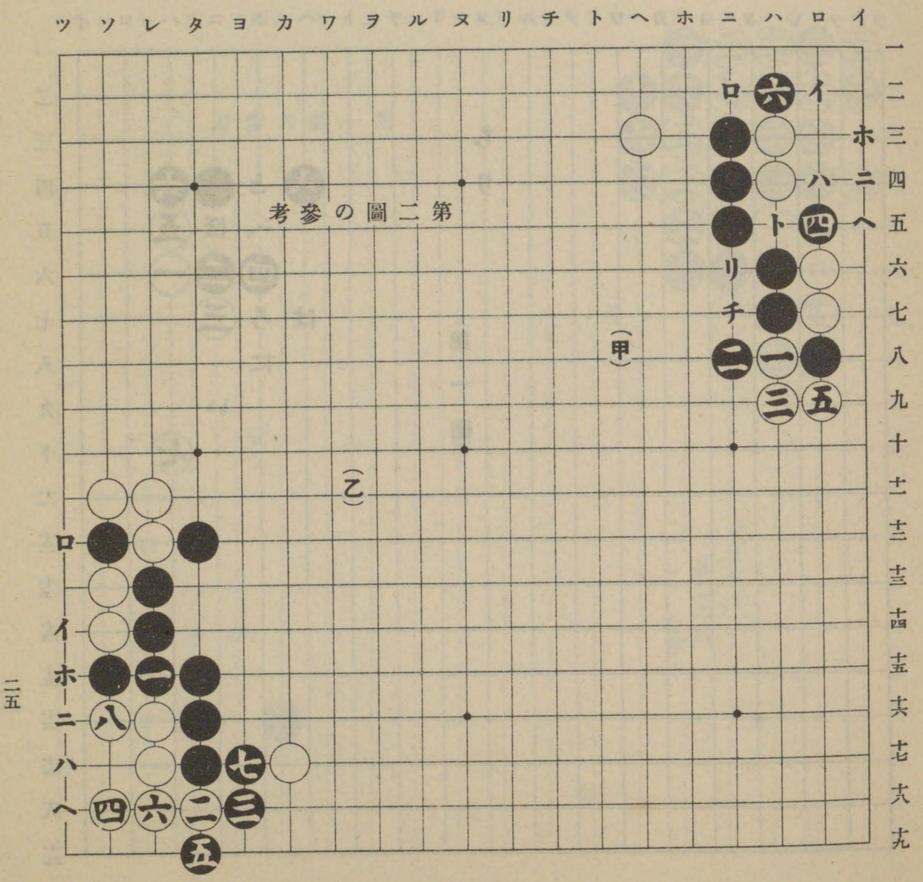
第二圖

本圖は第一圖の、白七から變化して居ますが、白の五から斯う七と斜走した目的は、十一までと先手を運んで十三と拓きたい爲めなのですが、白七の時黒九に約へると、白八、黒「い」、白十六黒「ろ」、白十四、黒「は」となつて、白に「に」と兩斷されて、紛らはしくなります、故に白七の時八と沿ふのは、斯うした場合の要領なのです、又黒十四、十六と、白十五、十七との交換は、そう急がなくもいゝのです、其れは場合によつては黒十六の粘で、十七に絆ねる手が有るからです、假りにそう絆ねた時、白「ほ」と下つて黒に「ろ」と懸けつがせ、「へ」の所へ活きを打つて、ムザムザ四んで居るわけには行きませんから、黒の十七の時十六に切り、黒「と」、白「ち」と運んで劫になります、ソコで黒劫立の上「ち」の一子を十四の所へ取り返して、白餘儀なく「ろ」と引けば、黒更に「り」と切つて、いよいよ一隅の興廢に關する、大劫となるのですが、之れは要するに豫め劫立の數を計算してから、取かゝる手段なのです。

又白十一の手で、十二に切つてはどうかといふ



と、十二を一とする別圖(甲)の如く、六までの變化となり、白が五まで と右邊の經營に便じたら黒は斯う六と受けて居ていゝのです、なぜなら此處で白「イ」、黒「ロ」、白「ハ」となつても、黒は「ニ」と絆ねて白に「ト」と突つこむ手がないからです、又黒六の時白「チ」と切れば、黒は「リ」と當てゝ「ト」の切りを防ぐのは當然ですが若し其の六を(乙)の如く一と粘げば、八までの運びとなつて白に活きられてしまひます、即ち黒「イ」白「ロ」と交換して、黒「ハ」と置いても、白「ニ」、黒「ホ」、白「ヘ」となつて活きです、故に(甲)の如く六と絆ねるのが肝要。

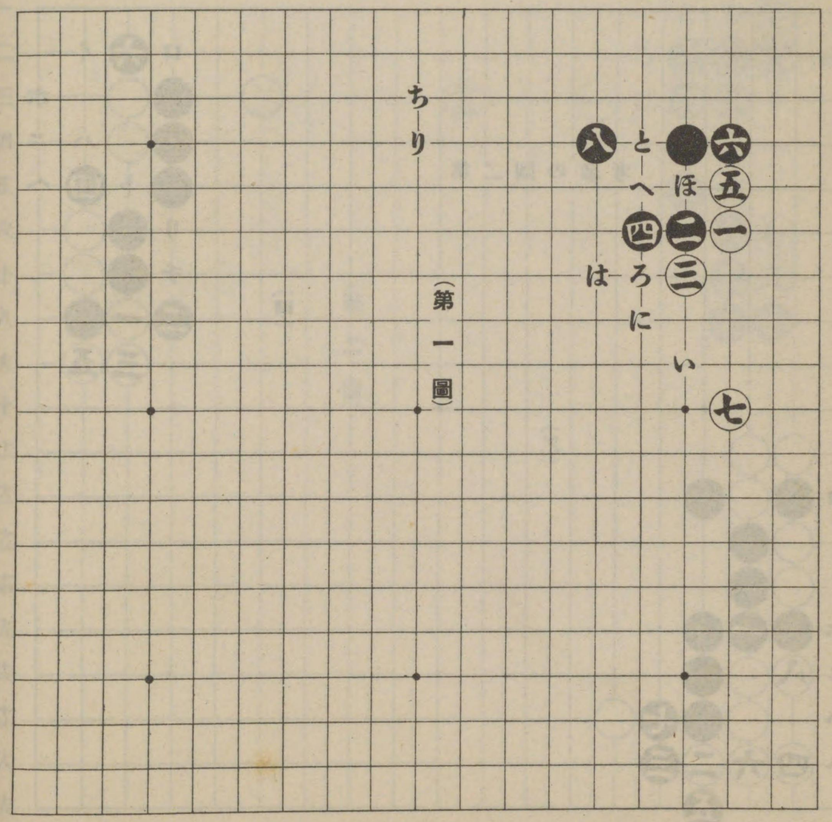


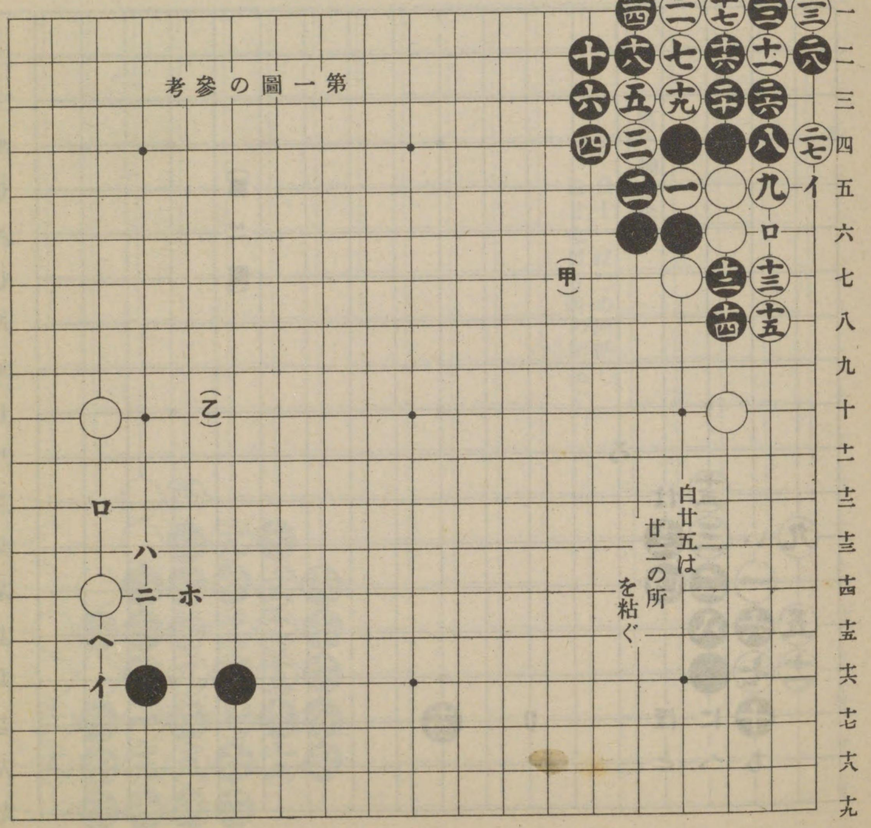
頂定石

四隅何れに於ても、白一と懸つた時、黒二と頂けるのを頂定石と云つて、置碁には常に最も多く現はれる型ですから、玆に先づ其の六通りの變化を擧げて、說明を試みませう。

第一圖

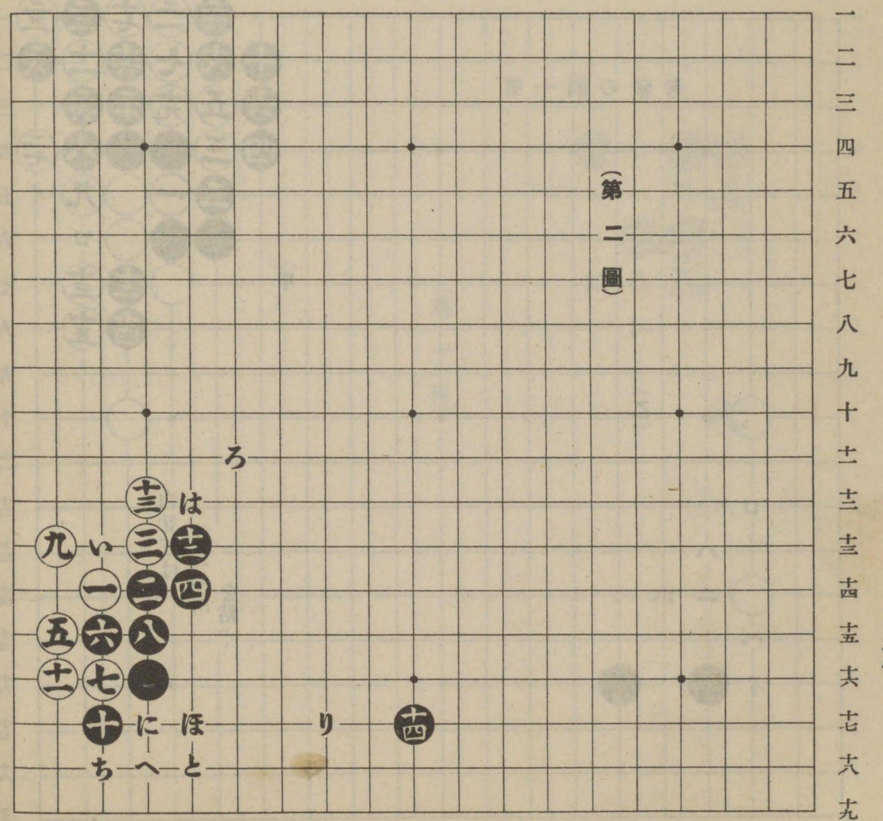
黒二と頂けてから六までと運び、ソコで白七と備へたのは、若し此の手を抜けば、黒に「い」と衝かれて、白「ろ」、黒「は」、白「に」と應じなくてはなりませんが、其れは白二が愚形になつて且つ黒「い」がいつまでも働いて邪魔になりますから、斯う七と拓いて用心したのです、尋いで黒八と飛んだのは、此處を捨てゝ置けば、白から「ほ」と出られ、黒「へ」と約へた時、更に「と」と切られる手に備へたのですが、黒たとひ八の手を省いて、そう出切られたものとしても、其の變化は「ほ」を一とする、別圖（甲）のやうな手順になつて、白の九目を捕獲することになるのですもつとも此の圖中、白十七を二十の方に抱へると黒十九、白十八、黒廿六、白十七、黒廿四と運んで、白は二十に一子を取返し、其處に劫爭ひが起りますが、其の時黒は「イ」に劫立して「ロ」と粘がせ、再び劫を取り返して、もう大抵の劫立を利かずに取り切るのです、斯ういふ手段を呑込み得たならば、本圖八と用心しなくもよし、そして其の八の手で、「ち」迄拓くのが可いのです、特に井目の碁などは、「り」の點に置石がありますから、其れを利用して其處へ二目並んだ日には、所謂鬼に鐵棒の强味を加へるのです、所が從來の教え方は、所謂石部金吉鐵兜其の物の構成で、甚だ時代に順應しないのです、と云ふのは（乙）の如く、黒最初「イ」と締つて、次に「ロ」の打ち込みを睨み、白それを防いで「ハ」と後手で用心するといふ所を、黒ことさら「ニ」と頂けて、白「ハ」、黒「ホ」、白「ヘ」、黒「イ」と白に先手を與へた型に當るので、從つて本圖八までは定石でないといふ論も立つのですが、其の八の手で前述の如く、「ち」までと廣く拓けば、黒二から白七迄の應接は、寧ろ黒の方が働いてるのです、是も亦本講座の舊套を避けて、進歩の上に無駄を省かんとする所以であります。





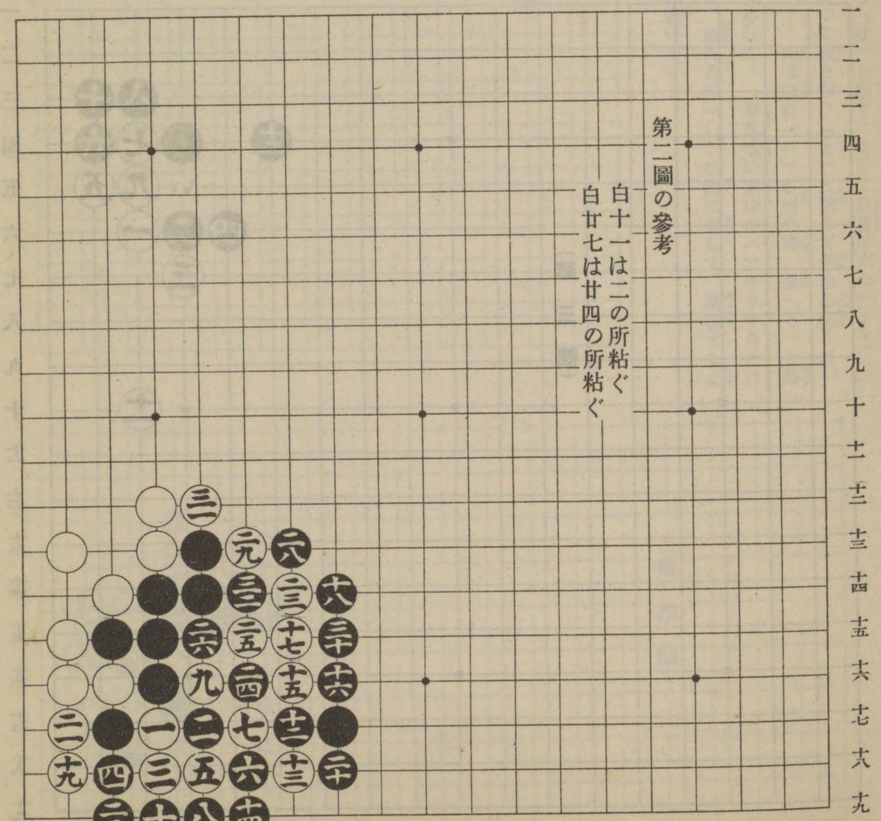
第二圖

一から十三までの定石中、白十一と粘いだ手で十二に押せば、黒は七の一子を十一の所へ打ち抜きますが、それも亦定石です、白を十一と粘がせて更に十二に押させたり、又十二に押させて十一に粘がせたりするのはいけません、白十三を他へ轉じると、黒から更に十三に絡ねまくられ、オメオメ「い」と粘がされることになつては、白の陣形は既製品の脊廣以上に、型が崩れてしまふのですが、それに反して黒は尚ほも「ろ」と粘いで、「は」の點の切りを防ぎつゝ針路を中央に向け、一鼓六足の歩調を採つて、ノンノンズイズイと大いに軍容を壯んにするのは、知れた事です、スルト白十三の肝要なことも、ハッキリ合點されませう、ソコで黒十四と拓いた時、白若し「に」に切れば、黒「ほ」、白「へ」、黒「と」、白「ち」と、斯ういふ運びになりますが、黒は十の一子位ゐは見棄てゝも、大事の先手を以つて他の要所に轉じるのが、どれほど利益だか解りません、が其れは要するに時機の問題です、又黒十四を殊更「り」の點に控へたら、彼の雁の亂れを見て伏兵の在ることを覺る筆法で、其處に一つの陷穽のあること



（第二圖）

に、氣づかなくてはなりません、ト云ふのは其の場合「に」と切れば、其の「に」を一とする、別圖の如く運ぶ手段によつて、白の十一目は無殘の大死を遂げるのです、併し本圖の如く黒の堂々十四と拓き得べき所を、ことさら「り」と控へて、敵の此の術中に投じ來るを待つやうな作略は、決して學ぶべき戰術ではないので、其れが皆、我技藝の向上を妨げる因となるのです。



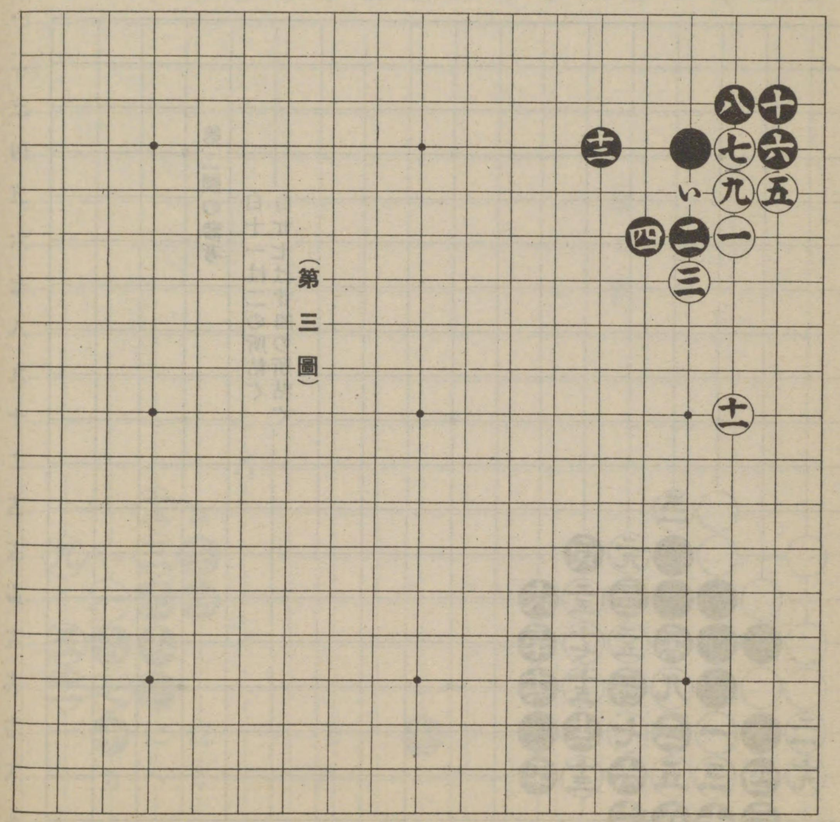
第二圖の參考
白十一は二の所粘ぐ
白廿七は廿四の所粘ぐ

第三圖

本圖は第二圖の如き定石を避けて、十二までの運びを採つたのです、デ此の手順中白十一で「い」の所へ出ますと、其の「い」を一とする、別圖のやうな變化となつて、黒はたとひ右上隅の四目は犧牲に供しても、其の外部に築いた鐵壁は、如何に最新科學の粋を凝らした武器を以てしても、到底爪も立たないのですが、其れに引き換へて白は日の眼も見ぬ、地下生活に安んじなくてはなりません、ト云ふわけで白は十一、黒は十二と、互ひに備へ備へとなつたのです。

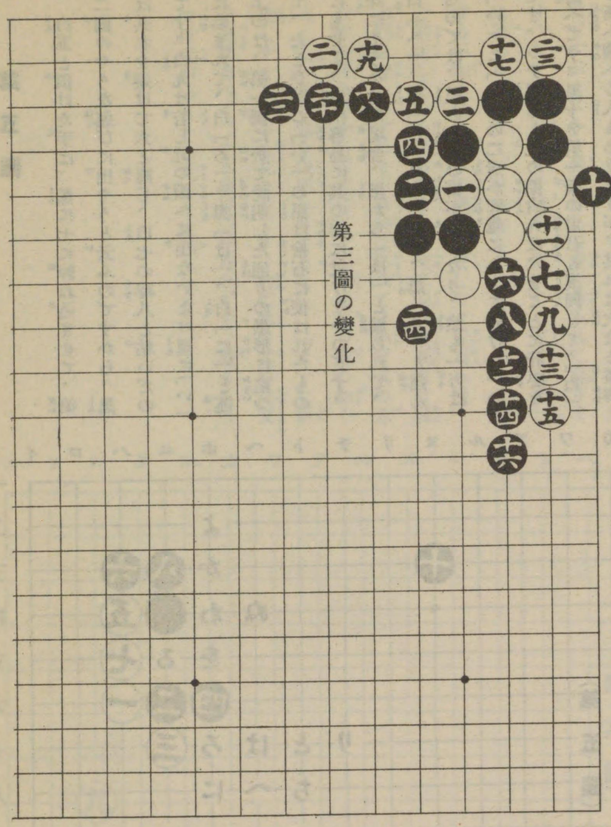
第四圖

圖中黒六は、第二圖のやうな運びを希望したのですが、白はそうなるのを面白くないとして七と粘いだのです、茲で黒直ぐ「い」と約へると、白に八の所へ覗かれて、黒「ろ」、白「は」の手段に出られるか、又は八の覗きを見て、「に」の方面から窺はれますから、斯う八と挟へたのです、白九は斯う押さなければ、必ず黒から九の所へ押されて、「ほ」と後手を引かなければ、ならないからです、黒十は白に其處を絆ねまくられると、

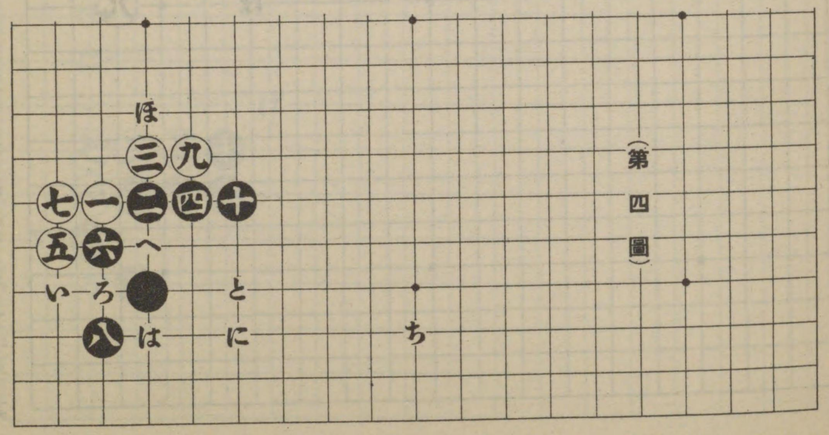


（第三圖）

黒二と四の鋭鋒は、一手で挫かれると同時に、白は中央に其の針路を開くことになりますから、黒の十と行びて自己の厚味を蓄へたのは、最も肝要の一着です、或は此の場合白から「い」と出られると、次に「ろ」に突つこまれる手のあることを懸念する人もありませうが、若しそう突つこまれたら「は」と粘ぎ、そして白更に六の一子を「へ」に取つて來たら、「と」と飛んで何の心配もないのです、尚ほ白の「い」と出た時、黒「ち」と拓いてあれば、一層前述の意味がハッキリするわけです、故に其の「い」の出に對して、應答する必要は無いのです。



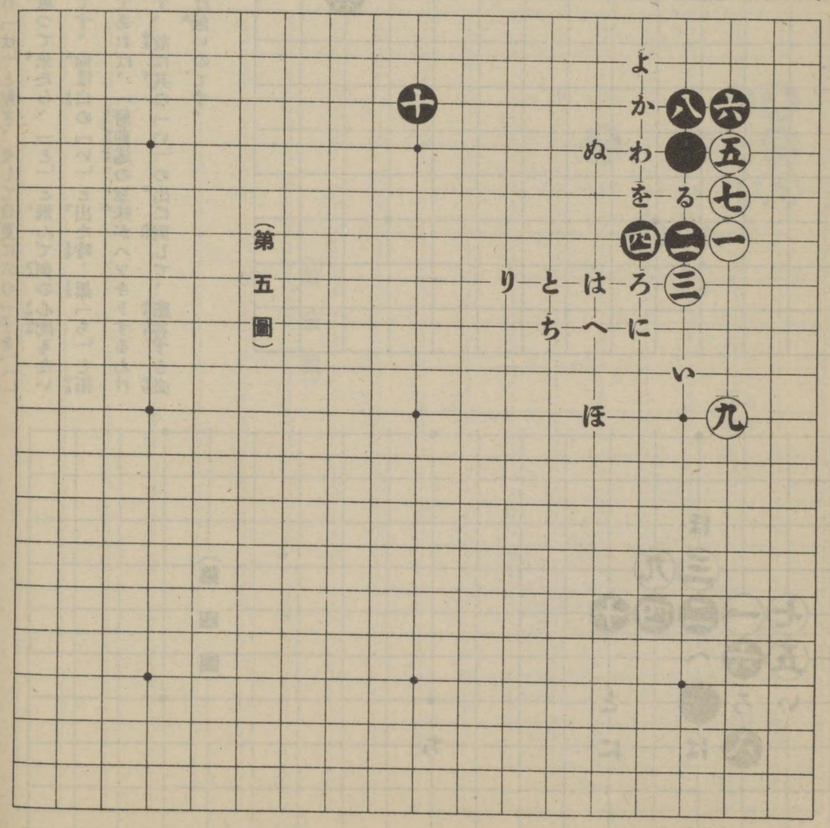
第三圖の變化



（第四圖）

第五圖

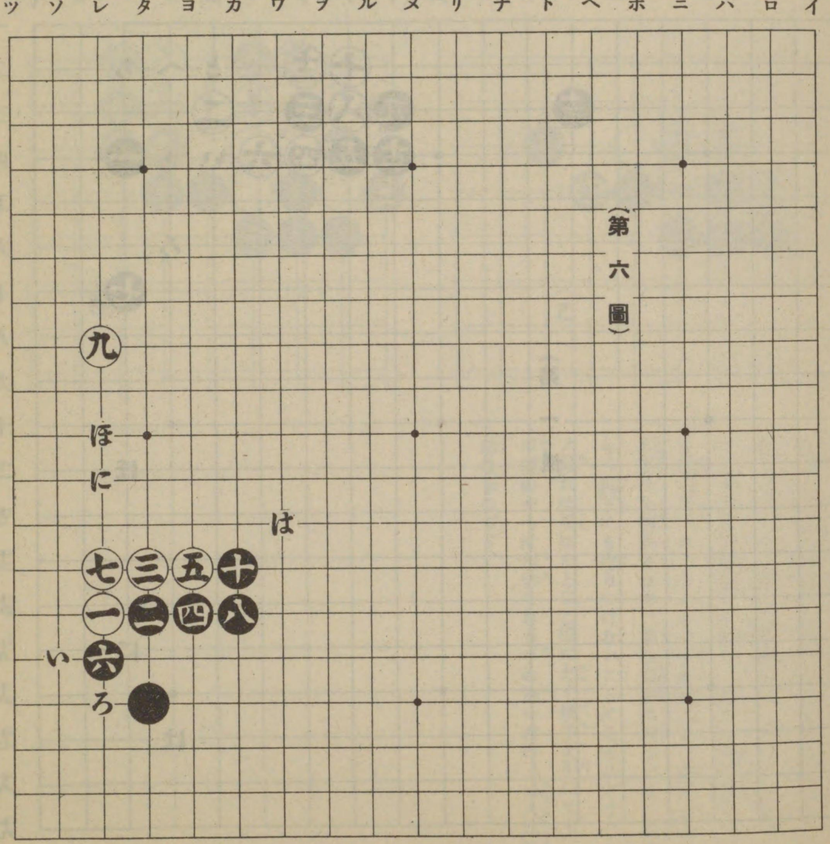
白五と頂けた手は、黒に七に綽ね込ませて、第二圖のやうな運びに出やうと云ふのですから、黒は其れを避けて六と應じ、白七の時八と粘いだのです、白九は若し此の備へに出ないと、黒に「い」に臨まれて、白「ろ」、黒「は」、白「に」と運ぶのは、第一圖に於て説明した通りの愚形に陷つて、たとひ其の「い」の黒は捨石に使はれたものにもせよ、白は容易に其の形に就けないのです、殊にそうなつた場合、黒から「ほ」と煽られて、白「へ」、黒「と」、白「ち」、黒「り」と運んだのでは、黒の上邊の搆が厚くなり、然も一方は「い」と「ほ」の二着が邪魔になつていけないのです、シテ見ると此の際白九は、まことに肝要な備へです、黒十を第一圖の定石と混同して、「ぬ」の所へ備へる人もありますが、其れは大なる誤解です、なぜなら此處でたとひ白が「る」の所へ出ても「を」と約へ、白次に「わ」と切らば、黒「ぬ」、白「か」、黒「よ」と征に懸けることができますから、其れに頓着なく、斯う大きく十と拓くべきです。



（第五圖）

第六圖

本圖に於て白五と押したのは、前數圖に現はれた型の如く、此の手で「い」、「ろ」、又は六等に運ぶのを面白くないと見た場合、斯う押すこともあります、白九では「は」と斜走して、八の頭邊を制し、大に中央に勢力を展べんとするのも好點ですが、スルト黒から九の邊に薄られて弱ります、なぜなら白ソコを捨てゝ置いて、更に「に」に詰められてはまづいからと、之れを「ほ」と受けるが如きは、餘りに狹きに失して、折角「は」と斜走したのも、あたかも九尺二間の裏長屋に冠木門を配したやうな不調和に陷つて、半ば其の意義が失はれるからです、ソコで白は先づ圖の如く九と拓いて、然る後成らうことなら、「は」に斜走しやうといふ注文なのです、故に黒は其の注文を裏切るべく、十と曲げつけたのです、斯うなつては黒がいくから定石とは謂へません。



（第六圖）

一間夾

第一例

本例に於ける、黒一に對して白二と懸つたのを「ヘの三」の所を明けて黒三と夾んだのが即一間夾です、夾の定石中最も嚴しく二に薄つた意味なのですが、其の計畫は次の手で「い」と頂け、そして二の白を內面に壓して最少限度に活かし、外部に自己の勢力を張らうといふのですから、白も捨てゝは置けません、もつとも白に別個の腹案が有つて、よし黒に「い」と頂けられて內部に活きて居ても、包圍した黒の厚味は、徐ろに消して行くといふ方針なら、ことさら手を拔いても妨げないのです、ソコが即ち定石の杓子定木で無い所以で、斯う三と夾まれたからとて、白が直ぐ二の活動に就かなくてはならないとは限らないのです。

其の次第は又卷を追つて說明しますが、玆には先づ白が手を拔いて、黒に「い」と頂けられる、悪い場合の經緯に就て、其の幾變化を圖解しませう。

先づ黒「い」の頂を**甲圖**のやうに、白一と應じて、九迄と後手を引くと、カネの手になつた黒の外壁は、左右何れにも其の威力を蓄へて、容易に寄りつけぬやうになるのです、そして白たとひ、「イ」と出て、黒「ロ」と約へた時「ハ」と切つても、黒「ニ」、白「ホ」と交換して黒は「ヘ」に應じて戰ひます、其所は白「ト」と出れば「チ」と引く所です、黒又「ヘ」の手で「リ」と受けても十分戰へるのです、故に白此の際先手を得る手段を採つて、征の關係を考慮しつつ、**乙圖**のやうに一と絡ね込む手段に出れば、黒八までの運びとなつて、白は望みどほり先手を取るには取れますが、そうすると後に、**丙圖**の如く黒に一と切られて、十二までの運びに依り、前に一間に夾んである黒から、七、十一の二子を連ねて、俗に云ふ三本下りを利かされて、其の堅壁に向つては、白はもう風下にも寄りつけないことになるのです、シテ見れば黒はたとひ乙圖の如く後手を引いても、甲圖のやうに出切られる手の無いだけ、一入厚壯になるのです。

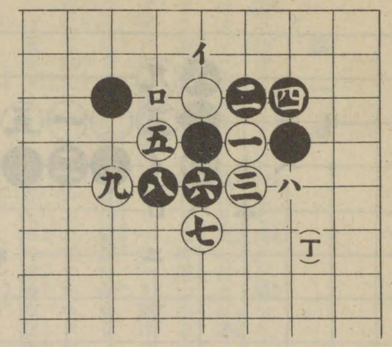
（第一例）

（甲）

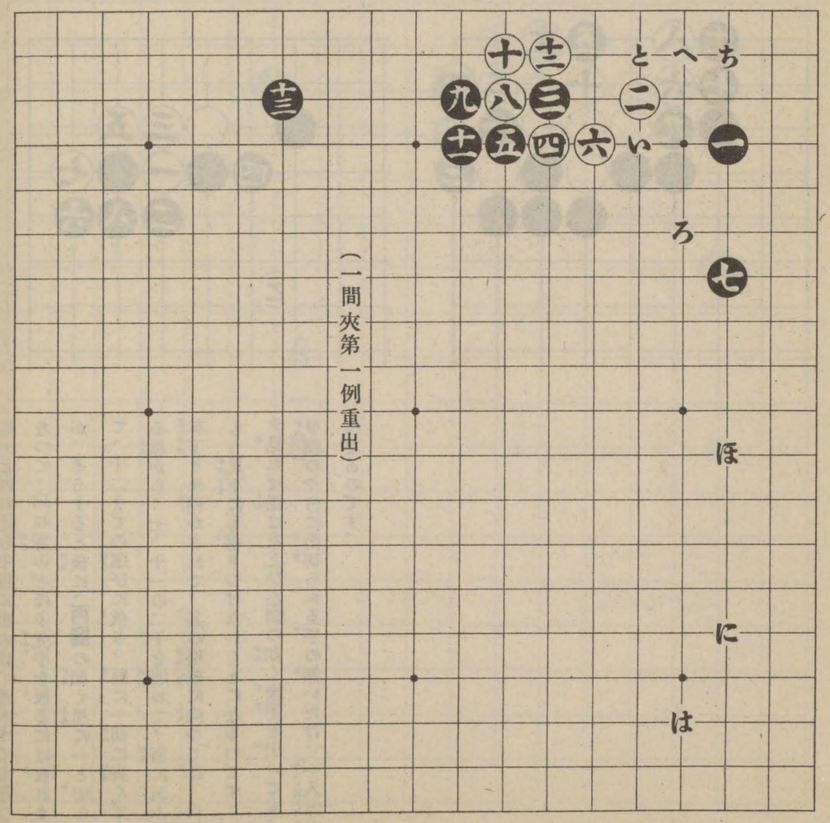
（乙）

（丙）

又乙圖の條下に述べた、征の關係と云ふのは、左に掲ぐる丁圖の如く白五までの運びによつて、



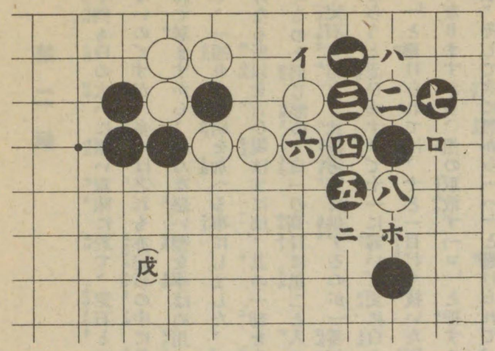
八と六に續く黒の一子を、斯う九までの如く征に取れる場合に限り、一と綽ねこむ手もあるのですが、若しも其れが征に懸からぬ時は、言ふまでもなく其の手段に出るのはいけません、だが中には黒の立場から見て、ナニ其の一目を征に懸けられたら、「イ」と綽ねて白六に打ち抜いた時、「ロ」とわたつて居ればいゝと、斯う考へて居る人もありませうが、其れがいけないのです、其の時白に「ハ」と約へられたとして、黒白互ひの手數からいつても、打ち抜かれた一目を加算して黒の方が



（一間夾第一例重出）

一手多くを費やしながら、効果は其れに伴はないのです、第一白は其の時「ハ」に約へるかどうかも解りません、然かもヨリ大きい所があれば、他に轉じるに違ひないのです。

本圖の如く四と頂けて、十三までの應接を重ねた結果は、黒の方が一手多くを費やしては居ますが、其の左翼を七まで展べ、其の右翼を十三まで展べて、まことに輕快な理想的の陣形を、描かれて居るのに反し、白は敵と敵との中間に介在して、甚だ鈍重の姿となり、終に消極的の活路に就いたといふまでゝ、黒の優先的能率を減殺することはできないのです、然かも黒十三は必ずしも此處に拓くとは限らず他に善き着點があれば、そちらの方へ轉ずるかも知れません、是等の經緯はあながち、白の一間に夾まれた時のみの利害觀ではなく地を換へて黒が一間に夾まれた場合にも、ソックリ應用すべき心得、故に本圖の白四、六と頂引いて十二までと運んだのを以て、定石と謂ふのはいけませんから、之れに從ふことを避けられたいのです。



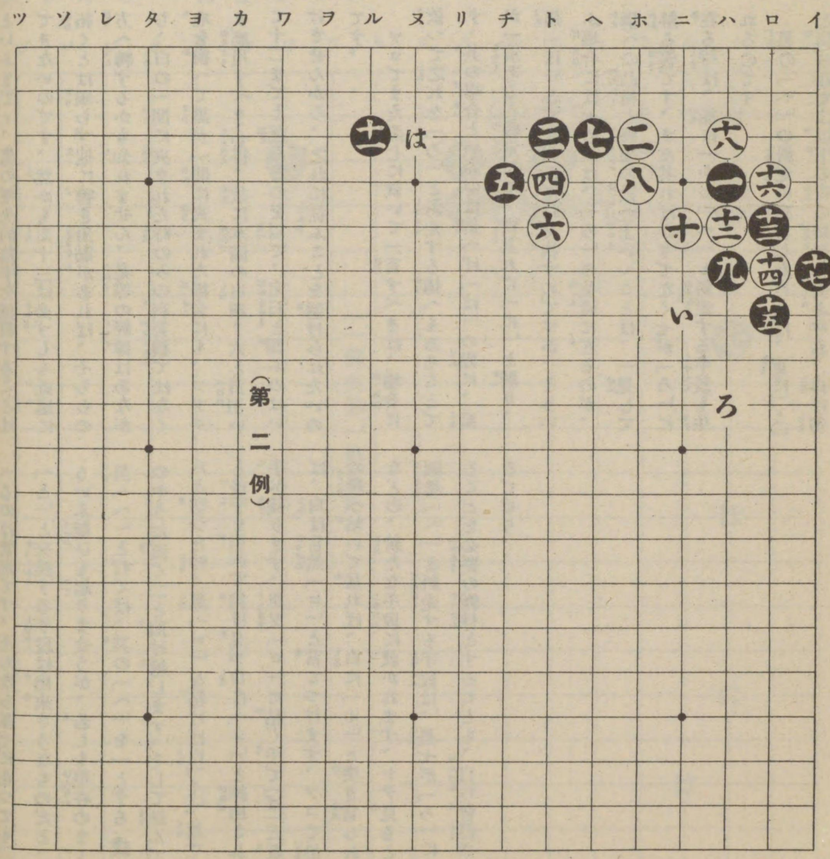
ソコでまた黒七に就いて一言すべきは、場合に依つて之れを「ろ」と斜走する搆へもあることです、其の場合といふのは例へば「は」の點に、黒「ほ」とても夾んだ時を指すのですが、そういふ場合には七の黒は、「ろ」の位置に在るのが、搆への品格と將來の發展上いゝことは、一見して解る筈です、まだ其ればかりでなく七が「ろ」に在る時は、後に一から「へ」と斜走する手段も生れるのです。

黒の「へ」の斜走に應答しなければ、更に「と」と出られて二以下の白の眼形を失ふゆゑ、白は勿論之れを「と」と約へて、「ち」の頂を後日に蓄へるのは當然です、そんなら黒七に在つても「へ」「と」と交換する手段は出來さうなものだと、斯ういふ疑ひも起りませうが、若しも現在のまゝで黒「へ」と打てば、其の「へ」を一とする戊圖のやうに直ぐ二と頂け越します、そして進んで白八と切つた時、黒「ロ」と粘げば白「イ」、黒「ハ」と後手を引いて尚ほ且つ白に「ニ」と綽出される手が殘ります、黒又「ロ」に粘ぐ手で「ほ」と取れば、白は當然「ロ」と當てつけます、ソコて黒二の所へ粘いて居れば、白に「ホ」と突き當られるなどの、新たな手段に就かれます、シテ見ると本圖黒「へ」と斜走する手段は、黒七が「ろ」に在ることを必要の條件とすることも、自ら會得されるでせう。

第二例

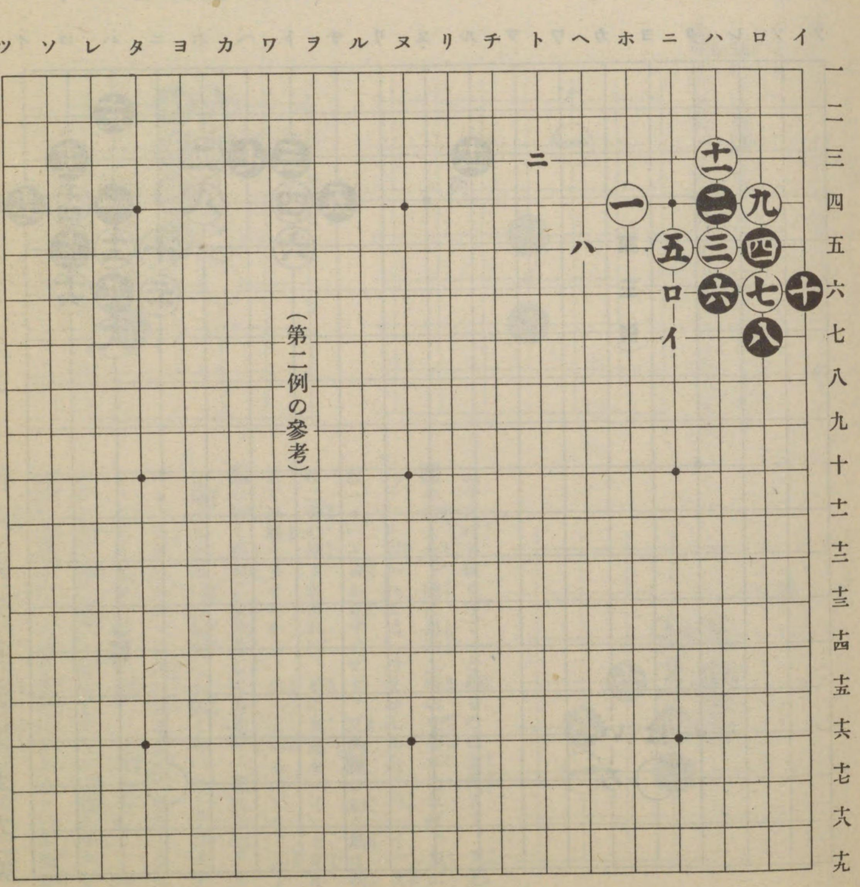
本例も白の大いに悪い意味に於て、定石とは言へないのですが、多くは之れも亦定石の中に數へられて居ますから、こんな悪い型を學ばぬ用心として、一通りの説明を加へる事にしました、で其の非なる所以を言ひ現はすには、其の一部を分割したいのと同じ形の、白一の高目に黒二と入つた時の定石を借りて比較考査に供するのが一番便宜であらうと思ひます。で十一に尋いで更に白から「イ」と懸けられては、十と一目打ち抜いた所が薄くなりますから、黒の取敢ず「ロ」と押すのは當然、そして次に黒から「ハ」と懸けられて、白「ニ」と應じるのは白の位みが低くなりますから白「ハ」と應じて其れを防ぎます。

ソコで之れを本圖に照合して見ますと、手順こそ違へ黒「ロ」と押すべき手で「ニ」、即ち本圖の三に詰めた形ちになつて居るのです、スルト其三の詰に對しては、直ちに「い」と懸けて「ろ」と應じさせ、然る後「は」と打つて三の石を夾撃すべきものを、わざわざ四に頂けて十一まで逃んだ理合に當り、白は一隅に凝つて、黒の將に上邊と右邊とに搏へんとする、便宜の棋勢とは比較



（第二例）

にならないのです、是れも亦白黒逆の立場に在つても、同じ意味で學ぶべき型ではありません。

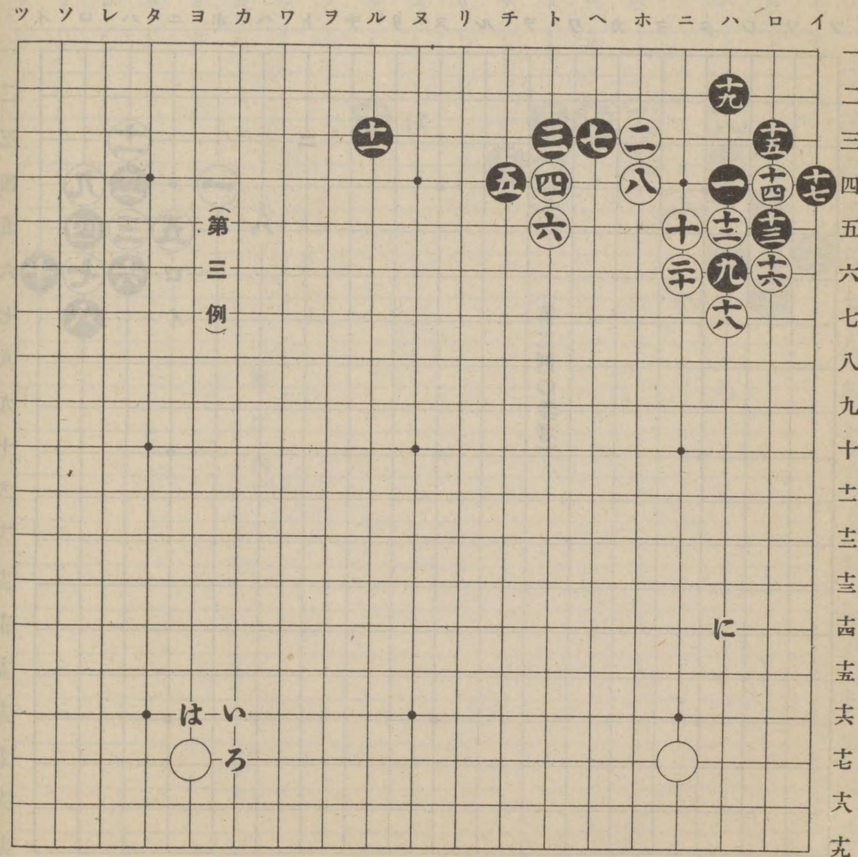


（第二例の參考）

第三例

本例は第二例の白十四から變化して、前には十六に切つたものを、今度は斯う十四の方から切つたのですが、此の型に於て九の一子を十八と征にかけて、二十に打ち抜ける場合には、白の棋運は外壁を厚壯にして、ひどく働いて居るのです、併し斯ういふと、もうチヤンと十八で征に懸けてあるものを、別に二十に打ち抜いて、ことさら後手を引くにも及ばないではないかと、こんな疑義が起るかも知れませんが、此處で打ち抜かないと、黒に左下隅の方面へ、征の當りを打たれて、次に白の二十の所へ打ち抜いた時、其の當りと連續した意味の手を、もう一着打たれますから、其れは言ふまでもなく白の不利なのです。

例へば其の時左下隅に一着の白が在つたとしませうか、黒先づ其處へ征の當りを「い」と打ちます、ソコで白二十に打ち抜き、黒に更に「ろ」と押されるか「は」と押されるかして、白の一着は半ば其の能動力を擊肘されるのですし、又其處に白の一着が無くて、全く明き隅になつて居たとすれば、征の當りを利用して、黒に思ふまゝの二着を占められますから、どうしても征に掛けたまゝで

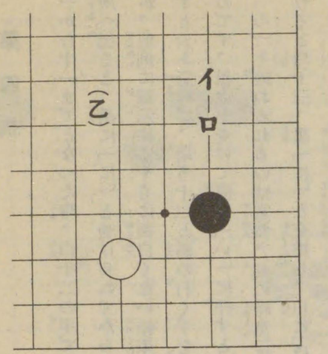


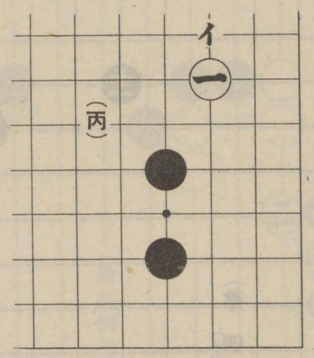
（第三例）

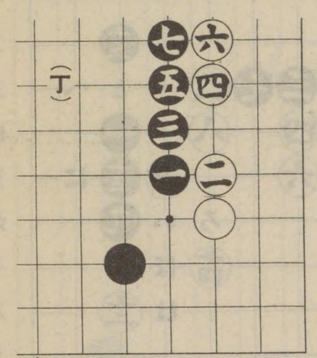
捨てゝ置くのは良くないのです。

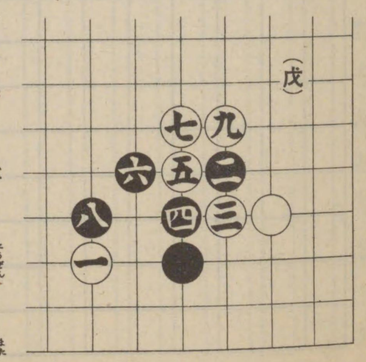
けれども、其れは周圍の形勢局面の緩急如何に拘はらず、是が非でも打ち抜いて居なくては、ならないと云ふのではありません、例へば右下隅に在る白から、「に」と大ケイマに締るのを急ぐやうな場合には、無論二十の打ち抜きをやめて此の締りに就き、右邊に大模様を搆へるべく努力するのです。

茲にまた**甲圖**の如く、右下隅に黒の一着がある時は、黒に「イ」と締られてはいけませんから二十に打ち抜く手で一と懸るのは當然です、又**乙圖**の如く右下隅に黒白二着の交換があれば、黒に「イ」と拓かれてはいけませんから、白「イ」又は「ロ」と夾み返すのです、又**丙圖**の如く黒に既に二着の締りがあれば、更に其處を「イ」と拓かれては堪りませんから、白一と詰るのです、又**丁圖**の如く白黒二着交換してある時、黒から七までと運ばれては白が如何にも低くなつてしまひますから、白から先づ一の所へ尖まなくてはなりません、又そう尖むか**戊圖**の如く一と夾み返して、九までと運ぶ型に從ひ、何れも十八の尖端に有する威力を活用して、右邊の經營に就かうといふ場合は、必ずしも二十の打ち抜を必要としないのです。







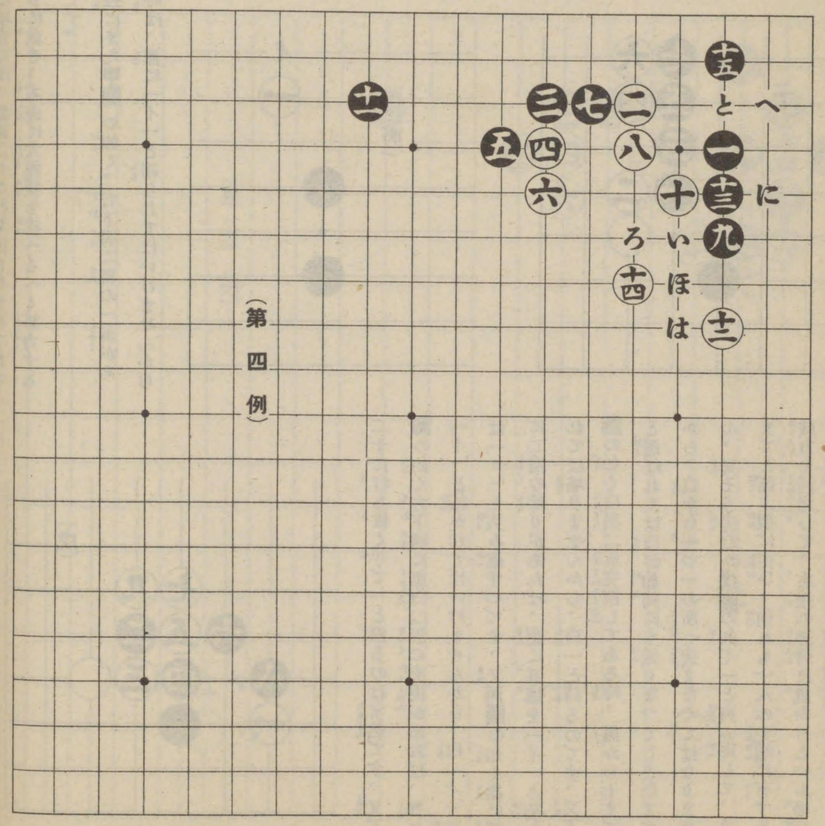


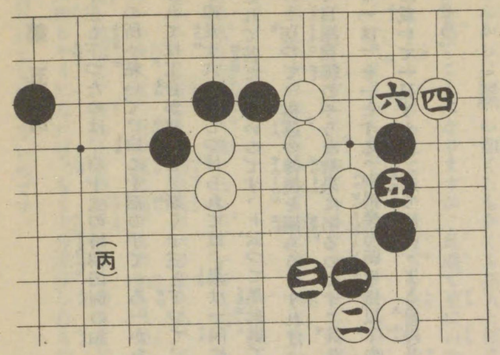
第四例

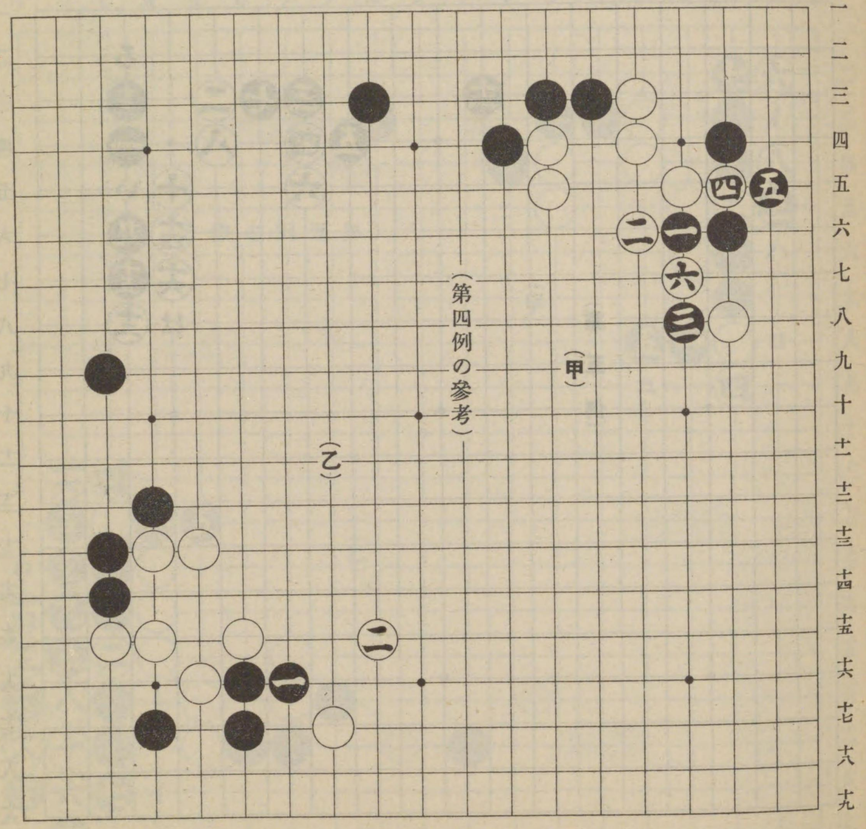
黒一から十一までとなつた時、白十二の手で十三の所へ出ると、黒に「に」と受けられてからの運びが、前例に圖示するやうに面白くない結果を齎らすと云ふ意味で、斯う十二と黒の行く手を遮つたのです、黒之を受けて直ぐ「い」に押すと、白に「ろ」と絡ねられるのは當然、其の時黒「は」に頂けると白十三、黒「に」と交換し、白に「ほ」と切られますから、其れは丁度其「い」を一とする、參考圖（甲）の如き運びとなつて黒の惡いのは申すまでも有りません、ト云つて白の「ろ」と絡た時、「ほ」に曲れば「ほ」を一とする（乙）の如く、白に二と追はれて、謂ふ所の愚形に陷るのです、ソコが即ち上手下手の岐れる所ですから特に注意しなくてはなりません。

そんなら黒最初「い」と押す手で、「ほ」に尖んではどうかと云ひますと、そう尖めば白に「は」と押されて、黒十四の所へ行ひた時、白は「へ」と置いて黒の根據を衝きます、ソコで黒それを「と」と受けると、忽ち白に十三に出られていけませんから、「と」と受ける手で十三に結げば、白「と」と連絡して、參考圖（丙）の如く味よく治まるのに反し、丙圖の三を先頭とする黒には、まだ眼形が備らないで、前途に幾多の不安が横はらうといふものです、白十二の時黒十三と斯う結いだのも、ツマリ以上の經緯に基くのです。

白十四は旣に十一に拓かれた方面の黒が堅くなつた結果、更に黒から「は」に頂けられたり、或は「ろ」に覗かれたりして、兩斷されては堪りませんから、斯う十四と懸けて、十五と應じさせたのですが、十五は即ち白に其處へ走られてはまづいからです。

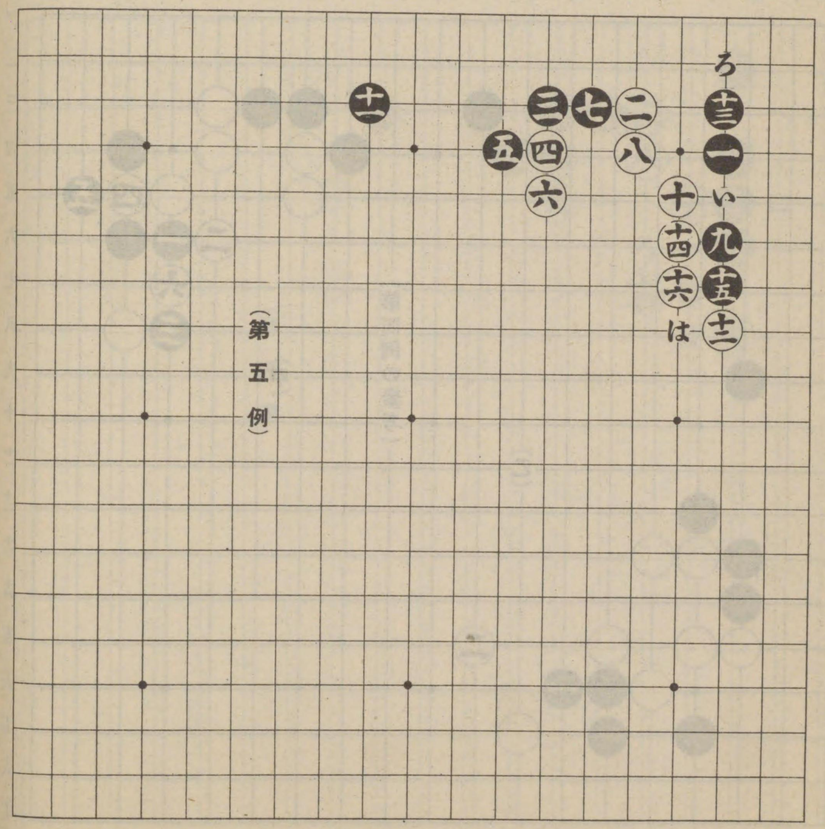






第五例

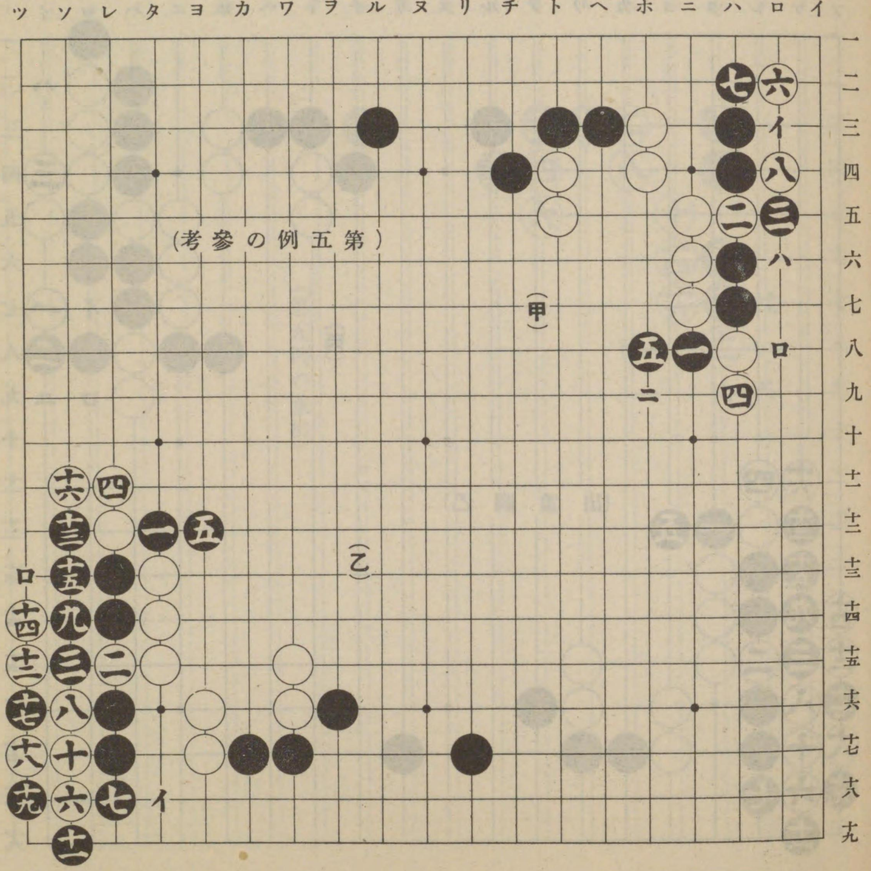
黒十三と下つたのは、白十二の時第四例の如く「い」の所へ粘いで、白に十四の手で「ろ」から攻められては工合が悪いと、斯う十三と下つて、白に十四及十六と押しつけられては、黒は一隅に閉鎖されて甚だわるいのです、ト云つて黒此處で「は」と切つて、棋運の轉換を圖らうとすれば、却つて自繩自縛のやうな結果に陷るのです、其れは其の「は」を一とする、別掲參考圖甲圖以下の變化に就いて一見すれば　直ちにハ、アと會得されるでせう。



（第五例）

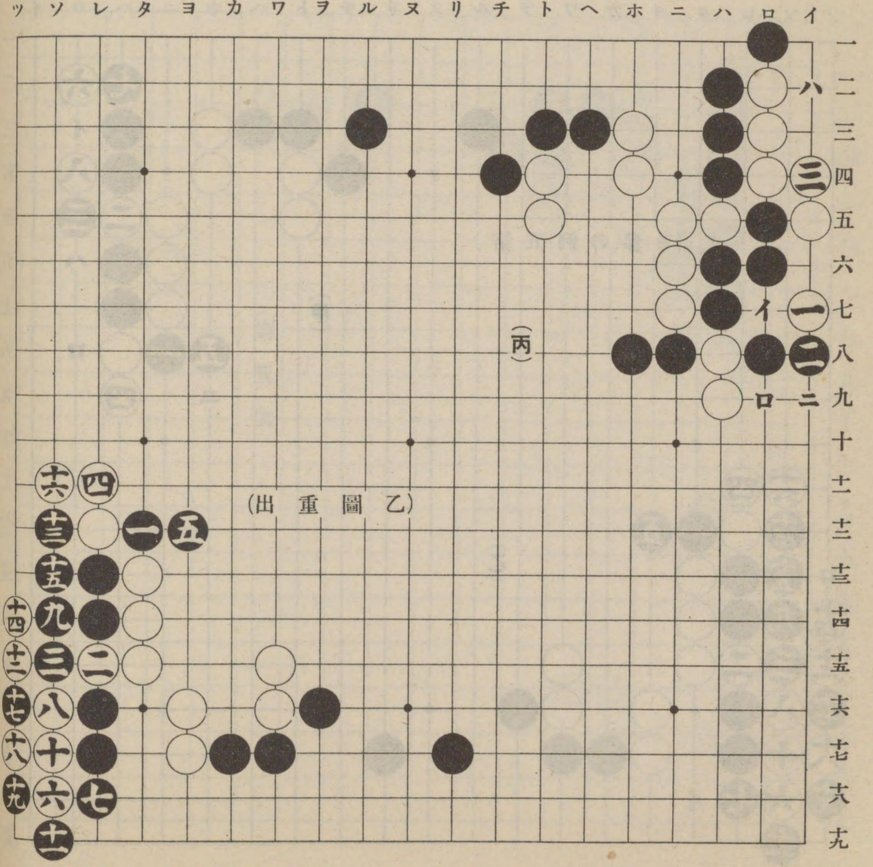
甲圖の如く一から八までと運んだ手順中、白六の置に黒「イ」と應じれば白に「ロ」と下られて「ハ」に粘げば、七に引かれて全滅ですから、勿論黒は七と約へるの一手、白八の切りに、黒「イ」と出れば「ロ」と切られて、「ハの六、七」二子を捕獲されますが、そんなみじめなことになつては、一と五の二子は所謂陸へ上つた河童同然、もう何の働きもなくなるのです、但し黒五は「ニ」に懸けられて、一の一子を捕獲されるのを妨いだ手でです、さうなると、白八の時、黒「イ」と出る手は有りませんから、**乙圖**の如くともかくも黒九と粘ぎ、白十と粘ぐことになりますが、此處で更に白から「イ」と尖みつけられては、六以下の白との攻め合が、一手足りなくなりますから、十一と綽ねます、ソコで白十二と綽ねてから、十八までの手順を重ね、黒十九と打ち込んで劫にする外はないのです。

尙ほ此の手順中、黒十三の手で十四に約へると白に「ロ」と當られて到底黒がいけません、だが玆に一つ白には、次の頁に掲げるが如き、黒の劫手段を裏切る、取つときの好手があるのです、其れが解るやうになれば、もう大分進歩したものと、自負されても妨げないのです。

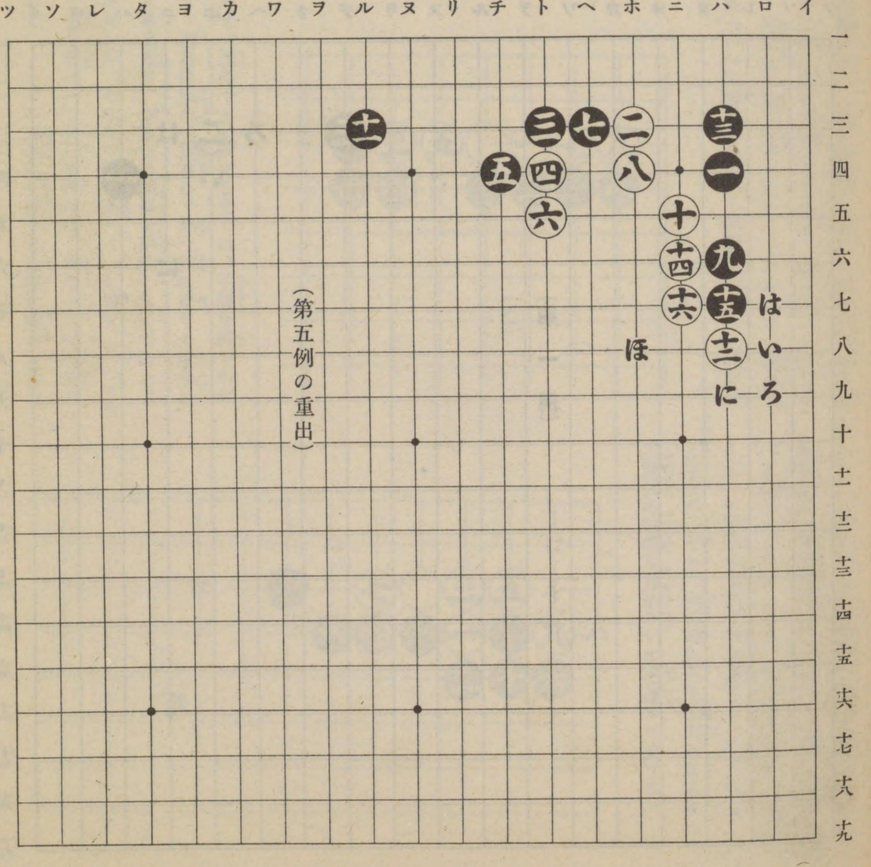


（第五例參考）

前項に述べた白の好手と云ふのは、此處に重出した**乙圖**の十四から變化する**丙圖**の手段で、即ち白一の時黒三に打ち込むと、白「イ」と突つこみます、黒又「イ」に結げば白は「ロ」と約へます、其處で黒三なら白に二と當てられていけないのです、又斯う三まで と運んだ場合、黒「ハ」と綽れれば、白「ロ」黒「イ」白「ニ」で、黒は全滅するのです。以上は諸君の實力養成の爲めにする逆教授で、特に講述中に餘地を設けて、其の發見に努められんことを、望む意味に外ならぬのです。



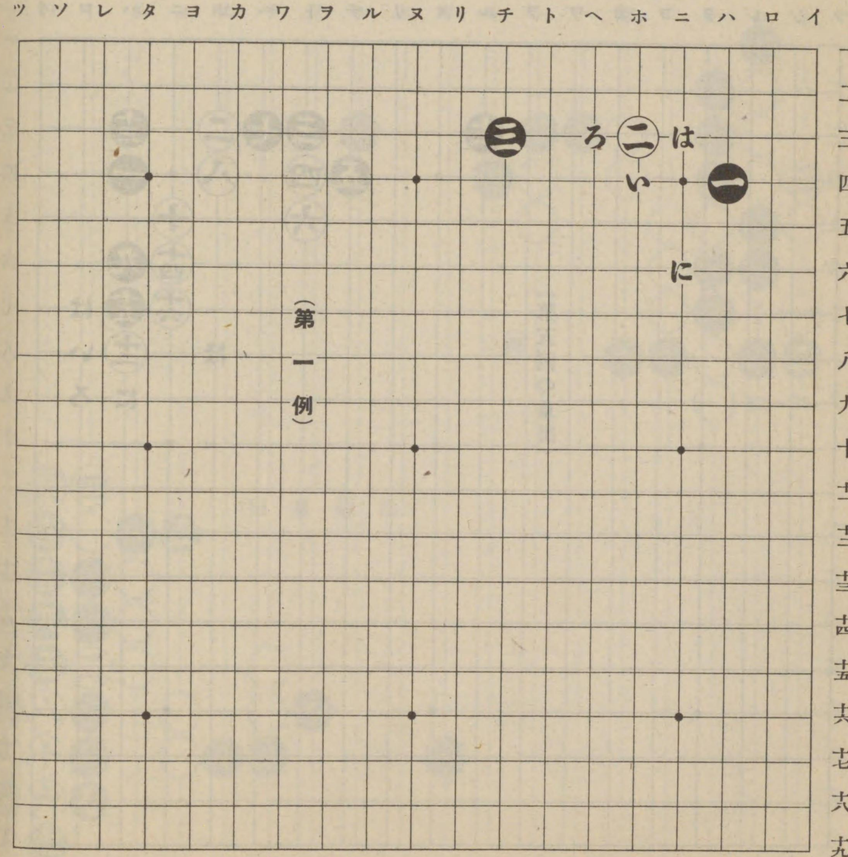
さりとて黒は本圖「ニの八」と切る手で「い」と綽ね、白「ろ」、黒「は」、白「に」と應接したのでは、黒は唯だ一隅に僅かの地域を、固定するに過ぎませんが、其れと反對に白の包圍線は、ますます堅固になるばかりなのです、なほ中には白十四の手で「ほ」などに應じる人も見受けますが、其れは無論圖の如く、十四、十六と息も吐かせず、押しつけるに越したことは有りません。



二間夾

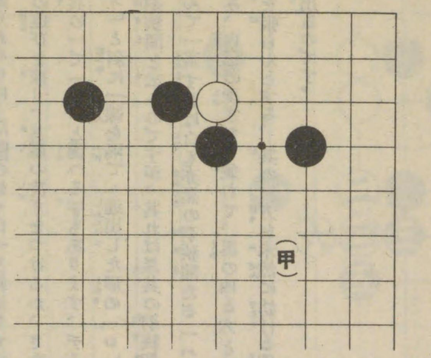
第一例

二間夾は前の一間夾よりも一間遠く、二の白を二線隔てゝ夾んだのですから、取りも直さず二間夾なのです、そして其の黒三はやはり一間夾と同様、次に「い」に頂けて白を内部に固定せしめ、外勢を張らうといふのが、主なる目的なのですが一つには又そう頂ける手で「は」と尖みつけて、白「い」の時「に」と攻めつけやうといふ、腹案もあるのです、デ白若し此の夾に頓着なく手を抜いて、黒先づ「い」と頂けたものとしませうか、スルト白更に之にも應答しなければ、黒に「ろ」と抱へられて、甲圖のやうな形ともなりますが、之れはもう白に取つては、此の上もない打撃なのです、ト云ふのは試みに此の五子の配置から二の白と、「ろ」と抱へた黒の二目とを取除いて見ますと、ハツキリ會得されますが、其れは丁度黒のそう一から「い」と締つて、更に三と拓いた、立派の構へに臨んで、白二と頂けて、「ろ」と抱へられた理合に當りますから、其交換の白の惡いのは



（第一例）

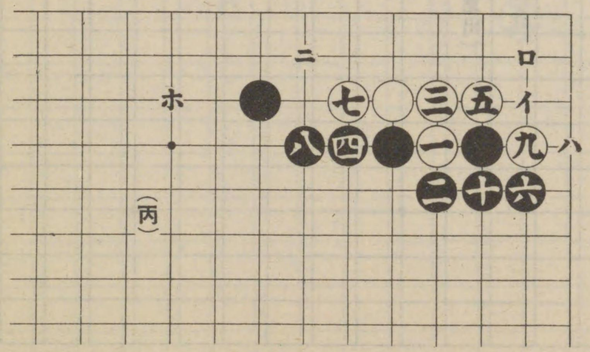
言ふまでもありません、斯ういふ風に一手々々の精神を解剖して、其れを研究するのが進歩の捷徑ですから、總て此の手は何の爲めに斯う打つのかといふ、目的を呑み込むのが最も肝要です。



さて白は「い」と頂けられた場合、手を抜くと如上の經緯になりますから、とにかく二の白を活きる工夫を講じ乙圖の如く一から九までと運んで後手の活に就きますと、其の白を包圍した黒の厚味は鐵筋コンクリート其の物の如くになるのです、併し白の立物に於て其れが絶對に不可と云ふ事はないので、相手の棋風を見て、ことさら斯う敵の作戰に投じ、然る後徐ろに黒の、外壁の厚味を消す工夫に出る場合もある事を、附け加へて置ます。

白又此の隅で先手を取らうといふのは、最初黒に「い」と頂けられた時、丙圖の如く一と絡ね込んで、黒に十と粘がせるまでの、手順を採るのです、之れは前の一間夾の、第一例に於ても說明してある通り、無論征の關係を斟酌しなくてはなりませんが、そうなつた時黒「イ」と當て黒「ハ」と打ち抜けば、白に「ニ」と尖まれて、「ホ」の方面に手段する餘地を蓄へられます、又黒「イ」と切る手で「ニ」に尖めば、白に

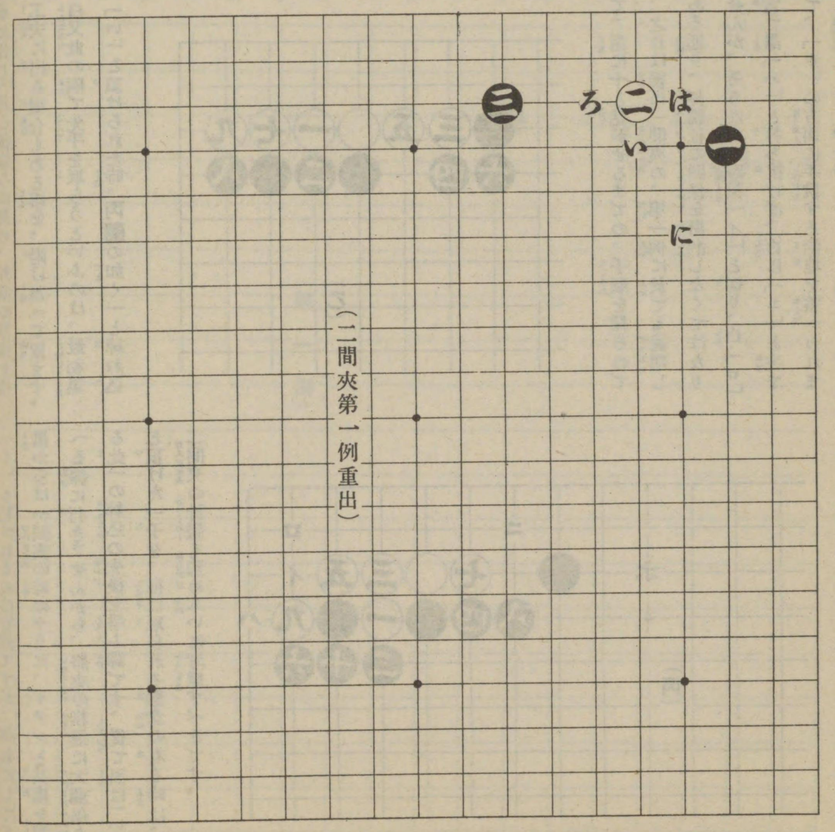
「イ」と粘がれるのは當然てすが、何れにしても黒からは一間夾の時のやうに、キチンと其處を調へる譯に行きませんから、將來の棋運に大關係ある此一の絡込の先後を爭ふ譯です、從て黒は「い」と頂けた一子を、征に取られる懸念の有る時は、二間夾の計畫も豫め大いに考慮すべきです。



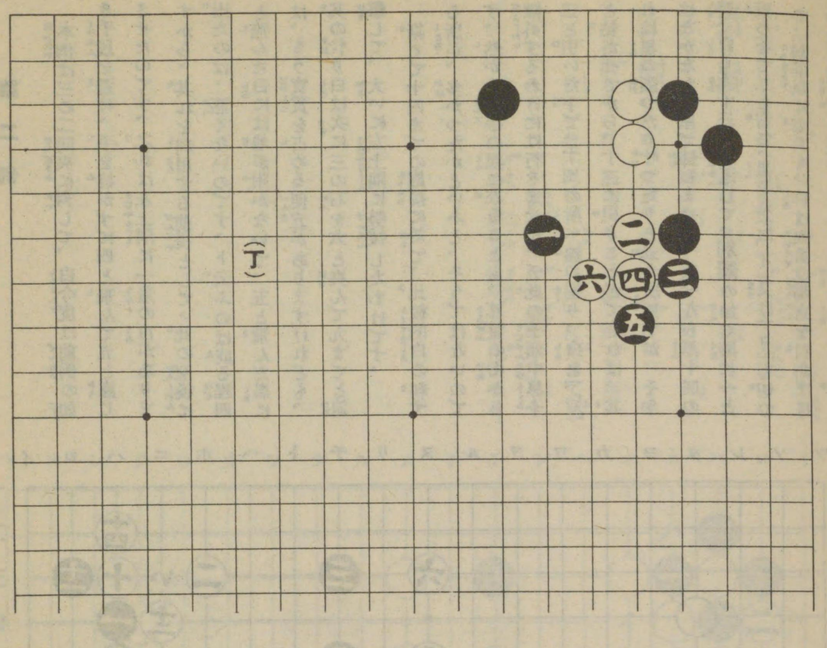
又黒三と夾んだ從の目的に出て、「い」の頂けて「は」と尖みつけると、白「い」と行び黒「に」と煽るといふ、丁圖のやうな形となつて、黒は左右に領土を開拓する便宜も有り、ソコで白尙ほ之れに應答しなければ、黒は一と遠火で炙る手段を採ります、デ遂に白六と曲るやうなことになつては、之れは素より白がまづいのです、從つて黒に一と煽られぬ中に、戊圖の如く白一と斜走して六までの運びを採り、其處の凌ぎをつけるか、さなくば其の一で「イ」と備へる手もあります、デそう「イ」と斜に一線を隔てゝ進出した形の「ロ」點を羽狹間と云ふのですが、其れは黒其の羽狹間に臨んで一着すれば白も亦黒の羽狹間たる「ハ」に臨み、自己の凌ぎをも兼ねて、黒の四と六とに兩翼を張らんとする、其の一方を未然に妨げる備へに出るのです。

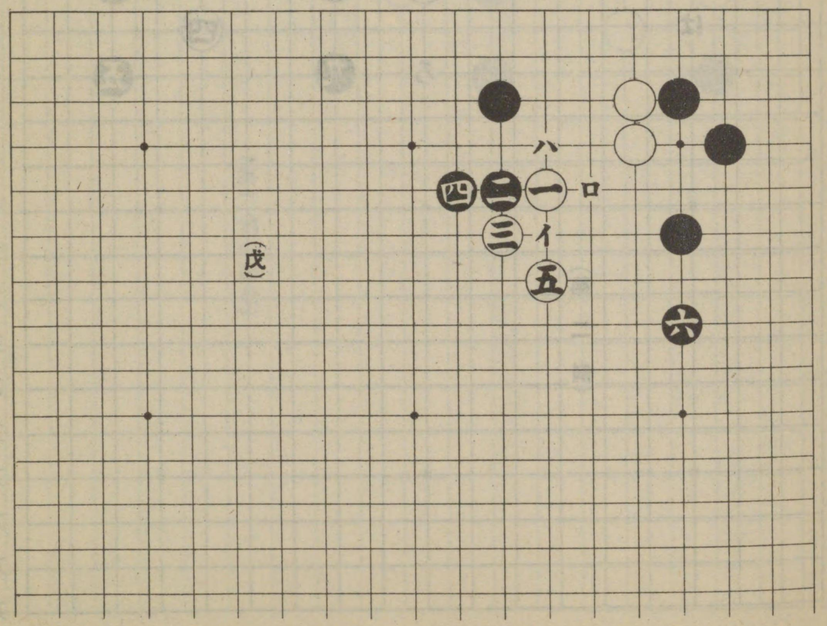
イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ヌ ル ヲ ワ カ ヨ タ レ ソ ツ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九



（二間夾第一例重出）

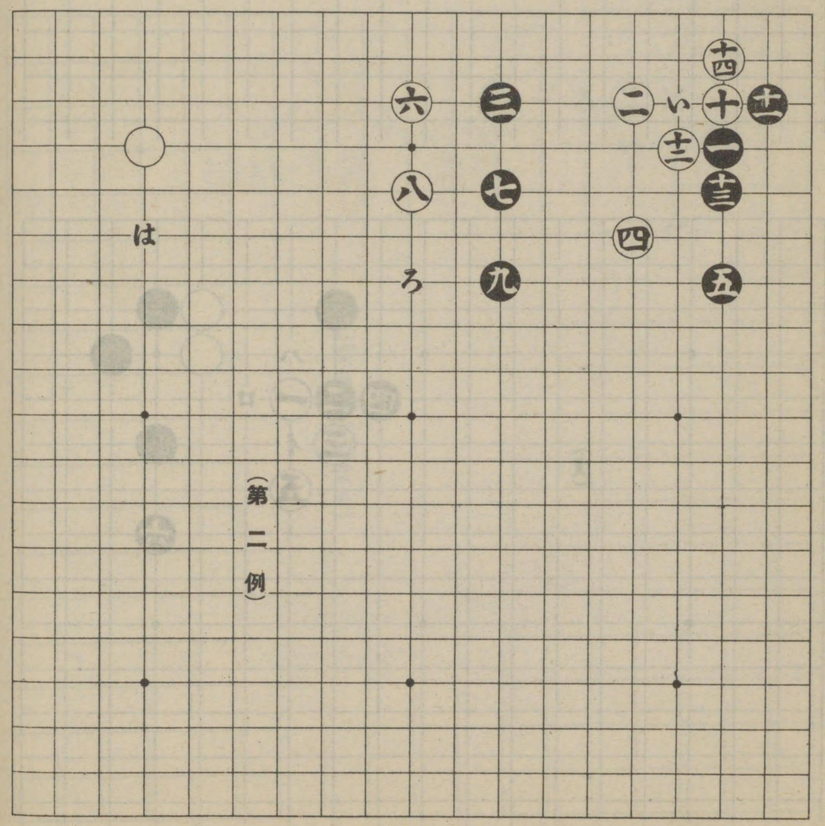




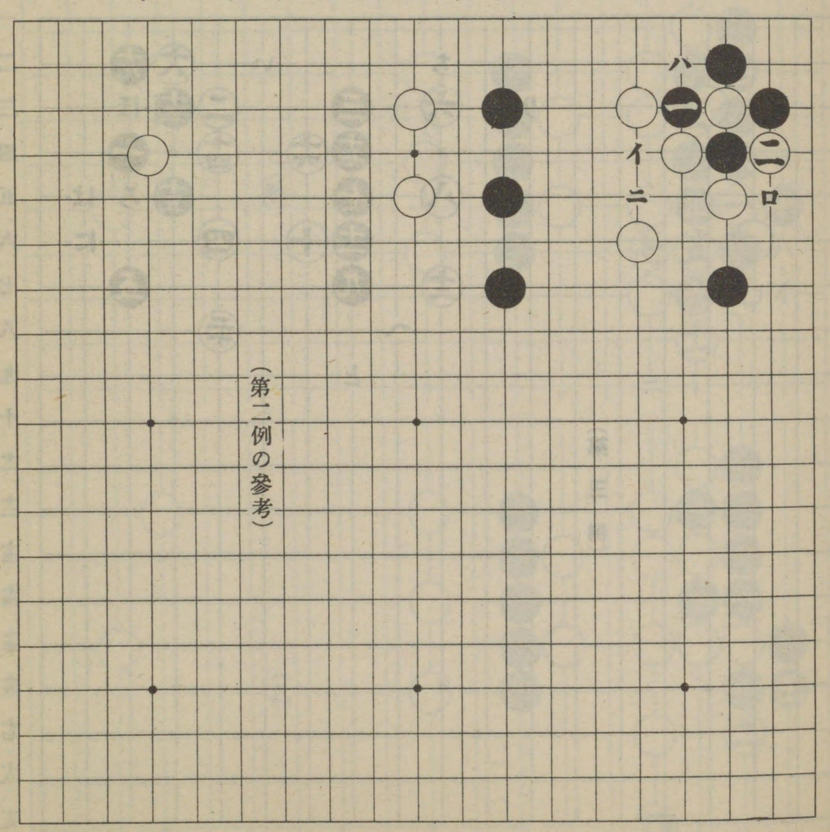
第二例

本例は三の二間夾に對して、白今度は前例の如き手段を避け、手を抜かずに四と飛んで五と應じさせたのです、之れは左上隅に一着の白がありますから、其れを利用する前提として、此の交換に出たのは、惡くないのです、ト云ふのは成る程四と飛んだ白には地が附かないで、五と飛んだ黒には、もう實質を占める便宜がありますけれども、其の代り白は次に三の石を六と夾んで九まてと追撃して、大いに左上隅に勢援したわけです。

斯くて十四までの應接に於て、比較的白の利する所が、多かつたかといふと、そうではないのです、然かも先手の黒に在ることも、算盤の桁から除外するわけには行きません、デ此の手順中黒十三と引いた手で、十四の所へ綽ね捲り、白を「い」と粘がせてから、十三に引くことができれば、其れは黒の願つたり叶つたりと云ふ所ですが、そうはなかなか問屋で卸しません、なぜなら黒十四の時、白も亦十三に綽返して、**別圖**の如く黒に一と取らせて二と當て、黒それに「イ」又は「ロ」と切つて、劫爭ひに來ても、白は大抵の劫立を利かずに「ハ」と打抜いてしまひます、故に黒は二と當てられた時、取り跡の十へ粘いて居なくてはなりません、スルト白に「ニ」と懸け粘がれて、白の形は良くなりますが、黒の五の一子は全く本隊との連絡を遮斷されて、之れア黒がトテも振はなくなるのです、ソコて本圖の如く十三と引いて、白を十四と治らせたのですが、白の十と頂けて、十四までと活きるのは、あながちそう急ぐ所でも無いのです、白十では「ろ」か又は「は」に飛んで居てもいゝのです、デハ試みに一歩を進めて、白十で「ろ」と飛んだ場合の變化を討究して見ませう。



（第二例）



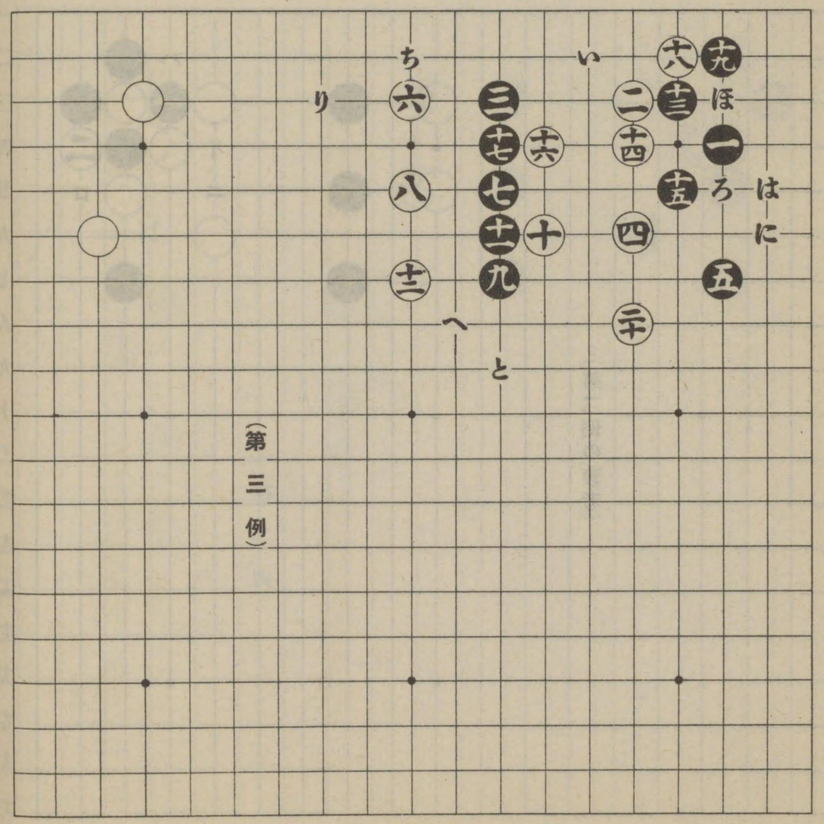
（第二例の參考）

第三例

本例はたとへば左上隅に、白の大ゲイマ締りのやうな、理想的の締りや、又は其れに類似した備へのあつた場合、白からは其の締りとの釣合上、十の手で十二の所へ飛んで居たいのですが、白の二及び四を掩護する意味で、圖の如く十、十一と應接し、そして十二と飛んだのです。

デ既に白に十二まで、と摸様づけられた以上、黒はどうしても二と四の白を攻めつけなければ、權衡が取れませんから、先づ十三と尖みつけて、白の根據を奪つたのです、ソコで白は十四と行びて十九までの應接を重ね、二十と飛んで自衛に就いたのですが、此の手順中黒十五と覗いたのは、若し此の手を打たなければ、白に「ろ」と頂けられて、黒「は」、白十五となつて、黒其の時五の方面の働きに資すべく「に」と引けば、白にさらに「ほ」と頂けられて、己れの領域がいよいよ薄くなるからです。

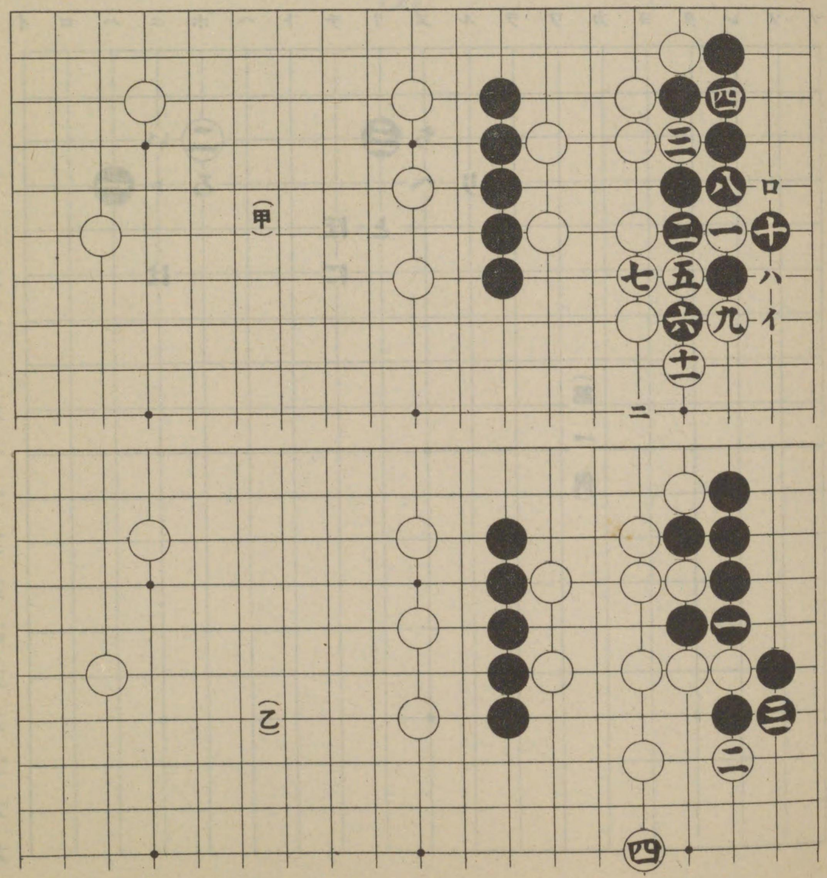
白十八、十九の交換なしに直ぐ二十に飛ぶと、黒十八に下つて「い」のわたりを見つゝ、白からの五の方面の手段を消します、次に別掲甲圖の如く白一と頂け越し、十一までの運びを取つて、



（第三例）

黒を一隅に壓縮しやうといふ肚なのです此の應接に於て黒六と當て、白に七と粘がせる手順を省いて、直ぐ八に粘いて居ると、白に忽ち九に當てられて、先手で其處の出はなを挫かれることも、忘れてはなりません、が何れにしても斯うなつては黒は惡くなり、白は善くなるのです。

又最初白一と頂け越した時、黒十に絆ねると、白に二の所へ粘がれて、黒「イ」と懸け粘げば、白八に切り、黒「ロ」となつて、白に本圖十五の一子を取られ、白が非常に強くなります、ゆゑに黒「イ」に懸粘ぐ手で八に粘げば、其の八を一とする乙圖四までのやうな形となつて、黒の位は無下に低くなるのです。又本圖に戻つて白二十には以上の如き經緯と、尚「へ」と尖む手が有りますから、黒十三では今一着「と」と飛んで、十三の尖みつけと、一方は「ち」のわたりを見つゝ、「り」に打込むべきです。

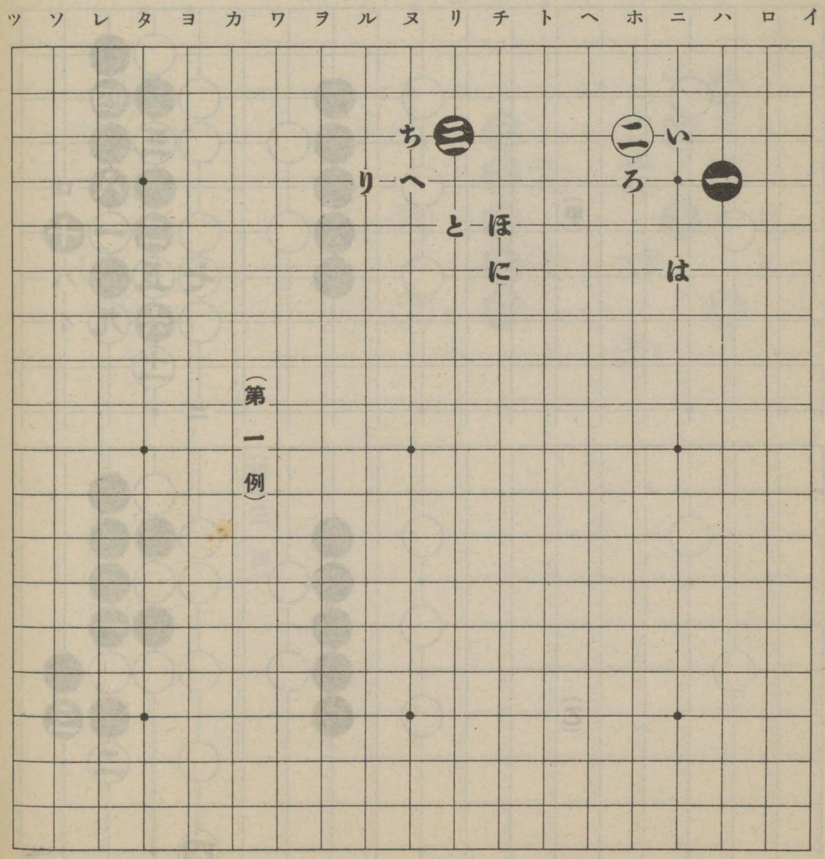


手所

三間夾

第一例

白二から三線を隔てゝ三と夾んだのが即ち三間夾で、そう夾んだ黒の目的は、次に「い」と尖みつけ、白「ろ」、黒「は」と、斯う白をいじめ付けやうといふのです、假りにそうなつたものとして、白は今度更に「に」の邊から、攻撃されると黒の「は」と「に」との中間「へ」の六」邊を縫つて、外部に進出するのが不便なるのみならず、スルト黒の「は」の方面にば地ができ、又「に」の方面にも模様づけられることになつて、二と「ろ」の二子の動作に甚だ窮屈を感じますから、黒に「に」と打たれない中に、何とか其の防ぎの方法を講じなければなりません、ソコで白其の目的で「ほ」と備へれば、黒は次に「へ」の所へ懸けられる手を妨いで、「へ」と尖みます、白又「ほ」の手で「と」と備へれば、黒は次に「ち」と頂けられる手を防いで、「り」と斜走しやうといふのです、尚ほ三間夾に就いては、次々に其の類例を掲げて説明します。



（第一例）

大衆圍碁講座

手所

講師七段　雁金準一

講師七段　高部道平

手所

手所と云へば、廣い意味では打始めから打終りまで、着々皆手所で有りますが、本講座に於て特に手所の一欄を設けましたのは、手筋とか、俗手とか、本手とか、妙手とか、筋違ひとか云ふ、局面の隨所に現はれる肝要の手段に就いて其の順逆利害を說き明す爲めと、一面には石の下と云つて、一旦敵に取らせて置いて、直ぐまた其の敵を切つて取る手や、長生と云つて持とは似て非な、眼形なくして活きて居る手や、三劫と云つて同時に三ケ所に劫の起つた時の措置や、嵌め手や詰物の類例、其の外凡ゆる祕傳を本欄に盛込み、稀に遭遇する其の手段の對策に資せんとするのです。

謂ふ所の嵌め手を用ゆる者の不德のみを鳴らして、之れに陷るものゝ油斷を責めぬは、素より片手落でもあり、また弱者に同情する所以でもありませんから、斯ういふ場合の此の一着が、嵌め手であると云ふことをも、其れを防ぐ意味で本欄に例示しやうと思ひます。

詰物には單なる死活のみでなく、其の經緯に於て頗る微妙の變化を宿すものがあります、然かもそして其の一々は概ね布石にも定石にも、又實戰道理としては存在するも、實際には有り得まじと思はるゝほどに、興味本位の技巧を弄したものさへありますが、成るべく多く其の類例を呑み込んで居れば、どれほど實戰の他足になるか知れません、故に其の手品に等しいやうな、作爲的詰物を避けて、成るべく實際に應用し得るものを收むることにしました。

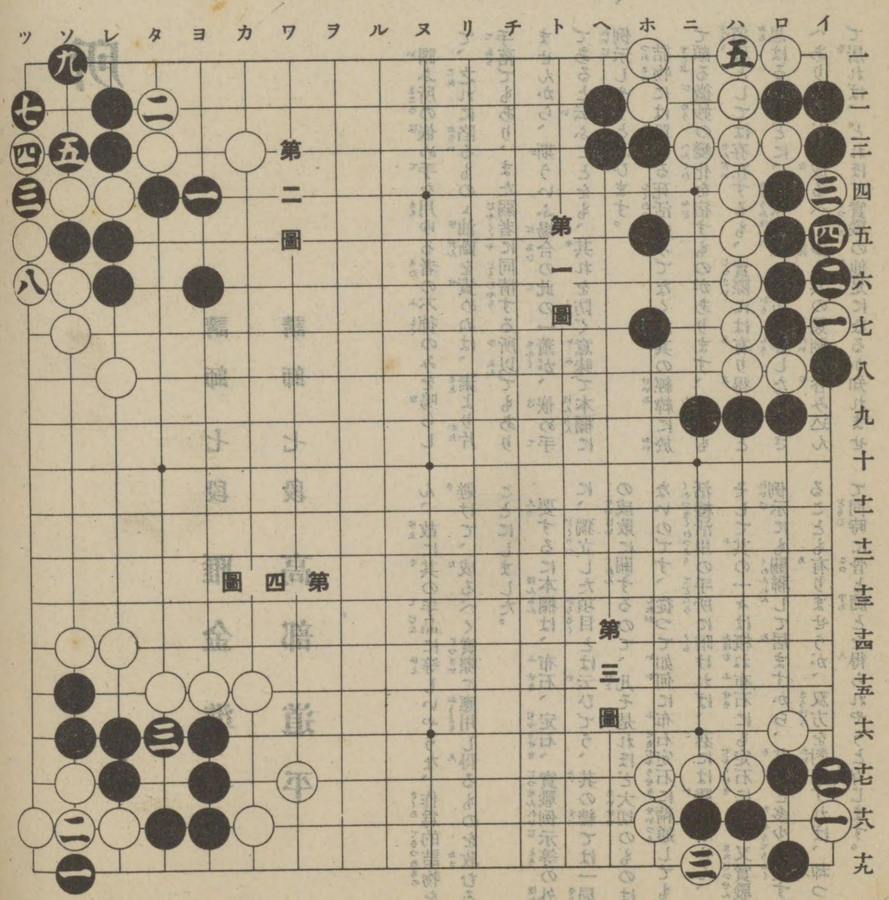
要するに本欄は、布石、定石、實戰例示等の外に、獨立した項目とは云ひでう、其の總ては一局の成敗に關するので、凡そ是れほど大切のものはないのです、從つて如何に布石定石に精通しても活機活用の手所に暗ければ、碁には勝てません、

◇第一圖　白一から四迄と打缺いて、斯う五と粘ぐのが肝要です、ソコで黒一の所へ粘げれば、白に「イの一」と押されて、所謂追落に遭ふのです。

◇第二圖　黒一で「ヨの三」なら白「タの五」、黒一、白「タの六」で黒三目を取られます、故に黒二から九までと運んで活きたのですが、それは斯う三と打込んで四と取らせ、五と當てる要領が解つて居るからです、尙ほ白四で五に出れば、黒「ソの二」、白四、黒七で、白四目はやはり第一圖と同じ、追落に遭ふのです。

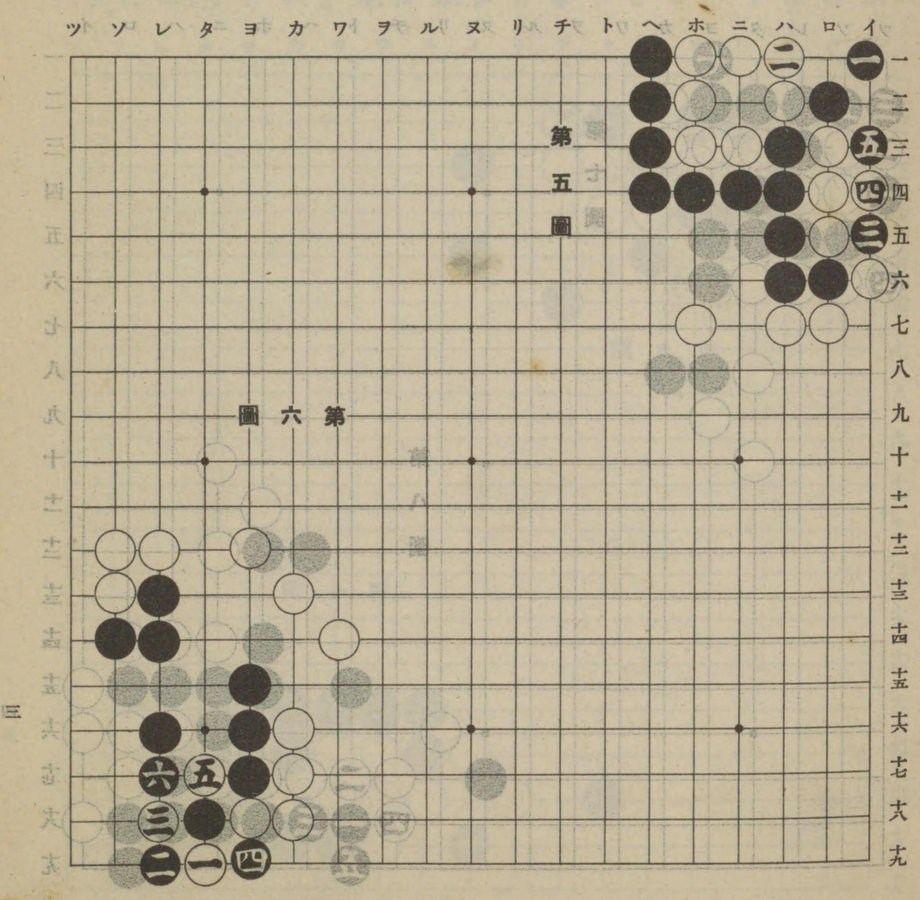
◇第三圖　白三で黒は取られましたが、白一を二に綽れれば、黒一に受けて劫になるのです。

◇第四圖　黒一から三まで、白四目は取られて黒は活きましたが、黒一で直ぐ三に眼を持てば、白に一と活きられて、反對に黒が助らないのです又黒一で「レの十九」なら、白に一に受けられて劫になりますが、白に劫立の豐富な場合黒「タの十九」、白三と交換し、黒劫を取ても結局黒の劫立が盡きて、白に二に粘がれ、次に黒「ツの十五」白「ツの十六」と運ぶと、所謂花六の點となつて黒が全滅です。



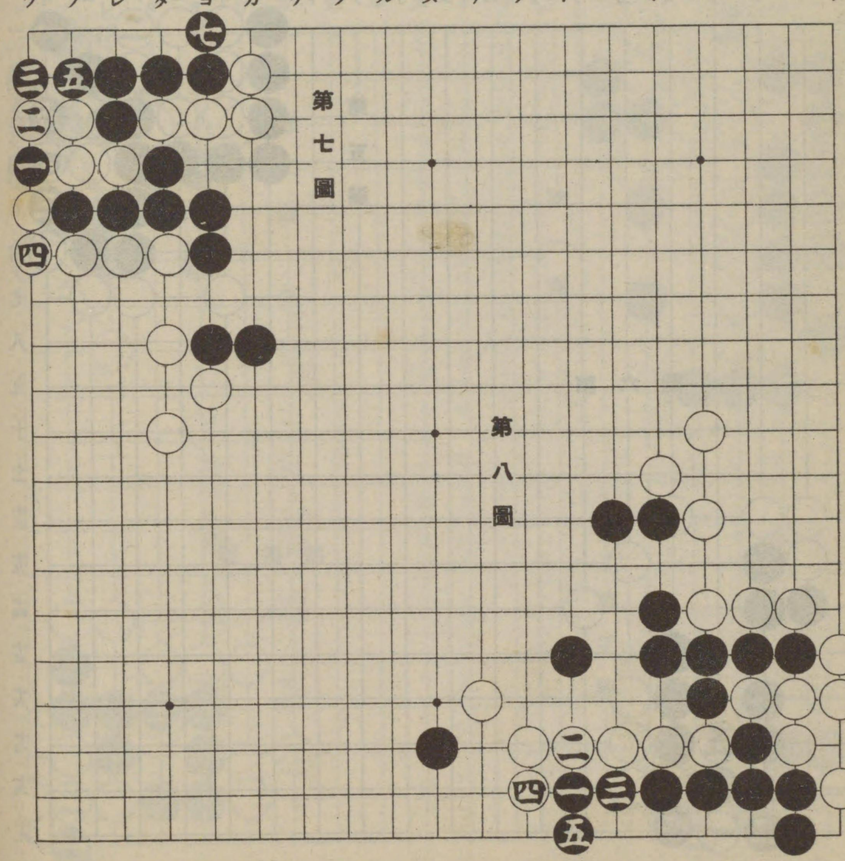
◇第五圖　黒一から五までとなつて、劫が起りましたが、此の手順中黒三を五に綽れれば、白に三に受けられて手になりませんが、ト云つて黒一で「イの二」なら白「ロの一」、黒また「ロの一」なら白「イの二」で、黒二目は其のまゝ立往立となるのです、白の二は惡い手です、其れは三に粘いて黒二に打ち込んだら、同じ劫でもそちらで劫をするのです、圖の如く五の方で劫にしては、若し其の劫に負けて四目打抜かれた場合、上の白七目まで刷毛序に持つて行かれますが、上で劫にすれば劫に負けても、七目だけの犧牲ですむのです。

◇第六圖　白一は黒に三に受けさせて、白「ツの十四」、「黒ツの十五」、白「ツの十三」と運びソコで黒「ソの十五」なら白二、黒「ソの十九」白四、黒「ソの十八」と、更に黒地が二目減りますから、黒「ソの十五」で「ソの十七」と兼粘するのです、其の意味で黒は斯う二と約へて、白四なら黒「ソの十八」と應じ、尋いで白「ツの十四」黒「ツの十五」、白「ツの十三」となつても、其方に用心する必要はないのです、故に白は斯う劫に出たのです、デ黒も白一の註文通り三に受けては、一局の勝敗に關する場合、劫に勝つ成算があれば、二から六迄と運ぶのも妨げありません。



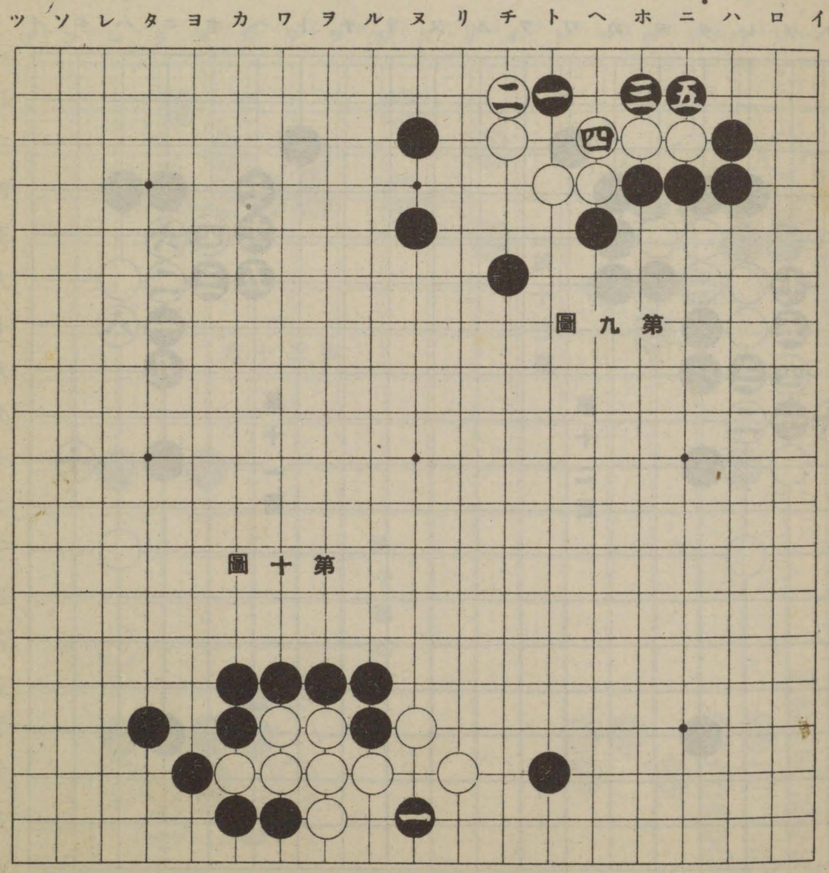
◇第七圖　黒一から七まてと運び、白「ソの一」なら黒「レの一」、白「レの一」なら、黒「ソの一」て、完全に活きましたが、黒万一三の手を五に換へれば、白三で黒は助らないのです、又白四て五に出ると黒「ソの一」て劫になるのです、尤も白のそう劫爭ひに出ると否とは、其の時の局勢と劫立の數とに依つて、決せられるのですが、要は黒一白二と交換して三と運ぶのが、黒に取つては肝腎の手順なのです。

◇第八圖　一から五までとなつて活きた黒の手順を、黒若し不用意にも、黒三、白一、黒「ヘの十九」と云ふ順序に出れば、白に「ニの十九」と點されて、黒の亡びに就くことは餘りに明白ですが圖の如く黒最初一と飛ぶのが要領なのです、然かも黒一の時白二を三に出れば、黒二、白四、黒五白「トの十六」、黒「ヘの十六」、白「チの十六」黒「ヘの十九」となり、又其の運びの黒二の時、白五なれば、黒四、白「リの十八」、黒「リの十七となり、其の他一二手順の變化はありますが、何れにしてもそうなつては、白が悪いのです。



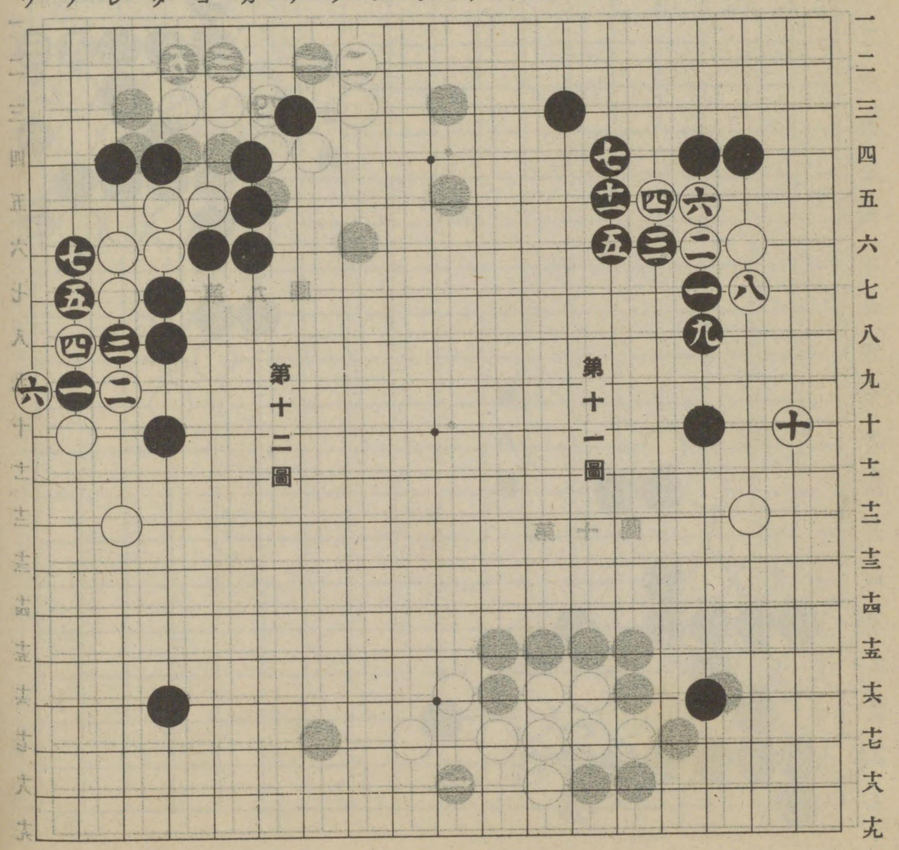
◇第九圖　圖中黒一と三とはいゝ筋です、今黒一の時白「ヘの二」なら黒は二に引きますし、又白四で五に出れば、黒四、白「ハの二」、黒「ロの二」、白「ホの一」、黒「ヘの二」、白「ロの一」黒「ハの一」白「ニの一」、黒「ヘの一」となり又白「ホの一」て「ヘの二」と打込めば、黒「ヘの一」、白「トの三」、黒「ヘの二」、白「ニの一」、黒「ロの一」となり、要するに白四を五と換つて、黒に四に切られては、白が悪いのです。

◇第十圖　黒一に對して白「リの十八」なら、尋いで黒「ヌの十五」の時、白「リの十六」と屈し黒に「トの十五」と飛ばれて、辛うじて活ですが白若し「リの十六」を「リの十五」と頑張れば、黒に「ヌの十七」と切られて、大破綻に生じるのは當然、また黒一に白「ヌの十七」と應じれば、黒「チの十六」、白「ヌの十五」黒「ヌの十四」と運び、ソコで白「リの十五」なら、黒に「チの十三」と懸けられて弱るのです、さりとて黒「チの十六」の時、白「リの十五」なら、黒「チの十四」、白「リの十四」、黒「リの十三」、白「ヌの十三」黒「チの十三」、白「ヌの十四」、黒「ヌの十二」白「ヲの十三」、黒「ルの十二」となり、そして白「ヲの十四」、黒「ワの十二」で、白は行詰り。



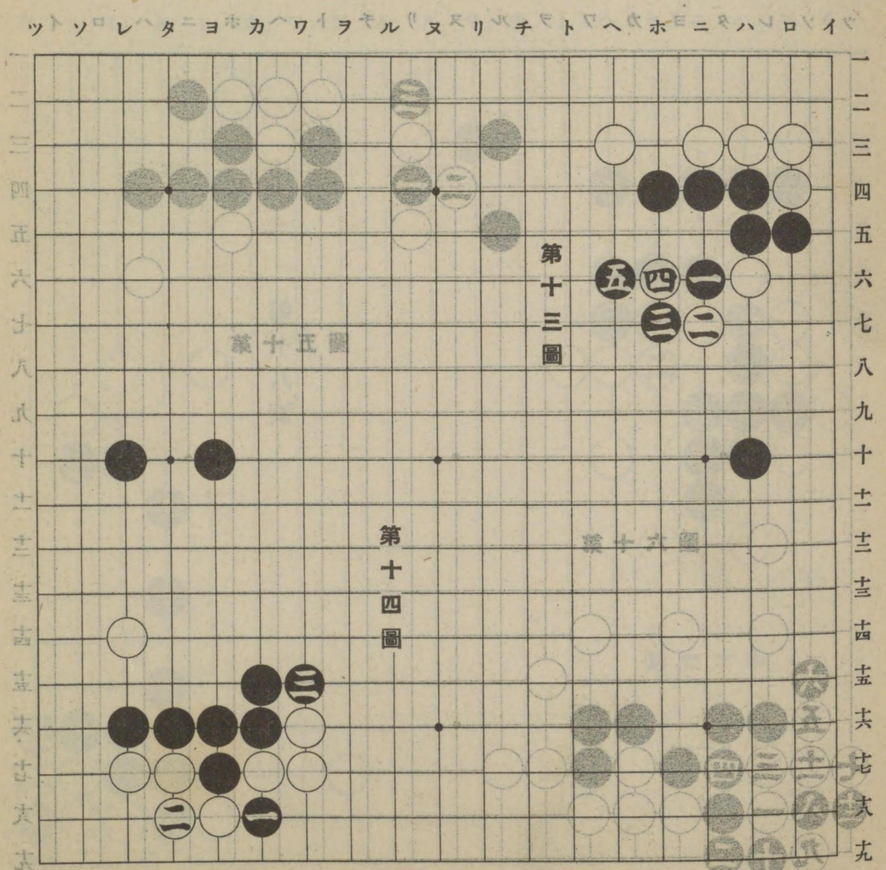
◇第十一圖　六目位の碁に、得て現はれる形ですが、其れは丁度黒「ハの四」の時、白が手抜をした意味に當りますから、白のその手を抜いて他に轉じた方面が、捨て、置けぬ場合はいざ知らず、さもなくば斯う一と懸けて、五までの運びに出なくてはなりません、デ白六と其處の切を用心すれば、黒七と白の出を止めるのが肝要の手なのです　ソコで白は十と走つて「ハの十二」に連絡を求め黒は堅く十一と粘いで、水も漏さぬ陣形となり、兼ねて白二以下五目を取る目的も能るのです。

◇第十二圖　は卽ち前述の變化を如實に示したので、黒先手なら一から七迄て、白の五目は助らないのです、きりとて白二て四に夾み、黒三、白五黒六、白「ソの五」と運んでも、黒に「ツの六」と置かれて活きませんが、黒万一「ツの六」を「ソの四」と受ければ、白「ツの八」、黒「レの十」、白「ツの六」て活き、又白二て四に夾んで黒三の時、白「ツの八」と下れば、黒「レの十」と突當るのが良いのです、そして白六、黒「ソの十二」、白二、黒「レの十二」、となつても、又黒「レの十」の時、白「ツの十」、黒「ソの十二」、白「レの十二」、黒「ツの十二」、白六、黒五、白二、黒「ツの七」となつても、白はやはり自滅。



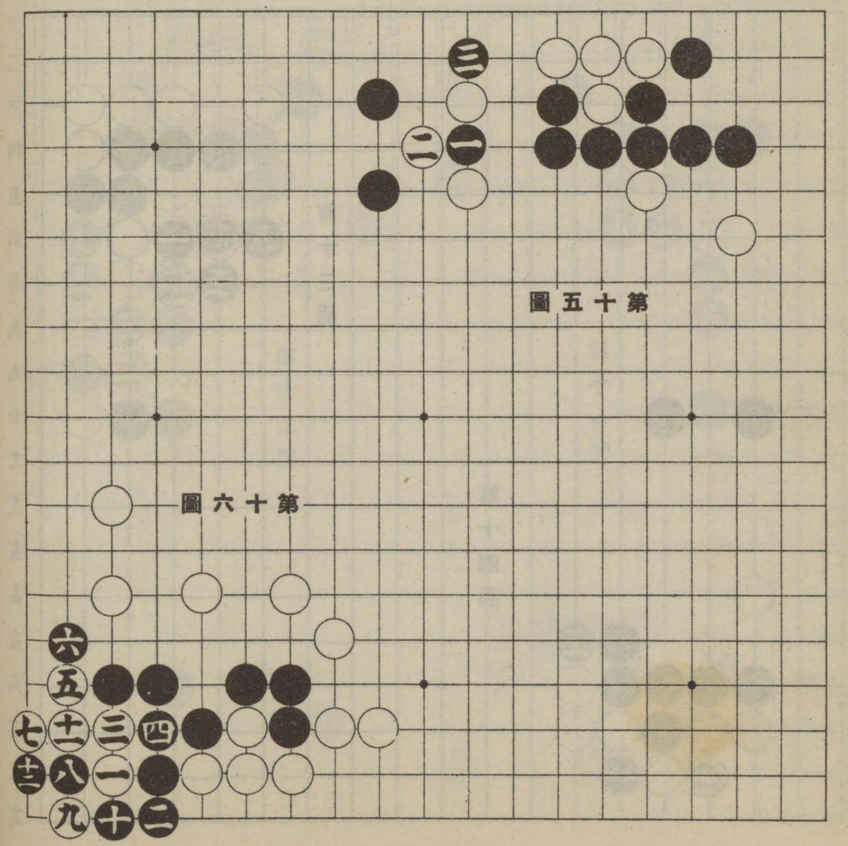
◇第十三圖　黒一はそうなくてはならぬ一着、若しそれを手抜して、白から四に飛ばれてはいけません、白二の時黒之に四、又は「ハの七」と應ずるのは緩いのです、やはり斯う三と積極的に二段伸に出なければなりません、白四の切りに黒「ニの五」と結げば、白に「ニの八」と出られて、悪いのは言ふまでもなく、圖の如く五と當つけるのは當然です、ソコデ白「ニの五」、黒「ホの五」、白一、黒「ニの八」、白「ロの六」、黒「イの六」、白「イの七」、黒「イの五」、白「ホの八」、黒「ヘの七」、白「ハの八」、黒「ニの九」、白「ロの八」、黒「ロの九」て白は全滅、ト云つて白「ホの八」を「ヘの七」と切り、黒「ホの八」、白「ヘの五」、黒「トの六」、白「ヘの四」　黒「ロの七」となつても攻合は黒一手勝。

◇第十四圖　黒三には次に「ヲの十六」と縛ねる厳しい手が伴つて、其の時白「ヲの十七」なら黒「ルの十七」、白「ワの十八」、黒「ヲの十八」、白「カの十九」黒「ルの十六」となつて、白が悪いのです、だが、黒一て三なら、白「ソの十七」、黒「ソの十六」となつて、今度黒「ヲの十六」を占める含みで一と切つても、白は「ワの十八」と抱べるゆゑ、前のやうには行きません。



◇第十五圖　圖中黑三は肝要の點です、こゝで白「チの二」、黑「チの三」、白「チの四」、黑「ヌの二」となつても、白又「チの二」を「ヌの二」に換へ、黑「ヌの三」、白「ヂの四」、黑「チの二」白「ルの二」、黑「ルの四」となつても、白は完全に兩斷されるのです、然かも黑「ルの四」の時、白「チの三」、黑「チの五」、白粘ぎ黑「リの六」で、二以下數子は行詰るのです、ゆゑに白「チの三」で「ヲの三」と黑の四目に攻めかゝれば、黑「チの三」白粘ぎ、黑「リの六」白「チの六」黑「ヌの五」、白「チの五」黑「チの七」、白「トの六」、黑「トの七」、白「への六」、黑「ヌの七」となつて、白は「カの四」と「ホの八」との、何れからか攻められるのです。

◇第十六圖　白に一から七迄と運ばれた時、黑ウツカリ「レの十五」と粘げば、白に八に活きられて黑は全滅しますが、白七の時斯う八と頂るのが旨い手で、終に十二まで白は取られました、ト云つて白九で十二なら、黑十、白「レの十五」、黑十一、白「ツの十五」と運び、ソコで黑「ツの十六」と取り、白適宜劫立の上其れを「ソの十六」に取返すと、黑「ツの十九」と打込んで、白「ソの十九」の時「ツの十六」と、兩劫で黑は活。

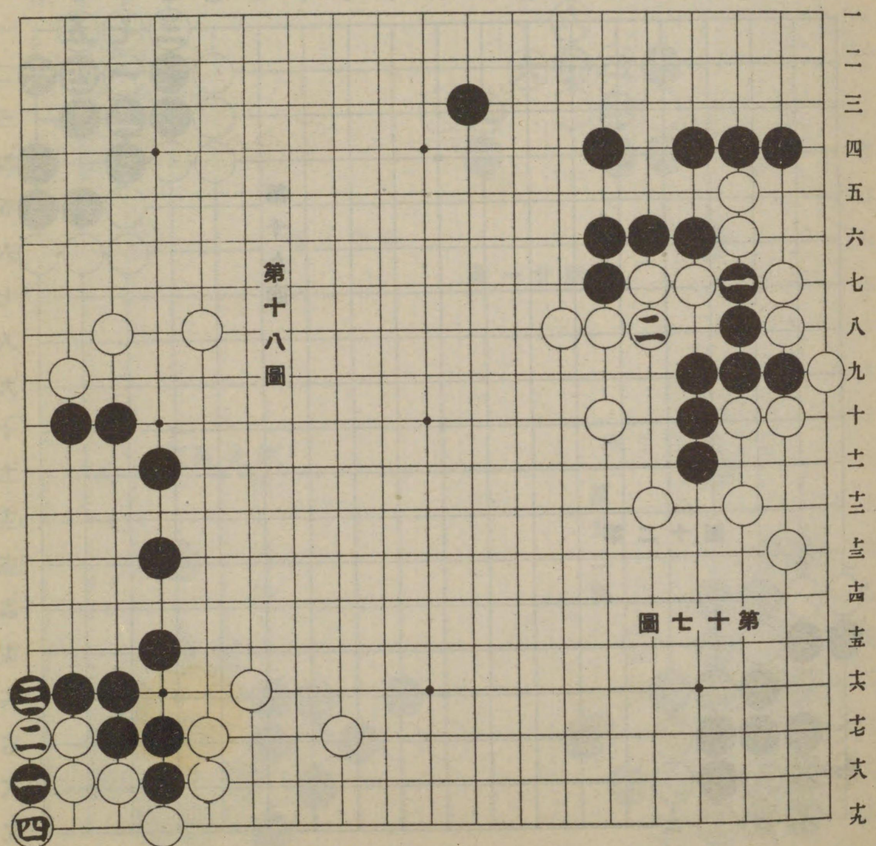


第十五圖

第十六圖

◇第十七圖　黑一は九死から一生を得た手です、ト云ふのは白二の時、黑「イの八」、白「イの七」黑「ロの六」、白「ロの五」、黑「イの五」、白「イの六」、黑「イの四」て、白「イの十」に粘げば、黑「ニの五」と追落して、黑七目は虎口を逭れるのです、が黑「イの八」、白「イの七」の交換なしに、前述黑「ロの六」からの手順に出ると、黑「イの四」の時白に「イの八」と粘がれて黑七目は其の儘埋れ木となるのです。

◇第十八圖　一から四迄を省いて、白三、黑「ツの十五」、白二、黑「ソの十四」となれば、圖の如く三と下つてあるのに比べて、現實に黑地を二目減らされて、其れが勝敗の鍵となります、故に黑斯う四まてと運んで、二目の減を先手で防いだのです、其れを黑一て三に下つて、次に一と頂けても、白は二と應じて、黑に「ソの十九」に綽ねる劫手段を、與へる愚には出ません、デ黑二、白「レの十九」となるのと、斯う一と頂けた時、白手を拔いて黑二、白「レの十九」となるのとは、其處に一着先後の差が有ります、從て黑一の頂けを巧妙の手段とします。

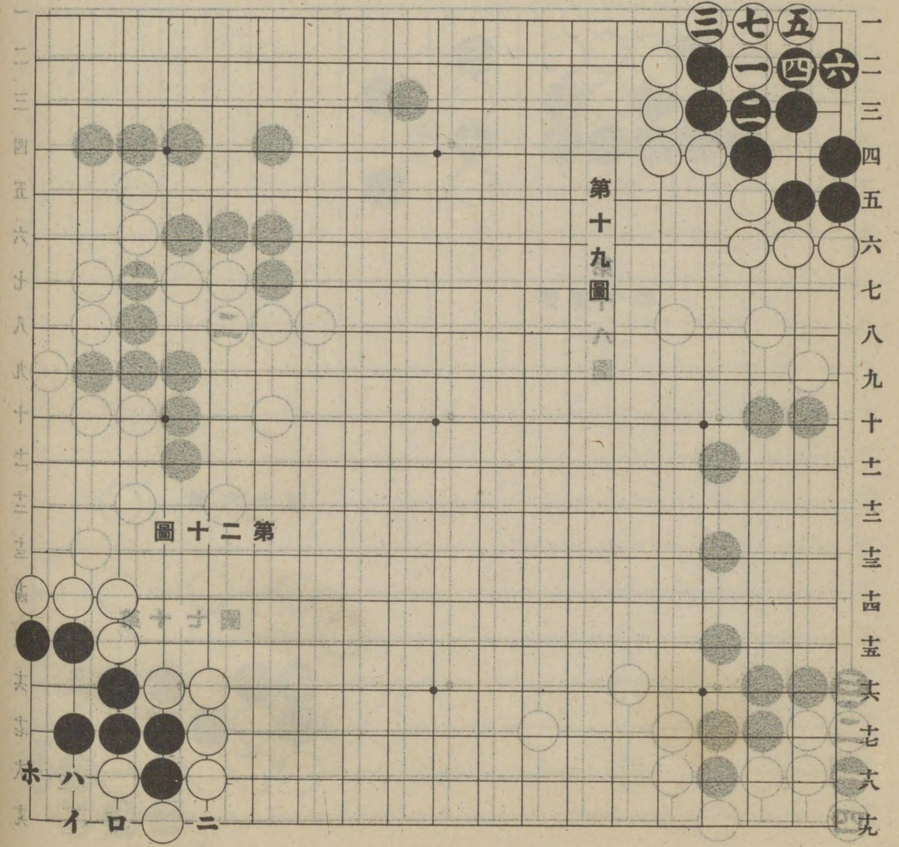


第十八圖

第十七圖

◇**第十九圖**　白一で三と綽ねて、黒七、白「ホの一」、黒一となると、黒地は七目で白が負けになるものですから、白一と頂けたのです、此處で黒三に下つて、二に切られてはいけませんから、三の手で七に綽ねるのです、そこで白五、黒三、白四、黒六となつて白二には入れません、スルト白「ホの一」、黒二となつて黒地は九目になりますから、却つて黒は二目儲かるのです、それを白は一の時黒に七に綽ねられたら、百年目と、斯う一と頂けたのですが、果然其の頂が圖に中つて、七までの運びを採り、結局黒一目の負けとなつたのです、尤も白七と粘げたのは、白に劫立の豐富な關係もあります、が其れを黒四でも尚ほ

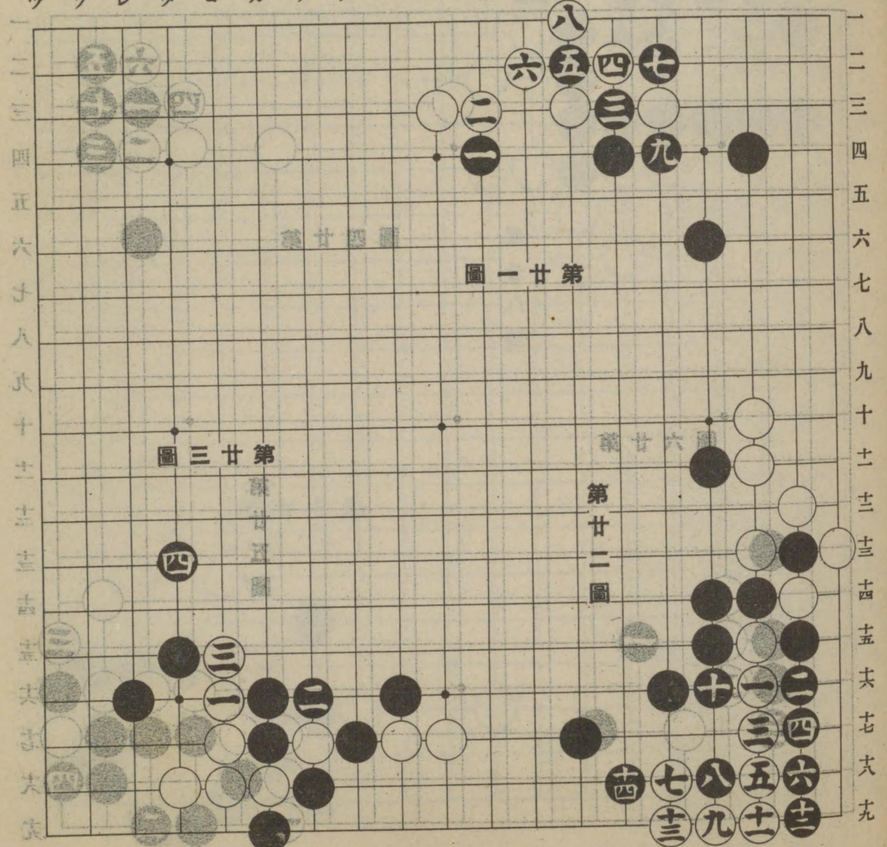
◇**第二十圖**　の如く、黒「イ」と飛べば、白「ロ」、黒「ハ」白「ニ」と運んで黒地は四目となり、黒一目勝となるのです、要するに黒は「イ」と飛ぶ手を知らなかつたからですが、黒「イ」の時白「ロ」を「ハ」に出ると、黒に「ホ」に約へられて、「ロ」に粘げば「ニ」に取られるのです、但上圖に在つては一に對して黒七、下圖に在つては黒「イ」が肝要です。



◇**第廿一圖**　互先の手合參能く現はれる形で、黒は「ホの三」に在る白を取る爲めに、斯う一から九までと運んだのですが、斯うなると黒の一と三との交換は、黒が働いて居るのです、ト云ふのは黒は後に「トの四」と連絡する便宜があつて、外勢を張る資けとなるからです、ソコデ白「ホの三」の二子を助くべく「ニの二」と出る變化を、

◇**第廿二圖**　を假りて說明すれば、白一は卽ち前圖の「ニの三」に當りますが、スルト黒四の時白六でも白八でも、五に切られて三目取られますから、今更乘りかゝつた船とばかり五と下ると、圖の如く十四までの運びで、白はもう取りつく島は無いのです、ト云つて再び第廿一圖に戻つて、黒五の時白「ニの二」と應じれば、黒「への一」、白七、黒「チの三」となつて、其れは

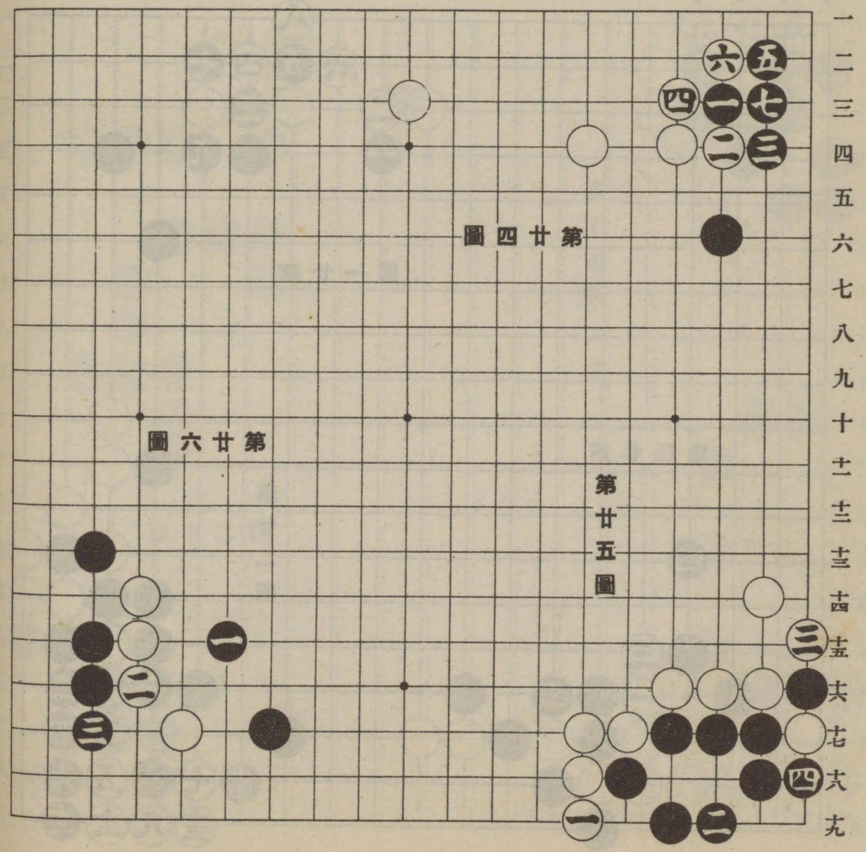
◇**第廿三圖**　の如く、白一と出て黒四までと交換し、黒は遂に縦斷されて了ふのですが、そうなつても黒がわるくはないと云ふ意味を、豫め考へて居て欲しいのです、ト云ふのは「ルの十七」、「ヌの十七」の、二目の方の破れが酷いからです。



◇第廿四圖　黒は「ハの六」の一子を、白に「ハの五」と攻められぬ中に、斯う一から七まで と運んだのですが、其の手順中白六は肝要で、若し六と七との交換を省けば、後に黒「ニの二」、白「ホの二」となつて、白のわるいのは言ふまでもありません、假りにそうなつて、白六と打込めば、黒に「ハの一」と取られる事でも解りませう。

◇第廿五圖　斯う四までとなつて、後に白「ホの十九」、黒「ニの十八」で黒地は三目になりますそれを白三、黒四、白一となると黒「ニの十八」で四目になるのです、但し白一の時黒二を四だと、白「ロの十九」黒二、白「ニの十八」で黒は滅一。

◇第廿六圖　は黒三の方では地を取り、一の方では「ワの十七」と共同して、白を攻めて居るのですが、白此處で手を抜いて、黒「タの十三」、白「ヨの十四」となるのは勿論惡いのです、又黒一で二に出て、白「ヨの十六」、黒一、白「ヨの十五」、黒「カの十四」と白を攻めれば、白「レの十四」、黒「ソの十四」、白「ソの十三」となりソコで白に「レの十二」と征にかけられる手を避けて、黒「ソの十二」と抱へれば、白「ソの十五」黒「ツの十三」、白「ソの十六」で、黒の三目は滅となるのです。



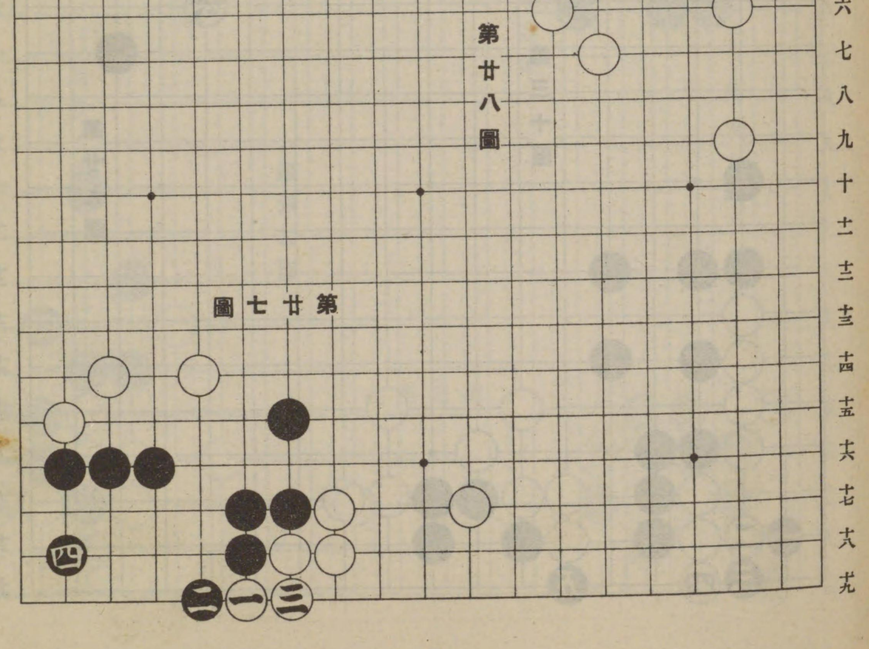
第廿四圖

第廿六圖

第廿五圖

◇第廿七圖　黒四の兼粘ぎを「タの十八」に懸けつぐと、更に白「ツの十六」、黒「ツの十七」、白「ツの十五」、黒四と、減らされて了ふのです故に黒斯う四と兼粘ぐのがいゝのです、此處で白「ヨの十八」と切つても、黒「タの十九」、白「レの十八」、黒「タの十八」で手にはなりません。

◇第廿八圖　所が本圖の如き形になるを、前圖と酷似して居ますが、白一から三迄と絆いだ時「ハハア兼ね粘ですか」と呟やくので、黒もすまして四と粘いで安心して居ると、白もそこで直ぐ五と切ると、其の伏線を悟られますから、時機を見て他に劫爭ひを起して、其劫立の振りで五と切る、黒ウッカリそれを六と受けると、サア黒十までとなつた時、白は十一と打込で、ヘツどんなもんだと云つた態度、黒もソコで呀と氣がついたのですが、もうそれは大事去つた後の祭り、黒「イの一」に取れば、白「ニの二」、黒「十一」、白「ロの三」で黒は全滅といふわけ、怖るべきは口で打たれる外交術です。

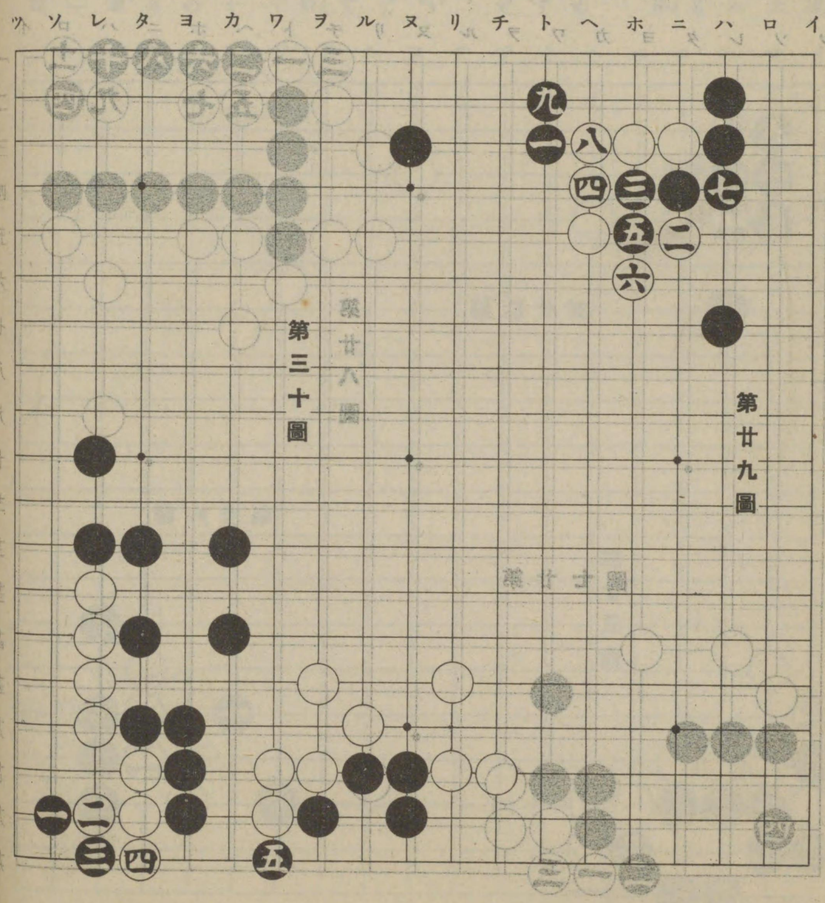


第廿八圖

第廿七圖

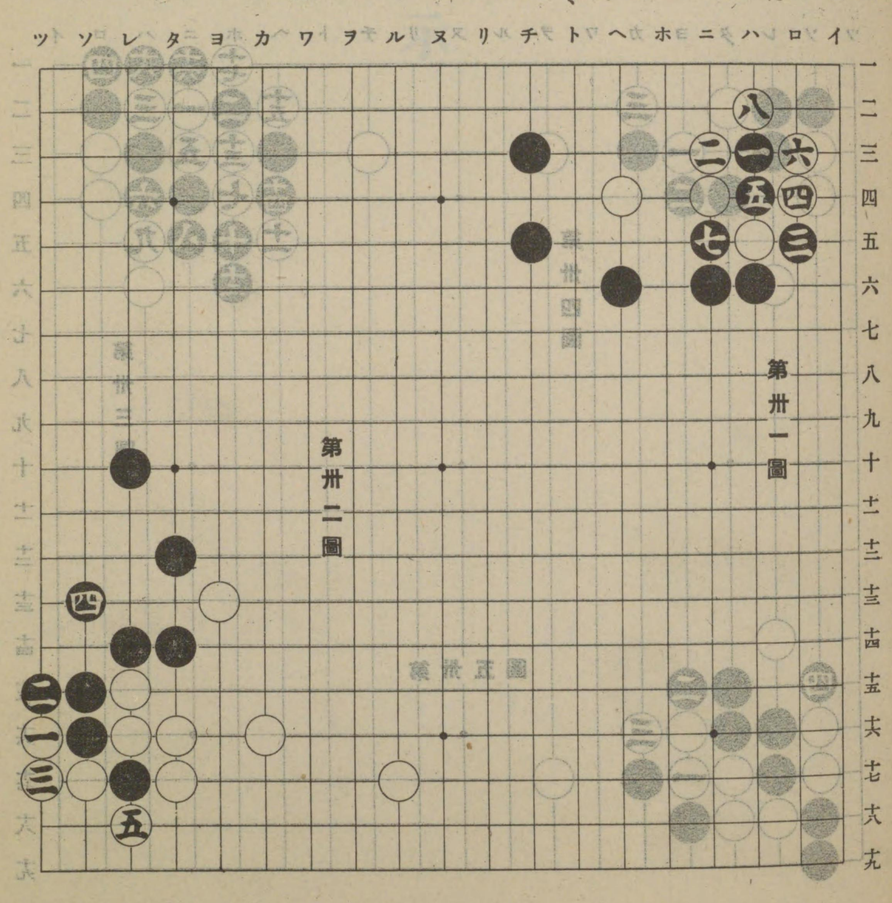
◇**第廿九圖**　此の形ちも置碁には常に現はれますが、一から九までの運びの中、黒一で三に出で、白四の時八に切つて、白一、黒「ヘの二」、白九黒「ホの二」と白の二目を取つた所で、それア所謂些細の內緒ごと、然かもそうなつて白に、「チの五」位に備へられても、忽ち「ヌの三」の黒に薄味を感じるのです、デ黒は斯う運んで「ヌの三」と共同動作を採り、イザと云ふ場合には「ニの一」の點に、左右を連絡する間道を蓄へたのです。

◇**第三十圖**　下邊に遺棄された形ちの黒四目は、一から五までの運びに依つて、首尾よく母體に連絡し、枯木再び春に逢ふの惠みを受けました、ト云ふのは茲で白「カの十九」と應じても、黒「ヨの十九」の兩當りで、白はどちらかを取られるからです、又黒一の時白「レの十七」に粘ぎ、黒四、白三、黒「ヨの十九」となつて、白五に黒の盤りを止めれば、黒二に切るのは言ふまでもなく、ソコで白「ソの十七」なら、黒「ソの十三」、白又「ソの十二」なら黒「ツの十二」、白「ツの十二」黒「ソの十七」、白「ソの十六」、黒「ツの十四」白「ソの十四」、黒「ツの十五」、白「ツの十六」黒「ツの十三」、となつて、白は其れぎり。



◇**第三十一圖**　白の三子は完全に包圍されて此處から手を拔けば、殆んど死命を制せられるかの如く、大いに冒險のやうにも思はれませうが、其の實黒に先手で一と打込まれても、斯う八までの運びに依つて活きられる事を、白は先刻承知で居るのです、だが其の白四で五なら、黒四白六、黒「ロの二」、白八、黒「イの三」で、白は同じ活きるにしても、ひどい緊縮振になるのです、又白を八にわたらせまいと、黒七の手で八に出ると、白七、黒「ロの六」、白「ロの二」、黒「ニの二」、白「ホの二」で黒は助りません。

◇**第三十二圖**　白一は黒に「ソの十四」と粘がせて、先手を取らうといふ目的なのですが、其れを黒は二・四と應じて白に五と後手を引かせたのです、尤も白が全然此の一隅を閑却すれば、黒から「ソの十八」、白五・黒三、白「レの十七」、黒「ツの十八」とヨセられるのですが、黒若し其の「ツの十八」の手を拔けば、白に「ツの十八」と先んぜられ、黒「ツの十九」の時、白に「レの十九」と追落を食はされるのです、前述の意味で白一なら黒二と應じるのが、斯ういふ場合の要領です、又黒二の時白「ソの十八」なら、黒は三に打拔いて、「ツの十八」の押出しを見るべきです。

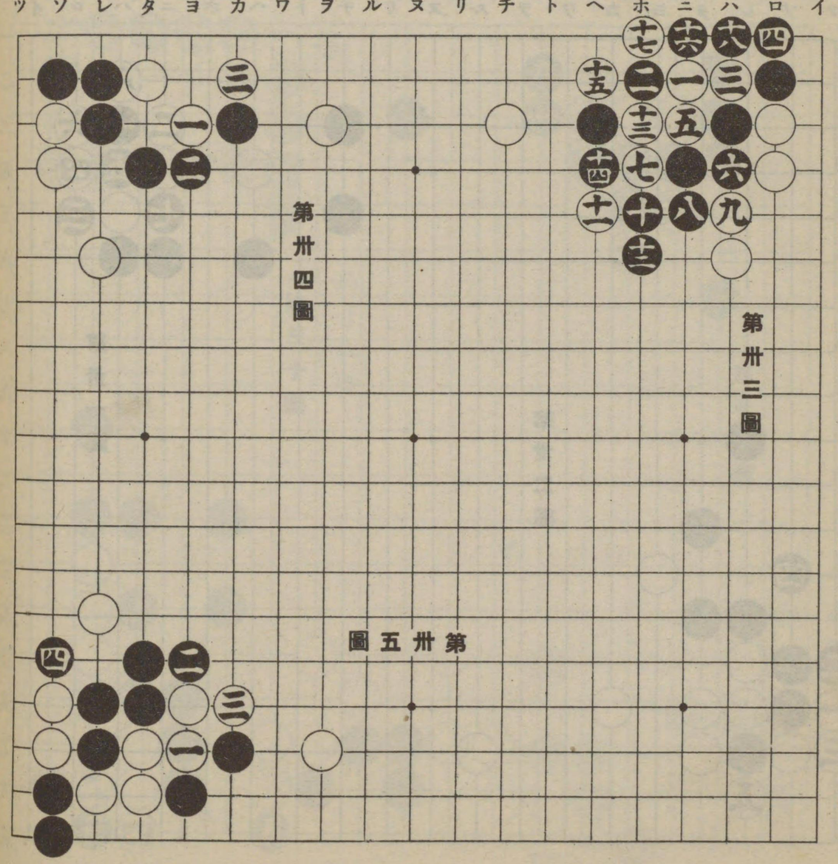


實戰例示

◇第三十三圖　これは黒「ニの四」の置石から、「への三」と小ゲイに走つてる形ちで、今は餘り用ひられませんが、併し之れに絡んだ手所は澤山ありますから、教材として本圖を借ることは決して不當ではないのです、デ其の一から十八迄の手順中、黒二を三の方に應じれば、

◇第三十四圖　の如く、白に一から三までと運ばれて、黒は折角の我立脚地を失ひ、其の安定點に達するまでには、幾多の曲折を要するのです、故に前圖の如く黒二と應じて、白三の切りに四と下つたのです、黒にそうした要領を知られて居れば白一からの手段には出られないのです、其の證據には黒九ではまだしも十三に粘ぐべきで、若しそう粘げば其の十三を一とする、

◇第三十五圖　の如く、一から四までとなつて、其れでも黒が可いのですが、白横着にも黒が知つて居たらまゝよと、第三十三圖の如く九と突き當つた爲めに、黒に紛れなく十八までと運ばれて瓦解したわけです、尙白十一は黒に十四に切らせて白十二、黒十三、白「ニの六」、黒「ホの四」、白「トの五」と運んで黒に逆襲しやうといふハメ手ですが、其れにも黒の嵌らずに、十二と應じたのは感狀に値ひします。



大衆圍碁講座

實戰例示

講師七段　雁金準一
講師七段　高部道平

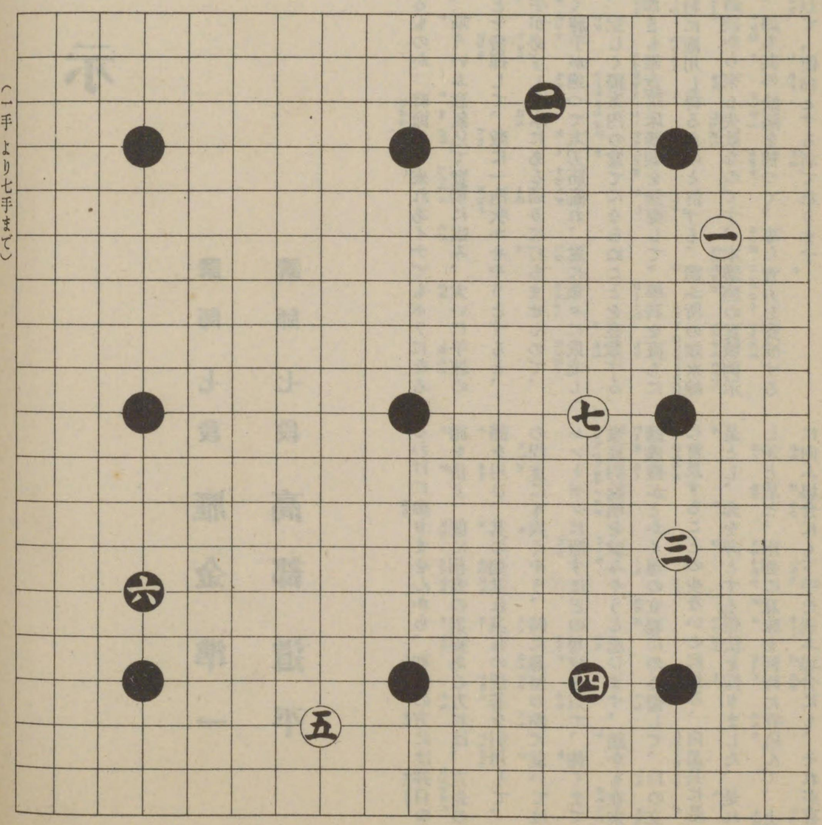
醫術を學ぶのに、生理や解剖の學科から入るのは申すまでもありませんが、其の最も重きを置く所のものは、臨床講義であります、そして其れに依つて骨肉の組織や、病原の潛む點なども、理解し得られるのですが、圍碁に於ても亦定石や布石の説明は、醫術に於ける生理や解剖の學科と同じもので、單に其れを習得しただけでは、まだ遺憾なく實力を養成するわけに行きません、ト實戰例示の説明は、取りも直さず醫學に於ける、臨床講義と異る所はないのです。

坊間に有りふれた、獨案内的棋書に就いて、無意識に型だけを學んだ人が、ナニいつまでヘボで居るものか、時節さへ來れあイナでもボラになると、斯ういふ意氣込で實戰に臨み、大いに手練のほどを發揮して、敵に一泡吹かせやうとすると、相手が必ずしも本にある通りに打ちませんので、漸く勝手が違つて太刀筋亂れ、遂に散々に敗北して、空しく獨案内の當てにならぬことを嗟歎するわけに參りませんから、初步の方には井目の棋譜を借り、既に相當の素養ある方には、互先の棋譜を用ひ、其の間其れ其れの置碁を引用して、どの程度にも向くやう、特に難解の點に就いては、レントゲンに照すほどの用意を以て、飽くまでも徹底的説明を試みやうと思ひます、然かも在來の講義錄がとかく黒の立場にのみ偏して、白の立場が如きも畢竟臨床講義を無視して、學科を直ちに實科に應用し得るものと信ずる、謂ふ所の畑水練の錯誤から來る失敗なのです、本講座の實戰例示は、即ち其の缺陷を補つて、專ら實力を養成する者であります。

併しながら、聽講諸君の程度は强弱一樣に律すを以て、使命とする者であります。

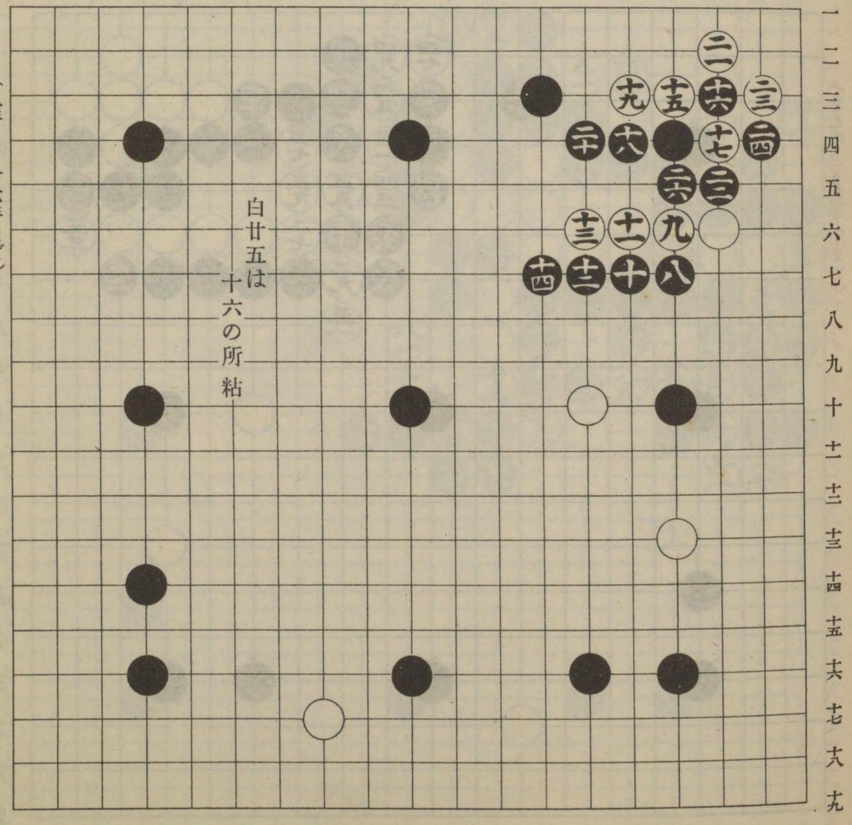
九子局

此の對局は、白某三段と黒十一歳の某少年とで黒の敗局に終つた碁です、黒**六**は之れでもいゝのですが、之れを「ヌの十七」と下つて居れば、「ヌの十六」の置石が、其の下つた石に協力して、次に白「チの十六」なら、黒「チの十七」白又「チの十七」なら黒「チの十六」と應じて、黒四との間の防備が堅くなります、ト共に白の**五**の一子は、黒の堅い面に接近して、今後の活動に不便を感じますから、五はむしろ「カの十七」の所へ離れて居る方がいゝのです、そういふ理合に於て、白五は惡い手と謂ふ外は有りません、白の之れに鑑みべきは勿論ですが、黒としても始めから、斯うした理合を呑み込めば上達の速度を増すわけなのです、白**七**は黒の「ニの十」の置石が邪魔になりますから、先づ斯う冠して黒のどう受けるかを問ひ、そして其の時黒「ホの十一」に尖み出たら、「トの十四」とでも追つて、四の頭邊を脅かしつゝ其の方面を破らうし、黒又「ホの九」の方へ尖み出たら、「ホの五」と懸けて、「トの八」と追ふ手と、「ヘの三」と頂ける手段と、其何れかを採らうといふのです。



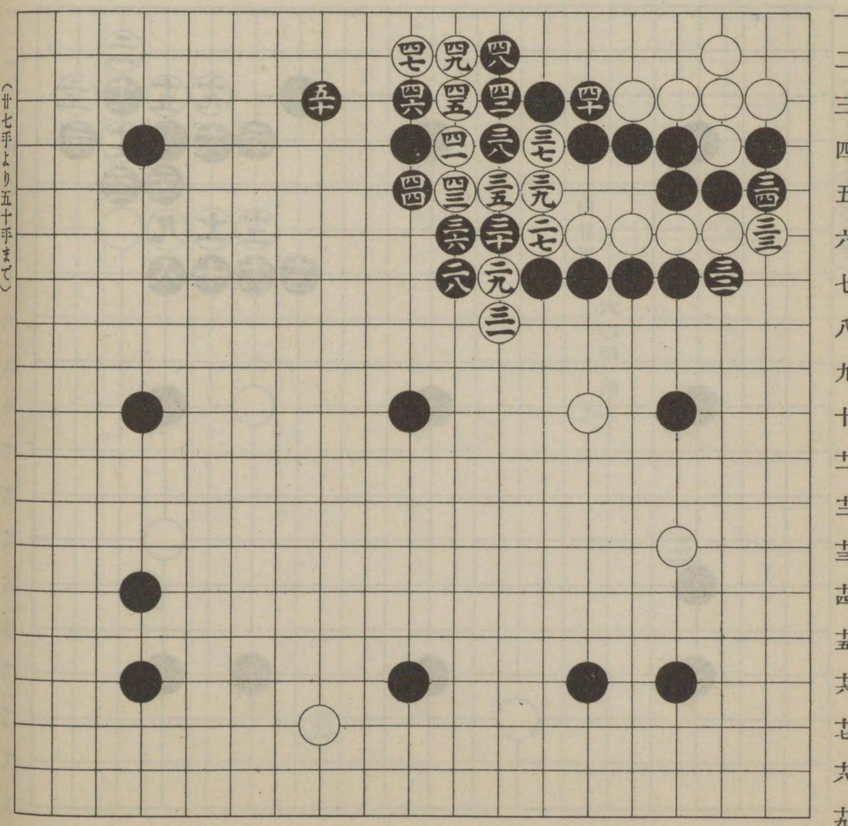
（一手より七手まで）

黒**八**て十七の所へ締ると、其次ぎには八の所へ白の一の肩を衝く手段ができますから、白は十一に飛ぶのは當然ですが、其れでも「ニの十」の置石は容易に取られないのです、デそうなつた局面では、黒「ヌの十七」と備へて「チの十七」の打込を防ぐか、「レの十」と備へて「タの十二」の打込を防ぐか、又は「ワの三」を占めて、上邊一帶を地にする工夫に出よと、斯ういふのが從來の教へ方で、其れは無論正法です、が斯う八と「ハの六」の肩を衝いて變化を試み、其れに應ずる力を養つてから、右の如き正しい順路を辿るのも亦、一つの上達方法です、デ黒**十四**となつて、白の三は薄くなり、「への十」は稍や手持無沙汰の體となりました、白**十五**の時黒若し「への十三」と轉じれば、白は更に黒から「ホの十二」と尖まれて「ニの十三」と「への十」とを、離斷されては堪りませんから、取敢ず「ホの十二」と尖み、次に黒「への十二」、白「ホの十一」と連絡し、ソコで黒「チの十」と白の出を止めると、白は其の四子を何とかして、活きなくてはなりません、故に白十五に對ずる黒の應接は、後廻しにして「への十三」と白に冠するのがいゝのです、併し黒**二十六**迄の運びは惡くはありません。



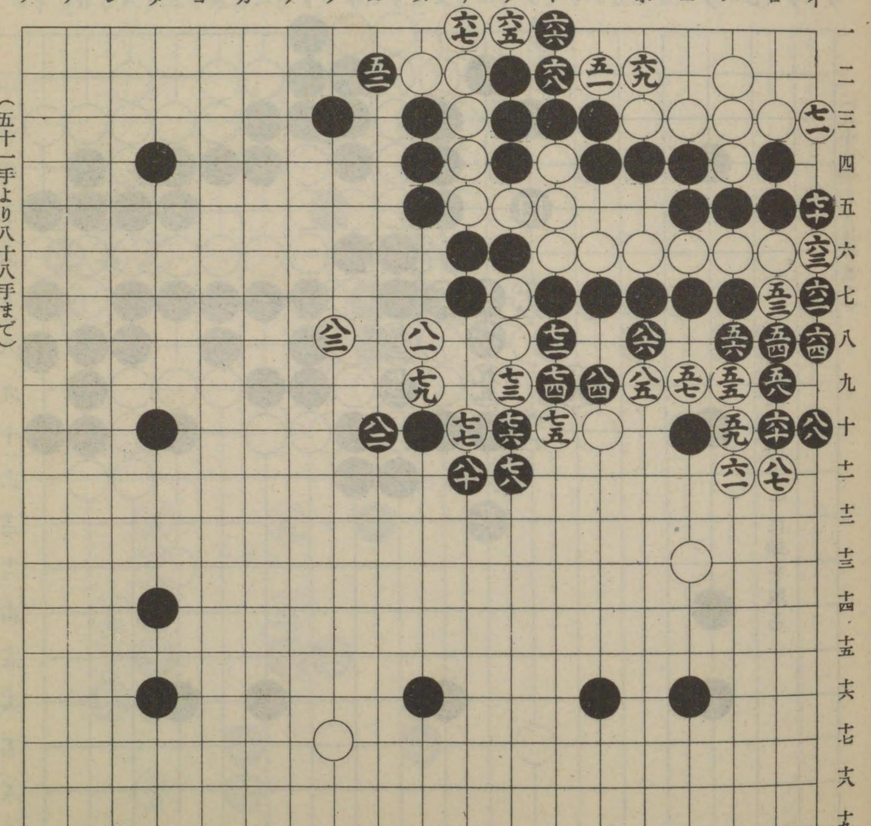
（八手より廿六手まで）

黒**二十八**では廿九に行びて居べきです、そして其の時白三十に押せば、三十六に約へて白の出路を止めるのでした、併し白**二十九**の綽ね込を、三十と切つたのはいゝ手です、進んで黒**四十四**の手で、四十五の所へ約へ、白の四十四に出た時、黒「ホの二」と綽ねれば、右上隅の白六目は其のまま取れるのでした、斯くて黒**四十八**と下つて、白に**四十九**と粘がせる迄の運びはよかつたのですが黒**五十**は甚だ緩い手です、其れは當然「ルの二」と約へていゝのです、なぜなら其の時、白「ルの三」に切れば、黒は五十の所へ征にかけて、其の白を擒にしますし、白又そう切る手で「ヌの六」に切れば黒は五十の所へ懸けついで居て、切られた廿八以下の三目は、絶對に取られる氣遣ないのですが白右の切る手に出ずして、黒の「ルの二」の約へに「ヌの二」と頂けた時、黒若且にも「ルの一」と下れば、白「ルの三」、黒五十、白「ルの四」、黒「ワの二」、白「ヲの四」、黒「ワの三」、白「ヌの六」、黒「ルの五」となつて、白「ヌの八」で黒の三目は取られますが、其れよりは其の「ヌの八」で「リの八」と當て、黒「ヌの七」なら白「ルの六」、黒「ヲの五」、白「ルの八」と運んで、黒の四目は逃げられません。



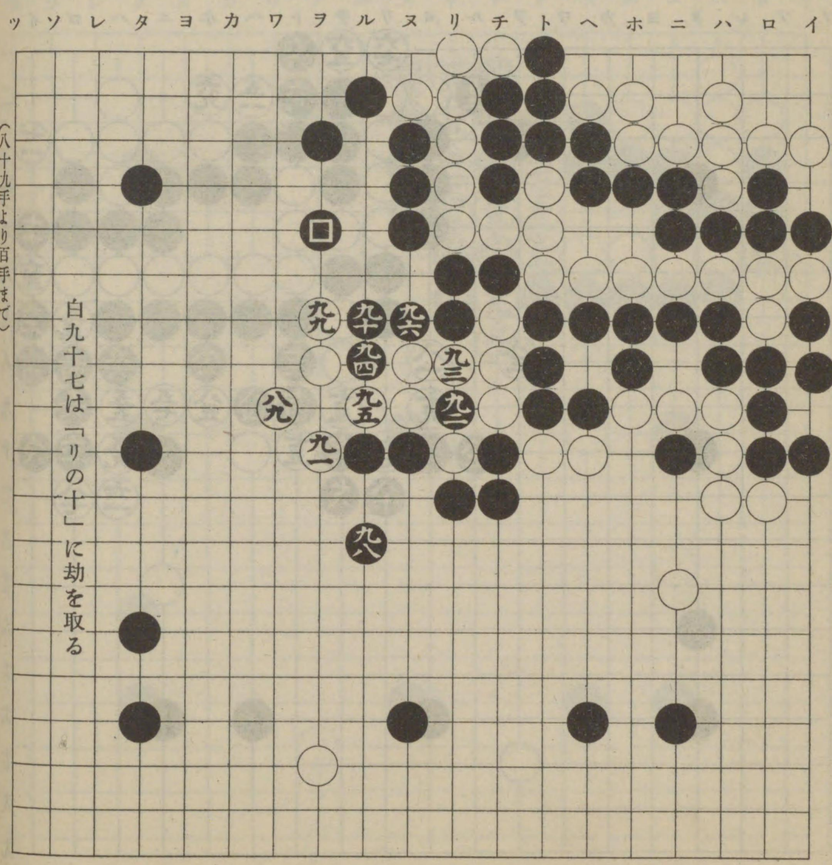
（廿七手より五十手まで）

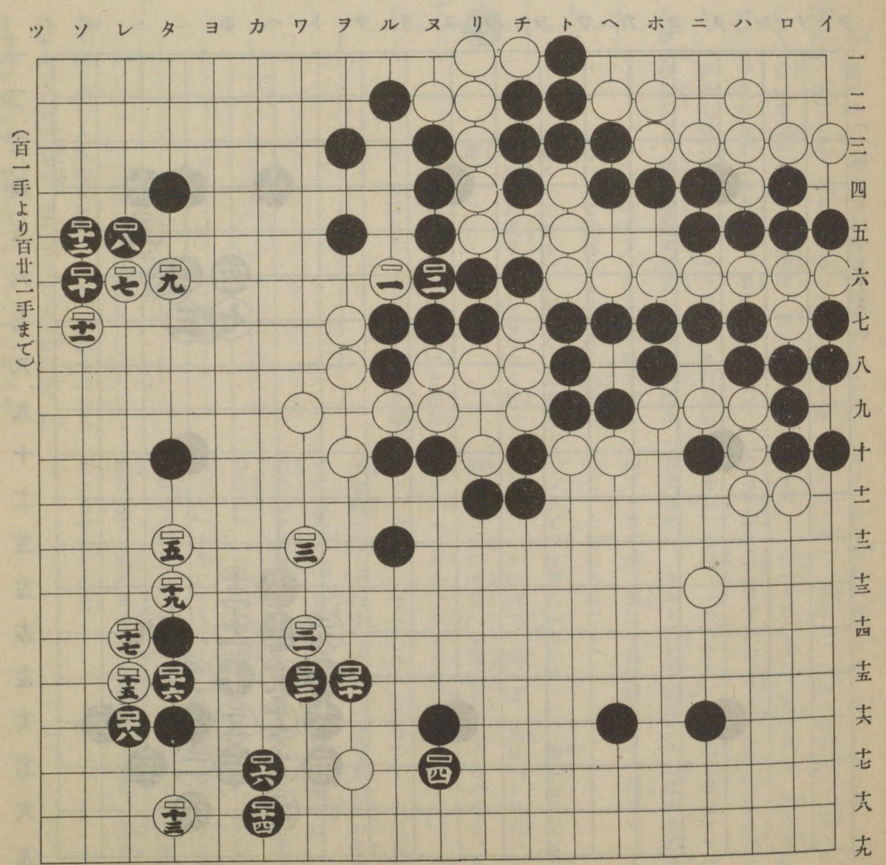
五十までの運びに依つて、四十九以下の白と四十八以下の黒との、大攻合となりました、ソコで白は黒から六十九に綽ねられる手を防いで**五十一**と綽ね、黒は白に五十二に行びられる手を防いで**五十二**と約へ、延いて黒**五十六**までとなつた時、白**五十七**と出たのは大失着です、ト云ふのは此處で黒に直ぐ六十七に綽ねられて、白「ヌの一」、黒六十五となると、白は六十九の所へ粘ぐ關係で攻合は一手白が足りなくなつて、一軍ムザムザ全滅するからです、故に白は五十七の手で六十五に綽ね黒六十六、白六十七、黒六十九、白「ホの一」黒六十二、白六十三、黒六十四、白「ニの二」、黒六十八、白「イの四」、黒七十、白七十一、黒「ルの一」、白「への一」、黒「ヌの一」と斯う交換して持にする所なのです、黒も亦其れに氣付かずして、尙ほも**六十二**、**六十四**と綽ねついだのはわるいのです、爲めに白**七十一**とトウトウ持にされましたが、斯うなると白五十七は却つて過ちの功名、黒**八十六**と眼を持て白**八十七**、黒**八十八**と活きた黒の運びもいけません、**八十六**では今一着八十七に押したり、「への十一」に頂けたりして、先手を取つて八十六に眼を持つべきです、八十八までの四まされはひどかつたのです。



（五十一手より八十八手まで）

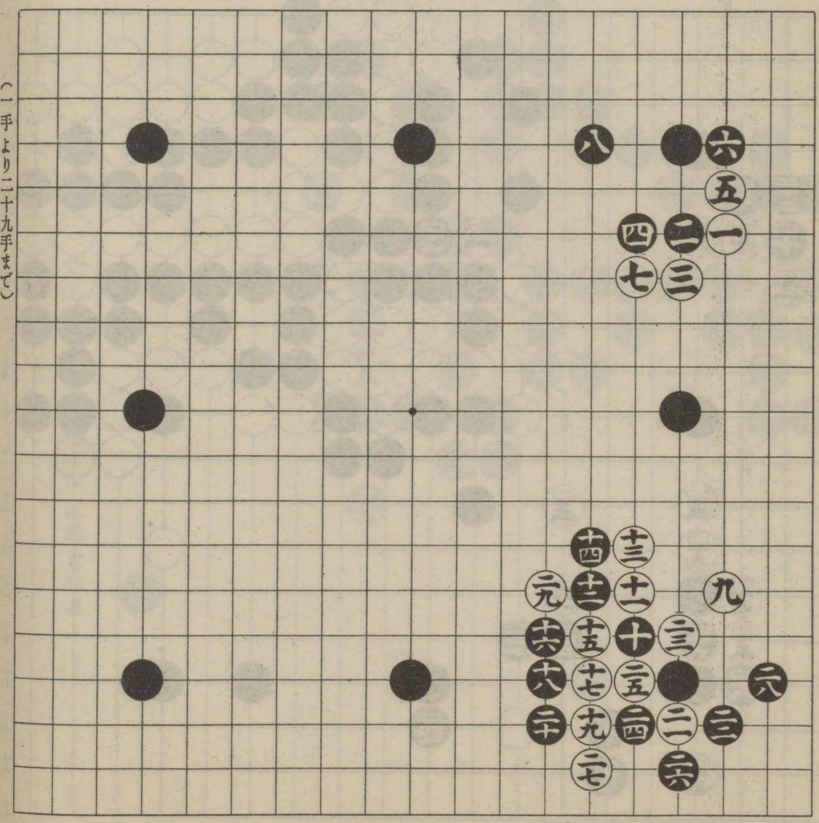
白**八十九**は筋違ひで、其れは當然「ヲの九」と双關すべきです、さすれば黒は次に「ヌの六」と切られると、黒九十六、白「ルの六」、黒九十、白「ヲの六」で黒の五目を取られ、持が破れて全局の覆滅を來すわけですから、黒は白「ヲの九」の時、「ルの六」に備へなくてはなりません、ソコで白は悠々「ワの十一」と斜走し得るのですから、尋で黒**九十**の時**九十一**と尖みつけるやうな、苦しい手を打たずとも濟んだのです、尙ほ言ひ換れば白は「ヲの九」で利くべきものを、筋違ひの八十九と尖んで、此の愚形に陷つたわけです、黒**九十八**はぬるい手です、「ヲの十一」と綿ねて、白「ワの十一」の時「カの十」と覗くのがいゝのです、ソコで白「ルの十一」に切れば、黒は無論**九十二**に劫を取ります、デ白其の劫立に「への一」と來れば黒は持の十五目を見捨てゝ、白の七目を打ち抜くのです、スルト其の威力は全局に波及しますが、黒の十五目は之れあるが爲めに、却つて荷厄介となるのですから、其の利害に於ては雲泥の相違なのです、故に白は「カの十」と覗かれた時、「ヲの九」に粘がなければなりません、ソコで黒は「ヲ白**百一**」と當てゝ、**百二**と粘がせたのは、無用の交換です、此處は黒から後手で「百一」に打つ氣遣ひの無い所ですから、白は後日の劫立として、此の交換を保留すべきが當然です、白**百三**は其處を黒から「ワの十一」と懸けられて、其の方面の出路を塞がれては堪りませんから、豫じめ其れを防いだのです、黒**百四**は穩やかな手ではありますが、既に形勢が變つて居ますから、此の手では「カの十」と覗いて、白「ヲの十二」と突當つたら、黒「リの九」に劫を取り、白に「ヲの九」に粘がせて、「ルの十四」と飛ぶ調子です、デ其の次の手では黒百廿一の所へ飛んで、白を兩斷して双方を攻めますから、白は百廿二の邊に飛ぶ位のものでせう、ソコて黒「ルの十七」と尖みつけて、「チの十六」の間を整へやうと、斯ういふ方針に出るのが時機に適ふのです、デ**百二十二**まてと運んで、黒は依然優勢を維持し、然かも**百十、百十二**の綿ねつぎに依つて、「レの七」に切りを殘し、白の圍みを破る手段さへ蓄へたのですが、其の後の經過に無理が有つた爲め終に敗を取つたのです、例へば上邊に白に「ルの一」と綿ねさせるやうな餘地を存し、劫の結果持を破られた如きも、其の一





八子局

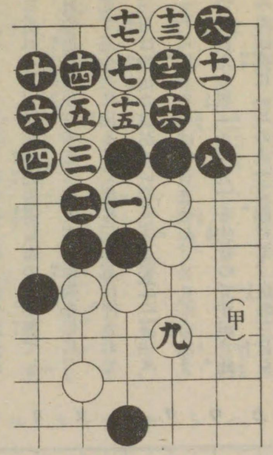
本局白は某地方の獨學で、三段の免許を得た人、黒は其の舍弟でありますが、結果は終に白の勝に歸した局面です、デ黒八までは頂定石の運びですが、八ては「への七」と綽ねて、白「ホの九」の時、「ハの十三」と拓いて、「ニの十」の置石に連絡すべきです、若し其時白「ニの五」、黒「ホの五」と交換して、白「ホの四」と切る手段に出ても、定石の部でも說明した通り、けして恐るゝに足らぬのです、それは其の「ニの五」を一とする甲圖の如く、十八までの運びによつて、白は全滅するからです、尙ほソコで白たとひ「イの一」に取つても、黒は「ホの一」と押す必要はなく、手を拔いて他に轉じて妨げないのです、又甲圖の手順中黒十二で十五に當て、白十四、黒十二、白十三、黒十六、白十八、黒十七、白「ホの一」、黒「への一」、白五目粘ぎ、黒「ロの三」となつても、攻合は黒が一手良いのです、又白十一を十二に打ち、黒十四、白十五、黒十一、白「ロの三」黒「イの三」と運び、白十六の所へ粘げば、黒十七でこれまた、黒が一手良いのです、此くのごとく本圖黒八と備へる必要が無いとすれば、其れを



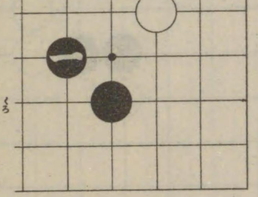
（一手より二十九手まで）

是とする從來の定石は、甚だ肯綮に中らないので從つて六目以上の置碁に向つて、白七までの運びは、須らく改善すべきであらうと思ひます、ソコで黒八で「への七」と綽ねた時、白「への八」なら黒は「ホの八」と切つていゝのです。

黒十の尖みは恐らく誤解でせう、之れは乙圖のやうな互先の場合に於ける應手で、置碁には殆ど打たぬ手です、併し此の十が絕對に惡いとは言ひません、卜云のは次に「ニの十三」と懸る手が伴ふからですが、白も勿論そう懸けられては堪りませんから、圖の如く**十一**と肩けて、**十三**までの運びを採つたのです、併し黒十は普通十二か、十七の所へ打つべきものを、斯う十と尖んでもいゝといふ、一つの信念があつて打つたものとすれば、其れだけでもう將來入段の素質は宿るのです。



（甲）

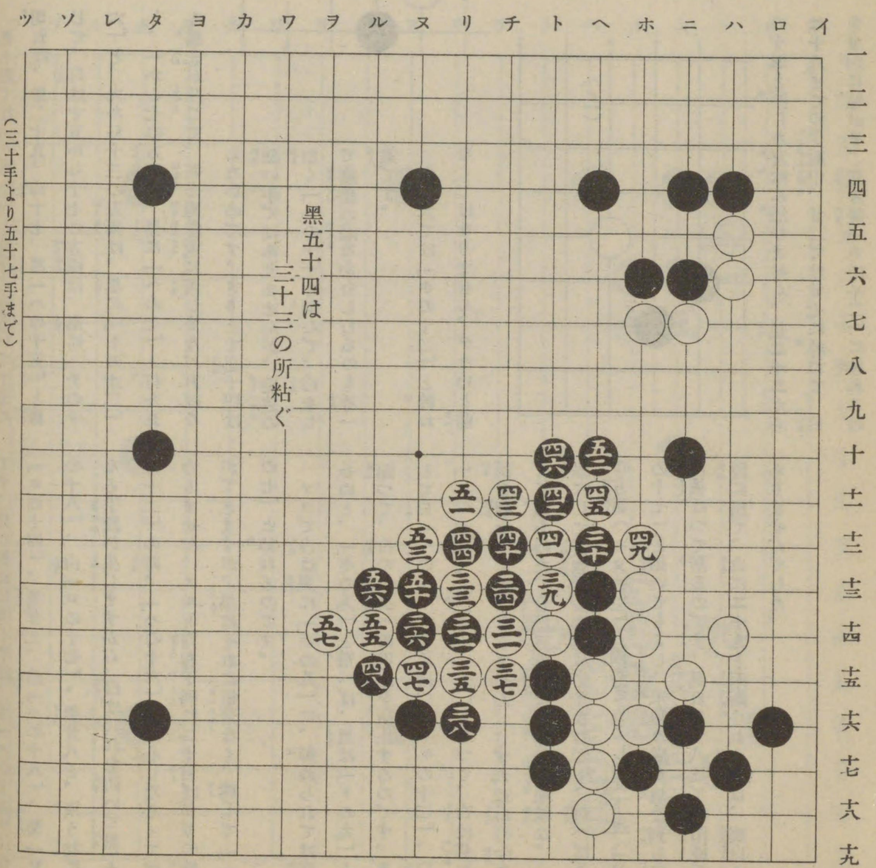


（乙）

黒**十四**では「への十」と飛び、白尋いで十五に切れば、黒二十九、白十七、黒「ハの十五」と應じて、白は十五から十七の方面は、黒に「チの十六」と、九から十三の方面は、黒に「への七」と打たれると、一から七の方面は、黒に懸念が生じて、甚だ應急策に苦しまなければらないのです、さりとて黒十四は惡い手ではありませんが、前述の如く「への十」と飛んで、白をしてす、此の綽ねに次ぐ手は、黒「ハの十五」、白「ロの十四」、黒廿二、白「ハの十八」、黒「ロの十八」、白「ロの十七」、黒廿八と、斯う劫になる手段が生じますから、白は其れを防いで黒「ホの十二」の時、「ハの十六」と用心しなくてはなりません、スルト白右下隅に二十目ばかりの地ができますが、黒はそれに頓着なく、轉じて「への七」と綽ねるのです。

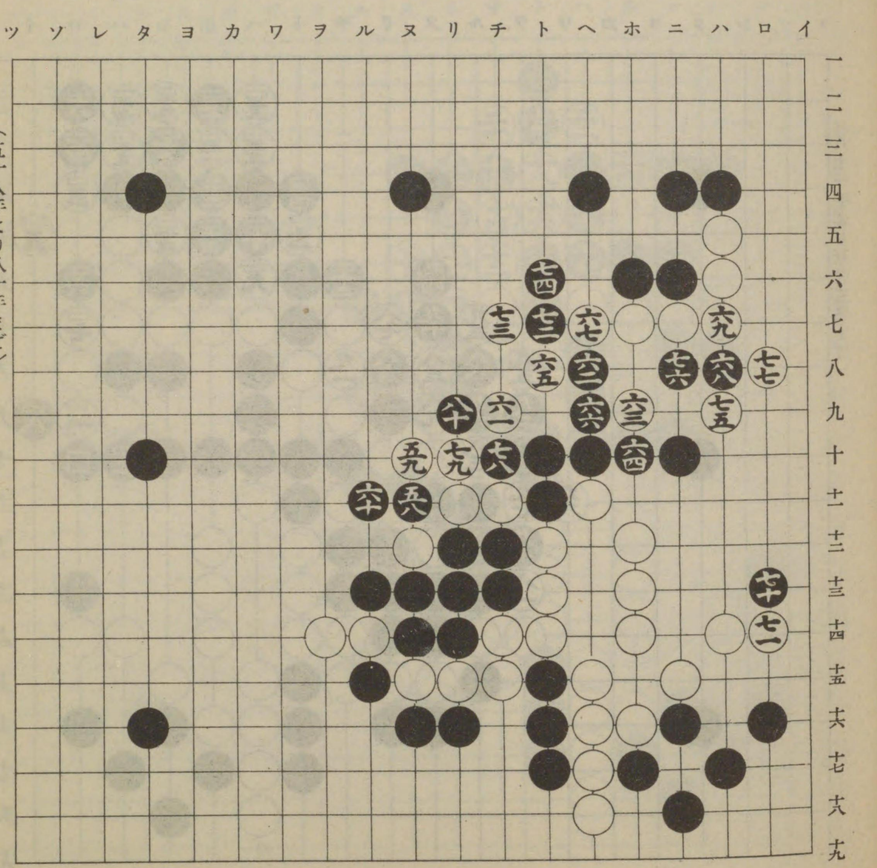
ソコで白は更に「ホの八」に、綽ねられては堪らぬと、「ホの九」と飛べば、黒は「トの九」と焙つて、白の中央への進出を阻止するのです、そして白「への十」に尖めば、黒「ニの十二」、白「ハの十三」、黒「チの十一」となつて、白は僅に活を圖らなくてはなりません、さすれば白の今までに贏ち得た、合計三十目にも滿たぬ地域は、一擧にして凌駕することができるのです、例へば八の方面へ「ヌの三」と固めてもよし、又下邊へ「ワの十七」と拓いてもよし、未墾の處女地は到る所に横はつて居るのです、其れを廿八までの消極手段に出て、白に**二十九**と兩斷されたのは、面白くありませんでした。

黒**三十**はい、手ですが、**三十二**と喧嘩腰に出て白**三十三**の時**三十四**と切つたのは、チト急に過ぎました、三十二では五十二の所へ飛ぶべきです、そして白「ホの十一」と覗かば四十九に出て、次に白「ニの十二」なら「ニの十一」と切るのです、と「ホの十一」の白は、忽ち擒となりますから、黒四十九の時、白「ニの十一」と出れば、黒は「ニの十二」と押し出して、右下隅の白に眼形が備らなくならうといふものです、所が黒は**三十一**と出た白を、取らうといふ野心に驅られ、**四十九**迄の應接を重ねて、三子を犧牲に供したのは不覺でした、此の應接中白三十五、三十六の交換なしに、三十五で三十七に出ると、黒に三十五に押されて白の三目は脫出の途がないのです、黒**五十二**は「ヌの十一」に絡ねなくはいけません、ソコで白「リの十」と出たら黒「チの九」と尖むのですが、此の尖みには次に「ルの九」と懸けて、白の三目を取らうと云ふ意味をも含むのです、其れは即ち白「リの九」、黒「リの八」、白「チの八」黒「ヌの九」、白「トの九」、黒「ヌの十」と運ぶのですが、白又「リの十」て、「チの九」なら、黒「トの九」と押す其には「リの九」が伴ひます、デ白に**五十七**迄と運ばれたのは更に悪いのです。



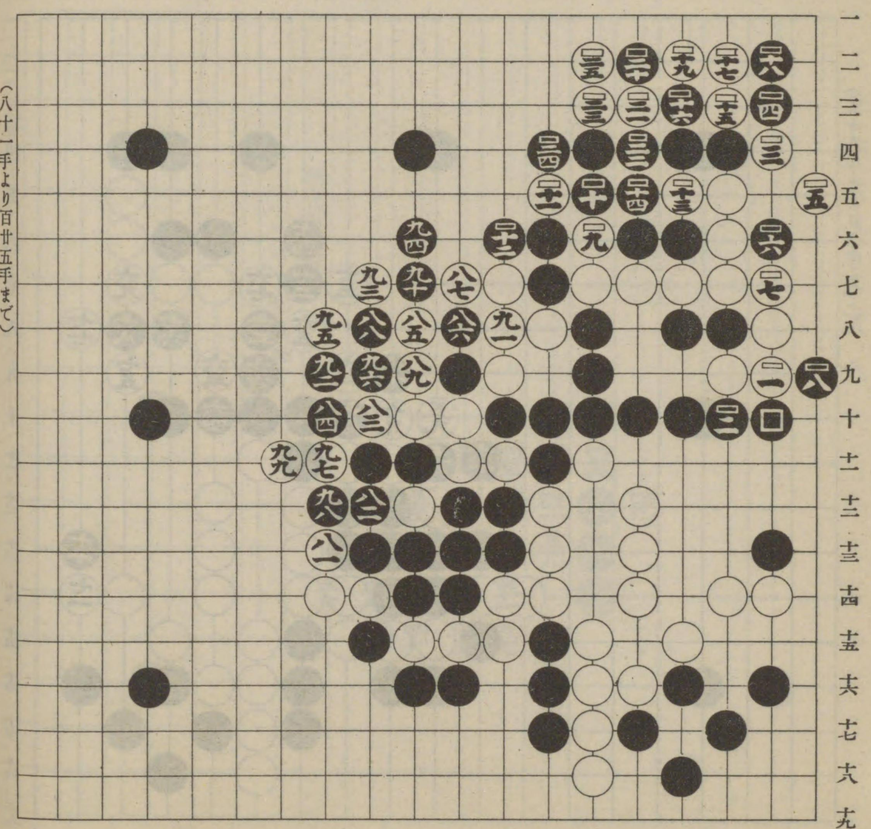
（三十手より五十七手まで）

黒**五十八**の手を抜けば、白から「ヲの十二」と懸けられて、黒「ルの十二」に出ると、白六十、黒五十八、白「ヲの十三」て黒は沒落です、五十九、六十の交換に尋で、白**六十一**と飛んだのは、黒に七十九に切られて二目を捕獲されると、左右の黒が一團となつて、俄かに其の勢力を加へますから、白は斯う飛んで、肝腎の二子を掩護したのです、黒**六十六**は大變惡い手でした、其れは當然六十七に約へて、白六十六の時「トの九」と切るべきです、スルト「チの八」の切りと、「ニの九」の當てとを睨んで、白には由々しき脅威となります、其れを六十六と粘いだ結果、黒遂に慌て出して**七十八**、**七十九**と交換し更に**八十**と切つて、其處を突破しやうと試みたのですが、黒は其れよりも七十八て「ロの十」と覗き、白「ロの九」なら「ハの十」と粘ぐのです、ソコで白七十八に詰めると、黒から「ロの五」と絡ねられて、攻合は白の負けとなりますから、黒「ハの十」の時白「ロの四」、黒「ロの三」、白「ロの五」と運び、其處で黒七十八、白七十九、黒八十と戰ふべきです、さすれば其の結果次第で、更に「イの九」と、白の活路を奪ふ手だても殘ります。



（五十八手より八十手まで）

白**八十一**から、**八十三**迄と運んだのは旨い手です、黒の**八十四**と防いだのは、白から九十七に綁ねられては、堪らないからですが、尋いで白に**八十五**と懸けられて、折角の「リの九」の一子を、敵手に委ねたのはまづいのです、とにかく黒は此の邊で、篤と全局の利害を打算し、先づ八十四で八十六に覗き、ソコで白九十七に綁ねて黒の十一目を取らば、黒九十一に切つて、百の覗きを見てはどうかと思ふのです、そして白百二に抑したら「ワの十七」に拓いて、落伍の狀態に在る、「ルの十五」外五目の黒を收容するのも一策です、併し局面の大勢を見渡せば、白の確定地域は十一目の取りに依る廿二目をはじめとして、三目の打拔き其の地の厚味を合せて、既に六十目位ゐを算するのですから、たとひそうなつた所で、黒の今までの腕前から見ると、勝局は覺束ないかも知れません、が併し八十四から**九十七**までの運びで、支離滅裂となつたのに比べれば、まだまだ遙かに運命は長かつたでせう、就中其の手順中黒**八十六**及び**九十**の二着は、最も不用意でした、デ八十六では八十八に頂け、九十では九十三に行びて居べきです。



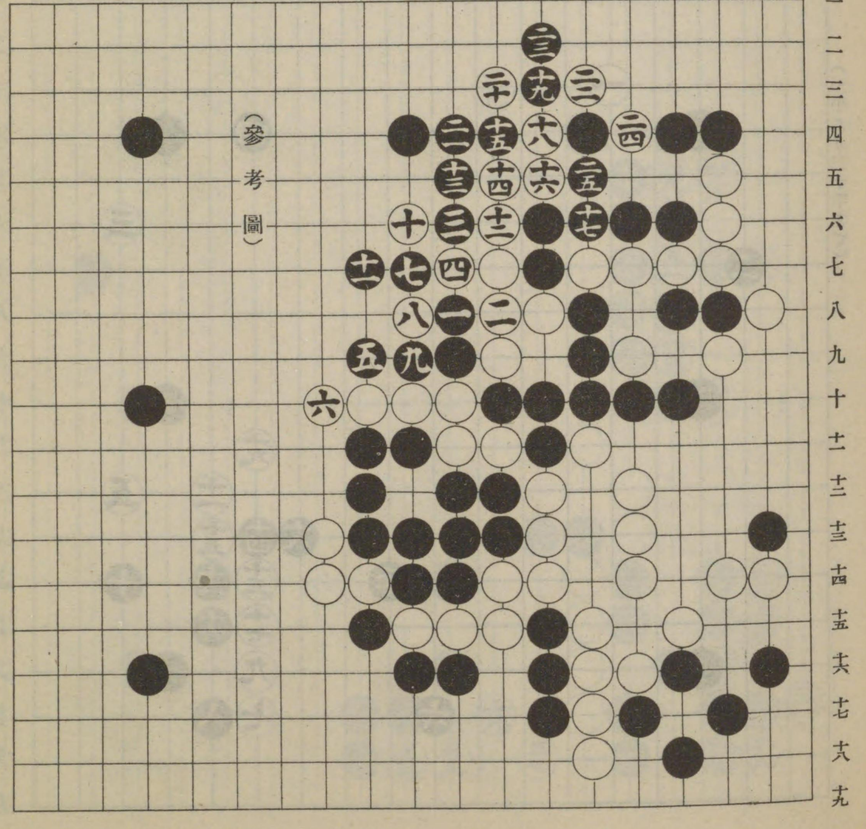
（八十一手より百廿五手まで）

本局の研究に就き、對局者よりの來書に曰く。

（前略）黒八十四で八十六の行び、其八十六を一とする、別紙參考圖の如き運びに出ると、終に廿五までゞ、白の九目を取られる事になりますが、此の手順中白四で十二の方へ出れば、十六までとなつた時、黒四に粘ぎ白十七に二子を打拔き、ソコで黒六に綁ねても、白五、黒「ヲの九」、白「ルの八」、黒「ヲの八」、白十一、黒「ヲの七」、白「ルの六」、黒「ヲの六」、白「ルの五」、黒「ヲの三」となる攻合は、白ダメ七手に對し、黒のダメ六手で倘ほ白の先手、シテ見れば黒八十四で八十六なれば、白九十一に粘ぐ手も有つたかと存じます、如何。

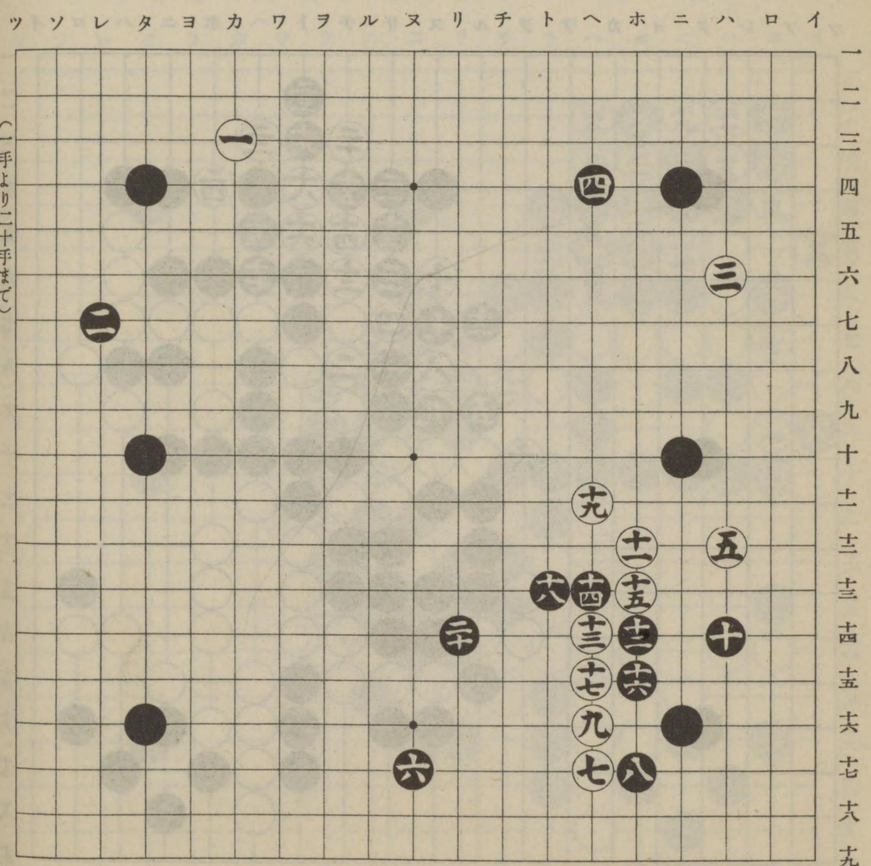
其の變化は對局者の、研究通りに違ひ有りません。

初心の中はとかく大局を達觀する明を缺く爲め中道にして一度蹉跌しますと、忽ち步調が亂れて徒らに氣をあせり、却つて一步々々逆境に進み、遂に浮ぶ瀨のない深みへ陷るのですが、此の一局の如きは最もこうした、初心の弱點を暴露したものであつて、**百二十五**を手止りに黒は投げましたが、其の實**九十九**の時もう明らかに、勝負は決して居たのです。



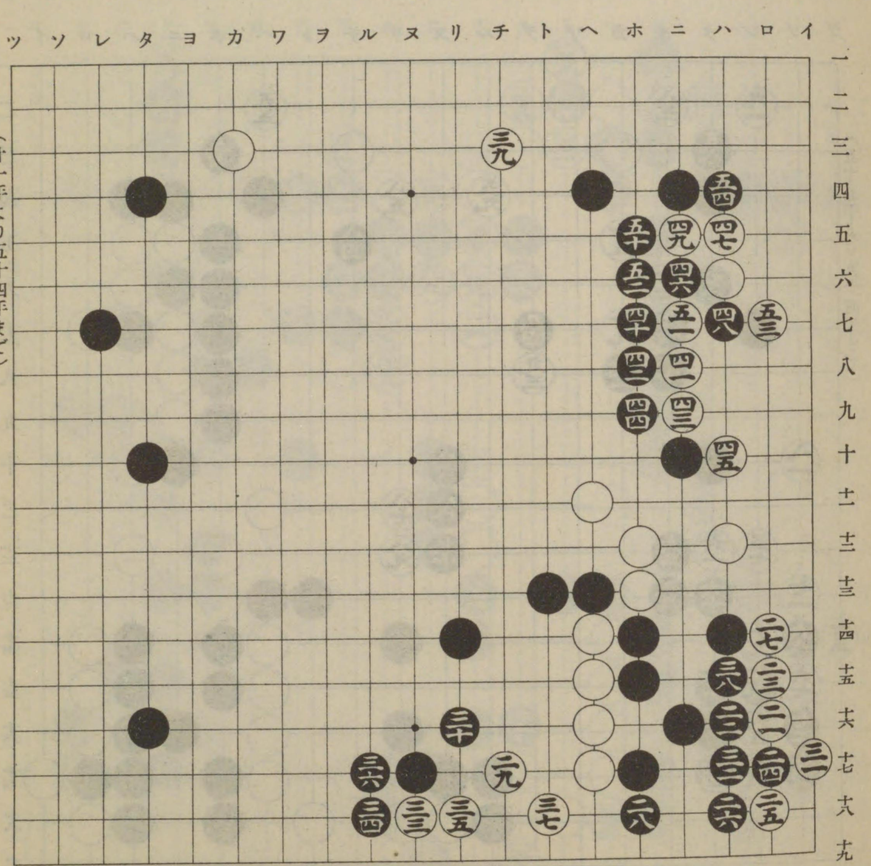
六子局

白は某七段、黒は靜岡縣の某刀圭家です、本圖の碁は黒の勝局に歸した郵便碁ですが、某は此の郵便碁の研究で、二目の上達を遂げたのです、黒**六**は「ヌの三」と拓くべきで、其れは前に黒四と應じた時、白五を「チの三」と詰めて來たら、黒「ハの五」、白「ニの六」、黒「チの五」、白「ヌの四」と應接して、黒「トの九」と、白の三及び「ニの六」を包圍するのです、其の目的は白を內部にちいさく活かして、己れの外壁を厚くしやうといふのですから、黒六では「ヌの三」と拓かなければ前の四の意義に伴はないのです、白**七**の時は白五が十の所にあれば十六の所へ懸けられていけませんから、手は拔けないのですが、五にある時は手を拔いてもいゝのです、從つて黒六の精神は白七と來たら、「カの十六」、白また「カの十七」と來たら、九に搆へべき筈であります白**十一**は黒の「ニの十二」の頂を防いだ手、白**十七**は惡い手です、「トの十四」に行くべき所、白**十九**は黒にソコへ懸けられては堪りません、黒**二十**は好着で、白若此處を閑却すれば、黒に「チの十七」と詰められて、殆ど活路を失ふのです。



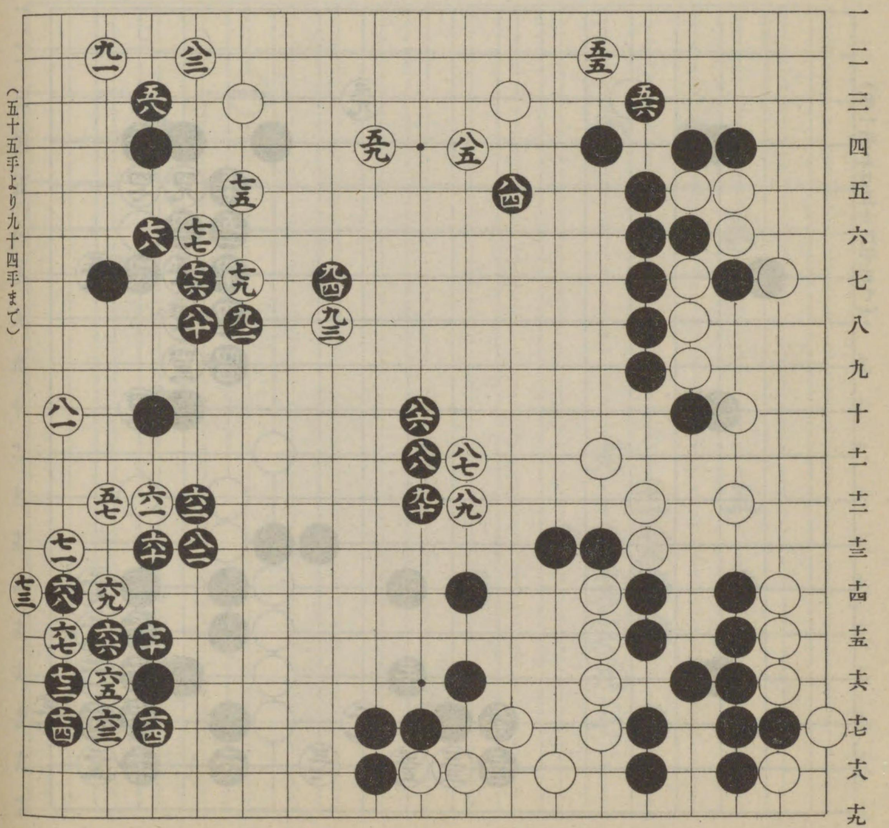
（一手より二十手まで）

白**二十一**は七以下の四子を攻略される處れが有りますから、側面から其れを牽制した手段です、デ黒**二十二**から白**二十七**までと交換して、白をわたらせましたが、白**二十五**の時、黒苟且にも三十一に下れば、白に「ニの十八」と飛ばれて、三十二の切りと、廿八のわたりとを見られるのです、又白**二十七**で三十一にわたれば、黒廿七、白三十二、黒「ニの十八」となつて白の五目は助りません、黒**三十**は「リの十七」と突き當るべきでしたスルト白は廿九以下を活きるのに、非常の困難を感じるのです、だが白の斯く**三十七**までと、辛うじて活きたのも可なり苦しかつたのです、黒**三十八**は手を拔いて「ヌの三」又は「レの十三」と搆へ、白三十八に取りに來たら、黒「イの十八」白「イの十九」、黒「イの十六」、白「イの十五」黒「ニの十四」、白「ハの十三」、黒「ヘの十八」と應接して、黒は「ヘの十九」の活きと、「チの十六」の眼缺とを見るのでした、黒**四十二**で「ハの十一」と尖みつけ、ソコで白「ハの十三」に突き當つても、「ロの十二」と下つても、黒は「ヘの十」と飛びつけて居る手段がありました、**四十六**から**五十四**までと、黒後手を引いたのは面白く有りません。

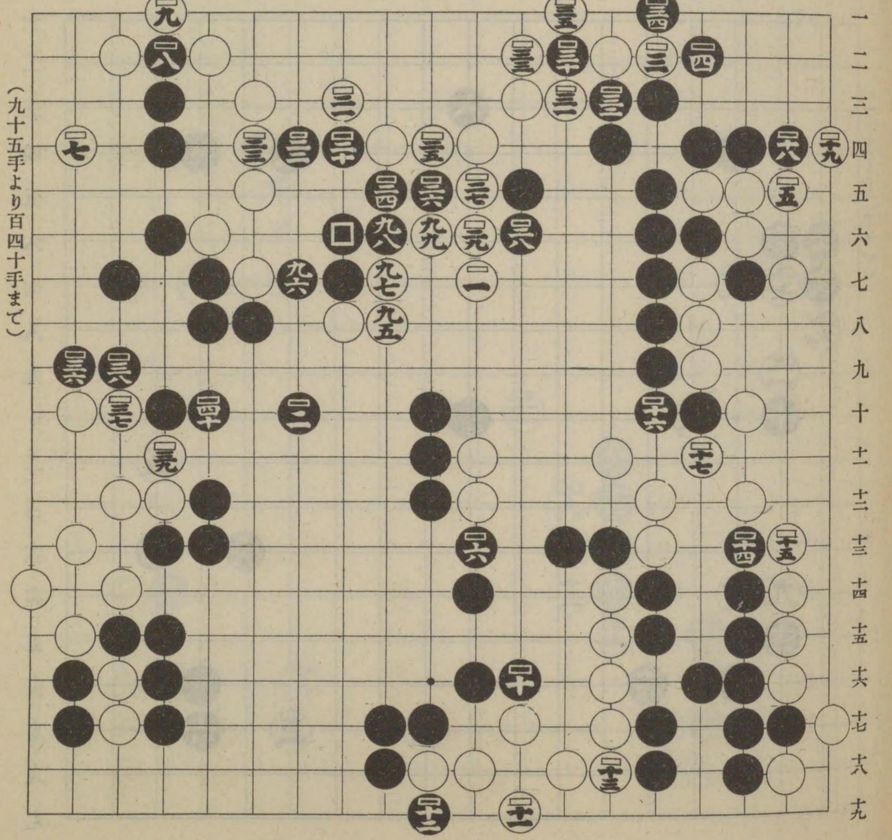


（廿一手より五十四手まで）

黑五十六は、白にソコへ覗かれて、黑「ホの四」白「ハの二」となれば、黑の地が潰れて、眼形に影響するゆゑ、斯う受けるのは肝要です、白**五十七**を五十九で、黑に「レの十三」に圍まれますと、「タ」の線を縱貫した左邊一帶は眞黑になつてさながら地表に露出した、炭脈のやうになりますから、白は其の未だ十分整はざるに乘じて、敵地の分割に就いたので、ソコでたとひ黑に六十九に夾擊されても、既に斯う一着した白は、けして沒意義には終らないのですが、此の場合黑から「ヌの三」と打込まれると、「ホの九」までと築かれた、黑の長壁に有する威力を利用されて、白は何かと足掻に苦しむのです、故に黑は**五十八**で「ヌの三」に打込むべきでしたが、白に**五十九**と圍はれたのは緩い交換です、黑**六十**は普通は六十九に詰めるのですが、黑の「リの十四」に有る、此の模樣に於ては斯う六十と肩を衝いて、白**六十一**の押に**六十二**と絡ねたのは好手段です、此處で白八十二に切れば、黑は「タの十四」と引き、白又「ヨの十一」と絡ねれば、黑「レの十三」と約へつけ何れにしても白は難儀ですから、**六十三**と轉じたのですが、黑**九十四**迄は申分なく、就中**八十六**は好着。

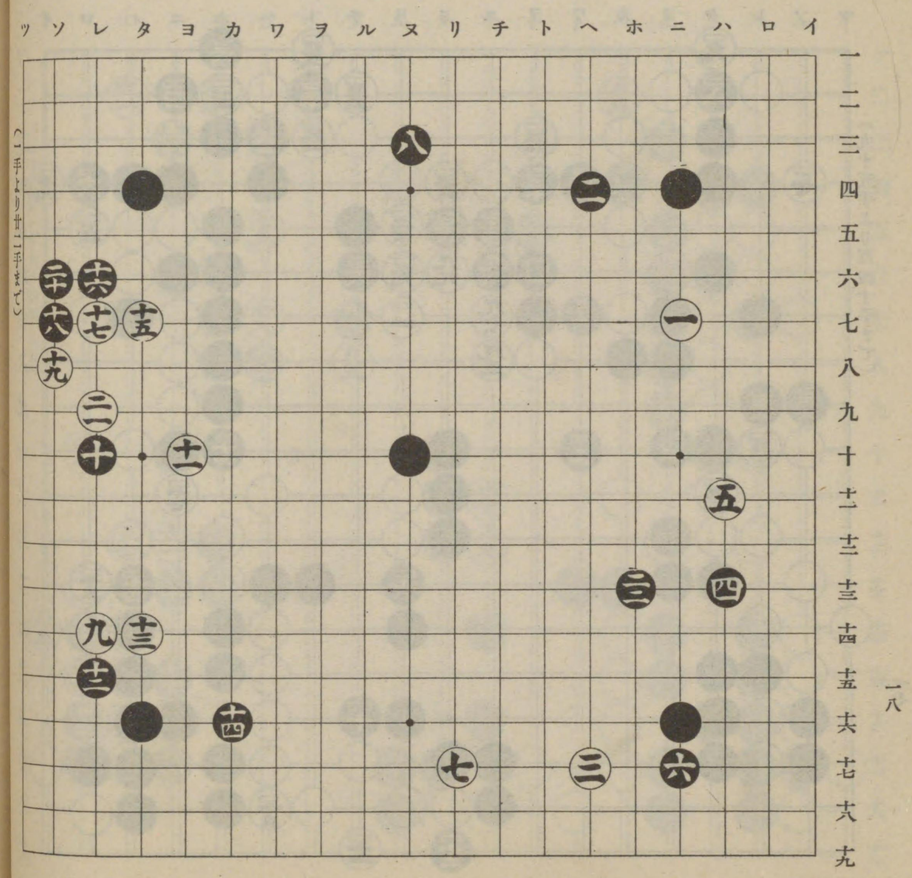


白**九十五**で九十六に切つて、黑「ワの八」の時白九十五に行びたり、九十七に抱へたりしても、黑に「ヲの九」と先手に止られてまづいのです、然かも其の先手で黑百十に押し、白百十三に應じ黑「ハの九」、白「ハの八」、黑「ハの十一」と運び、そして白「ロの九」に一目打ち拔けば、黑は「ホの十一」と尖み頂けて、「ヘの十二」の切りと、「ロの十一」の下りとを睨むわけですが、黑「ハの十二」の時、白百十六、黑「ロの十」、白百十七となれば、黑「ロの十二」、白百十五、黑百十四、白「ニの十二」と運んで、黑は「ロの八」と當てるのです、ソコで白「ハの十」に劫を取り、黑「トの十六」に劫立して白百十一に活き黑「ニの十」に劫を取り返すといふ工合で、白には劫立がないのです、さりとて黑に「ハの七」に四目打拔かれては堪りませんから、オメオメ其處へ粘げば、黑は更に百五に絡ねて、大いに得をしつつ飽くまでも劫爭ひを續け、白ソコで劫を取れば黑は百十二に劫立して、一目の損もなく運びますが、萬一此の劫を白に讓つても、其れに換る二着を占め、十分黑は優越の地歩を占めて、天下に號令し得るのです、凡そ是等の手順が自在に運べるやうになれば、彼岸も遠くはないのです。

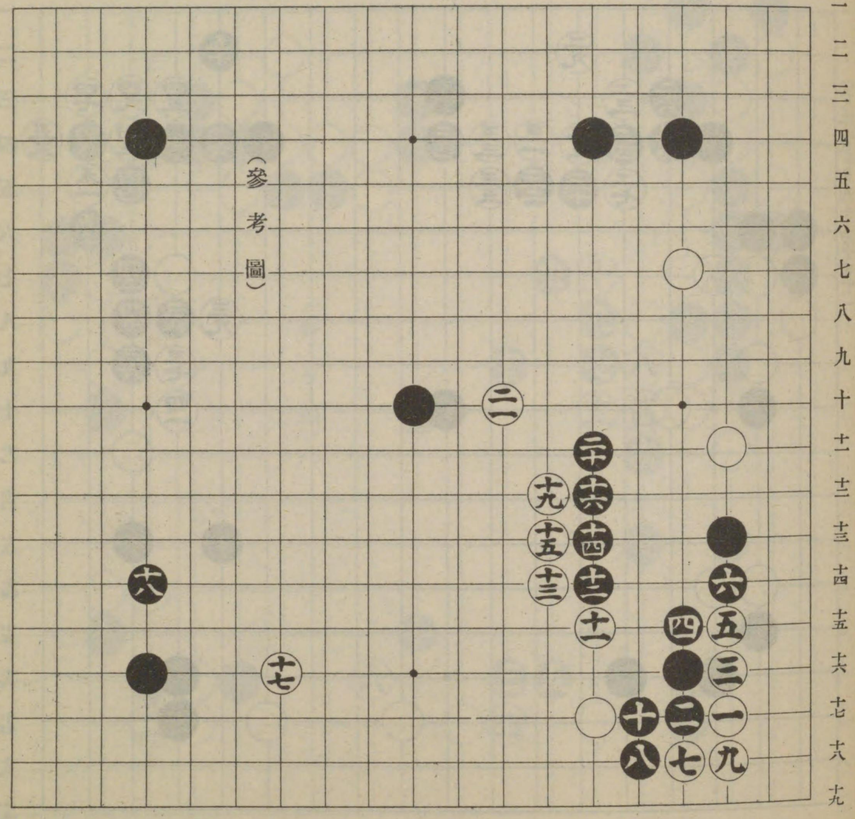


五子局

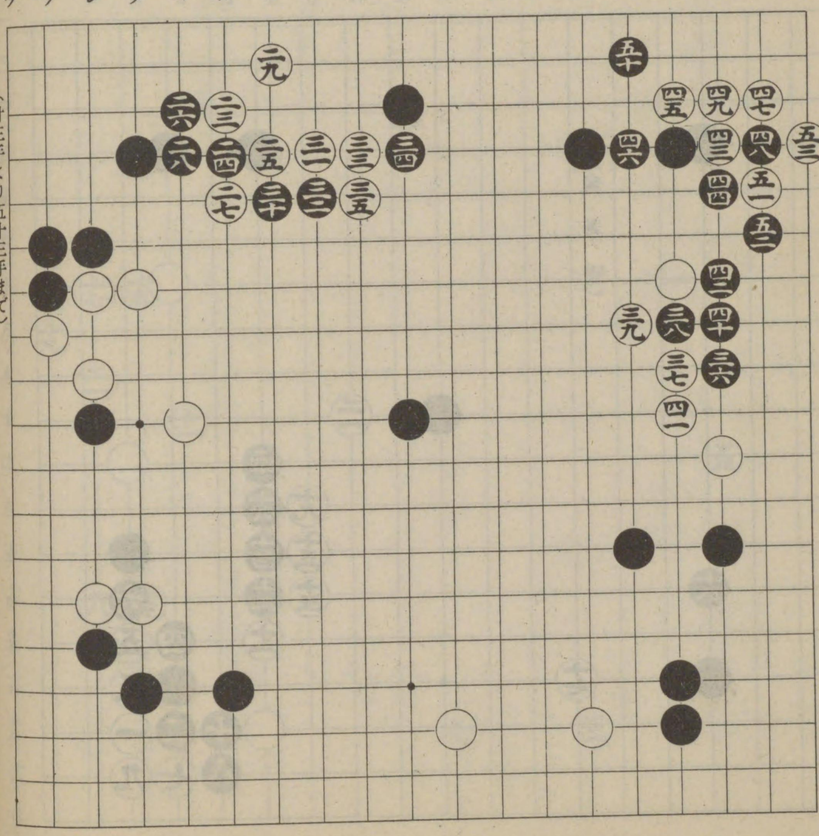
白は某七段、黒は靜岡の某銀行家、郵便碁の手合で白中押勝ちとなつた碁です、黒六に次ぐ白七は、黒に其處へ詰められると、三が孤立に陷るからですが、其の黒六を打たぬと參考圖の如く、白一から十一までと運んで、其の時黒「トの十七」、白「への十八」、黒「トの十八」、白「への十九」となりますと、此の「への十九」が所謂唐人の泣き手なのです、昔遙々來朝した唐土の棋客が、我棋士との對局に當り、斯う下られて泣いたと云ふ傳說付きの妙手なのです、其れは次に黒「への十六」、白「トの十六」、黒「ホの十六」白「ホの十九」と運んで黒「ホの十四」と粘ぎ、白「チの十七」に綽ねるといふ順序で、黒の二目は、頗る困難に陷りますから黒は十二と頂けて二十までと交換したのですが、二十では「トの十一」と綽るのが宜しい、又白十三で「トの十五」と行びれば、黒は「ホの十四」と引くのが定石、ソコで白廿一と斜走して、黒の二十と「ヌの十」の置石とを中斷する、此の手順中、白十七黒十八の交換なしに、廿一までの運びを採れば、黒に「ワの十七」と先着されて、白の模樣は丑刻帶のやうに薄くなるのです。



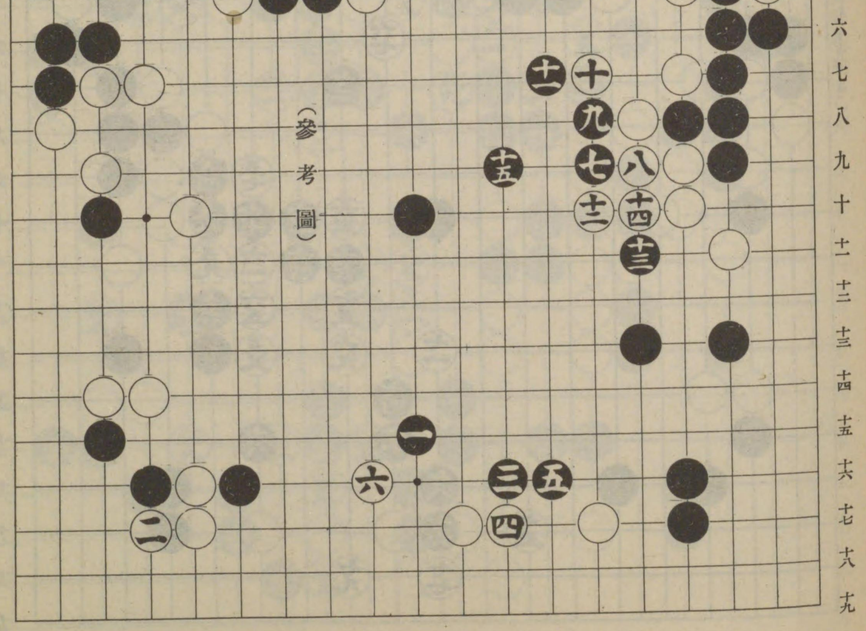
本圖に戻つて、白十一の目的は黒に「タの八」と應じさせ、次に「カの十七」に夾み返さうといふので、其處には黒十四白「ワの十六」、黒「カの十五」、白「ヨの十七」黒「タの十七」とでも交換して、白は「レの十一」に頂け、其の方面の折衝の結果、先手を取つて「レの三」に入らうと斯ういふ含みもあるのです、だが其れを黒十二、十四と運んだのです、白十五は黒此處で「ヨの十一」と頂けて、白「カの十一」黒「ヨの十二」、白「レの十二」と斯う運び、黒「タの十一」と粘ぐのは、「ヨの十一」が如何にも働きませんから黒「ヨの十一」で「ヨの九」に頂ければ、白「タの九」、黒「タの十」、白「ヨの十一」、黒「タの八」、白「ヨの八」、黒二十一、白「カの九」、黒「ヨの七」、白「タの九」と劫を取つて、其の時黒「チの十六」、其の他どこへ劫立しても、白は其れに應ぜず「レの八」と打拔きます、ト云つて黒「ヨの七」を十七に綽ね、白「タの九」、黒「レの八」白「タの六」となるのも、黒は面白く有ません、是れ卽ち白の十五と懸つた意味ですだが十六から二十一までと、黒十の一子をムザムザ遺棄したのは、惜むべきです。



黒**二十四**は廿六に尖みつけて、白廿四の時「ルの十七」に詰めべきです、スルト「ホの十三」が大に活躍して、白の「ヘの十七」と「リの十七」とは、非常に薄くなります、黒**三十二**は「ヌの五」と飛ぶのが良く、黒**三十四**は俗手でした、此の手では「カの六」と抱へなくてはなりません、が**三十六**の打込から、延いて**四十二**までの運びは、總べて好着でした、其れは「ホの十三」と飛んであるおかげですが、其の中の白**三十七**で四十一に尖めば、黒三十七、白「ホの九」、黒「ホの十」、白「ホの十一」、黒「ヘの十」、白三十九となつた時、黒「ロの九」と下つて「ロの十一」の頂けと、「ハの六」の接續とを見つゝ、白は兩斷されるのです、黒**四十四**は四十五の方へ受けべきですそして白四十四、黒「ニの六」、白四十九、黒「ニの二」となつて、白「ホの七」、黒「ハの六」と換ると、白は隅の三目を活るのに困りますから、「ホの七」で「ハの二」と約へ、黒「ホの七」に打抜く順になるのです、又黒四十五に受けた時白四十九に約へれば、黒四十四、白五十一、黒五十二、白「ニの五」、黒「ハの六」、白「ニの二」黒五十と運んで、白「ロの二」と懸けつぐのですが、其の時黒「ニの一」、白「ハの一」、黒「ハの二」と劫に出れば、白は何處でも黒に二着を讓つて、「ロの一」に打抜きます、デハ白其の劫立によつて、「ヨの十七」「ヨの十六」と突貫いたものとしませう。

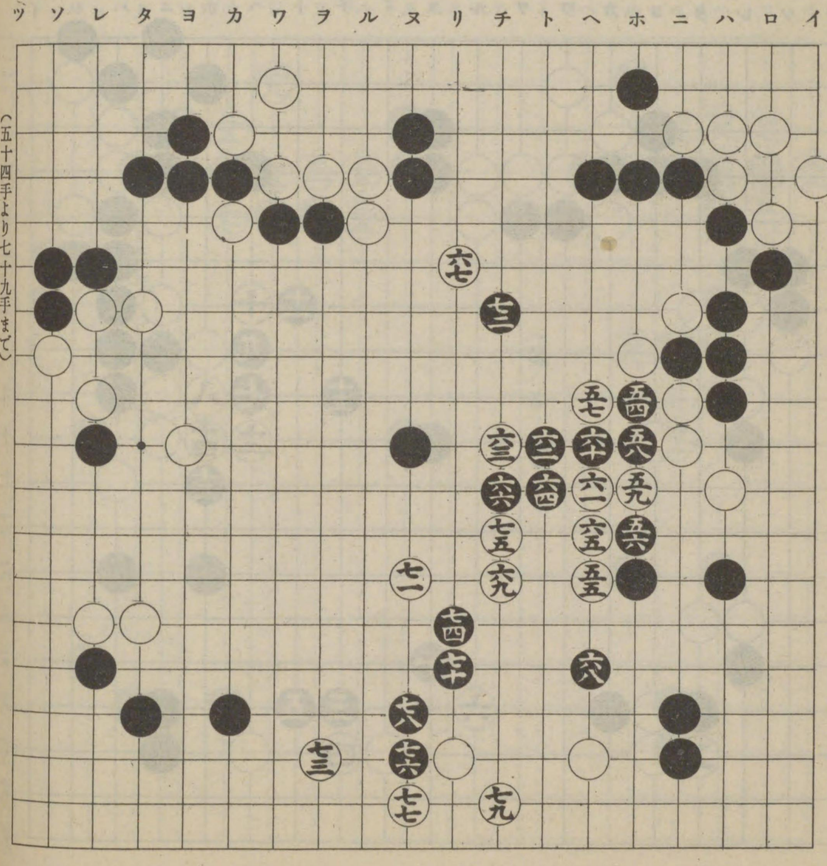


ソコで黒「タの十七」、白「ヨの十八」、黒「タの十八」、白「ソの十五」、黒「ソの十六」、白「タの十五」、黒「レの十六」と活れば、白に大きく「ヌの十四」と圍はれますから、黒其れを防いで、別掲參考圖の如く、一と白の動靜を窺ひ、白其の時六に應じれば、黒「ルの十五」、白「ヲの十六」と交換して、黒二に活きますから、白は折角劫立の意味を承けて二と曲り、黒は三から五までと運んで、次に「ルの十七」に詰めやうと云ふふくみ、デ白それを六と防いで、十五までの應接を重ね、十四以下の白は困難に陷るのです、故に黒四十四で四十五に受くべきものを、本圖の如く**五十三**までと、易々白を活したのは失態でした。

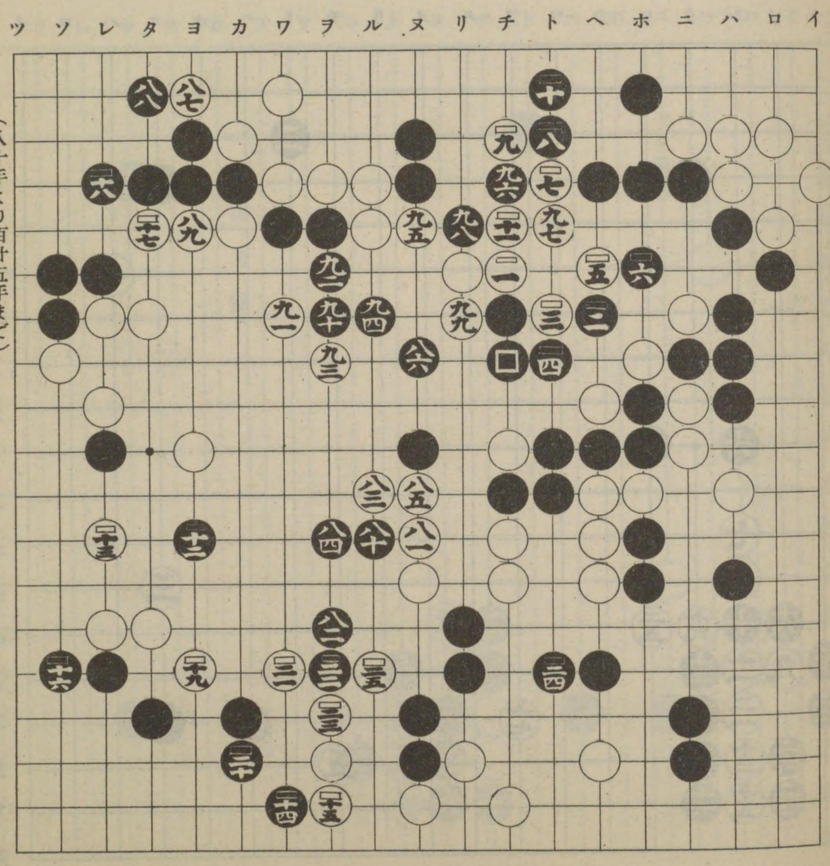


黑**五十四**の時、白五十七に征にかけても、其の針路に當る角道が、「カの十六」の黒の、「ワの十六」の面に當るので其れは取れませんが、「カの十六」の黒が、若し「ヨの十七」に在る時には、角道が其の「カの十七」の面に當つても、最後に白「ヲの十八」、黒「ワの十七」、白「カの十七」黒「ワの十八」、白「カの十八」で、黒は逃れないのです、故に斯ういふ場合白黒共に、征の當りが「カの十六」なら黒がよし、「ヨの十七」なら白がよしと云ふことを、直感するやうに努めなければなりません、されば其の征の安全なのを見て斯う五十四と切つたのは鋭い手でした、此處で白「ヘの八」、黒五十七と交換するのは重いからと白五十七、黒五十八、白五十九、黒六十、白六十二、黒六十一、白六十五、黒六十四、白五十六と運んで、黒に六十六に行びきられるのは面白くありませんから、白**五十五**と頂けて**六十一**までとなつたのですが、黒**五十六**は五十七に行び切るのです、そして白「ホの十四」なら「ニの十三」、白又「ハの十五」なら「ニの十五」で、恐れる所はないのです、白**六十三**は黒**六十四**の出を見越して、**六十五**に粘ぐ調子を採り、更に**六十七**に黒の其處へ關ふのを防いだのです、黒**六十八**では「チの十六」と覗き、白「チの十七」、黒「ヘの十六」と白を兩斷する筋がいゝのです、黒**七十二**は頗る微溫的でした、此の手では「ルの十七」に詰めて、白七十八に尖み出たら、黒は「ルの十四」と白を隔てるのが宜しい、白**七十九**は肝要の手です、其れを若し「ルの十七」に突當つても、「ルの十八」に引いても七十九に覗かれる手が殘るのです。

黒**八十**は**八十一**に頂ける筋で、そして白に「リの十三」と粘がせて、強く「ルの十三」と絆ねまくる手を見るべきです、其れを八十から八十五まてと應接して、却て白を調へさせたのは、面白くありません、白**百一**は百十一に當てゝ、黒に「リの四」と粘がせる、交換を了して置く機會でした其れは後に圖の如く、黒**百十**となつた時白「ヌの二」と頂けて、黒「リの二」、白「ルの三」、黒「リの三」、白「リの一」、黒「チの二」と、斯う先手ぎめが利くからです、そういふやうな意味で黒は、白の**百十一**の時ことさら「リの四」に粘がなかつたのです、斯うして黒は**百十二**から**百十六**まてと、着々實利を收めましたが、進んで白に**百二十五**と切られて、所謂千日に刈つた茅を一日に燃して了ひました、ト黒は**百十六**て**百二十一**に連絡しなかつたのが、敗局の因となつたのです。



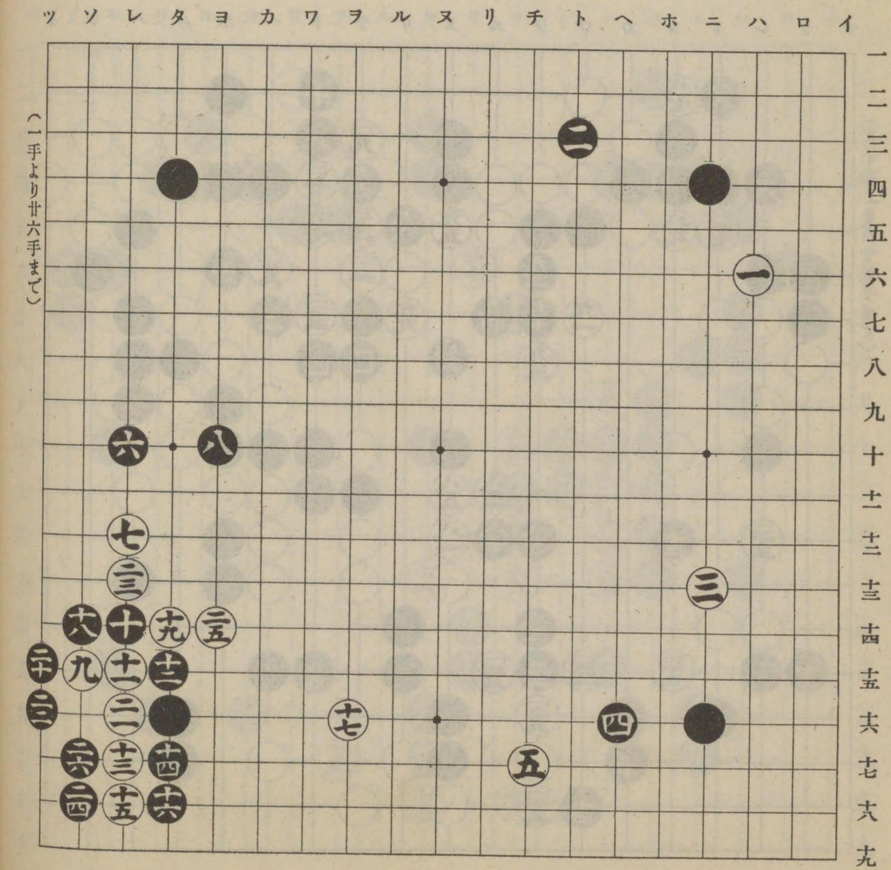
（五十四手より七十九手まで）



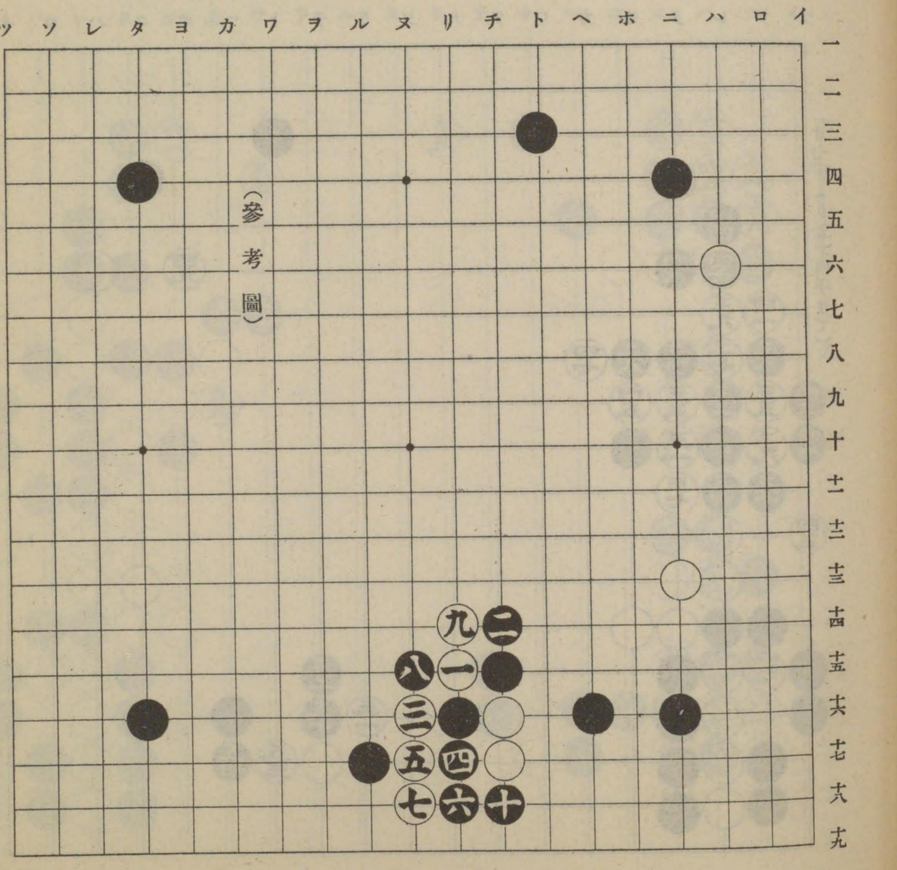
（八十手より百廿五手まで）

四子局

白は中興の名人として、將た方圓社の創立者として知らるゝ、故村瀨秀甫八段、黒は南部藩士にして二段の棋客、故三戸與彰と云ふ人で、遂に打懸けとなつた局面です、黒**六**では「ル の十七」と五の白に薄る手もあります、其れには次に黒「チの十六」と頂け、白「リの十六」に綿ねれば、黒「リの十七」に切るといふ順序で黒四と「ル の十七」とが大に他足となりますから、結果は勿論黒がいゝのです、又黒「チの十六」を「リの十六」と懸けて、白「チの十六」なら「チの十五」と約へるのです、ソコで白「リの十七」、黒「ヌの十六」、白「ヘの十八」、黒「ニの十八」、白「ル の十八」黒「ヲの十八」、白「ヌの十八」、黒「ワの十七」と運んで、小さく活きるのは白の本意で有りませんから、黒「チの十五」の時、別掲參考圖の如く白一と切つて七までとなつた折、黒に機會に八と切られて白九と交換するのは、甚だ白が重いのですが已むを得ません、白九で十に當て、黒九の時「リの十九」と渡れば、黒「ル の十六」に約へるのは言ふまでもありませんが、ソコで白一の所へ三目を取り、黒は「ヲの十五」と懸繼いで、其の威力は中央に伸びるのです、デ斯う黒十までとなつた場合、白「ト の十七」と出れば、黒「ト の十八」、白「ヘの十七」、黒「ホの十七」、白「ヘの十八」黒「ホの十八」で白は自滅するのです、故にたとひ白「ト の十七」で、先に「ホの十八」に覗いて來ても、慌てゝ黒「ト の十七」と、二目を取る必要はなく、「ホの十六」と應じて妨げないのです。

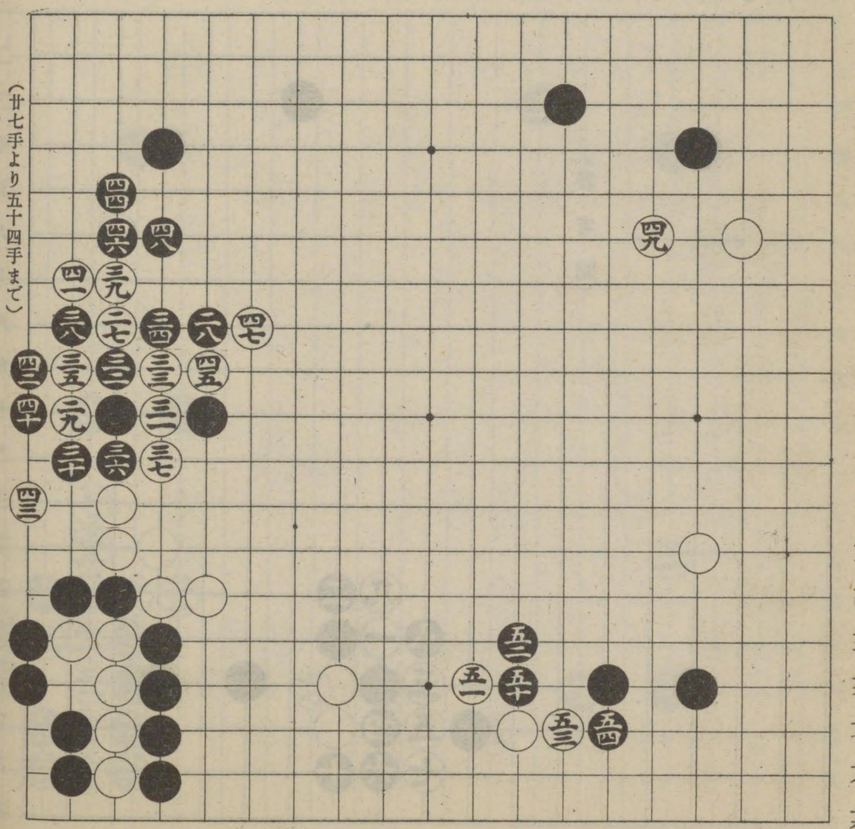


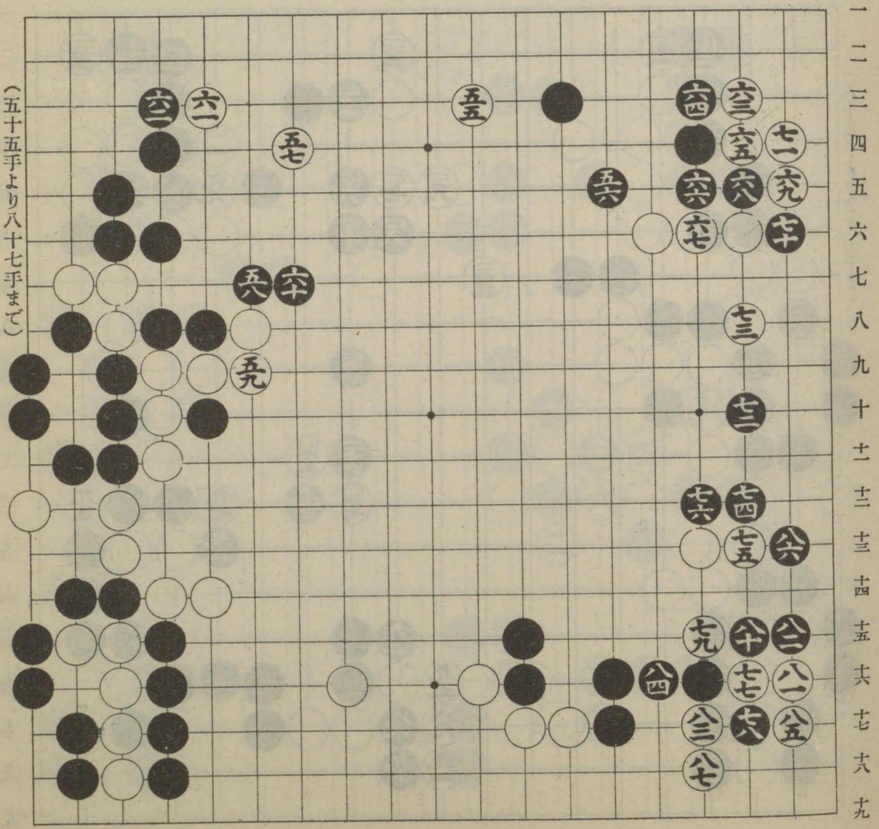
前述の意味で本圖黒六を「ル の十七」、白「チの十五」、黒「ヘの十四」と云ふ調子もいゝのです、白**七**は黒の**六**と「タ の十六」の置石とを、離間したのですが、此の手で「カ の十七」に懸れば、黒十九に飛んで、理想的の陣形となるのです、黒**十**は十一に尖みつけて、次に白「ソ の十六」なら黒十、さなくば黒十を「ワ の十七」、白十三、黒十四、白十五、黒「ヌ の十七」と應じるのもいゝのです、黒十六で**二十六**までの變化となつたのは、面白くありません、但し黒十六は「ル の十七」がいゝのです、又此の手順中、白**二十五**で「ソ の十三」と當て、黒「ツ の十四」、白二十六、黒「ツ の十七」、白「ソ の十九」、黒「ツ の十八」、白「ツ の十三」で、一時持にはなりますが、黒に「タ の十三」と切られて、それは破れます。



白**二十七**は此際黒に「ヨの十二」に覗かれて、「タの十三」に粘ぐのは、最悪の手ですから、「ヨの十三」と粘げば、黒「ヲの十五」に頂けて、次に白「ワの十五」なら黒「ワの十六」、白又「ワの十六」なら黒「カの十五」と、白を兩斷しやうといふ所ですから、白は斯う二十七と打込んで**二十九**と渡ったのです、白**三十一**て三十六に切り、黒三十五、白三十一、黒三十二、白三十三、黒三十四、白四十五、黒「カの九」、白三十七となれば黒三十九、白三十八、黒四十、白四十一、黒四十六となって白が悪いので、白は斯う三十一と劃込んだのですが、ココで黒**三十二**を三十三に約へると、白三十六、黒三十七、白三十五と連絡するのです、そう運んでも黒は「ワの四」と轉じて惡くはないのです、進んで**四十四**迄となつた時、白**四十五**を「ツの七」と下れば、攻合は白の勝ですが、スルト黒四十五に粘ぎ、次に「タの十二」に切られますから、「ヨの十二」と粘ぐ位ゐのものです、併しそうなると黒「タの七」、白「ツの八」と交換した上、黒は「ルの四」と轉じて、雄大の搆へに出やうと云ふのですから、白は折角黒の七子を取ても面白くはありません、デ**四十八**迄となって、白は潔く三目を見棄てたのです、白**四十九**は左邊四十七と捲つた關係で、中央に大模樣を占めやうといふ計畫なのですから黒はそれを消すべく**五十**と頂けて**五十四**迄と運んだのですが、五十では單に五十二に冠し、そして「リの十七」の頂けを窺ふべきでした。

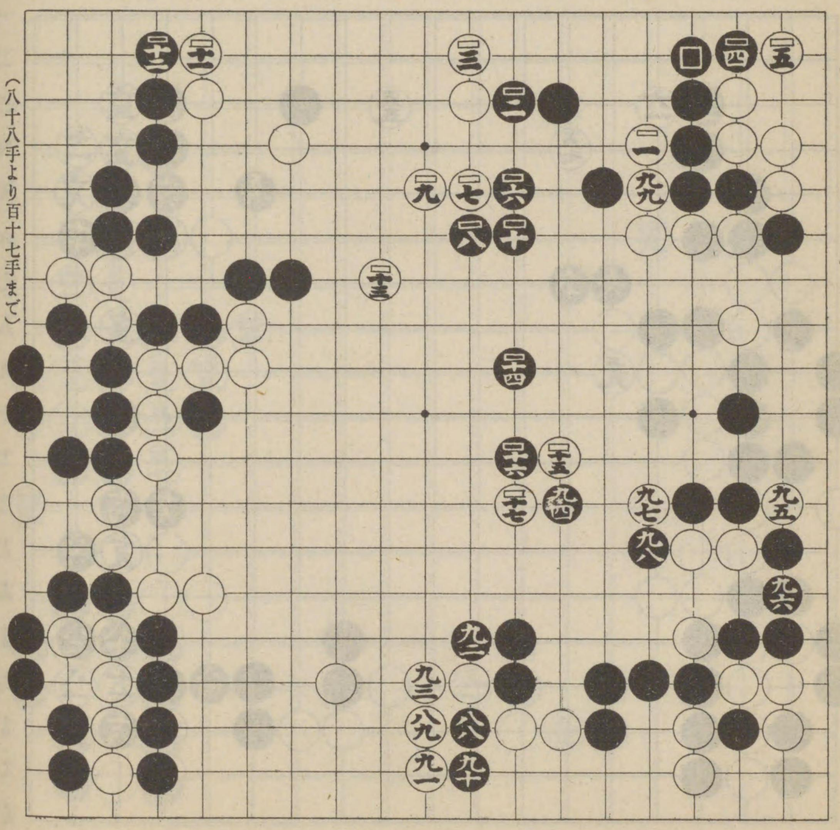
黒五十六では、先づ六十八に尖みつけ、白を七十に下らせて、然る後圖の如く、五十六と應じて、白の「への三」の頂を防ぐ、順序に出べきでした。白**五十七**は黒に「ヲの三」と詰められると五十五に脅威を受けますから、それを防いだのです、白**五十九**で六十に二段絆して、黒五十九、白「ワの八」黒「タの十二」、白「ヲの十一」、黒「ヨの十二」白「カの十一」、黒「カの十二」白「タの十三」、黒「ワの十二」と運べば、尋いで黒には「ワの十」と尖んで、白の六目を取る手がありますから、それを避けて白「ワの九」、黒「ワの十四」、白「カの十五」、黒「ワの十五」となれば、白は「ヲの十六」の方へ接續ができません、故に白は五十九と粘いて、**六十**と行びきらせたのです、黒**七十**、と切つたのは、白のどう應じるかを問ふた手で、若其處で白「ロの七」なら七十一に切つて、六十三、六十五の二目を取らうといふのですが、白**七十一**と粘いだゆゑ、**七十二、七十三**の交換に便じ



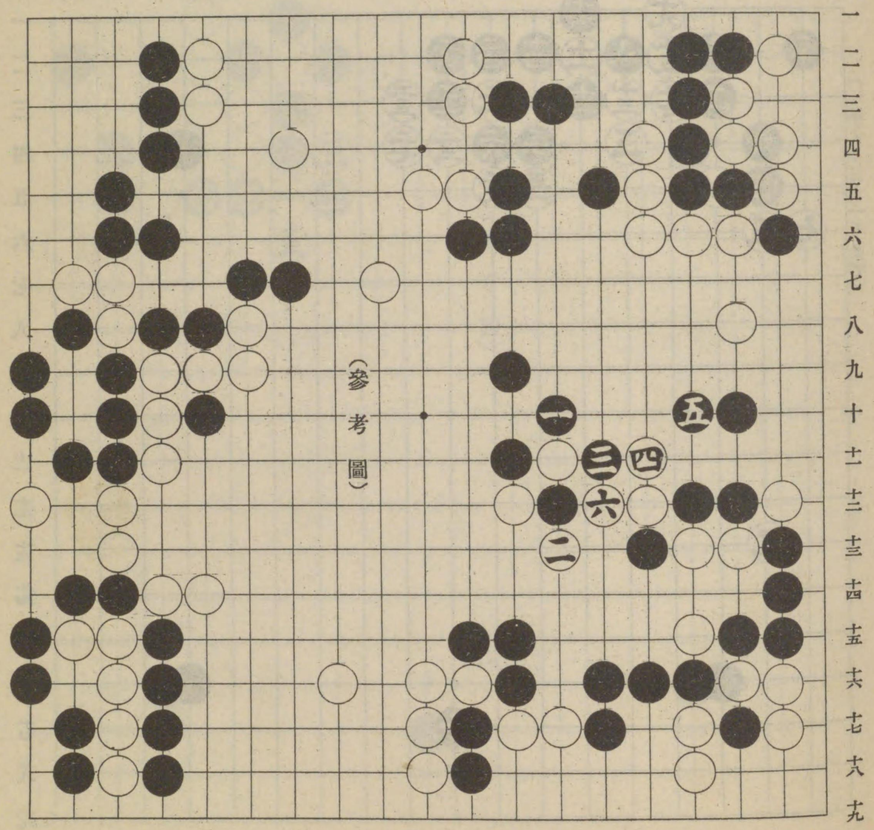


更に七十四から**八十七**までの運びを採つたのです。

黒**八十八**と切つてから**九十三**までは、黒「トの十八」、白「チの十八」、黒「トの十六」、白「リの十九」の交換で黒「トの十六」の味を調へた意味、黒**九十四**は白に**九十五**、**九十七**と手段されて、**九十八**と應じ、大分其處を侵蝕されたのみならず、尙將來白に「への十三」に絆出される味が殘りましたから九十四では「への十二」と飛ぶのです、白**九十九**の出に黒百一に約へれば、白百に絆れて黒「への四」なら、白「ホの二」と行び切つて、黒地は題無しです、ト云つて黒「ホの二」に約へれば、白「への四」、黒「ホの三」、白「トの五」と征に懸られそれも黒が惡いのです、黒又白九十九の時「への四」に引けば、白は「への二」に置いて黒「トの二」なら白百、黒「ホの二」なら白「トの二」、黒「への三」白百二となつて、黒には地も眼もなく、白は益々厚くなるのです、故に圖の如く黒**百**と下つたのは可のです、デ白**百一**となつて其の方面を固めましたが、其れは九十九及び百一の手段で、黒に「ルの三」と打込む隙を與へなかつた、巧妙の牽制策に依るのです、其白**百三**「リの四」と行びれば、黒「リの一」黒百三白「ヌの二」と得を占めつゝ、白が此の黒を取りに來るか、どうかを問ふのですが、白は「ヌの三」に切られるのが大なる弱點です、白**百五**は、此處で黒に「ホの十」と飛ばれると、白の施す餘地が無くなるゆゑ、斯う頂けて**百六**、**百七**と交換して打懸けの憾兩者とも物故したのですが、此處で黒「トの十」と絆れれば、其れを一とする、參考圖の如く、六迄と運び、ソコで黒「リの十二」なら、白「トの十一」と劫を取り、黒「ロの七」と唯一の劫立に出て、白「ロの八」と應じた時劫を取返せば、白に「ツの十四」と劫立されて、「ツの十三」と應じ、白に再び劫を取返された時、黒には「ハの七」と出る劫立が有りますが、白には「ソの十三」「ツの十七」「ソの十九」其他にも劫立がありますから、黒は當初劫を避けて、白六の時「トの十一」と粘げば、白「リの十三」、黒「ホの十四」、白「への十三」、黒「リの十二」、白「チの十三」、黒「ヌの十二」、白「ヌの十三」、黒「ルの十二」白「ルの十三」、黒「ヲの十二」で、白の厚味は殆ど消滅、故に白は黒「ホの十四」の時、「リの十一」と絆ねる棋移を採るでせう。



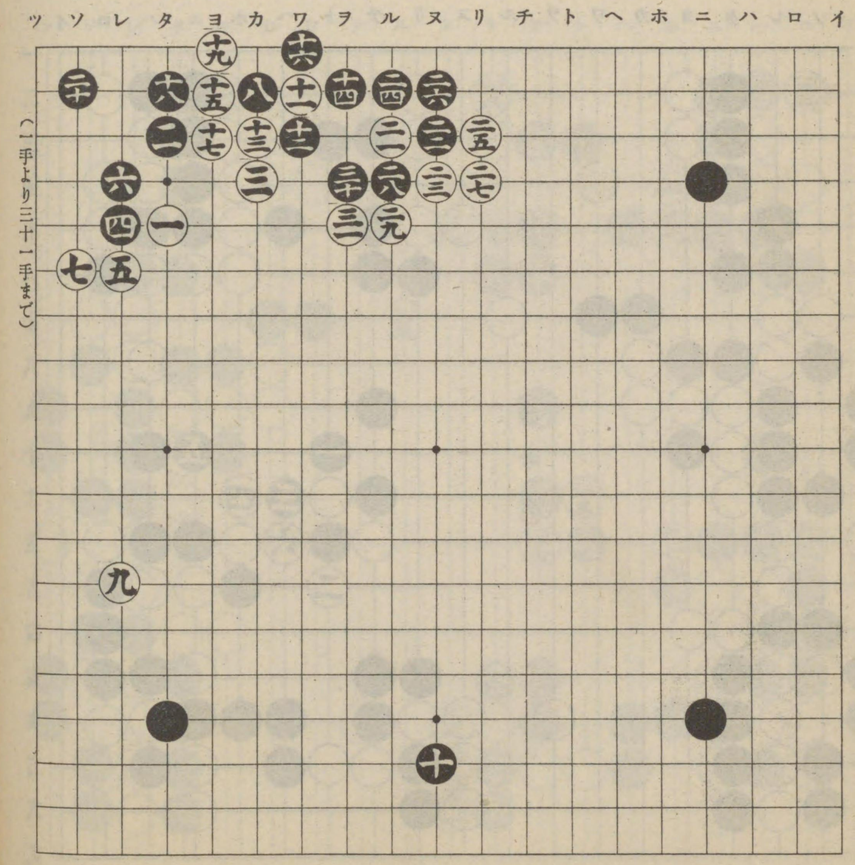
（八十八手より百十七手まで）



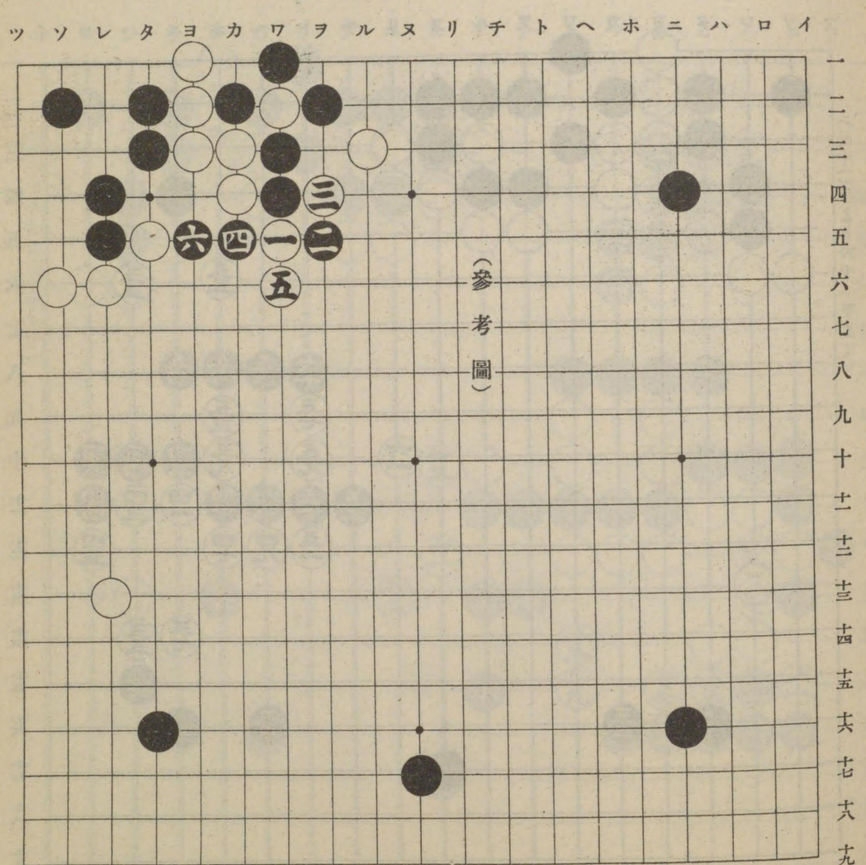
（參考圖）

三子局

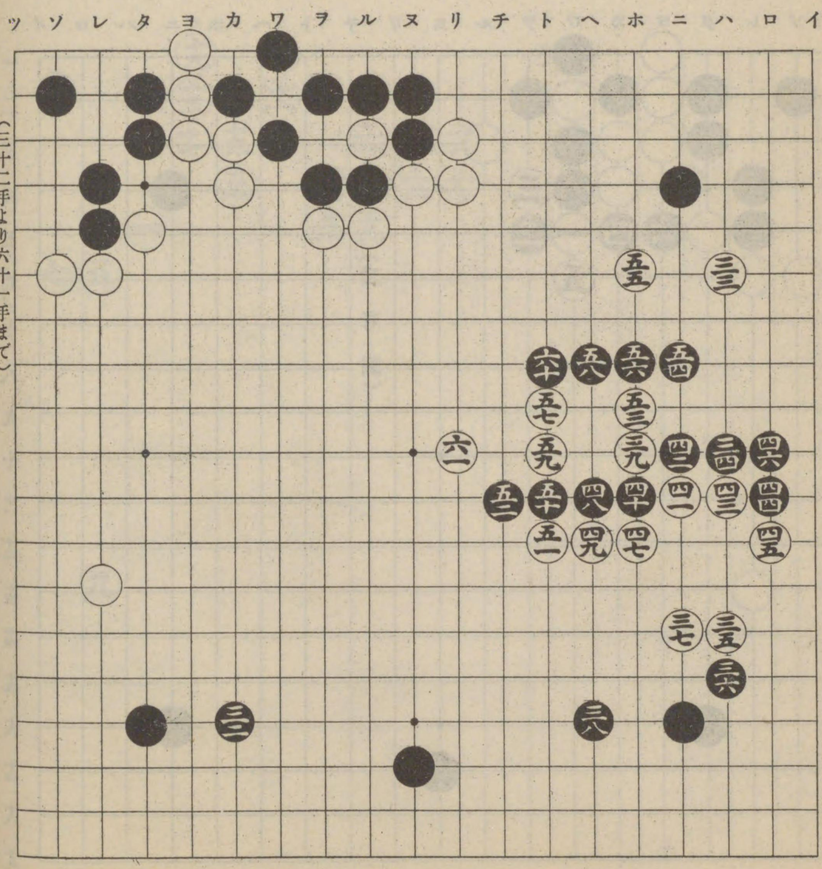
白は獨自の力に依つて、現在の地位を開拓した某三段、所謂野武士の雄なる者、黒はまだ修業中の青年棋士、白**三**から**七**までは**一**の着意を延長した手で、黒二の時考へられてある定石、黒**八**の走りは白に十五に約へられるのを防いだ手、白**九**は「ワの六」に粘ぐべきです、それは次に黒「タの六」なら、白「タの七」、黒「ヨの六」、白「ヨの七」、黒「ヨの五」、白「ヨの四」、黒「タの四」、白「カの六」となつて黒が悪いからです、幸ひ黒が十と受けて呉れたからいゝやうなものゝ、若し黒に其の十で「タの六」に切られて、白「カの六」と飛び、黒「ヨの五」と抱へ、白「タの七」となれば白は仕合ですが、白「カの六」の時黒「タの七」と行び、白「タの四」と突當り、黒「レの七」、白「レの三」、黒「ソの三」、白「レの二」、黒「ソの五」、白十七、黒廿一と變化されては白がわるいのです、以上の意味に於て白九は無理、黒十は、緩いのであります。白**十一**の頂けに、黒十三に突當つたり、十五に引いたりして、白に十二に引かれてはいけませんから、十二と絆出して**ニ十**までと運んだのは得心しますが、**ニ十一**から



三十一までは黒がいけません、黒**ニ十ニ**では無論「ワの四」と押すのです、ソコで參考圖の如く白一から六までと運べば、白の五目は空しく犧牲となりますが、ト云つて白一を放つて置いて、黒に「リの三」と詰められると、「ルの三」が無能に陷るからと、一の手で「チの三」とても拓けば、黒「リの四」白「リの三」て、黒は「タの六」と切り、次に白六なら黒「タの七」と行び、次に白一なら黒「ルの四」に頂けるのです、ソコで白三に絆込んで、黒「ヲの三」、白二、黒「ヌの三」となるのは白がわるいので、一方には黒に「レの八」と矢まれる手が有りますから、白餘儀なく「レの八」と飛び、黒「タの八」、白「レの九」、黒「タの九」、白「レの十」と交換して、黒尙ほも「タの十」に押しつけやうといふのです、そうなつては白の形勢が甚だ振はないのです、其れを本圖白に三十一まてと約へつけられた退嬰は、お話しになりません、黒**ニ十四**ではまだしも廿五に引いて、白廿四、黒廿八、白三十、黒廿九、白「ヲの三」で黒は四目を見すて、「リの五」と懸けて、新生面の打開に努むべきです。

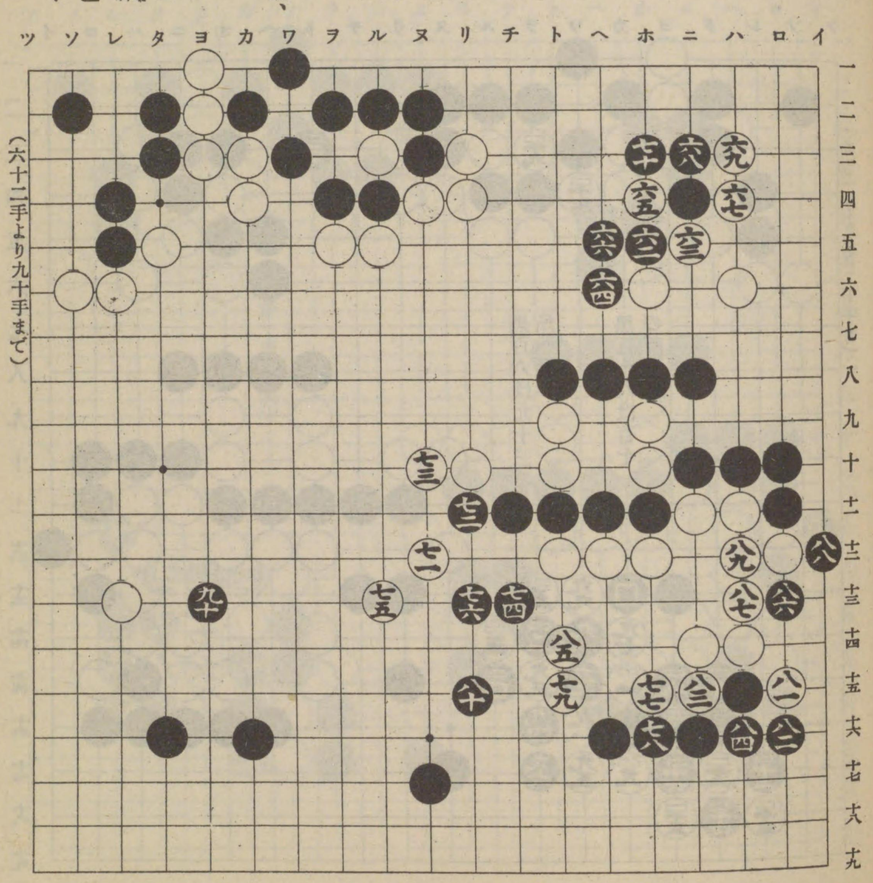


白三十五では三十九に冠して、中央の模様に質し、此の三十九に黒「ニの十二」と應ずれば、白は「ハの十七」に入らうと云ふのです、其れはチト高遠に失するかも知れませんが、其の邊の理合が呑み込めれば、すでに段に入つてるのです、斯くて三十九までの手順中黒三十六では、三十九に飛んで居るのがいゝのです、黒**四十**の頂けはいい手ですが、白の**四十一**と絡ね出して、**四十六**までと交換したのは俗手で、且つ白は重いのです、四十一では四十八に絡ね、次に黒四十七に行びたら、白「ハの十三」、又は「ヘの十五」と手段すべきです、但し黒も亦四十と頂けた以上、白に直ぐ四十八に絡ねられたら四十七に行びるので、四十一に引いて白に四十九に行び切られる如きは四十の意義を沒却するのです、黒**五十**と調子を採るのがきまつて居る手所です、で圖の如く**五十二**迄となつて、白の「ヲの五」と約へた方面の、厚味を殺ぎましたが、併し白に**五十三**と行び切られたのは、黒がいけません、故に黒は五十二でも尚五十三に絡ねべきです、白**五十五**は黒から「ニの六」に頂けられるのを防いだ手、玆で黒「ニの七」、「ニの六」と交換して、五十八にかけて白の二目を取れば、「ニの四」の置石が不安だからと、斯う**五十六**から、**六十一**まで運んだのでせうが、此の置石は前述の手順に出ても、一手で取られる憂ひはありませんから、黒はやはり二目を取つて居べきです。



（三十二手より六十一手まで）

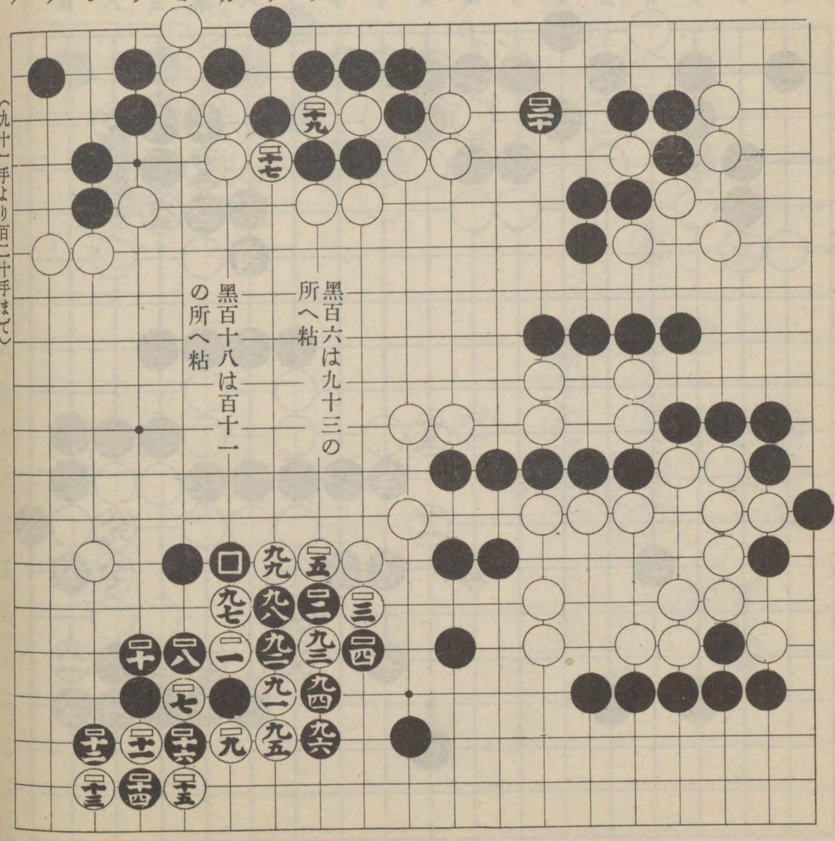
黒**六十二**は、白に「トの六」と飛ばれますと、折角の「ヘの七」及び「トの七」の厚味が、一手で消えて了ひますから、斯う六十二から**七十**までの運びを取つたのですが、白**六十五**では單に六十七に絡ねて、黒六十五、白六十九と交換し、そして六十六の切りを見るのがよかつたのです、故にそうなれば黒は「トの四」と備へるでせうが、それは圖の如く、七十までとなつたのよりは、白が勝るのです、白**七十一**と懸けて黒**七十二**の時、**七十三**と行びたのは味の悪い手です、尋いで七十五で黒を**七十六**と粘がせたのは、更にまづいのです、故に七十一では「リの十二」と懸けて、黒七十二、白「ヌの十一」、黒「チの十」、白「チの九」、黒七十三白「リの九」、黒七十一、白「ルの十一」、黒「チの十二」と運び、次に白「ヘの十五」と頂けて、七十六の行び出しと「トの十六」の絡捲とを見るのでした、尚白**七十五**でも「ヘの十五」の頂に出べきでしたが、斯う九十迄となつては、白に勝算は有ません。



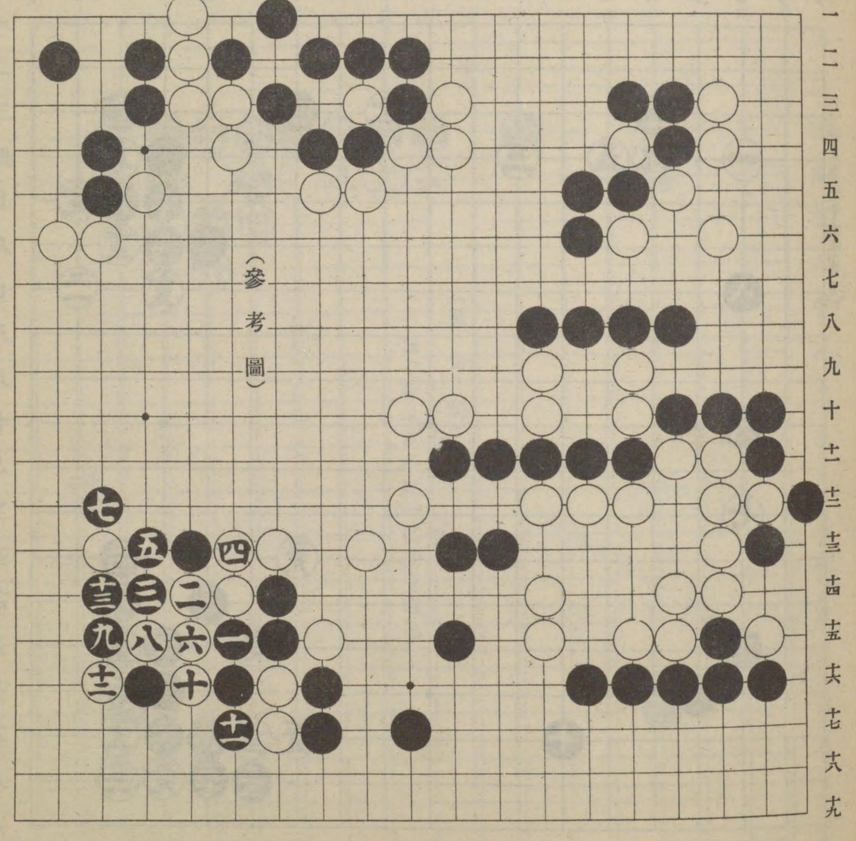
（六十二手より九十手まで）

白**九十一**は、既に傾きかけた我棋運を盛りかへすべく、直ちに斯う敵の懐ろに喰ひ下つて、最後の一戰を試みんとしたので、さすがに古兵の意氣も見えます、之れに對する黒**九十二**の應手は、緩みの無い手でした、之れを若しも百九に下つたり又は九十五に絆ねて、白九十六、黒九十二、白九十四、黒百九などに應じるのは、大いに悪いのです、其れは「カの十六」と「ヌの十七」とにある黒の意義を沒却するものです、白九十三を九十四に行びて黒九十三、白百九と交換した時、黒百十六に約へますと、白百一、黒百七、白百四となつて白は中央に連絡しますから、白百九の時黒は百七に粘いで白「ルの十六」なら、黒百四と押しつけるのは當然です、其時白「ヌの十四」と覗いて黒「リの十五」、白「ヌの十六」、黒「ヌの十五」白「リの十七」と斯うなれば、白の誘へ通りですが、其れはチト蟲のよすぎる話で、白「ヌの十四」の覗きに、黒「リの十五」と應じる氣遣ひは有りません、黒は必ず「ヌの十五」の方へ粘ぎますから、ソコで白「リの十四」と出ても、黒「チの十四」、白「チの十五」、黒「ヌの十三」、白百三、黒「ルの十二」て、結果は白が悪いのです。

斯くて**百十六**までとなつて、劫が生じましたが

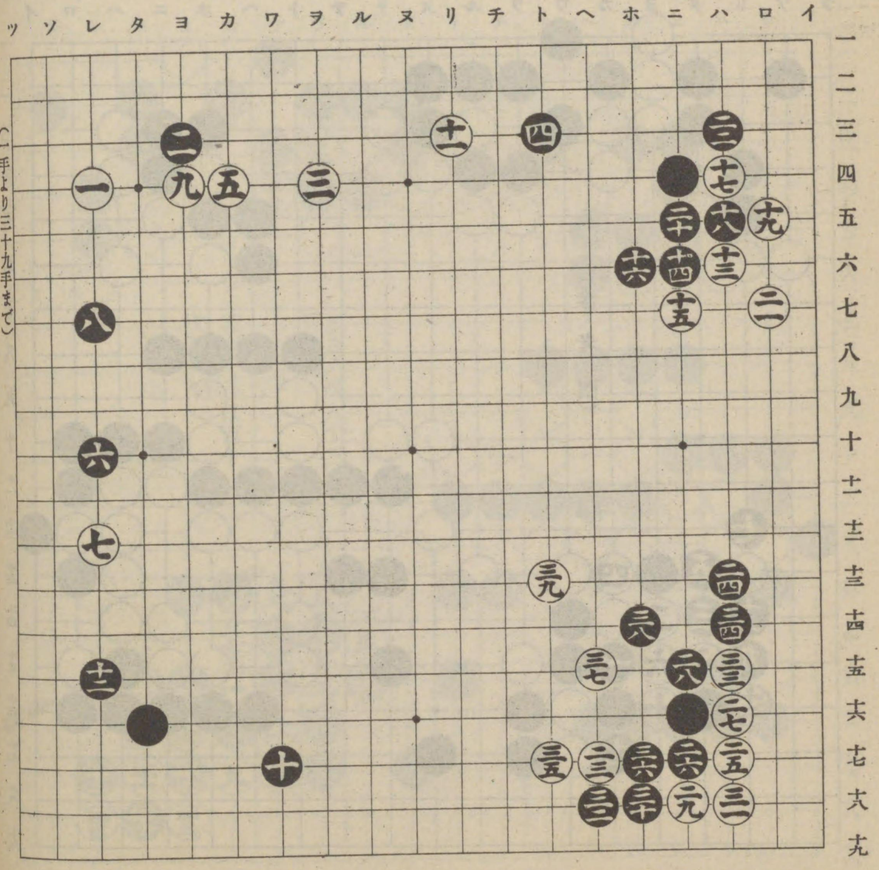


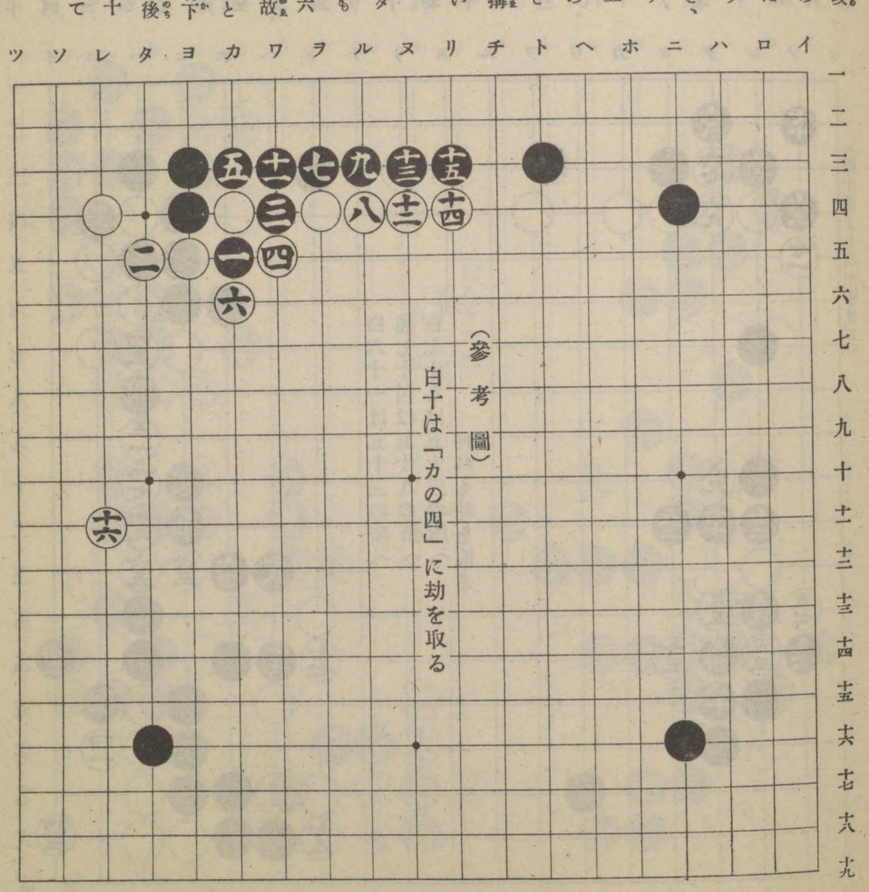
白の**百十七**の劫立に應ぜずに、黒は**百十八**と百十一に劫を粘ぎ、白の百十九の打抜きに、黒**百二十**と飛んで、白をして終に投げを打たしめたのですが、併しこゝまでの手順中、黒の**百**と切つたのは、甚だ危險の手でした、それが爲めに白に**百一**と切られて、**百六**と粘ぐまでの締付けを食つたのはいけません、百では百一に粘いてさへ居れば、白は「ヨの十四」と出て中央で爭ふ外はありませんが、スルト其百一を一とする參考圖の如く十三までの運びに依つて、白「タの十七」に一目取れば、黒は「レの九」に拓き、白又其の打抜く手で「レの十」と詰めれば、黒「タの十七」、白「ヨの十七」、黒「レの十七」、白「ヨの十八」、黒「ワの十八」となつて、見渡した所白の唯一の持みとする中央は、黒から「タの十」と頂けられて、白「タの九」、黒「ヨの十」、白「ヨの九」、黒「カの十」と段々に行びて蹂躙し、一方には黒「ヌの十一」と出切る手もあり一方には「リの八」と飛ぶ手もあり、白の圍ひは漸次に蠶食されて大勢はもういけないのですが、何にしても白に大きな劫立のなかつたのは、黒の僥倖でした。



三子局

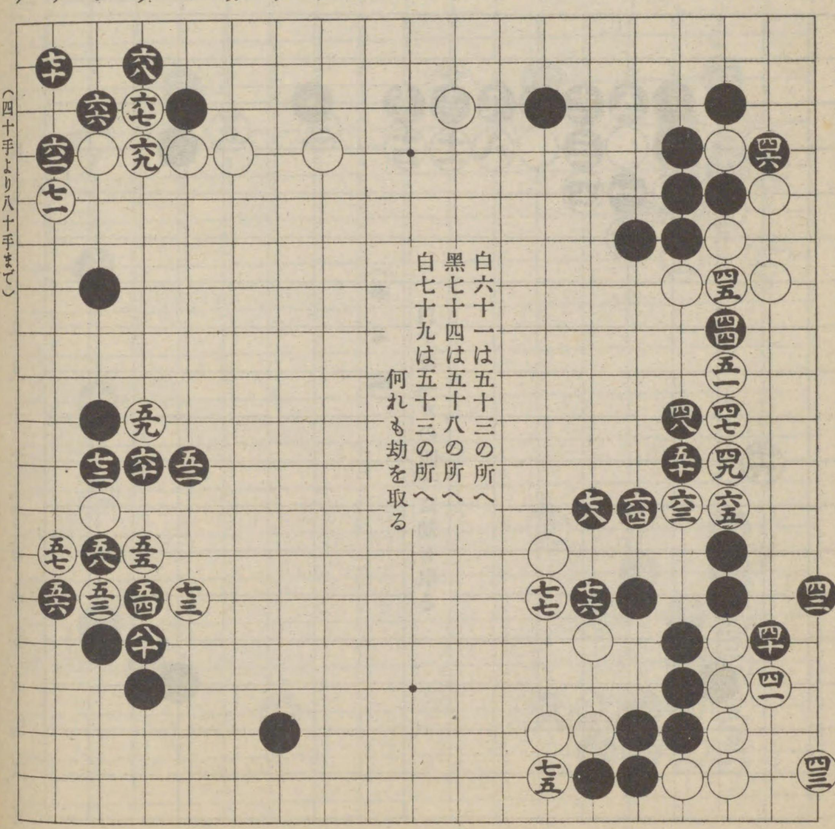
是も白は故村瀬秀甫八段、黒は嘗て大審院長から樞密顧問に歴任した故尾崎忠治氏で、黒一目の勝となつた碁です、黒四は白に「への三」に懸られるのを防いだ手、そんなら白三で「への三」に懸り、黒に十四の方へ應じさせてから、三に夾んでもよさゝうなものですがスルト黒は十四に應ぜずに「ヌの三」と夾み、白若し「ワの三」なら黒「タの五」、白「レの五」、黒「タの六」、白八となつた時、黒三に懸け「ワの三」の白は逸出することができません、デ斯う三から五と二の黒を攻めたのです、ソコで黒其の二の石を掩護すべく六の手で九の所へ押して、白「ヨの五」の時別掲參考圖の如く、一から十六まで と運ぶと、白に左邊に大模様を搆へられて、其れを削減するのは容易ではありませんが、其の白十六で「レの十四」に懸り、黒に「カの十六」又は「ワの十七」と受けさせて、「タの十」と拓くことができれば、白の言ふ目は出るわけですが、そう旨くは行ませんなぜなら白「レの十四」の時には、黒は「レの十二」と夾んで、次に「タの十四」の頂けを見ますから、白「ヨの十四」と飛べば、黒に「レの九」と拓かれて、白「カの十六」と左下隅の置石に攻懸れば黒「カの十七」、白「ワの十七」黒「ヨの十七」白「ワの十六」、黒「ソの十六」と、黒に一隅を固められ、お剩に「ソの十四」に黒の渡りが殘りますから、白の模様の主要部分は消されて、黒に相當の地が付くのです、此の局面では白斯う十六邊に拓くのが肝要です、本圖に戻つて、白五の時黒二を始末しやうとするのは、却て參考圖のやうな形勢が現れますから、白の意中に先んじて六と據つたのです、白七は黒の「タの十四」に搆へるのを黒八は白の「レの八」に詰めるのを防いだ手、デ白九と壓して半ば二の死命を制した時、二にはまだ黒「レの三」、白「ソの三」、黒「タの三」白「レの五」、黒「ヲの二」と凌ぐ手段も殘つて居ますが、白「レの五」の懸粘で、八と六の黒に脅威を受けるのは、面白くありません、故に黒二の活を後日に保留して十と拓き、白十一と詰めて、黒の「ヌの三」の詰めを防ぎ、遂に右下隅三十九迄と運びましたが、其の中黒三十二は後に黒「ロの十五」、白「ロの十六」、黒「イの十四」、白「イの十八」と、先手を取る伏線としても、餘り好い手では有りません。





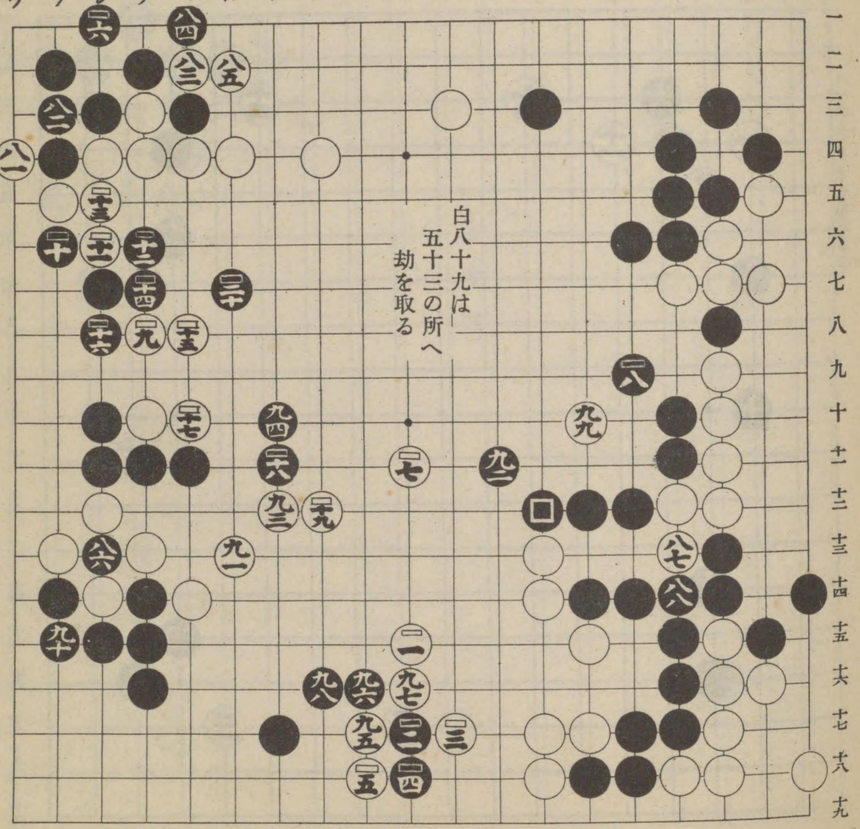
（參考圖）
白十は「カの四」に劫を取る

黒**四十**から白**四十三**までと交換した、黒の先手は、そう急ぐ必要の無い所です、それは白から四十に下れば、黒四十六に一目取とも「ルの十七」と換るとも、何れにしても黒の得になるのですから、白の其處へ下る氣遣ひはなく、從つて黒は其の先手を劫立用として保留することよけれ、斯かる手廻しは寧ろ惡手です、黒**四十四**白**四十五**と交換して、黒**四十六**と打拔く手順の肝要である點は、改めて手所柵に於て說明しやうと思ひます、左邊に起つた劫爭ひについて、黒**六十二**の劫立に白「ソの三」と應じ、黒五十八に劫を取り、次に白七十二に劫立して黒「レの九」と應じ、白五十三に劫を取り、次に黒「ヨの十三」と紳ね、白「ソの十五」と切り、黒劫を取返せば白は劫立に困るのです、が假りに右下隅の黒を攻める意味で、六十三に劫立すれば黒に劫を粘がれ、白六十四に行びて、此の黒を取らうとしても、黒七十五、白「チの十八」、黒「チの十七」、白「リの十八」、黒「チの十六」、白「トの十五」、黒「ヌの十七」と運ばれて、白は見す見す此長蛇を逸するのみならず却て大損を招くのです、其れて白は特に六十二の劫立に應ぜずして、我が劫立の材料を得べく、**六十三**から**六十五**までと運んだのですが、スルト黒



六十二で、「ヨの十三」と紳ねる手はあつたのです、黒**六十八**から七十二迄の、黒六十八では「レの五」と當て白六十九、黒七十、白「レの二」黒「ソの三」となるのが、左側の黒の爲めでした、黒**七十八**は白から其處へ尖みつけられると、忽ち黒の活路を失ふからで、尋いて白**七十九**の劫取に、餘儀なく**八十**と應じたのです。

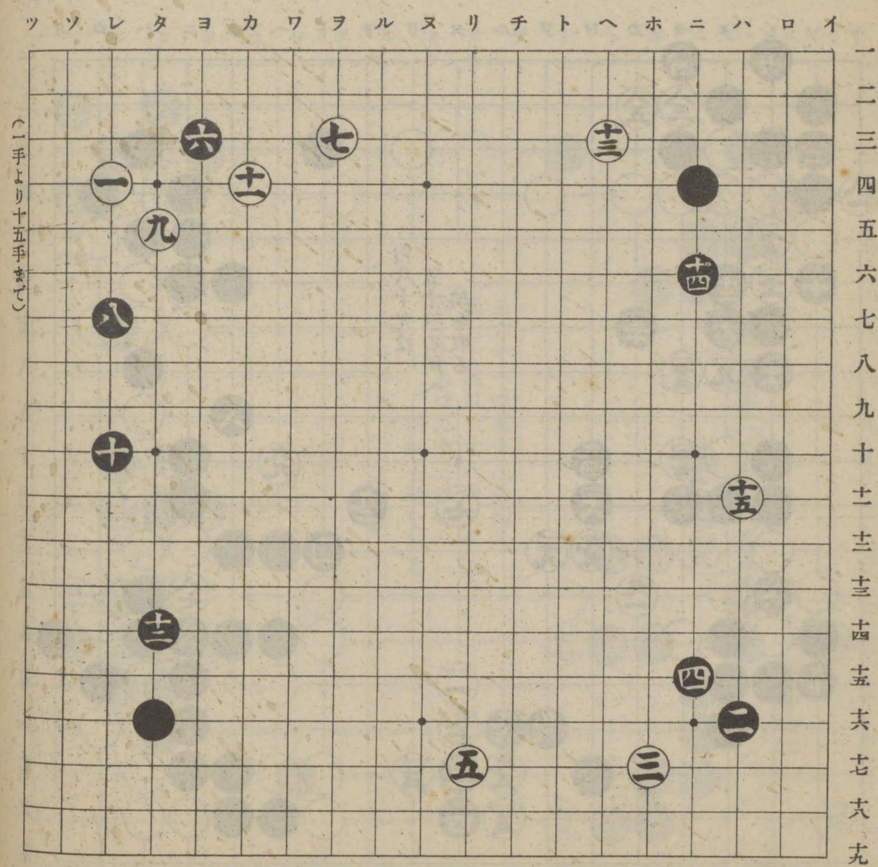
進んで黒**八十六**と劫を取返しましたが、其時白左上隅の黒を攻めて、百六と置いても、黒「ツの三」、白百十、黒「タの一」、白「ソの一」、黒「ツの一」で又劫となりますから、黒は決して無條件では取られません、白**八十九**と劫を取返した時、黒「ヨの十三」と切れば、白に九十に切られるのは、言ふまでも有りませんが、其の時黒劫を取返した所で、白に九十二に走られると、其の方面に多數の劫立を利かされて、黒は到底數に於て對抗することができませんから、隱忍して斯う**九十**で白に**九十一**と粘がせたのです、白**九十五**は黒から先に百二に詰められると、九十三の方面と、「トの十三」の方面との、連絡が危くなりますから、先づ一方を治めたのです、尋いで、黒**九十六**と頂けて、**九十八**と引いたのは、白に「カの十七」に頂けられる手を防いだのです。



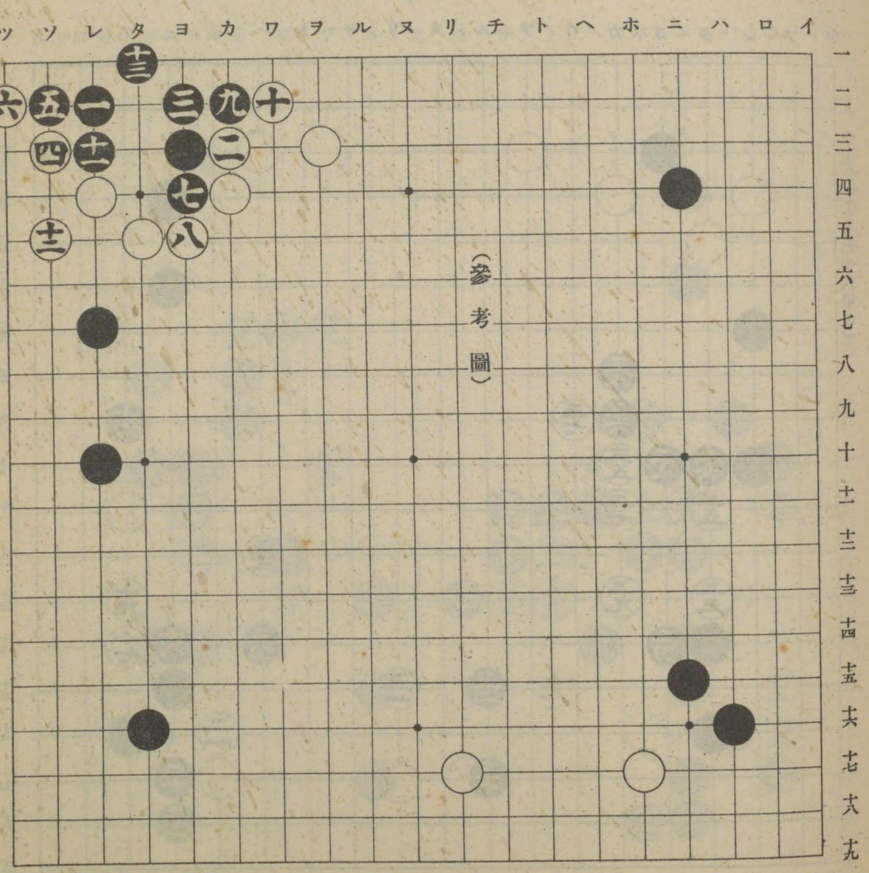
二子局（其一）

此の二子局の手合は、ことさら双方の資格を現はさずして、其のどの位の技倆を有する人々であるかを、試みに譜面に就いて判斷して載きませう。

黒四は白が三に懸りますから、其れと對等の意味に於て、六に懸つていゝのです、四の尖みが敢て悪いわけでないが、稍や緩いのです、白五では「カの三」「ヨの四」又は六の何れかに締つて欲いのです、デ其の意味に於て黒四で、六に懸るのがいゝと云ふ事にもなるのです、白七と夾んでから十一までとなつた、其の手順中の白九は、黒に其處へ懸けられてはいけませんし、白十一は黒にそこへ尖み出られるからですが、此の十一までを、定石と云つてるのは誤謬です、なぜなら其れは參考圖の如く、黒一から十三までゝ後手活にはなりますが、十二と懸けついだ方面がトテも堅固になつて、本圖八と十に影響を受けるからです、そして將來白が六の活を奪ふ時機が來れば、「ソの五」と尖んで其の目的を達することは、參考圖十一、十二の交換で黒の辛うじて活きた事に見ても明瞭黒十二は白に「レの十二」と、十の一子に薄られると、參考圖のごとく黒十三までと活きる手順に



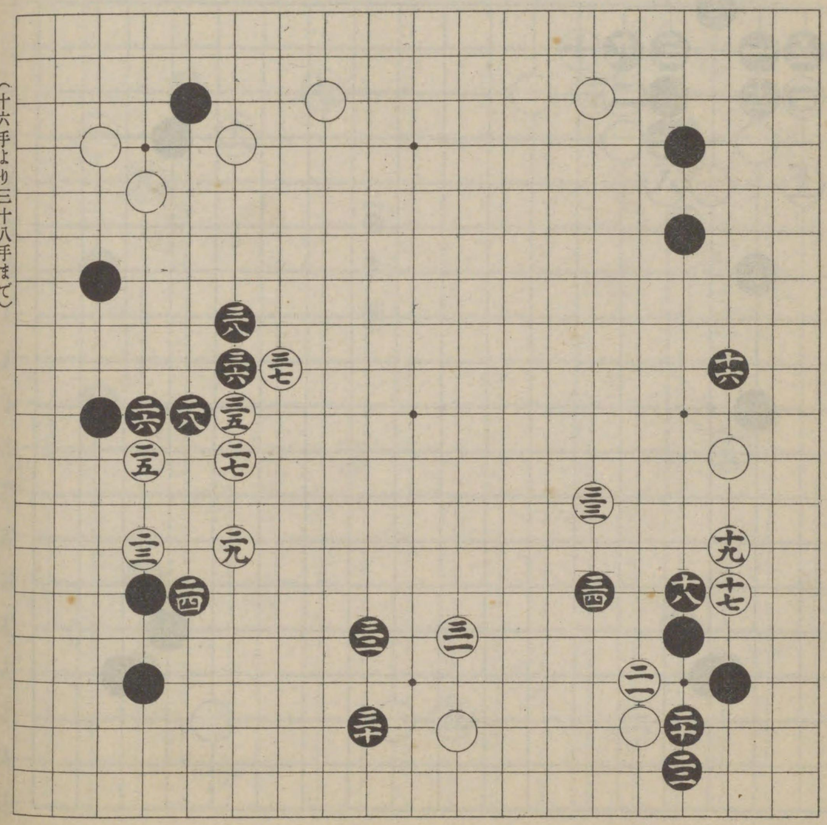
依る、白十二の懸けつぎが來て、八と十とに薄味を感じると、斯ういふ懸念からの一着でせうが、其れはチト小心に過ぎて居ます、八と十とは相頼り相俟つて、既に單獨の働きを悪まれて居るのですから、今急に其れに聲援する必要はないのです故に十二では當面唯一の要着たる「ハの十」を占めて、遙かに「ニの四」の置石と四の方面との消息を通ずる、中繼機關となるべきでした、白十三は七の方面が參考圖のやうな運びになつて、堅實となるべき素質を具へて居るのですから、斯う懸るのは方針を誤つて居ます、ですから十三で「ハの六」と懸り、黒に「ヘの四」と受けさせて十五に拓き、四の威力を牽制することができれば申分は有りませんが、黒は必ず「ハの六」と懸られた時、「ハの十」と夾みますから、白の注文は褒粉にならうといふものです、スルト十三では十五か、又は「ハの十」を占めるのが本手なのです、從つて黒十四も亦「ハの十」に拓くべきを、斯う受けたので白に十五の好點を與へたのです。

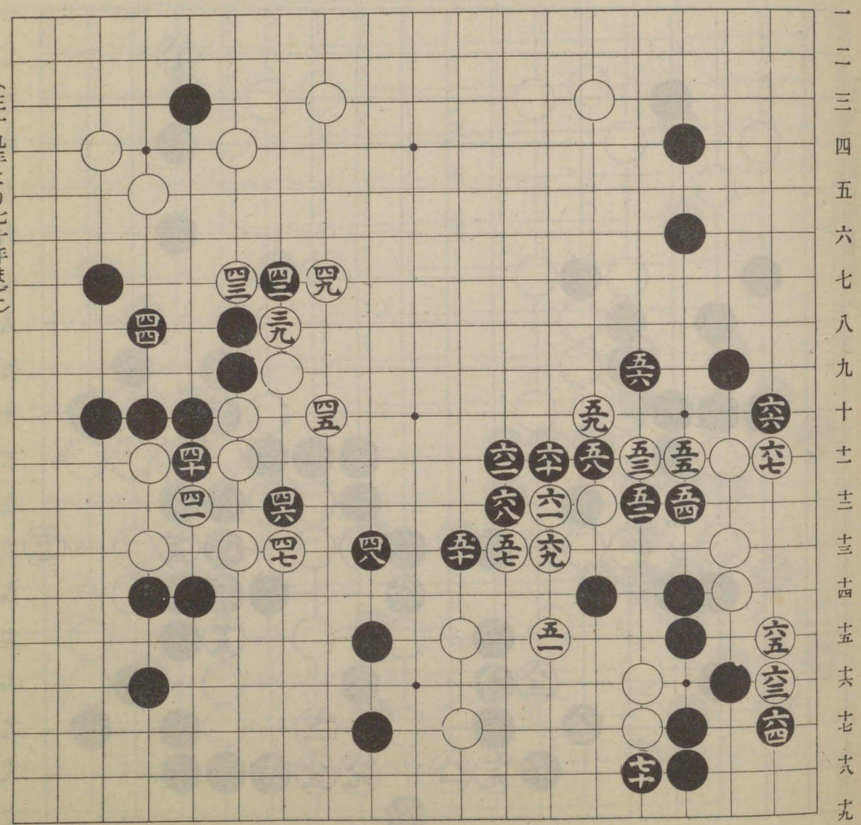


黒**十六**は白に「ハの八」と拓かれるのを、白**十七**は黒に十九に詰められるのを共に防いだ手、尋で黒十八から**二十二**までと應じるなら黒は**十八、十九**の交換は無い方がいゝのです、其れは後に白が右下隅の眼を取る關係で、先づ「ロの十七」と頂けて、黒に「ロの十七」と受けさせ、「ロの十六」と頂けて、黒に「ロの十七」と受けさせ、「ロの十五」と引かうと、斯ういふ手段に出た時、白の「ロの十六」に黒「ロの十五」、白「ハの十五」、黒「ロの十七」、白「ニの十六」、黒「イの十六」となつて、白に「ホの十三」と懸けられ、難なく二目を取られるからです、白**二十三**から**二十九**までは殆ど常套の手段で、其の方面の黒地を少し蠶食したに過ぎませんが、廿三では「ヲの十七」に拓いて居べきです、其の運びに出なかつた爲めに、黒に**三十**と詰められ、白「トの十七」の打込みを防いで**三十一、三十二**の交換となり、白の方は廿二の下りが利いて地にならぬに反し、黒は下邊から左下隅に亘つて、尨大の領域を擁へたのです、白**三十五**と押して、黒に「ヲの十」と攻られる手に備へたのはいゝ手でした、其れは中央の權も握れるからです、黒**三十六、三十八**は、白に三十八に飛ばれるのを防いだ手。

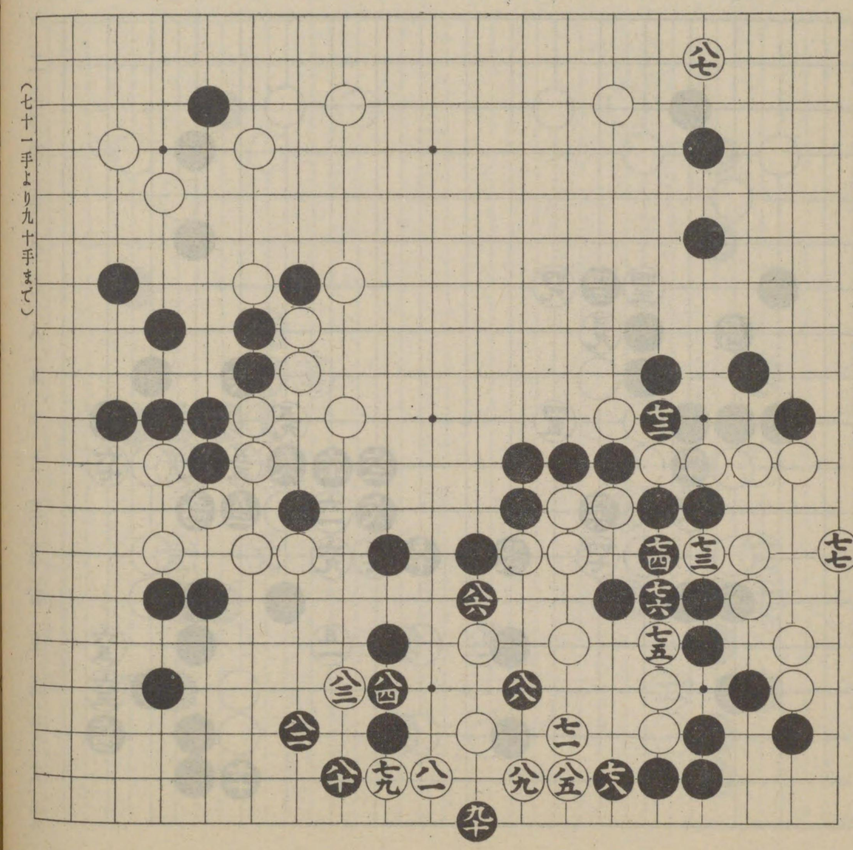
白**三十九**は肝要の押しです、黒から先に其處へ曲られると、白「ヲの九」と受けなくてはならないからであります、黒**四十四**では「ヨの七」と當て、白「カの六」の時「ワの十」と切るのです、デないと黒**四十**と出た意味と矛盾します、黒**四十六**で白に「カの十二」と粘がせやうと云ふのは、餘りに自分勝手です、之れを機會に白に**四十七**と押されて、「ワの十七」邊が薄くなつたのも自業自得で、覗きに粘がぬ莫迦はなしといふ諺も此處では例外、が黒折角覗いた手段を反古にせまいと黒「ヲの十二」、白「ヲの十三」、黒「ルの十二」、白「カの十二」となれば、三本行びた黒は甚だ重くなるのです、但し黒「ルの十二」で「カの十二」と切り、白「ルの十二」、黒「ヨの十三」、白「タの十二」、黒「レの十三」、白「ヲの十一」と斯う運び、黒左邊に渡つても、白に中央に厚味を加へられて得ではありません、黒**四十八**は次に「ヲの十二」と引く思はくでせうが、此の手では「ワの十五」に圍ふべきです、白**五十五**迄で黒「ハの十二」、白「ロの十二」、黒「ロの十三」と、黒に切られる手を殘したのはいけません、五十三では「ニの九」と頂ける要領、デ**七十**までと黒の方が優勢になりました。

白**七十一**は惡い手です、無論七十八の所へ約へ



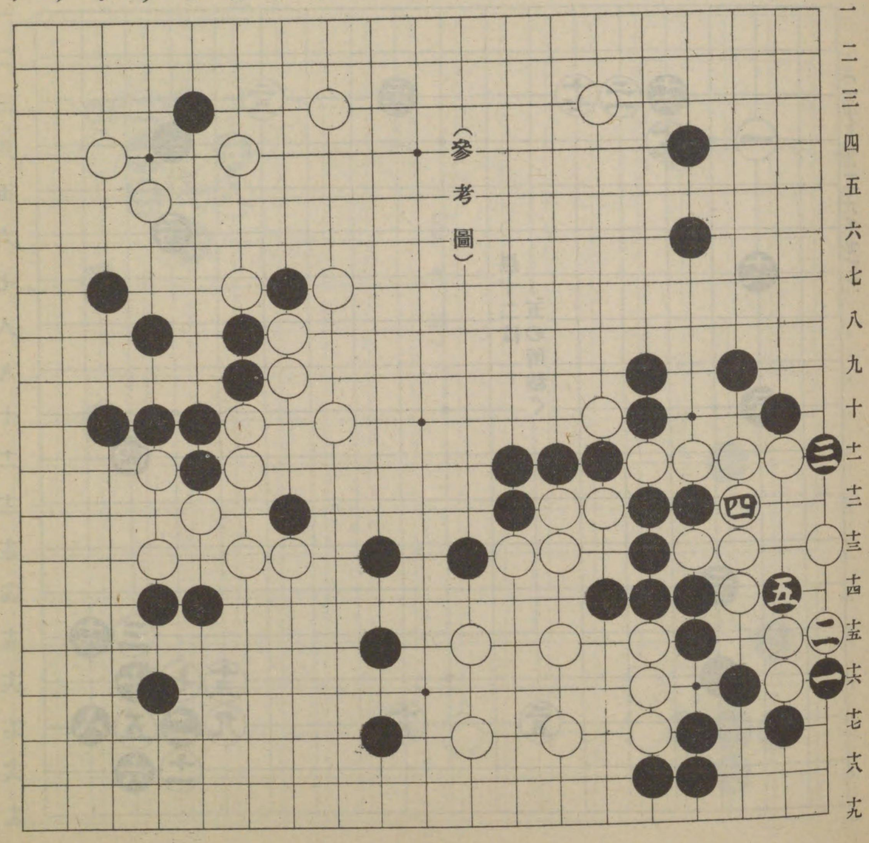


なくてはいけません、黒**七十二**は先づ七十八に出べきです、スルト黒は安定して白は治まらず、萬一ソコで手を抜げば黒に八十八に置かれて全滅ですから、白八十八に用心する外は無いのです、白**七十三**も悪い手です、白が將來「ヘの十五」に押した時には**七十六**に絡込が殘りますから、其れは後の白の死活に關係するのです、白**七十七**は最も悪い手です、なぜなら參考圖の如く、黒一から五まで、白は滅亡するからです、從つて本圖七十七は「イの十四」と活きなくてはなりません、そして參考圖の黒一なら白「ロの十三」、黒「ロの十三」なら白一と應じて黒「ロの十二」、白四、黒三と渡れば、白「イの十二」、黒「イの十三」、白五と三目を取って活きです、黒七十八は可い手です、爲めに**八十二**迄の固めとなりました、がたとひ**八十二**の手を抜いて、白に「ヌの十七」と切られても「ワの十八」と引き、白八十四、黒八十三、白「ヌの十七」、黒「ワの十六」となるのと、白又「ヌの十七」の手で「ワの十七」、黒「カの十七」、白「ワの十六」黒「ヌの十六」となるのと、さなくば黒「ワの十八」の時、白八十二、黒「カの十七」、白「カの十六」なら黒「ワの十六」、白八十三、黒「ヌの十五」、白「ワの十五」、黒



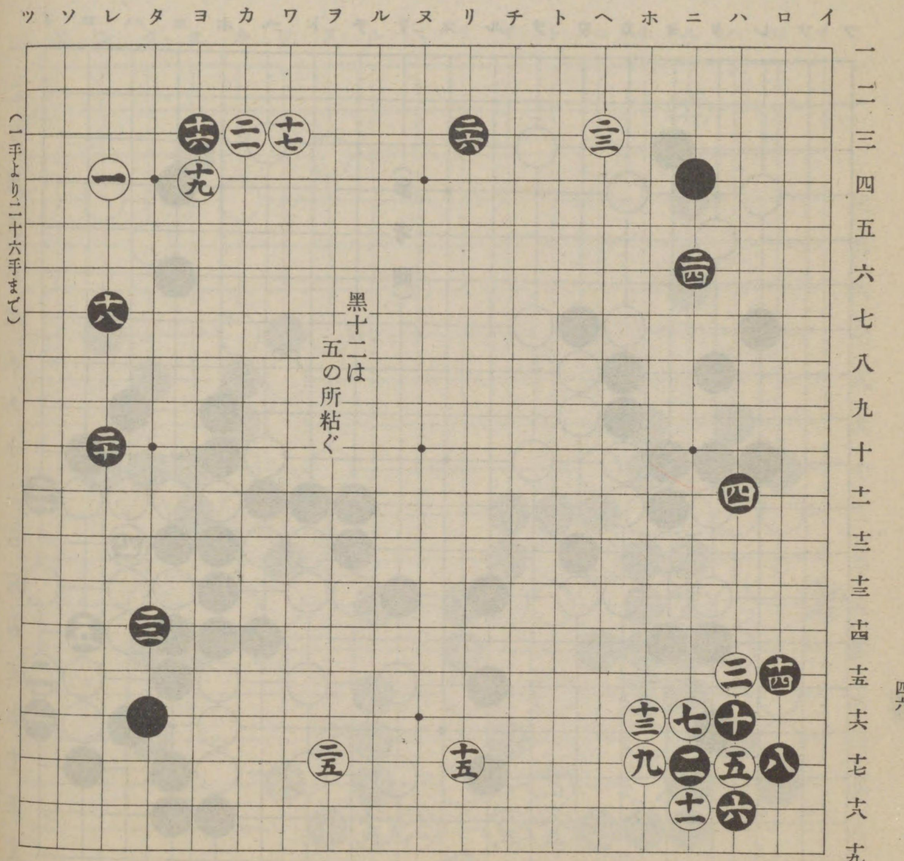
（七十一手より九十手まで）

八十四、白三目粘、黒「ヨの十七」となるのですから、其の孰れも白に悪いのです、故に黒八十二て他に忙しい所があれば、手を抜いてもいゝのです、白**八十七**は見損じでせう、無論「チの十五」と活なくてはいけません、がそう活きて居ると、黒に「トの五」と懸けられて、白「チの四」、黒「チの五」、白「リの四」と運び、尚ほ黒に「リの五」と押しつけられて、更に「リの八」と圍つて地にされるのと、一方は黒に「ルの五」と飛ばれて、「ルの三」に頂けられる手がありますから、黒「ルの五」の時、白は「ヌの四」と防がなくてはなりません、尋で黒「ヌの十二」白「カの十二」、黒「ワの六」、白「ヌの六」、黒「ヌの五」、白「ワの五」、黒「カの六」となつて、白は活きるのに骨です、だが八十八から九十迄を取られたり、「イの十六」の手を殘したりしては、其れはもう問題の外です。



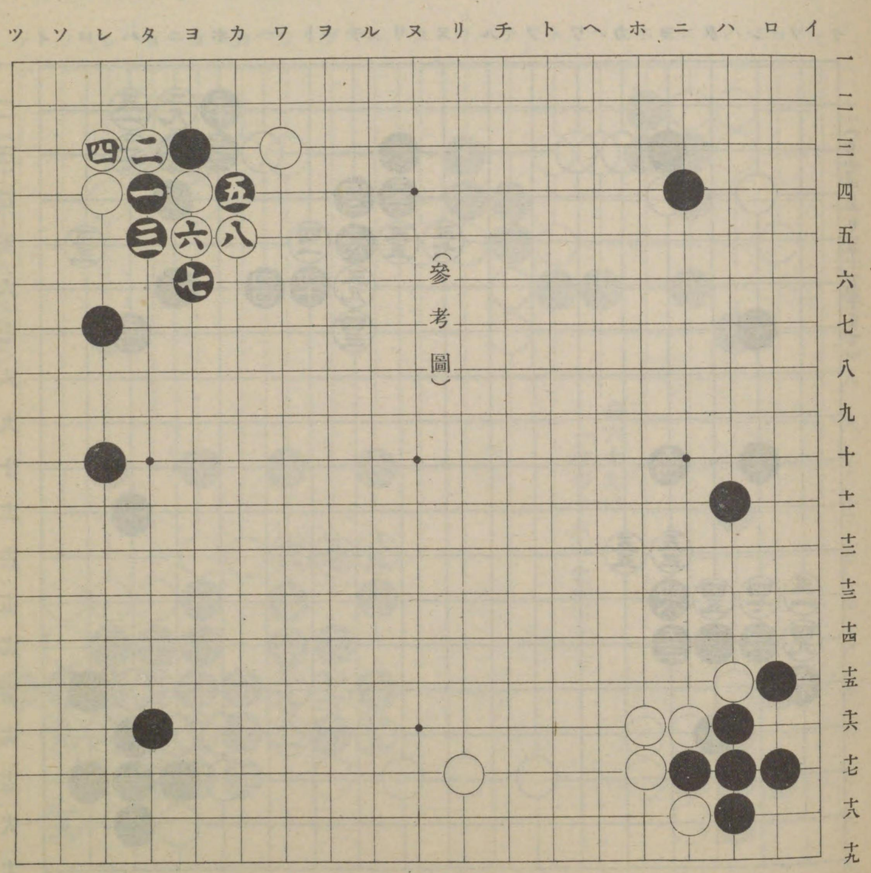
二子局（其二）

前の二子局とは段違ひで、白は名人格黒はそれに對する、二三の二子番です、黒**四**は次に黒十、白「ニの十五」、黒「ヘの十六」と運ぶ目的なのですから、白は**五**と**六**との交換に尋いで、**七**と絡ねたのです、ソコで黒九、白八、黒「トの十六」**又**は「チの十七」なら何れも定石で、白は三をそう治らうといふのですから、黒鋭意**八**と絡返したのですが、白それを十に粘で、黒に九に行びさせるのは極わるいのです、ト其の白の四子は所謂陣笠の形ちになつて、議會の陣笠程にも働かないのです、デ白**九**と絡返して**十四**迄と運んだ其の黒十四は白に其處へ下られると、黒「ホの十八」、白「ヘの十八」、黒「ニの十九」、白「トの十六」で、黒は一隅に閉鎖されるから斯う絡ねたのですが、スルト黒四は、「ハの十四」にても在れば格別、此處では黒十四から更に四と行つた如くに當つて甚だ働かないのです、黒**十二**の粘では「ニの十五」に切つて、白五に劫を取り、黒「ロの十六」に粘ぐといふ風に戰ふなら知らぬ事、デ無い以上、黒八は九に引く成型に從ふべきです、黒**十八**と爽返して白に**ニ十一**と突當らせ、**十六**の一子を放棄

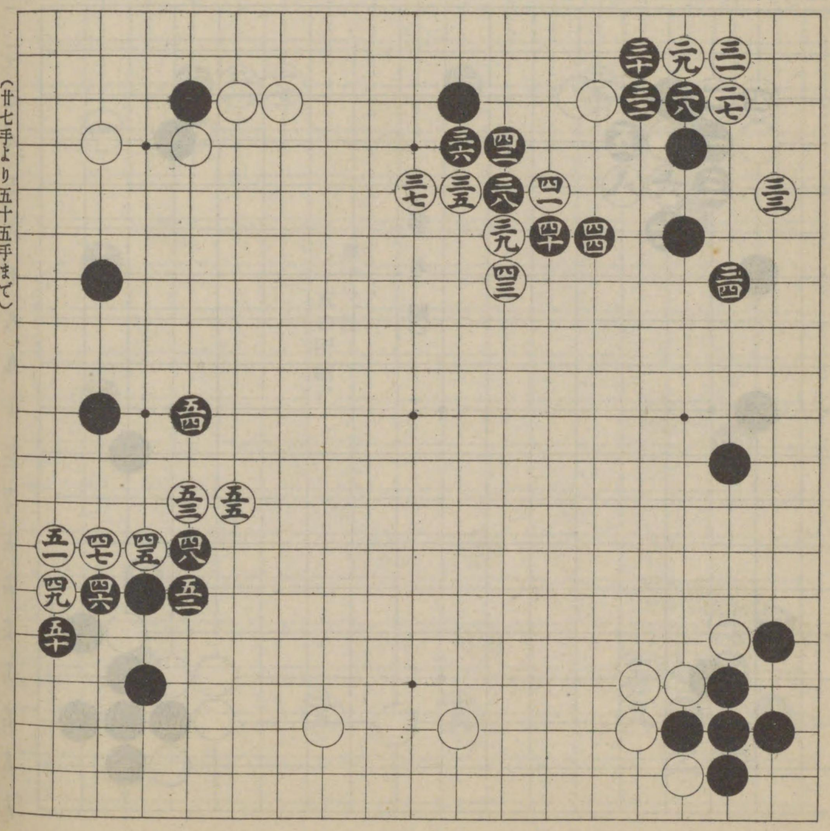


したのはわるいのです、其れを解剖すれば、黒十六で、十八の方から薄つて白に**十九**に締らせ、黒二十に拓き、白十七に拓いた形は白が堅きに失しますが、黒十六と廿一の交換は、白十七以上に黒十六が惡るいのです、故に黒十八は、白に「タの五」と尖ませて、黒二十、白「カの四」となる時には宜しいが、十九に頂けられて、「タの四」と絆込む事のできぬやうな場合には、そう爽む手は有りません、其れは參考圖八迄の運びのやうに、白を征に取れないからです、黒**ニ十ニ**は既に獨立して居る、十八、二十に應援する要は有ません、「トの三」の方に拓いて幾分でも十七の威力を制すべきです、だから**ニ十三**、**ニ十四**と交換して、白に上邊六路を與へたのは面白くありません、白**ニ十五**は黒に「ルの十七」に詰められて、更に「トの十七」に打込まれると、白「トの十六」、黒「チの十七」、白「チの十六」、黒「リの十八」となるのと、又黒「トの十七」の時、白「チの十六」、黒「トの十六」、白「トの十五」、黒「トの十八」で、黒は「リの十八」「ホの十八」の何れにても連絡する手があるので、斯う廿五と先んじたのです。

白**ニ十七**から**三十三**までは、此の一隅の黒地を



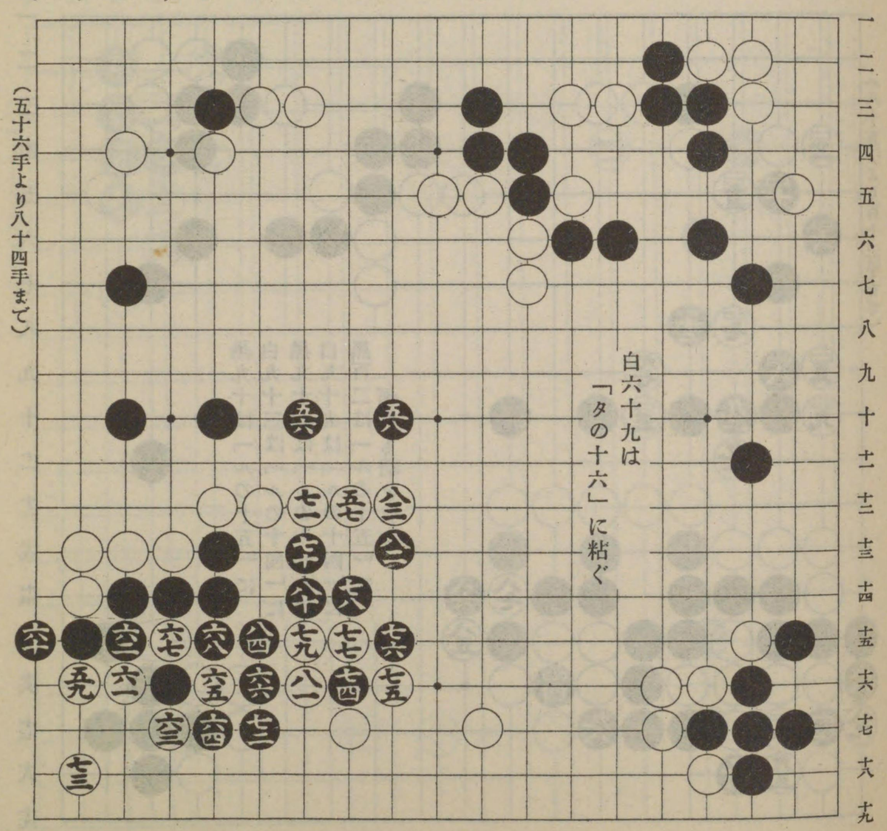
消した手段、黒**三十四**は白に其處へ出られると、「ハの十一」の黒に響くからです、が三十四では「ロの六」に頂けべきです、そして白「ハの五」黒「ハの六」となつて、白手を抜けば黒に「ニの五」と粘れて、更に手を抜けば、黒「イの五」、白「ロの四」、黒「ニの一」で白は全滅、故に白は黒「ニの五」の時、「ハの四」と用心する外なく、ト黒の右上隅が無疵に強くなりますから、黒「ハの六」の時白「ニの五」と出て、黒「ホの五」白「ハの四」と活き、そして「ヘの四」の行びと「ホの六」の切とを見ます、ソコで黒「ヘの四」と粘ねて、其の一方を防ぐと斯ういふ意味で黒三十四は、「ロの六」に頂けるのが可いといふのです、白**三十五**は既に**三十三**迄で相當の地を得て、「ヘの三」の使命は果して居るのですから、斯う三十五と黒を壓して、「トの四」とでも圍はせやうとしたのです、デ**四十四**までとなつて、黒の領域は案外縮少されましたが、これも軽竟前に白に「ヘの三」と、驅らせた手に起因するのです、白**四十五**の時黒斯う**四十六**と下つたり、又は四十七に粘ねて、「レの十二」に約へさせたりするのは白四十五の註文を迎へる意味でいけません、然かも其の方面は、黒が置石と共に四手を投じて、堂



（廿七手より五十五手まで）

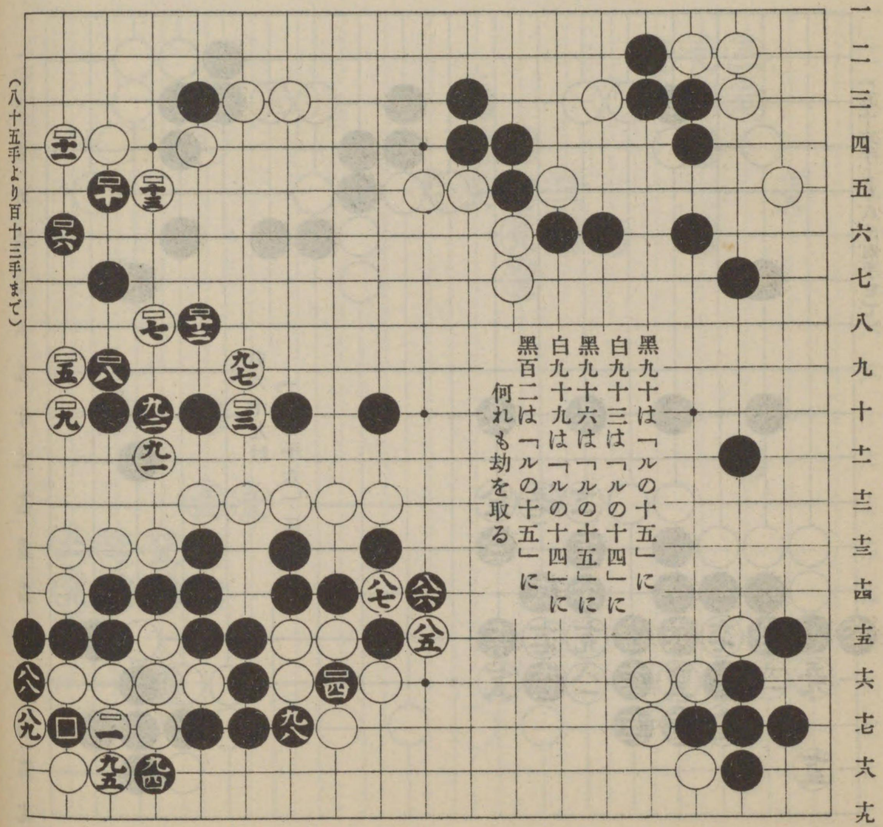
堂と搆へた所ですから、四十六と屈する手で、強硬に四十八又は五十二に應じなくてはなりません白**四十七**は少し重い手、五十四の方から運ぶべきです、黒**五十二**は緩い手、「タの十二」と粘べきです、デ**五十五**迄となつて、白**四十七**の目的は達せられたのです。

黒**五十八**は、七十二に詰めるのです、**七十三**までとなつた結果、白に地を與へて黒に眼が無くなつたのも、皆五十八の失着に因るのです、黒**七十四**は、白七十九、黒八十四、白八十となつては、黒が助らないからの防ぎ、黒**七十六**を七十七に行びて、白七十六、黒「ルの十四」、白八十二、黒「ヌの十四」となると、白に七十八に切られてわるいのです、黒**八十二**で八十四に粘ぐと、白「ルの十四」、黒八十二、白「ヌの十五」となつて、ソコで黒「ヌの十四」なら、「ヲの十三」と切られる劫が起りますから、黒「ヌの十四」を「ヲの十三」に粘ぐと、白に八十三に押出される結果や黒八十二を八十四に粘いだ時、白「カの十三」、黒「ワの十七」、白三目粘ぎ、黒「カの十四」、白八十二黒「ルの十四」、白「リの十四」などゝなる手段を恐れて、黒は八十二、八十三と交換して、**八十四**と粘いだのです。



（五十六手より八十四手まで）

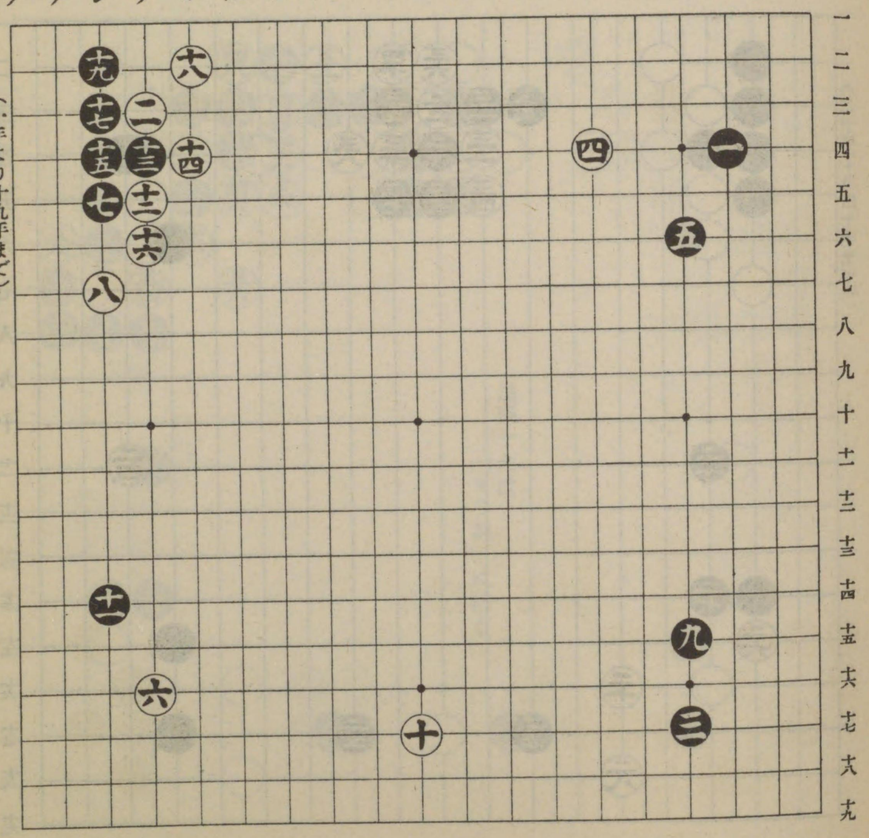
白**八十五**は黒に九十八に當てられて、百四に結ぐのが辛いからです、ト云つて黒八十六で九十八に當てれば、白八十七、黒八十六、白「ルの十五」となつて、黒「カの十三」と眼を持てば、白「ヲの十八」、黒九十四、白九十五、黒「ヨの十九」、白「ワの十九」、黒「カの十九」、白「レの十九」、黒「ワの十八」、白「ヨの十八」で、黒は萬事休するのです、又黒八十六で八十七に結げば、白九十八で黒に眼形が有りませんから、黒**八十六**、白**八十七**と劫になつたわけです、デ白**八十九**は黒に其處へ出られるのを、黒**九十二**は白に其處で出られて、黒「タの九」、白「ヨの九」と兩斷されるのを、白**九十五**は黒に百に打込まれて、白百一、黒九十五となるのを、何れも防いで**九十六**迄と劫を應酬し、白**九十七**の覗きに、黒百三に應ずれば白劫を取り、次に黒百、白百一で劫を取り、白「カの十三」黒「カの十四」で劫を取り、黒「ヌの十二」、白「ヲの十三」で黒の劫を取り、もう何處の劫立にも應ぜずして、黒八十七に結いでいゝのです。シテ見れば白九十七の時、黒百三に應じる手も有つたのです、其れを圖の如く**百十三**までと運んで、黒は容易に治まらなくなりましたから、前途を諦めて投げたのです。



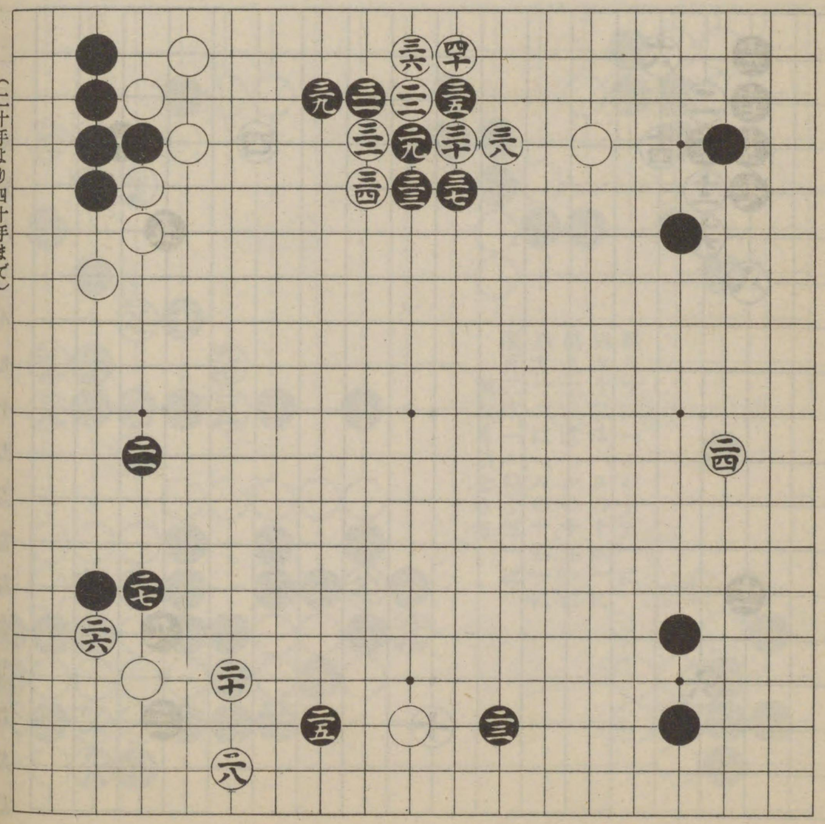
（八十五手より百十三手まで）

先の局

白は三十歳の四段、黒は十九歳の二段、兩々懸命の對局でした、白**四**は黒に**五**と受けさせるのが目的で、そして豫め黒の「ホの四」、「ホの三」又は「ヘの三」と締るのを妨げたのです、黒**九**は白から先に「ハの十五」と懸つたら、「ハの十一」邊に夾んで、五と相應じて右邊に地を取り、更に「ハの十六」と尖み頂けやうと云ふのですから、九では十四に懸けて、白「ヨの三」、黒「カの四」、白「ワの三」と、定石通りになれば、黒は「レの九」と白八を攻めるのも一趣向です、白**十**は黒に其邊に拓かれると、三との中間五路が厚くなるからです、黒**十一**は白に「カの十四」と受けさせて、黒十四、白「ヨの三」、黒「カの四」、白「ワの三」、黒「タの十」白「ヨの七」なら、黒「ワの四」、白「ヲの三」、黒「ヲの四」と壓迫して、「ヨの七」の白を、自然と深みへ陷れやうのたくみ、故に白**十二**と頂けて**十八**までの定石を運んだのです、此處で黒**十九**で「タの二」に當て、白「ヨの三」の時轉じて「カの十七」と夾み、前の**十一**の懸りに應じなければ、斯うだぞといふ手段に出ることもあります。

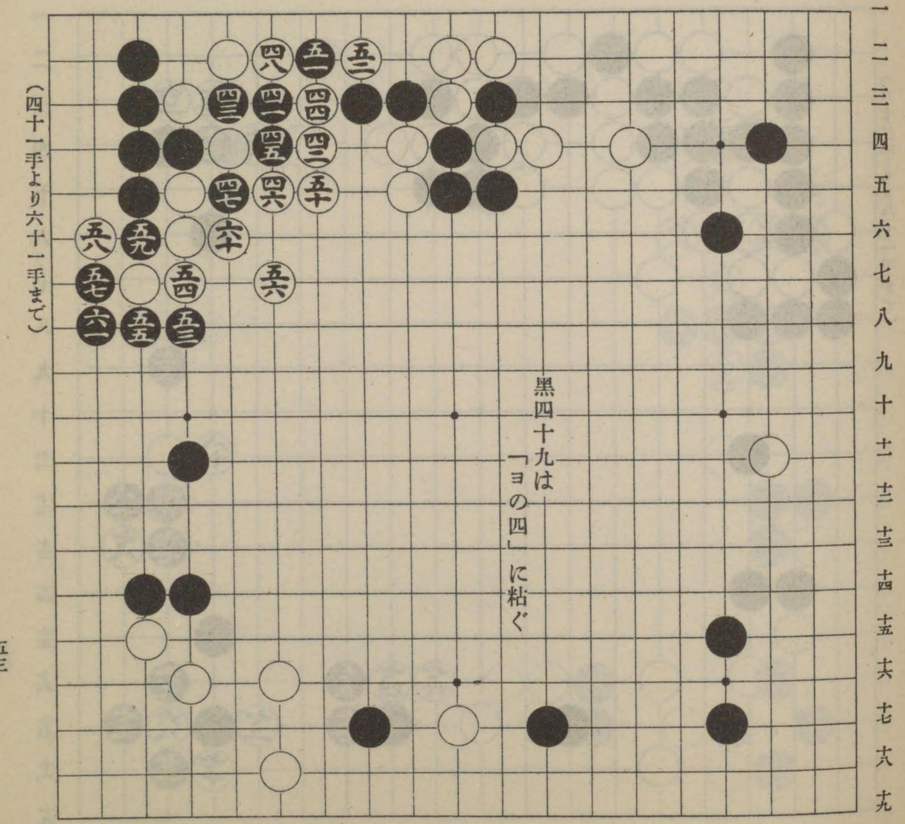


二十一は白廿六、黒廿七、白廿一と攻められる手に備へたのですが、前に黒「レの二」と下つた後手の意味は、尋て黒「ヨの五」、白「カの四」と運んで、黒「ヨの六」、白「ヨの七」となるか又は黒「カの五」、白「ワの四」となるか、又は黒「カの六」となるのは、皆重くていけませんから、黒は白「カの四」の時、「ヨの七」、と飛ぶのが旨い筋です、スルト白「ヨの六」黒「カの五」、白「カの六」、黒「ワの五」となるのですから、黒は直ちに「ヨの五」と白を切断する運びに出なければ、「レの二」の下りと調子が合ひません、黒**二十三**は「ヌの十七」の白に、直に應接した事になつた理に當りますから、此の手では廿四の方に據つて、我が「ニの六」と「ニの十五」とに聲息を通じ、右邊の開拓に就くべく、まのあたり之に比すべき好點はないのです、從つて白、**二十四**を與へては、布石に於て一歩を白に讓つた事になるのです、黒**二十五**は廿三の着意を承けた當然の打込、其れを白の**二十六**、**二十八**と應したのは、二十五が働くことになつてもまづいのです、故に廿八では「ルの十六」と尖むの一手、ソコで黒「ヨの十七」と覗けば、白「ヨの十六」に粘で、廿三の黒にも「レの十四」の黒にも影響するのです、



黒**二十九**は、其の一帶をどの位み白に與ふべきかに就いての運動を含むので、白**三十**と粹ねれば、**四十迄**となるのは當然の結果。

黒**四十一**の時白四十三に粘げば、黒更に四十六に覗いて、白四十七なら黒五十六に飛ばうと云ふのですが、其の飛はい、手です、ソコで白四十五黒四十二、白五十なら黒「ヲの五」、白又「カの六」なら黒「ルの六」、白「ヲの五」、黒五十、白「ヲの六」、黒「ワの六」と運ばうといふのです、故に白は黒五十六の時、大事の二目を守つて「ルの六」に行び、黒「ワの六」に粘ぐ形ちになるのです、斯ういふ所で同じ結果を得るにしても形ちを度外視してはいけません、白**四十二**は黒四十四に粘がば、四十三に粘がうの用意、そして黒五十、白四十五、黒「ヲの四」、白「ヲの五」となつても、白の三目は征に罹りません、斯くて黒**五十三**はい、筋、白六十に約へれば、「カの六」に切らうと云ふので、それは征に罹りませんから、白五十六、黒「ワの六」で、白「ヲの七」なら「ヲの五」に絡ね込むのですが、其の味で白困るのです、所が黒**五十五**から**六十一**迄と渡つたのは小さいので、五十五では「カの六」に捲らなくてはいけません。



白**六十二**と頂けてから、**六十六**までと自己の堅い方へ地を取り、黒に**六十五**と詰められて、「ハの十二」の白に影響させたのはいけません、故に六十二では「ハの八」に詰めるのがいゝのです、ソコで黒「ホの三」とでも走れば、白には更に「ロの十五」まで走る手があり其方が大局に照して、寧ろ意義が深いのです、黒**七十七**は微温的、七十七で「トの十五」に行きって居れば、痛切に「ハの十二」の白を刺戟したのです、そして白七十七に切れば黒「トの十八」、白「ヘの十七」、黒「リの十八」となつて、白「ヌの十八」なら黒「ヘの十八」、白「ホの十八」、黒「ホの十六」で、攻合は黒が一手勝、デハ白「ヌの十八」を「ヘの十八」に約へて、黒「ヌの十八」、白「ルの十八」、黒「ルの十七」、白「ヲの十八」、黒「チの十八」と運んで、次に白「リの十七」なら、黒に「ヌの十五」と懸けられて、四目は助りません、さりとて黒「チの十八」の時白「チの十四」、黒「ホの十六」と交換し、ソコで白「トの十九」なら黒「ホの十九」、白「ホの十九」なら黒「トの十九」で、やはり白がいけません、白**七十八**は黒に「ロの十四」と約へさせて、白「ニの十三」、黒「ハの十四」と、定石通りに應接しやうとしたのですが、

イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ヌ ル ヲ ワ カ ヨ タ レ ソ ツ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

（六十二手より八十一手まで）

そうなると白は働き黒は凝ることになり、黒**七十九**と突當るのは當然、延いて**八十**、**八十一**の交換となつたのです。

白**八十二**は、次に黒八十七に絡ねたら「ホの九」と行び、ソコで黒八十九に押さなければ、白八十九、黒八十六、白「ヘの六」なりますから、黒は當然八十九に押して、尋いで黒「ヘの九」に行びるとか、乃至は「トの九」に飛ぶとかすることは、白八十二の時機期して居るのです、然るに黒は其れを裏切つて、**八十三**と緩い式に出ましたから、白は増長して**八十四**と頂け、黒に八十六に引かせて「ロの四」に絡ねる手や、又白**八十六**では黒に「ハの七」と切らせて、白八十八、黒八十五、白八十七と調へ、「ヌの四」以下の黒三子を抱へ込まうのたくみなのです、さすがに黒も憤慨して**八十七**、**八十九**と突破し、逆に白の三子が重圍に陥つたのです、ソコで白は**九十**と約へて、黒「ハの五」、白「ニの五」、黒「ロの四」、白「ロの七」、黒「イの五」、白「ハの七」、黒「ロの三」、白「ロの二」、黒「イの三」、白「イの二」、黒「イの七」、黒「イの六」と黒を活し、白は「ロの十」と尖んで、連絡を探らうと云ふ考なのです、其れは白には勝手ですが、黒八十九以下三子は浮足となるのです。

イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ヌ ル ヲ ワ カ ヨ タ レ ソ ツ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

（八十二より九十手まで）

郵便碁

黒九十一は規模が小さ過ぎます、其れよりは「チの九」邊から、右邊に於ける白の三目を脅かして、「ヌの四」以下の三子へも連絡を探り、そして次に「チの十二」邊に圍ふ、方針に出べきです、ですから曰は極力九十四邊に其れを凌ぐでせう、ソコで黒九十九邊に白の連絡を妨げんとすれば、白「リの十一」と飛び黒「ワの十八」に尖み頂て劫手段を起す、トこんな風に打ちたかつたのです、デ其の劫手段と云ふのは、黒「ワの十八」の時、白「ヲの十五」なら黒「カの十七」、白「ヨの十七」、黒「ワの十六」、白「ワの十五」、黒「カの十五」、白「ワの十七」と運ぶのですが、此處て黒「チの十二」、白「チの十一」で黒劫を取返し、次に白「への九」と劫立したら、黒それに應ぜず、「ヨの十六」と打ち抜きますから、白「ヨの十六」と粘げば、黒「ヨの十八」と切つて、白の再び劫を取つた時、「ヌの十」と劫立し、白「ヲの十六」に打抜けば、黒は更に「ルの十二」と懸けるなどの、激刺の手段もありました。

イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ヌ ル ヲ ワ カ ヨ タ レ ソ ツ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

（九十一手より百三手まで）

大衆圍碁講座

郵便碁

擔當者　七段　雁金準一
東京市外瀧野川町中里四二九

擔當者　七段　高部道平
東京市赤坂區一ッ木町八

諺に百聞は一見に若かずと申しますが、其れは地理や風俗の視察などには當嵌るにもせよ、物に依て一見したゞけでは、まだ堪能するわけに行きません、譬へば菓菜の奨にまれ、鱸魚の膾にまれ百見は一喫に若かずで、見た眼が如何に旨さうでも、食べて味覺に感ずる所を究めなければ、其の食品の眞價を知ることはできないのです、ト同樣に碁も亦布石、定石、手所の祕訣を聽き、實戰例示に就いて見學したゞけでは、其れに依つて自己の技倆が、どの程度まで進歩したかを、覺ることはできないのです、故に諸君は無論相當の、稽古臺たるべき相手を見出して、實究を怠らぬことゝ信じますが、唯だ十分に其の打着の是非を、批判し得る相手を得ませんと、徒らに勞多くして効果は擧らないのです、ソコで思ひついたのが此の郵便碁の計畫です。

郵便碁とは、聽講諸君の希望に依り、一手づゝ郵便の往復によつて、碁を打つことです、嘗て讀賣新聞社の主催で電報碁と云ふものが企てられ、東京の方圓社長故巖崎健造八段と、大阪の方圓分社長故泉秀節六段との間に、一手づゝ電報で往復する手合が行はれ、當時空前の企畫として、一般棋界の評判を博したのでしたが、今なら長距離電話を利用して、電話碁といふものも行れば行れぬ事もありません、が此の郵便碁だけは未だ曾て新聞にも雜誌にも、一度も試みられたことのない催しで、之れを此の講座に加ふることは、新たに擇ばれたる時長の一として、大いに自負してもよいと考ふる次第であります。

尤も單に個人の希望としては、別掲實戰例示の

中にも見える通り、郵便碁はこれまでいくらも行つて居りますが、今回の如く之れを大衆的に公開して、斯道の進歩に裨益せんとする教材に供するのは、本講座を以て嚆矢とするのであります、然かも一局の經過は親切に批判して、啻に當事者のみならず、第三者にも十分納得の行くやう、ツマり直接稽古するのと同じ氣持を以て、後學の方々に臨まうと思ひます、併しながら自づから時間に制限がありまして、多數の希望者の有つた場合、其の全部を滿すことは困難ですから、取敢ず先づ廿人二十局と定め、それを私共二人で十局づゝ分擔することに取きめました、ソコで先づ九子局、六子局、四子局の三種を掲げ、其れに或る點までの布石を加へて、簡單に要點の意味を附け加へ、そして其の次の黑手から郵便碁に移るやうにしましたのは、經費の上に於ても進行の點に於ても、其れが便利であるからです、デ一局の終結に幾往復を費やすかといふことは、無論豫測はできませんが、勝敗不明の碁なら格別、既に其の數の明かとなつたものに就いては、時間と手數と浪費とを省く爲めに、中途で打切ることもあります。

希望者廿人以上の場合は、抽籤を以て其の參加權を定めます、ソコで當籤の通知を受けた方は、別掲第一局から第二十局迄の中、これなら己れの力に相當であらうと思はるゝ一局を擇び、打つべき手を定めて往復葉書の往信面に、「第何局」「ロの十とかホの四とか」いふ風に、其の局名と打つ手の位置とを明記し、尙ほ返信用の表面に自己の住所氏名を記入して、差し出されるのです、但し雁金の名で通知された方は雁金と對局し、高部の名で通知された方は高部と對局するものと承知されたく、特に當籤者からの名指で打つことはお斷り致します、ト云ふのは私共二人の共同責任を採る權衡上、どうしても其の名指しに、應じかねるからであります、

二十局の譜面は、必ずしも之れに限定するのではありません、之れはたゞ便宜上こちらで擇ぶのですから、當籤者諸君の都合によつては、諸君の棋風に合ふやうに、例へば平和を主義とする人は地取に便宜の多いやうにとか、力戰に得意の人は複雜に導くやうにとか、此の譜面の一部又は全部を變更しても妨げないのです、勿論其れは白に施す餘地の無いやうに作られた、偏頗極るものでも困りますが、とにかく變更された譜面は、一應提供してこちらの同意を求められたいのです。

郵便碁は取も直さず、一種の通信教授で、何々大學の講義錄とか、通信講座とかいふものと同じ性質のものです、されば其の講義錄や通信教授に依つて、入學試驗にパスしたり、登用試驗に及第して、現に顯要の地位を占めて居る人のあるやうに、圍碁も亦通信教授を受けて、入段することのできぬ筈はありません、然かも天才を抱いて空しく不遇を喞つ棋客の爲めに、此の福音を傳ふることを、私共は光榮とするのであります。

私共の既往の經驗から申しますと、一旦郵便碁に依て得た知己は、其れが假令一面識の無い人でも、往復の間に自然々々と、言ひ知れぬなつかしさを加へ、失禮ながら朝夕手許において、指導しつゝある門弟と同樣の親しみを生ずるのです、從つて其の勝敗は全然眼中に置かず、どうか少しでも合法的の佳い手を打つて來られたいと、毎日其の葉書に接することが、どれほど樂しみだか解りません、殊に此方で高を括つて、多分此の手所に誤りなく應答する事は、覺束なからうと思つて居た矢先へ、チヤンと圖星に中る手の屆いた時などは、覺えず破顏して會心の笑を浮べるのです。

郵便碁は左樣な親しみを以て、絕えず連絡を採るものですから、顏は合せなくも毎日會見して居るのと同じ氣持ですが、此の氣持は相手方と雖も恐らく變りはなからうと思ひます、スルト之れに參加さるゝ諸君は、之れに依つて只管我技倆の進歩を冀ふだけで、此の手合に勝つのを終極の目的とするのではないでせうから、總て良心の命ずる所に依つて行動し、自己の應手を自己以上の人に謀つて、其の智慧を借るやうな陋を避けて、飽までも眞摯の態度を以て、自己の完成に力められたいのです、否な誰に相談しやうと、誰の指圖を受けやうと、こちらの干涉する限りではありませんが、唯だ他力本願では遲々として進まないだけのことです。

或は郵便碁を蔑視して、實際の對局に於て教授を受けてこそ、一着毎に彼我の着意をも味ひ、一層其の指導の有がたさも會得すれ、郵便碁は丁度ラヂオドラマを聽くやうなもので、どうも隔靴搔痒の感を免れないのは是非もないと、斯う言ふ人も有りますが、其れはまだ郵便碁の趣味と實益と兩面の意味を兼ね備ふることを知らない妄斷に過ぎません、寧ろ環境の刺戟を受け易い對局教授よりは、超然物外に獨處して、遺憾なく其の應酬を練る所に、對局教授に期待し得られぬ沈着があり又次の白手を想定して置いて、其の當否を返信に徵する興味もあつて、其處に自ら堅實の進歩が宿るのです。

處に依つて一梅に律するわけには參りませんが往復二手に費やす日數を、少くも三日と見做せば百手の運びには五ケ月を要することになり、北海道とか九州とか遠隔の地方に在つては、なかなかそれでも濟みません、故に成るべく其の手數を節約する意味に於て、例へば白からの當りに對する粘ぎとか打ち拔きとか、そう應じなければならぬ極り切つた點などは、當然其の手順に出られたものと見て、其の次の手まで返信し、又黑からの劫立を利いた場合は、當然劫を取返されたものと見て、それに次ぐ此方の劫立までを返信するやうに致します。

郵便碁は勿論無料ですが、之れに要する往復葉書の代だけは、參加者諸君の自辨です、デ一局の勝敗に百手を費すものとすれば、僅か五十枚の往復葉書で事が足りるのですから、手輕の點に於て恐らく此の右に出るものは無いでせう、併し郵便碁は參加諸君の研究に資するのが目的とは云へ同時に參加者以外の人々に取つても、非常の研究資料となるのですから、假令參加權に漏れたにもせよ、參加者同樣の氣持で其の棋移を考案するなど、ソコに廣い範圍の研究が行はれるのです。

二十局中其の早く勝敗の決した分から、補缺抽籤を行つて第二の參加者を定めますが、一旦參加した以上、本講座の終了後も尙ほ結局までは繼續します、其の代り批評だけは講座終了と共に、打ち切ります。

手所其の他に就いては、進行中必ず疑義の起ることゝ思ひます、其の質問は直接には一々應答しきれませんが、講座に現はれる批評に就いて、尙ほ得心の行かれぬ點は隨時提出して戴きたいのです、さすれば一括して本欄で說明します、但し質問は當事者諸君に限らず、聽講諸君ならどなたでも隨意です。

以上の各項を要約すれば左の如くなりますが、諸君が之に從つて此の試みに應ぜられ、幾分でも斯道に貢獻せんとする私共の微衷を、諒解して下さるならば望みは足りるのです。

一　郵便碁に參加せんとする者は、本講座の聽講者に限る。

二　參加希望者は、來る七月十日かぎり、二十局の中第何局の手合を望む旨、住所氏名を明記して、平凡社編輯局宛に申込まるゝ事。

三　參加希望者二十人を超過する時は、最